下月隈C遺跡
Ⅲ

―福岡空港周辺整備工事に伴う
下月隈C遺跡第4次発掘調査報告―

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第750集

―本文編―

2003

福岡市教育委員会

SHIMOTSUKIGUMA

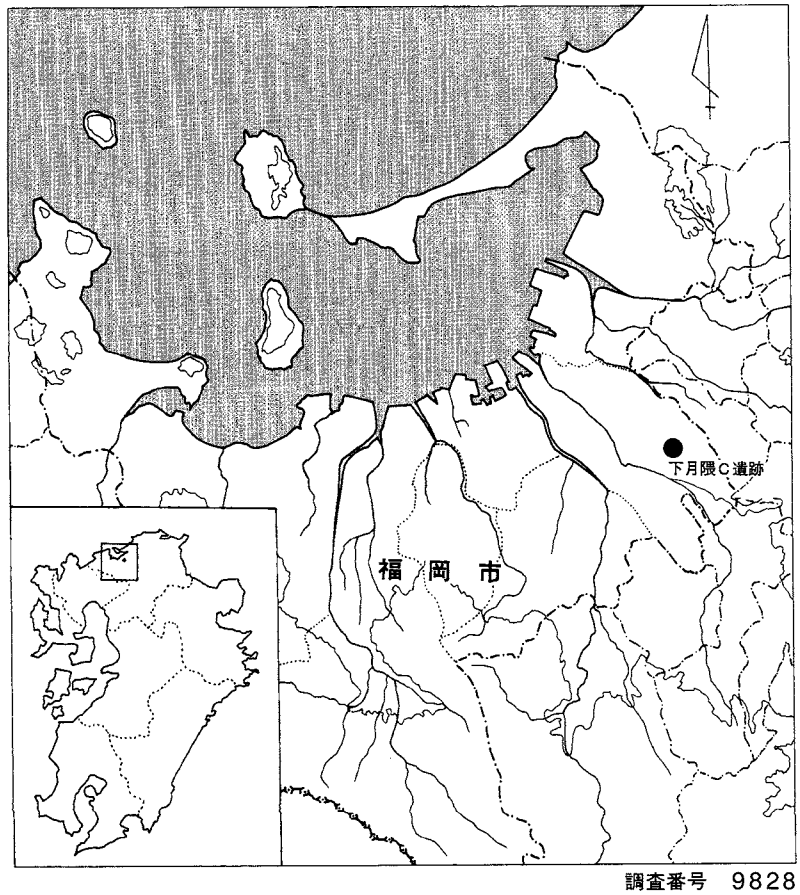
下月隈C遺跡

Ⅲ

― 福岡空港周辺整備工事に伴う 下月隈C遺跡第4次発掘調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第750集

―本 文 編―



調査番号　9828
調査略号　SHC-4

平成15年

福岡市教育委員会

序

福岡市は、まちづくりの目標のひとつに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。本市は原始より大陸文化流入の門戸として栄え、市内に多くの埋蔵文化財が残っています。このため、先人たちの足跡である埋蔵文化財の保護に努めております。

今回報告いたしますのは、福岡空港南側に空港周辺整備施設である調節池を建設するのに先立って発掘調査を実施した初年度の発掘調査記録です。

今後、本書および調査資料が学術研究だけにとどまらず、市民各位の埋蔵文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり全面的にご協力いただいた国土交通省九州地方整備局博多港湾空港工事事務所（旧運輸省第四港湾建設局）および大阪航空局福岡空港事務所をはじめ、御支援と御指導をいただいた関係各位に対し深く感謝いたします。

平成15年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　生田征生

凡　　例

1．本書は福岡市教育委員会が博多区月隈４丁目地内の月隈調節池工事予定地内において、1998年度（平成10年度）に実施した下月隈C遺跡第４次調査の発掘調査報告書である。

2．本書における調査の細目は次のとおりである。

3．遺構実測図に付した座標値は平面直角座標系第Ⅱ座標系による座標値である。方位は磁北で、真北に対して６°30′西偏する。

4．本書では遺構ごとに一連の遺構番号を付け、番号の前にＳＡ（柵・塀）、ＳＤ（溝・河川）、ＳＥ（井戸）、ＳＸ（その他）などの遺構の性格を示す分類記号を付した。

5．本書の執筆は下記のとおりである。

Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ－１，２－(1)～(3)，Ⅵ……瀧本正志
Ⅳ－２－(4)……山口譲治，瀧本正志
Ⅴ－１……株式会社 古環境研究所
Ⅴ－２……パリノ・サーベ 株式会社
Ⅴ－３……株式会社 パレヲ・ラボ

6．遺物実測は大半を財団法人元興寺文化財研究所に委託し、成果品の一部を本書で使用した。

7．各種分析については、樹種同定を（株）古環境研究所、土壌分析（花粉・植物珪酸体・種実）をパリノ・サーベ（株）、放射性炭素年代測定を（株）パレヲ・ラボに委託し、分析結果については第Ⅴ章に収録した。

8．本書では、遺構・遺物の撮影は瀧本正志、遺構・遺物の実測は犬丸陽子、上野裕子、中村智子、高木誠、春田城二、藤野雅基、山口譲治、山野祥子、瀧本、トレースは末次由紀恵、長浦芙美子、山口朱美、上野、中村、山野、拓影採拓は持原良子がおこなった。

9．本書編集は瀧本正志が担当し、中間千衣子の協力を受けた。

10．発掘調査に係る遺物・記録類のすべては、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されている。

調査次数	調査番号	遺跡略号	調　査　地	面　積	調　査　期　間
４次	9828	SHC-4	博多区月隈４丁目	6,500m²	98.9.2～1999.3.25

本 文 目 次

第Ⅰ章 はじめに……1
1．調査に至る経過……1
2．調査の組織……2

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境……4
1．遺跡の位置と立地……4
2．遺跡の歴史的環境……4

第Ⅲ章 調査の記録……8
1．試掘調査の概要……8
2．調査の概要と経過……9

第Ⅳ章 遺構と遺物……10
1．遺 構……10
(1) 第1遺構検出面……10
(2) 第2遺構検出面……26
(3) 第3遺構検出面……28
(4) 第4遺構検出面……30
2．遺 物……38
(1) 土器・陶磁器・土製品……38
(2) 石器・石製品……138
(3) 金属製品……158
(4) 木製品・建築部材……160

第Ⅴ章 自然化学分析……195
1．樹種同定……195
2．土壌分析（花粉・植物珪酸体・種実）……205
3．放射性炭素年代測定……222

第Ⅵ章 小 結……226

Figures

挿 図 目 次

Fig. 1 調査地位置図（1/200,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
Fig. 2 調査地周辺航空写真 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
Fig. 3 調査地周辺遺跡分布図（1/30,000）・・・・・・・・・・・・・・・・7
Fig. 4 試掘調査による遺構想定図（1/2,000）・・・・・・・・・・・・・・8
Fig. 5 第１遺構検出面遺構配置図（1/400）・・・・・・・・・折り込み
Fig. 6 溝SD26土層実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
Fig. 7 溝SD58・59土層実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
Fig. 8 溝SD59土層実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
Fig. 9 溝SD63土層実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
Fig.10 溝SD64土層実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
Fig.11 溝SD77土層実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
Fig.12 井戸SE68実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
Fig.13 井戸SE69実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
Fig.14 井戸SE73実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
Fig.15 土坑SK04実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
Fig.16 土坑SK55実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
Fig.17 土坑SK65実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
Fig.18 土坑SK66実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
Fig.19 土坑SK67実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
Fig.20 土坑SK71実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
Fig.21 土坑SK75実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
Fig.22 土坑SK78実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
Fig.23 第２遺構検出面遺構配置図（1/400）・・・・・・・・・折り込み
Fig.24 井堰SX87実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
Fig.25 第３遺構検出面遺構配置図（1/400）・・・・・・・・・折り込み
Fig.26 溝SD102断面実測図①（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
Fig.27 溝SD102断面実測図②（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
Fig.28 溝SD102断面実測図③（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
Fig.29 第４遺構検出面遺構配置図（1/400）・・・・・・・・・折り込み
Fig.30 溝SD104土層実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
Fig.31 溝SD108・井堰実測図（1/50）・・・・・・・・・・・・・折り込み
Fig.32 井戸SE120実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
Fig.33 甕棺墓SK129実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
Fig.34 甕棺墓SK130実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
Fig.35 溝SD58出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・38
Fig.36 溝SD59出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・38
Fig.37 土坑SK66出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・40
Fig.38 土坑SK72出土遺物実測図（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・・40
Fig.39 土坑SK74出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・40
Fig.40 溝SD81出土遺物実測図１（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・42
Fig.41 溝SD81出土遺物実測図２（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・・43
Fig.42 溝SD81出土遺物実測図３（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・44
Fig.43 水田SX85出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・45
Fig.44 土坑SK91出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・47
Fig.45 土坑SK99出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・47
Fig.46 水田SX93出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・47
Fig.47 水田SX96出土遺物実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・47
Fig.48 溝SD103出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）・・・・・・・・・・49
Fig.49 溝SD104上層出土遺物実測図（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・50
Fig.50 溝SD104中層～最下層出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・51
Fig.51 溝SD108出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・53
Fig.52 溝SD112出土遺物実測図１（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・・55
Fig.53 溝SD112出土遺物実測図２（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・56
Fig.54 溝SD112出土遺物実測図３（1/2・1/3・1/4）・・・・・・・・・・57
Fig.55 溝SD114出土遺物実測図１（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・59
Fig.56 溝SD114出土遺物実測図２（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・60
Fig. 57 溝SD114出土遺物実測図３（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・61
Fig. 58 溝SD114出土遺物実測図４（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・62
Fig. 59 溝SD116出土遺物実測図１（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・67
Fig. 60 溝SD116出土遺物実測図２（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・68
Fig. 61 溝SD116出土遺物実測図３（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・69
Fig. 62 溝SD116出土遺物実測図４（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・70
Fig. 63 溝SD116出土遺物実測図５（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・71
Fig. 64 溝SD116出土遺物実測図６（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・72
Fig. 65 溝SD116出土遺物実測図７（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・73
Fig. 66 井戸SE120出土遺物実測図１（1/2）・・・・・・・・・・・・・・75
Fig. 67 井戸SE120出土遺物実測図２（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・75
Fig. 68 井戸SE136出土遺物実測図（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・76
Fig. 69 井戸SE137出土遺物実測図（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・76
Fig. 70 土坑SK106出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・78
Fig. 71 土坑SK121出土遺物実測図１（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・79
Fig. 72 土坑SK121出土遺物実測図２（1/2）・・・・・・・・・・・・・・79
Fig. 73 土坑SK122出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・81
Fig. 74 土坑SK123・124出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・82
Fig. 75 土坑SK125出土遺物実測図（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・83
Fig. 76 土坑SK126出土遺物実測図１（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・85
Fig. 77 土坑SK126出土遺物実測図２（1/4）・・・・・・・・・・・・・・86
Fig. 78 土坑SK126出土遺物実測図３（1/2）・・・・・・・・・・・・・・86
Fig. 79 土坑SK129出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・87
Fig. 80 土坑SK130出土遺物実測図（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・88
Fig. 81 土坑SK131出土遺物実測図（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・89
Fig. 82 土坑SK133出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・90
Fig. 83 土坑SK139出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・90
Fig. 84 土器集積遺構SX107出土遺物実測図１（1/4）・・・・・・・100
Fig. 85 土器集積遺構SX107出土遺物実測図２（1/3）・・・・・・・101
Fig. 86 土器集積遺構SX107出土遺物実測図３（1/4）・・・・・・・102
Fig. 87 土器集積遺構SX107出土遺物実測図４（1/3）・・・・・・・103
Fig. 88 土器集積遺構SX107出土遺物実測図５（1/4）・・・・・・・104
Fig. 89 土器集積遺構SX107出土遺物実測図６（1/4）・・・・・・・105
Fig. 90 土器集積遺構SX107出土遺物実測図７（1/4）・・・・・・・106
Fig. 91 土器集積遺構SX107出土遺物実測図８（1/4）・・・・・・・107
Fig. 92 土器集積遺構SX107出土遺物実測図９（1/4）・・・・・・・108
Fig. 93 土器集積遺構SX107出土遺物実測図10（1/4）・・・・・・・109
Fig. 94 土器集積遺構SX107出土遺物実測図11（1/4）・・・・・・・110
Fig. 95 土器集積遺構SX107出土遺物実測図12（1/4）・・・・・・・111
Fig. 96 土器集積遺構SX107出土遺物実測図13（1/4）・・・・・・・112
Fig. 97 土器集積遺構SX107出土遺物実測図14（1/4）・・・・・・・113
Fig. 98 土器集積遺構SX107出土遺物実測図15（1/4）・・・・・・・114
Fig. 99 土器集積遺構SX107出土遺物実測図16（1/4）・・・・・・・115
Fig.100 土器集積遺構SX107出土遺物実測図17（1/4）・・・・・・・116
Fig.101 土器集積遺構SX107出土遺物実測図18（1/4）・・・・・・・117
Fig.102 土器集積遺構SX107出土遺物実測図19（1/4）・・・・・・・118
Fig.103 土器集積遺構SX107出土遺物実測図20（1/4）・・・・・・・119
Fig.104 土器集積遺構SX107出土遺物実測図21（1/4）・・・・・・・120
Fig.105 土器集積遺構SX107出土遺物実測図22（1/4）・・・・・・・121
Fig.106 土器集積遺構SX107出土遺物実測図23（1/4）・・・・・・・122
Fig.107 土器集積遺構SX107出土遺物実測図24（1/4）・・・・・・・123
Fig.108 土器集積遺構SX107出土遺物実測図25（1/2）・・・・・・・124
Fig.109 黒色土層出土遺物実測図１（1/2）・・・・・・・・・・・・・・129
Fig.110 黒色土層出土遺物実測図２（1/4）・・・・・・・・・・・・・・129
Fig.111 黒色土層出土遺物実測図３（1/4）・・・・・・・・・・・・・・130
Fig.112 黒色土層出土遺物実測図４（1/4）・・・・・・・・・・・・・・131

Fig.113　黒色土層出土遺物実測図５（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・132
Fig.114　黒色粘質土層出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・134
Fig.115　黒灰色粘質土層出土遺物実測図１（1/4）・・・・・・・・・136
Fig.116　黒灰色粘質土層出土遺物実測図２（1/4）・・・・・・・・・137
Fig.117　溝SD103出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・140
Fig.118　溝SD104出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・140
Fig.119　溝SD112出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・140
Fig.120　溝SD114出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・141
Fig.121　溝SD116出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・141
Fig.122　溝SD117出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・142
Fig.123　土坑SK119出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・143
Fig.124　土坑SK121出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・143
Fig.125　土坑SK123出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・143
Fig.126　土坑SK124出土石製品実測図（1/2・1/3）・・・・・・・・・・144
Fig.127　土坑SK126出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・145
Fig.128　土坑SK131出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・145
Fig.129　土器集積遺構SX107出土石製品実測図１（2/3）・・・・・146
Fig.130　土器集積遺構SX107出土石製品実測図２（1/2）・・・・・147
Fig.131　土器集積遺構SX107出土石製品実測図３（1/2）・・・・・148
Fig.132　土器集積遺構SX107出土石製品実測図４（1/2）・・・・・149
Fig.133　土器集積遺構SX107出土石製品実測図５（2/3）・・・・・150
Fig.134　土器集積遺構SX107出土石製品実測図６（1/3）・・・・・151
Fig.135　土器集積遺構SX107出土石製品実測図７（1/3）・・・・・152
Fig.136　土器集積遺構SX107出土石製品実測図８（2/3）・・・・・153
Fig.137　暗茶褐色砂質土層出土石製品実測図（2/3）・・・・・・・・154
Fig.138　黒色土層・黒色粘質土層出土石製品実測図（2/3・1/2）・・・・155
Fig.139　黒褐色粘質土層出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・156
Fig.140　黒色粘質土層出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・157
Fig.141　包含層出土石製品実測図（2/3）・・・・・・・・・・・・・・・157
Fig.142　土器集積遺構SX107出土金属製品実測図（1/2）・・・・・159
Fig.143　黒灰色土層出土金属製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・159
Fig.144　包含層出土金属製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・159
Fig.145　溝SD81，水田SX85出土木製品実測図（1/4）・・・・・・166
Fig.146　溝SD102出土木製品実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・167
Fig.147　溝SD103出土木製品実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・168
Fig.148　溝SD104出土木製品実測図１（1/4）・・・・・・・・・・・・・169
Fig.149　溝SD104出土木製品実測図２（1/4）・・・・・・・・・・・・・170
Fig.150　溝SD104出土木製品実測図３（1/4）・・・・・・・・・・・・・171
Fig.151　溝SD104出土木製品実測図４（1/4）・・・・・・・・・・・・・172
Fig.152　溝SD104出土木製品実測図５（1/4）・・・・・・・・・・・・・173
Fig.153　溝SD104出土木製品実測図６（1/8）・・・・・・・・・・・・・174
Fig.154　溝SD104出土木製品実測図７（1/4）・・・・・・・・・・・・・175
Fig.155　溝SD104出土木製品実測図８（1/4）・・・・・・・・・・・・・176
Fig.156　溝SD104出土木製品実測図９（1/8）・・・・・・・・・・・・・177
Fig.157　溝SD104出土建築部材実測図１（1/10）・・・・・・・・・・・178
Fig.158　溝SD104出土建築部材実測図２（1/10）・・・・・・・・・・・179
Fig.159　溝SD105出土木製品・建築部材実測図（1/4・1/8）・・・180
Fig.160　溝SD108出土木製品実測図１（1/4）・・・・・・・・・・・・・181
Fig.161　溝SD108出土木製品実測図２（1/4）・・・・・・・・・・・・・182
Fig.162　溝SD108出土木製品実測図３（1/4・1/8）・・・・・・・・・183
Fig.163　溝SD108出土木製品実測図４（1/8）・・・・・・・・・・・・・184
Fig.164　溝SD108出土建築部材実測図１（1/10）・・・・・・・折り込み
Fig.165　溝SD108出土建築部材実測図２（1/10）・・・・・・・・・・・185
Fig.166　溝SD108出土建築部材実測図３（1/10）・・・・・・・・・・・186
Fig.167　溝SD112出土木製品実測図１（1/8）・・・・・・・・・・・・・187
Fig.168　溝SD112出土木製品実測図２（1/4）・・・・・・・・・・・・・188
Fig.169　溝SD112出土木製品実測図３（1/4）・・・・・・・・・・・・・189
Fig.170　溝SD112出土建築部材実測図（1/10）・・・・・・・・・・・・190
Fig.171　溝SD114出土木製品実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・191
Fig.172　溝SD116出土木製品実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・192
Fig.173　井戸SE120出土部材実測図（1/8）・・・・・・・・・・・・・・・192
Fig.174　土壙SK113出土木製品実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・193
Fig.175　土壙SK119・126・142出土木製品実測図（1/4）・・・・・194

自然化学分析

表１　下月隈Ｃ遺跡第4次調査における樹種同定結果・・・・・・・203
表２　下月隈Ｃ遺跡第4次調査における樹種同定結果・・・・・・・204

土壌分析（花粉・植物珪酸体・種実）

表１　分析試料の一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・205
表２　花粉分析結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・207
表３　植物珪酸体分析結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・209
表４　種実遺体分析結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・210

図１　花粉化石群集の層位分布 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・206
図２　植物珪酸体群集および珪化組織片などの産状・・・・・・・・208

図版１　花粉化石 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・218
図版２　植物珪酸体 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・219
図版３　種実遺体(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・220
図版４　種実遺体(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・221

放射性炭素年代測定

表１　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（その１）・・・・224
表１　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（その２）・・・・・225

巻頭図版目次

PL. 1　調査地と福岡空港（南から）
PL. 2　調査地と福岡空港周辺
PL. 3　第１遺構検出面全景
PL. 4　第２・３遺構検出面全景
PL. 5（１）水田SX86（南から）
（２）水田SX89（北から）
PL. 6　第４遺構検出面全景
PL. 7（１）溝SD104（北から）
（２）溝SD104土層断面（南から）
PL. 8（１）溝SD108・井堰（西から）
（２）溝SD108・建築部材（30020）出土状況（西から）
PL. 9（１）溝SD108・井堰（西から）
（２）溝SD108・建築部材（30023）出土状況（西から）
PL.10　溝SD112・木製容器（30188）出土状況
PL.11（１）土器集積遺構SX107（南から）
（２）土器集積遺構SX107（南から）
（３）土器集積遺構SX107・遺物出土状況
（４）土器集積遺構SX107・甕（151）出土状況
（５）土器集積遺構SX107・壷（334）出土状況

周辺地形図版目次

PL.12　1937年（昭和14年）の調査地と周辺地形
PL.13　1947年（昭和22年）の調査地と周辺地形
PL.14　1948年（昭和23年）の調査地と周辺地形
PL.15　1960年（昭和35年）の調査地と周辺地形
PL.16　1964年（昭和39年）の調査地と周辺地形
PL.17　1969年（昭和44年）の調査地と周辺地形
PL.18　1972年（昭和47年）の調査地と周辺地形
PL.19　1979年（昭和54年）の調査地と周辺地形
PL.20　1993年（平成５年）の調査地と周辺地形
PL.21　1995年（平成７年）の調査地と周辺地形
PL.22　1998年（平成10年）の調査地と周辺地形
PL.23　2001年（平成13年）の調査地と周辺地形

遺構図版目次

PL.24　第１遺構検出面・調査区全景
PL.25（１）第１遺構検出面・調査区全景（東から）
（２）第１遺構検出面・調査区東半部（南から）
PL.26（１）第１遺構検出面・調査区西半部（南から）
（２）第１遺構検出面・調査区西半部（北から）
PL.27（１）第１遺構検出面・調査区東半部（南から）
（２）溝SD26・土層断面（南から）
（３）溝SD58，59・土層断面（東から）
（４）溝SD64・土層断面（南から）
（５）溝SD77・土層断面（南から）
PL.28（１）井戸SE68（西から）
（２）井戸SE68・井筒曲物検出状況（東から）
（３）井戸SE68（西から）
（４）井戸SE68・井筒曲物出土状況（北から）
（５）井戸SE80・井筒曲物出土状況（南から）
（６）井戸SE82・井筒曲物出土状況（北から）
（７）井戸SE83・井筒曲物出土状況（西から）
（８）井戸SE84・井筒出土状況（西から）
PL.29（１）井戸SE73（東から）
（２）井戸SE73（東から）
（３）井戸SE73（西から）
（４）井戸SE73・井戸枠組手状況（北から）
（５）井戸SE73・井戸枠組手状況（北から）
PL.30（１）第１遺構検出面・調査区西半部中央（西から）
（２）土坑SK04（西から）
（３）土坑SK55（西から）
（４）土坑SK71（北から）
（５）土坑SK75（西から）
PL.31　第２・３遺構検出面・調査区全景
PL.32（１）水田SX85（北から）
（２）水田SX85（北から）
PL.33（１）水田SX85（南から）
（２）水田SX85（南から）
PL.34（１）溝SD102（西から）
（２）溝SD102・鋤（30110）出土状況
（３）溝SD102・鋤（30110）出土状況
PL.35（１）水田SX89（西から）
（２）水田SX89（北から）
PL.36（１）水田SX98（東から）
（２）水田SX98（南から）
PL.37（１）井堰SX87（北から）
（２）井堰SX87（西から）
PL.38　第４遺構検出面・調査区全景
PL.39（１）第４遺構検出面・調査区全景（東から）
（２）第４遺構検出面・調査区全景（北から）
PL.40（１）第４遺構検出面・調査区西半部（南から）
（２）第４遺構検出面・調査区西半部（北から）
PL.41（１）溝SD102，105（南から）
（２）溝SD103・杓子形木製品（30111）出土状況
（３）溝SD103・直柄平鍬（30112）出土状況
（４）溝SD105・木製品出土状況
（５）溝SD105・鍬（30155）出土状況
PL.42（１）溝SD104（北から）
（２）溝SD104・土層断面（南から）
PL.43（１）溝SD104・竪杵（30137）出土状況
（２）溝SD104・竪杵（30007）出土状況
（３）溝SD104・砧（30009）出土状況
（４）溝SD104・編台脚出土状況
（５）溝SD104・梯子（30147）出土状況
（６）溝SD104・板状木製品（30005）出土状況
（７）溝SD104・槽（30004）出土状況
（８）溝SD104・槽（30004）出土状況
PL.44（１）溝SD104・鋤（30132）出土状況
（２）溝SD104・鋤（30131）出土状況
（３）溝SD104・鍬未製品（30003）出土状況
（４）溝SD104・直柄又鍬（30122）出土状況

PL.44 （5）溝SD104・曲柄又鍬（30128）出土状況
（6）溝SD104・直柄又鍬（30118）出土状況
（7）溝SD104・泥除（30134）出土状況
（8）溝SD104・木製品（30135）出土状況
PL.45 （1）溝SD104・建築部材（30008）出土状況
（2）溝SD104・建築部材（30008）出土状況
（3）溝SD104・建築部材（30006）出土状況
（4）溝SD104・建築部材（30006）出土状況
（5）溝SD104・建築部材（30014）出土状況
（6）溝SD104・建築部材（30014）出土状況
（7）溝SD104・木製品（30142）出土状況
（8）溝SD104・木製品（30143）出土状況
PL.46 （1）溝SD104（北から）
（2）井堰SX111（南から）
（3）井堰SX111（東から）
PL.47 （1）溝SD108・井堰（西から）
（2）溝SD108・井堰（南から）
PL.48 （1）溝SD108・井堰（西から）
（2）溝SD108・建築部材（30021）出土状況（北から）
（3）溝SD108・建築部材（30021）出土状況（北から）
PL.49 （1）溝SD108・建築部材（30021）出土状況（西から）
（2）溝SD108・建築部材（30021）出土状況（南から）
（3）溝SD108・建築部材（30021）出土状況（西から）
PL.50 （1）溝SD108・井堰中段（西から）
（2）溝SD108・井堰中段（南から）
PL.51 （1）溝SD108・建築部材（30023）出土状況（南から）
（2）溝SD108・建築部材（30023）出土状況（南から）
PL.52 （1）溝SD108・井堰下部（西から）
（2）溝SD108・井堰内木製農耕具（30163）出土状況
PL.53 （1）溝SD108・井堰最下部（西から）
（2）溝SD108・井堰最下部（北から）
PL.54 （1）溝SD108・井堰（西から）
（2）溝SD108・井堰除去後（西から）
PL.55 （1）溝SD108・遺物出土状況
（2）溝SD108・竹籠（30213）出土状況
（3）溝SD108・砧（30166）出土状況
（4）溝SD108・直柄又鍬（30160）出土状況
（5）溝SD108・槽（30169）出土状況
（6）溝SD108・梯子出土状況
（7）溝SD108・木製容器（30167）出土状況
（8）溝SD108・木製容器（30167）出土状況
PL.56 （1）溝SD108・木製品出土状況
（2）溝SD108・木製品出土状況
（3）溝SD108・木製品（30018）出土状況
（4）溝SD108・木製品（30022）出土状況
（5）溝SD108・板状木製品（30170）出土状況
（6）溝SD108・木製品出土状況
PL.57 （1）溝SD112（東から）
（2）溝SD112（南から）
PL.58 （1）溝SD112・鋤未製品（30027）出土状況
PL.58 （2）溝SD112・木製容器（30188）出土状況
（3）溝SD112・建築部材（30028）出土状況
（4）溝SD112・建築部材（30028）出土状況
（5）溝SD112・木製盾（30209）出土状況
（6）溝SD112・木製盾（30209）出土状況
（7）溝SD112・建築部材（30181）出土状況
（8）溝SD112・木製品出土状況
PL.59 （1）溝SD114（北から）
（2）溝SD114（北西から）
PL.60 （1）溝SD114・木製品出土状況
（2）溝SD114・木製品出土状況
（3）溝SD114・木製品（30210）出土状況
（4）溝SD114・木製品（30191）出土状況
（5）溝SD114・建築部材出土状況
（6）溝SD114・建築部材出土状況
（7）溝SD114・木製品出土状況
PL.61 （1）井戸SE120（南から）
（2）井戸SE120（東から）
（3）井戸SE120（北から）
（4）井戸SE120北半部（南から）
（5）井戸SE120北半部（東から）
PL.62 （1）井戸SE136（南から）
（2）井戸SE137（北から）
PL.63 （1）土坑SK106（南から）
（2）土坑SK113（東から）
（3）土坑SK115（南から）
（4）土坑SK119（北から）
（5）土坑SK121，123，128（北から）
（6）土坑SK125（北から）
PL.64 （1）土坑SK131（北から）
（2）土坑SK133（東から）
（3）土坑SK135（北から）
（4）土坑SK139（南から）
（5）土坑SK139・甕（687）出土状況（南から）
PL.65 （1）甕棺墓SK129（西から）
（2）甕棺墓SK129・墓坑（西から）
PL.66 （1）甕棺墓SK130（西から）
（2）甕棺墓SK130・墓坑（東から）
PL.67 （1）土器集積遺構SX107中央部（西から）
（2）土器集積遺構SX107北半部（西から）
PL.68 （1）土器集積遺構SX107南半部（南から）
（2）土器集積遺構SX107北半部（南から）
PL.69 （1）土器集積遺構SX107南半部（南から）
（2）土器集積遺構SX107北部（南から）
PL.70 （1）土器集積遺構SX107遺物出土状況
（2）土器集積遺構SX107遺物出土状況
（3）土器集積遺構SX107・甕（151）出土状況
（4）土器集積遺構SX107・壷（334）出土状況
（5）土器集積遺構SX107遺物出土状況

遺 物 図 版 目 次

PL. 71　溝SD58・59，土坑SK66・72・74，水田SX85出土遺物
PL. 72　溝SD81出土遺物
PL. 73　溝SD103・104出土遺物
PL. 74　溝SD104出土遺物
PL. 75　土坑SK106，溝SD108出土遺物
PL. 76　溝SD112出土遺物（1）
PL. 77　溝SD112出土遺物（2）
PL. 78　溝SD114出土遺物（1）
PL. 79　溝SD114出土遺物（2）
PL. 80　溝SD116出土遺物（1）
PL. 81　溝SD116出土遺物（2）
PL. 82　溝SD116出土遺物（3）
PL. 83　井戸SE120・136出土遺物
PL. 84　土坑SK121・122・124出土遺物
PL. 85　土坑SK125・126出土遺物
PL. 86　土坑・甕棺墓SK126・129・130出土遺物
PL. 87　土坑SK137・139出土遺物
PL. 88　土器集積遺構SX107出土遺物（1）
PL. 89　土器集積遺構SX107出土遺物（2）
PL. 90　土器集積遺構SX107出土遺物（3）
PL. 91　土器集積遺構SX107出土遺物（4）
PL. 92　土器集積遺構SX107出土遺物（5）
PL. 93　土器集積遺構SX107出土遺物（6）
PL. 94　土器集積遺構SX107出土遺物（7）
PL. 95　土器集積遺構SX107出土遺物（8）
PL. 96　土器集積遺構SX107出土遺物（9）
PL. 97　土器集積遺構SX107出土遺物（10）
PL. 98　土器集積遺構SX107出土遺物（11）
PL. 99　土器集積遺構SX107出土遺物（12）
PL.100　土器集積遺構SX107出土遺物（13）
PL.101　土器集積遺構SX107出土遺物（14）
PL.102　土器集積遺構SX107出土遺物（15）
PL.103　黒色土層出土遺物
PL.104　黒色粘質土層出土遺物
PL.105　黒灰色粘質土層出土遺物
PL.106　溝SD81・114・116，土坑SK121出土土製品
PL.107　土坑SK126，土器集積遺構SX107，包含層出土石製品
PL.108　溝SD103・104・112・114・116，土坑SK100出土土製品
PL.109　溝SD117，土坑SK119・121・124出土石製品
PL.110　土坑SK123・126・131出土石製品
PL.111　土器集積遺構SX107出土石製品（1）
PL.112　土器集積遺構SX107出土石製品（2）
PL.113　土器集積遺構SX107出土石製品（3）
PL.114　包含層出土石製品
PL.115　出土金属製品
PL.116　溝SD81・102，井戸SE84，水田SX85等出土木製品
PL.117　溝SD103出土木製品
PL.118　溝SD104出土木製品(1)
PL.119　溝SD104出土木製品(2)
PL.120　溝SD104出土木製品(3)
PL.121　溝SD104出土木製品(4)
PL.122　溝SD104出土木製品・建築部材(5)
PL.123　溝SD104出土木製品・建築部材(6)
PL.124　溝SD104出土木製品・建築部材(7)
PL.125　溝SD105出土木製品・建築部材
PL.126　溝SD108出土木製品(1)
PL.127　溝SD108出土木製品・建築部材(2)
PL.128　溝SD108出土建築部材(3)
PL.129　溝SD108出土木製品・建築部材(4)
PL.130　溝SD112出土木製品(1)
PL.131　溝SD112出土木製品(2)
PL.132　溝SD112出土木製品・建築部品(3)
PL.133　溝SD114・116，土坑SK 119出土木製品
PL.134　井戸SE120，土坑SK 113・126，SX127出土木製品

第Ⅰ章　はじめに

1．発掘調査に至る経緯

1994年（平成６年）３月31日付（四港建博第159号）で、運輸省第四港湾建設局博多港工事事務所長（現・国土交通省九州地方整備局博多港湾空港工事事務所）より福岡市教育委員会へ福岡市博多区西月隈（月隈４丁目７）地内における月隈調節池建設事業計画地内の埋蔵文化財事前審査願いが提出された。当該地域は福岡空港に南接する約８万㎡の空地で、埋蔵文化財包蔵地域の「下月隈Ｃ遺跡」として登録されている地域であった。さらに当該地に北接する地点では道路拡幅工事に伴う第１次調査によって弥生時代後期を中心とした集落関連遺構が、南接する地域でも空港周辺整備に伴う同遺跡第２・３次調査においては中世の集落・水田、古墳時代～弥生時代の水田、河川などが発見されていることから、当該地域においても遺跡の存在が十分に推定された。

このため、埋蔵文化財課では申請地において試掘調査を実施することに決定した。試掘調査は、当該地域全域に63ヶ所の試掘坑を設定し、1994年５月19日～同年６月19日に行った。その結果、申請地においては、全域で古代～中世に属すると推定される水田跡や水路、さらにその下層においては舌状に南北に延びる微高地上で弥生時代の柱穴や多量の土器を発見した。これらの資料から、当該地においては複数の遺跡面の存在と生産遺跡および集落遺跡の存在が推定され、計画されている開発事業が実施された場合には遺跡に影響が出ることが確実となった。

これらの試掘調査結果を平成６年７月６日付（福市教埋第52号）文書で依頼者に回答するとともに、試掘結果を基に博多港湾空港事務所と埋蔵文化財課とで協議を行った。この結果、月隈調節池建設工事に先立って埋蔵文化財発掘調査を実施することとし、第四港湾建設局長（現・九州地方整備局長）を委託者、福岡市長を受託者とする契約が締結された。この中で、発掘調査、資料整理および発掘調査報告書作成費用については第四港湾建設局が全額負担し、調査は福岡市教育委員会が実施することとなった。当初事業計画では、事業地全面を対象とした発掘調査を平成10年度から４年計画で実施することになっていたが、初年度（平成10年度）の調査により遺構密度が試掘調査で想定されていた以上に高いことが判明したため、調査計画を５年間に変更した。

2．調査の組織

(1) 委託者

運輸省第四港湾建設局博多港湾空港工事事務所
国土交通省九州地方整備局博多港湾空港工事事務所

【平成6年度】

第四港湾建設局長　石田省三　　博多港工事事務所長　鹿籠雅純

【平成10年度】

第四港湾建設局長　井上聡史　　博多港湾空港工事事務所長　久保省吾

【平成12年度】

第四港湾建設局長　江頭和彦　　博多港湾空港工事事務所長　古市正彦

【平成13年度】

九州地方整備局長　江頭和彦　　博多港湾空港工事事務所長　角　浩美

【平成14年度】

九州地方整備局長　渡辺茂樹　　博多港湾空港工事事務所長　角　浩美

(2) 調査主体

福岡市教育委員会

【平成6年度】

	教育長	尾花　剛
	文化財部長	後藤　直
	埋蔵文化財課長	折尾　学
事前審査	主任文化財主事	濱石哲也
試掘調査	文化財主事	長屋　伸
経理担当	事務吏員	内野保基

【平成10年度】

	教育長	町田英俊
	文化財部長	平塚克則
	埋蔵文化財課長	柳田純孝
	調査第2係長	山口譲治
調査担当	文化財主事	瀧本正志
	〃	田上勇一郎
	〃	本田浩二郎
経理担当	事務吏員	河野淳美

【平成12年度】

	教育長	西憲一郎
	文化財部長	柳田純孝
	埋蔵文化財課長	山崎純男
	調査第2係長	力武卓治
整理担当	文化財主事	瀧本正志
経理担当	文化財整備課	河野淳美

【平成13年度】

	教育長	生田征生
	文化財部長	柳田純孝
	埋蔵文化財課長	山崎純男
	調査第2係長	力武卓治
整理担当	文化財主事	瀧本正志
経理担当	文化財整備課	中岳　圭

【平成14年度】

	教育長	生田征生
	文化財部長	堺　徹
	埋蔵文化財課長	山崎純男
	調査第2係長	田中壽夫
整理担当	文化財主事	瀧本正志
経理担当	文化財整備課	中岳　圭

（調査・整理補助）

今林優湖　上野裕子　大神真理子　神原薫　北村幸子　清永啓子　草木迫あや　興絽友弘
佐藤貴海子　末次由紀恵　鈴木ひとみ　瀬戸啓治　高木 誠　槻木仁美　長浦芙美子　中間千衣子
中村智子　羽方 誠　春田城二　藤野雅基　持原良子　山口とし子　山野祥子

（調査協力者）

阿部幸子　荒牧幸子　荒牧テルヲ　安藤峰正　池 聖子　池田省三　井上英子　井上利弘　伊藤千里
岩崎良隆　上野龍夫　植松雅子　内山和子　江嶋光子　大音輝子　大賀 一　大橋由美子　奥田弘子
小野千佳　甲斐康完　兼田ミヤ子　亀井 薫　河野一一　草場恵子　倉野正明　黒瀬千鶴
桑原美津子　小池温子　古賀義博　小島キサエ　小路丸良江　小路丸嘉人　小松冨美　後藤タミ子
酒井次憲　坂口剛毅　指原姶子　佐藤アイ子　真田弘二　篠崎伝三郎　世利陽子　副田澄子
園田　豊　大長正弘　高手與志子　高野瑛子　武田潤子　田崎アヤ子　田中茂孝　田中フキ子
谷 英二　田上智雄　田端名穂子　堤 正子　寺園恵美子　徳永栄彦　徳永静雄　砥板晴美　豊丸秀仁
中村幸子　永田律子　永田八重子　長野嘉一　長峰正敏　夏秋弘子　西小路由美子　西堂将夫
二宮白人　野口リュウ子　花田則子　廣田安平　別府俊美　吹春哲男　増田ゆかり　松井一美
松浦滋子　松岡芳枝　松永七郎　三浦 力　宮崎雅秀　村本義夫　森本勇夫　森山恭助　森山タツヱ
安田光代　安高精一　安高久子　安元尚子　柳瀬 伸　山下智子　山下嘉人　山田 史　吉川暢子
吉住政光　吉田朋史　吉田博昭　吉村智子　脇坂サツキ　脇田 栄　渡辺淑子

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境

1．遺跡の位置と立地

本調査地周辺の地形は、北東側を三郡山地からのびる丘陵性山地に、南西側を背振山地から派生してのびる丘陵に挟まれ、北西から南東方向にほぼ直線的にのびる溝状地形が発達し、福岡～二日市～筑後地方へ通じる唯一の解析平地となっている。特に調査地周辺の低平地は北流する御笠川の沖積作用によって形成された標高８～12mほどの平野となり、福岡平野の東南部の一画を形成する。

下月隈Ｃ遺跡はこの底平地に点在する遺跡のひとつで、月隈・平尾丘陵と春日丘陵との間が扇状に広がる地形を呈する要の場所に位置する。現在の海岸線からは６kmを測るが、当時としては数km程度と推定される。

2．遺跡の歴史的環境

これまでの発掘調査で、調査地の西側を南北にのびる御笠川と月隈・平尾丘陵や東側を春日市から博多駅南側近くまで島状に高低を繰り返しながらのびる春日・那珂・比恵の各丘陵においては原始からの人々の暮らしの跡である遺跡が数多く存在していることが明らかとなっている。また、最近の発掘調査成果により、これまで遺跡の存在が想定されていなかった御笠川と月隈・平尾丘陵との間に位置する福岡空港などの低地においても遺跡が数多く発見され、微高地を中心とした底地において広範囲に遺跡が存在することが判明した。これまで弥生時代の集落は板付遺跡に代表される低丘陵上とその周辺から始まり、低湿地の開発はそれ以降とされてきたが、弥生時代の早い段階から微高地を中心とした底地においても人々が生活を営んでいたことが明らかになりつつある。

本章では、下月隈Ｃ遺跡と周辺の遺跡を取り上げてみる。

下月隈Ｃ遺跡

福岡空港に南接する遺跡で、東西0.5km、南北１kmの範囲を呈する。これまでの３次にわたる調査が行われ、遺跡の北側では弥生時代後期を中心とした集落跡が発見された。遺跡の南側では、古墳時代～奈良時代の水田、９～10世紀、10～13世紀、14世紀の集落と水田の大きく４時期の遺構が発見されている。特に、２・３次調査では越州窯系青磁碗の精製品、蛇の目高台の白磁碗、緑釉陶器皿、滑石製の権、瓦等の一般集落からでは見られない遺物が出土していることから、９～10世紀における集落は特権階級もしくはそれらに関係する集落と考えられ、それ以降は溝や門で画された屋敷に代表される一般集落に変容している。

雀居遺跡

本調査地から北方２km、福岡空港の西辺部中央に位置する遺跡で、東西0.4km、南北１kmの範囲を呈する。国際空港ターミナル建設をはじめとする空港西側整備に伴い、これまでに13次にわたる調査が行われ、弥生時代早期（縄文時代晩期末）～古墳時代前期までの集落、古代からの水田などが発見されている。特に遺跡の南側に位置する第４・５次調査では、弥生時代後期に比定され、推定南北約130m、東西約200mの楕円形状を呈する濠と梁行8.4m、桁行12.18mを測る大規模掘立柱をはじめとした29棟もの建物からなる環濠集落が発見されている。また、直接的に竪穴住居などの遺構は発見されていないが、第７次調査の微高地では前期の土坑墓６基や甕棺墓８基および大量の土器、石器、木製農耕具などが出土していることから、弥生時代早期（縄文時代晩期末）の段階から集落が営まれていたことは明白である。

Fig. 1　調査地位置図（1/200,000）

Fig. 2　調査地周辺航空写真

板付遺跡

本調査地から西方0.8m、北方へ島状に起伏に富みながらのびる春日丘陵の北頂端部に造営された環濠集落と丘陵裾部の低湿地に広がる水田からなる弥生時代前期の遺跡で、縄文時代晩期末（弥生時代早期）の水田も発見されている。環濠は内濠と外濠の二重の濠からなり、断面形が「Ｖ」字形を呈した内堀は、南北約115m、東西85mの楕円形状の平面形を測る。内堀の一画は、さらに直線溝で平面形が半月状に画し、食料倉庫である貯蔵穴群が築かれている。北側の内堀と外堀の間には小児甕棺墓群も確認されている。ただし、内堀の内側においては貯蔵穴の他には後生の削平により遺構は全く残存しておらず、集落の構成などは不明のままである。

天神森遺跡

本調査地の北東0.6km、月隈・平尾丘陵西斜面の裾部に位置する弥生時代前期前半から中期の甕棺墓、木棺墓の遺跡である。甕棺墓44基、木棺墓24基が確認されている。特に木棺墓は二列に埋葬され、棺外には小壷が副葬されていた。

上月隈遺跡

本調査地の東方0.35km、月隈・平尾丘陵の標高18m～21mを測る支丘の尾根線と斜面に位置する弥生時代中期後半期の遺跡である。これまでに３次にわたる調査が行われ甕棺墓29基、木棺墓２基、土坑墓15基が確認されている。特に、中期後半の大型墓坑を有する木蓋単棺甕棺墓のST007号は、棺内が朱（赤色硫化水銀）で塗布され、刃部を矢羽根状に研ぎ分けしている細形銅剣１口、ガラス製管玉20数点が棺内に副葬されていた。

久保園遺跡

本調査地の北方1.7km、月隈・平尾丘陵の標高20m前後を測る支丘の斜面に位置する弥生時代中期の遺跡である。これまでの調査で中期後半の梁行５間、桁行８間の大規模掘立柱建物が確認されている。

赤穂ノ浦遺跡（席田大谷遺跡）

本調査地の北方1.5km、月隈・平尾丘陵の標高30m前後を測る支丘の斜面に位置する弥生時代後半期の遺跡である。これまでの調査で横帯文銅鐸の鋳型が出土している。

宝満尾遺跡

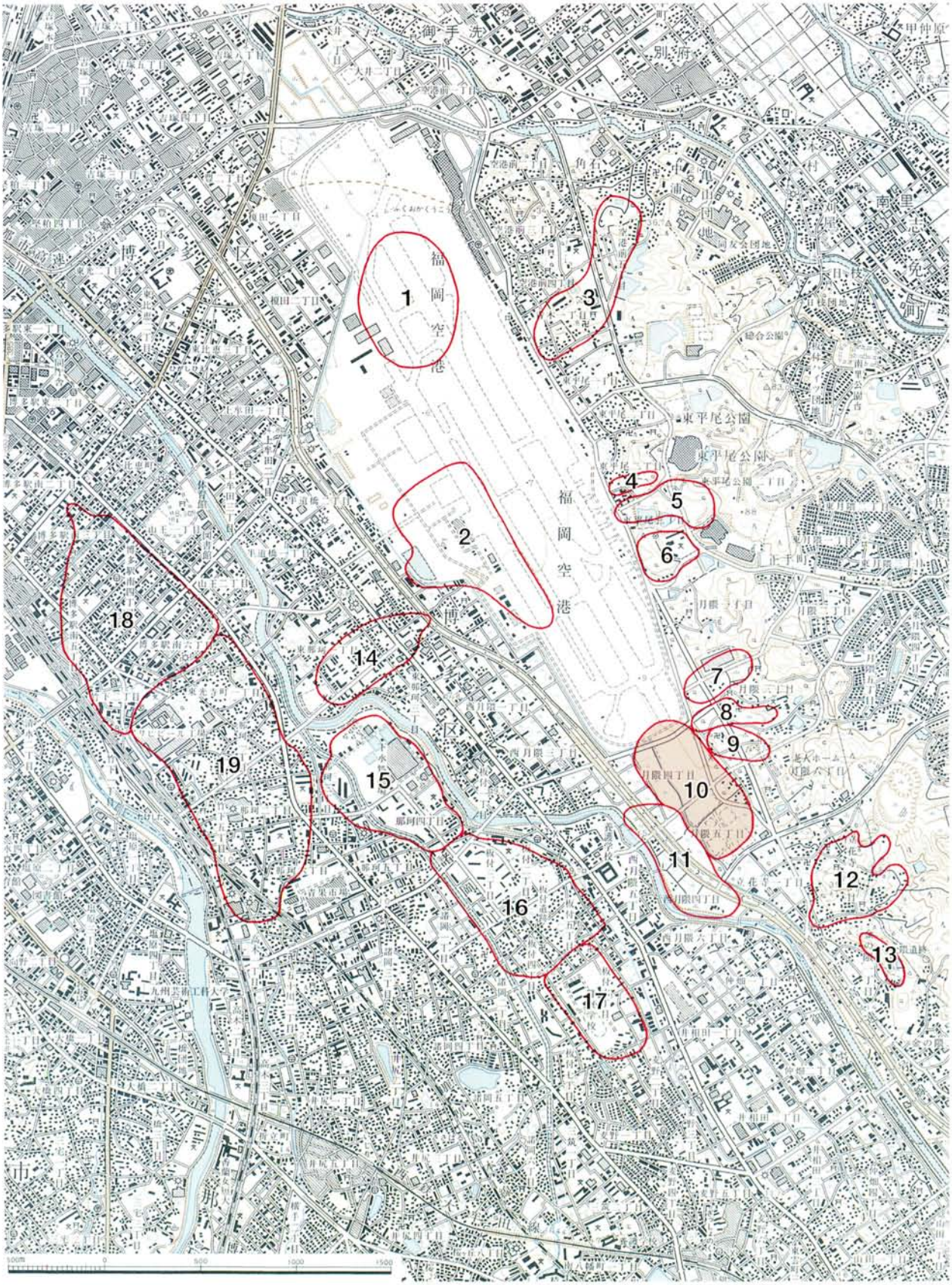
本調査地の北方1.3km、月隈・平尾丘陵の標高22m～30mを測る支丘の尾根線と斜面に位置する弥生時代後半期の遺跡である。これまでの調査で甕棺墓群、土坑墓群が確認され、その中の４号土坑墓には内行花文明光鏡、鉄製品、ガラス製小玉が副葬されていた。

金隈遺跡

本調査地の南東方1.3km、月隈・平尾丘陵から派生した標高35m前後を測る独立丘陵の尾根上に立地する弥生時代前期後半～後期に営まれた共同墓地遺跡で、国史跡である。甕棺墓348基、土坑墓等119基が確認されている。副葬品を有する墓は少ないが、ゴホウラ貝製の腕輪を装飾しており同時期における南西諸島との関連を知ることができる。同遺跡でも中期後半期から後期における甕棺墓の造営数は他の時期に比べて突出する。

那珂君休遺跡

本調査地の北西方1.4km、南東から北西方向へ標高を下げながら島状にのび、板付遺跡の立地する春日丘陵の先端部に位置する遺跡である。これまでに８次にわたる調査が行われ、弥生時代後期の井堰、古墳時代前期の水田、河川、井堰、水溜状遺構等の遺構が確認されている。さらに、多くの木製農耕具や沓、楯等が発見されている。遺跡の中心は古墳時代前半期の３世紀後半～５世紀前半である。



1．上牟田遺跡　2．雀居遺跡　3．席田青木遺跡　4．久保園遺跡　5．席田遺跡
6．宝満尾遺跡　7．天神森遺跡　8．下月隈Ｂ遺跡　9．上月隈遺跡　10．下月隈Ｃ遺跡
11．立花寺Ｂ遺跡　12．立花寺遺跡　13．金隈遺跡　14．東那珂遺跡　15．那珂君休遺跡
16．板付遺跡　17．高畑遺跡　18．比恵遺跡　19．那珂遺跡

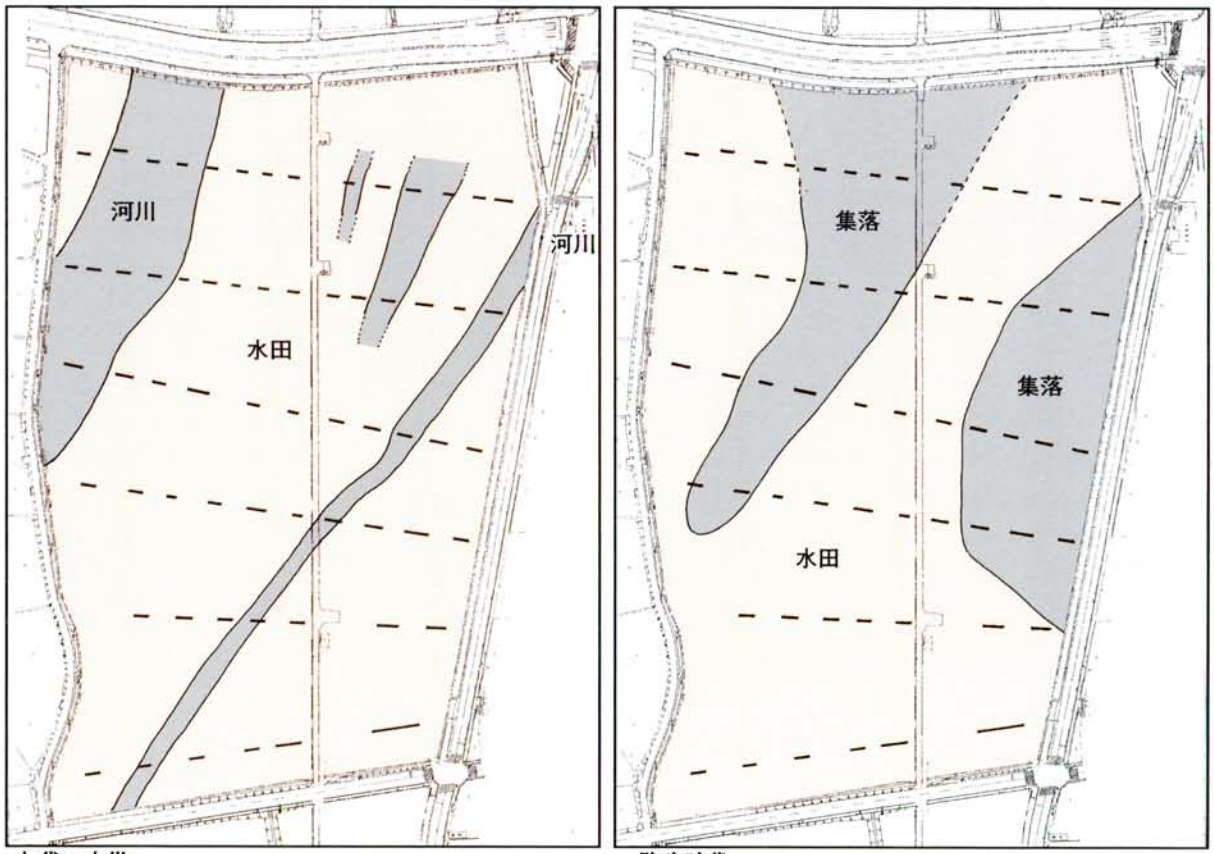
Fig. 3　調査地周辺遺跡分布図（1/30,000）

第Ⅲ章　調査の記録

1．試掘調査の概要

試掘調査は、工事予定地域である約80,000㎡の全域を対象として、平成６年（1994年）５月19日から同年６月17日に、バックフォーを用いて実施した。試掘坑は、南北に６列のラインを計画した後、各列に10m～20mmを測る試掘坑を設定し、地表下２m～３mまで掘り下げた。総試掘坑数は63ヶ所を数える。試掘調査の目的は、当該地の南北両辺に隣接する地においてはこれまでに第１次～３次の発掘調査がおこなわれ、弥生時代・古墳時代・中世の各遺構・遺物が発見されていることから、遺跡の有無や広がりはもちろんのこと遺跡全容解明の手がかりを得ることにあった。

試掘調査の結果、当該地に所在する生活文化面が古代から中世と弥生時代の大きく２時期あると推定された。地表下約１mに位置する古代から中世の面はFig. 4の左図に示すように、大規模河川と複数の流路が現在の地形にも合致した南北方向に流れ、これらの空間を水田が満たしているという状況である。なお、水田は試掘調査の土層図では複数層存在することが、水田間に厚い砂層を挟んで存在することから知らされた。地表下約２mに位置する弥生時代の面はFig. 4の右図に示すように、南北に延びる細い微高地上に柱穴や多数の土器が出土していることから集落が展開していることが明らかで、微高地間の谷間には護岸状の杭列が存在することなどから集落に直接結びつく水田が広がっていたと判断された。この水田層も複数が存在することが、水田間に厚い砂層を挟んで存在する土層状況から知ることとなった。



古代～中世　　弥生時代

Fig. 4　試掘調査による遺構想定図（1/2,000）

2．調査の概要と経過

調査計画初年度の下月隈C遺跡第4次調査は、1998年（平成10年）9月2日に発掘調査を着手し、1999年3月25日終了した。調査面積は6,500㎡であるが、4層の発掘調査となったために総面積は26,000㎡を測る。

遺構検出面は4面を数え、第1遺構検出面は中世、第2遺構検出面は奈良時代～平安時代前半期、第3遺構検出面は古墳時代、第4遺構検出面は弥生時代である。

1998年

9月　2日から表土掘削をバックフォーを用いて開始。頭上10mほどを飛行機が爆音とともに通過。朝夕はひっきりなしに離発着している。法令に従ってバックフォーに赤旗を装着させる。地表下1mほどで灰褐色砂質土層となり、溝、土壙などが認められる。14日から第1遺構検出面における本格的遺構検出作業を開始。瀧本が研修のため本田が代わって2週間だけ調査を担当。

10月　溝・柱穴などを検出するが屋敷などの区画性が認められない。

11月　組合せ式の井戸を調査する。26日に第1回目の空中写真撮影。第2遺構検出面における本格的遺構検出作業を開始。

12月　畦畔・足跡、大規模河川を検出する。畦畔は旧条里と同じ方向にある。調査区を斜行する河川を掘り下げ、須恵器・土師器の日常雑器が多く出土する。状況から、同じ面で検出した水田より新しい可能性がある。

1999年

1月　第3遺構検出面における本格的遺構検出作業を開始。第2面で検出した水田畦畔とは方向が大いに異なる畦畔・水田を検出する。調査区西辺部で大量の土器が集積した状態で出土。時期的には弥生時代後期～古墳時代初頭が中心である。26日に第2回目空中写真撮影。

2月　第4遺構検出面における本格的遺構検出作業を開始。4日、昨夜来の大雪で作業中止。SD104の掘り下げ始まり、多数の木製品が出土する。溝SD108で井堰を検出。建築部材の柱などを用いて構築されていることが判明。同時に、同井堰の溜まりからはネズミ返しと梁材が一体となった部材が出土するとともに多くの木製品が出土した。これらは、単に流れ着いたとか投棄したものではない状況を示している。

3月　SD112から盾と盾を装飾したであろう桜皮が出土。浅川滋男奈良国立文化財研究所遺構調査室長に出土建築部材について指導を受ける。23日に第3回目の空中写真撮影。25日に発掘調査作業を終了。

バックフォーと頭上を通過する飛行機

第2遺構検出面の水田

大雪による現場積雪状況

溝SD108の建築部材出土状況

浅川氏との出土建築部材検討状況

第Ⅳ章　遺構と遺物

1．遺　構

本調査で検出した遺構は、大別すると中世（平安時代後半期～鎌倉時代）、古代（奈良時代～平安時代前半期）、古墳時代、弥生時代の４時期である。

（１）第１遺構検出面

現地表を成す造成盛土下の旧耕作土直下で、溝21条、土坑40基、井戸４基を検出した。遺構の大半は調査区の西半部に認められる。近・現代の耕作による削平を受けている。

以下、主な遺構の特徴と出土遺物を記す。

溝（SD）

SD17（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央に位置する直線的東西溝で、幅3.3m、深さ0.1m、全長5.6mを測る。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。

SD18（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央、SD17の東に位置する直線的東西溝で、幅2.2m、深さ0.3m、全長5.5mを測る。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。溝SD17と一連の可能性が高い。遺物は、土師器・椀、須恵器・甕、越州窯産磁器・碗、白磁・碗、平瓦、滑石製石鍋が出土している。

SD22（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央、SD26の南に位置する直線的溝で、北東から南西方向に流れる。幅1.0m、深さ0.2m、全長7.5mを測る。壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。

SD23（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央、SD22の北に位置する溝で、平面的には半径10mほどの円を描く。溝SD22・26より新しい。幅1.8m～2.3m、深さ0.3m、全長16mを測る。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。

SD26（Fig. 5, 6　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央、SD22の北に位置する直線的溝で、北東から南西方向に流れる。幅1.4m、深さ0.4m、全長49mを測る。溝の西端部は調査区外に続き、東端部は調査区北辺部中央で立ち上がる。切り合い関係から、溝SD42・43より新しく、溝SD23より古い。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。 溝内の埋土は白色粗砂で、他の多くの溝内埋土が茶灰色、暗青灰色、茶褐色等の細砂やシルトであるのに対して大きく異なる。遺物は、黒色土器・椀、土師器・椀、須恵器・杯、滑石製石鍋が出土している。

SD27（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央に位置する直線的東西溝で、幅0.8m～2.4m、深さ0.2m、全長９mを測る。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。溝SD42より古い。

SD28（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央に位置する直線的南北溝で、幅2.6m、深さ0.3m、全長9.1mを測る。溝の壁面は

Fig. 5　第１遺構検出面遺構配置図（1/400）

弧を描くように緩かに立ち上がる。

SD29（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央、SD28の東に位置する東西溝で、幅0.5m～0.8m、深さ0.2m、全長４mを測る。溝の西端部は途中で立ち上がる。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。

SD42（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央、溝SD23の東に位置し、やや蛇行する南北溝で、幅0.8m～1.8m、深さ0.3m、全長29mを測る。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。溝の南端部は途中で立ち上がり、北端部は開口する。溝SD26・27・43より古く、溝SD63より新しい。遺物は、土師器・蓋・杯・小皿、須恵器・甕、黒色土器・椀、滑石製石鍋が出土している。

SD43（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央、溝SD23の東に位置する直線的東西溝で、幅0.6m～0.8m、深さ0.2m、全長16.5mを測る。溝SD63より新しい。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。

SD53（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区中央部に位置する直線的東西溝であるが、平面形的には土坑状的形態を呈している。幅0.6m～0.8m、深さ0.4m、全長3.1mを測る。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。

SD58（Fig. 5, 7　PL. 2, 21～24）

調査区南辺部中央から北上し、途中で西に折れ曲がる東西溝で、幅1.2m、深さ0.5m、全長36.5mを測る。溝の南端部は調査区の外に続き、西端部は途中で立ち上がる。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。遺構の切り合い関係から、溝SD59・60より新しく、土坑SK55より古い。遺物は、土師器・杯・椀・小皿、黒色土器・椀、須恵器・杯・甕、青磁・碗、白磁・碗、滑石製石鍋が出土している。

SD59（Fig. 5, 7～8　PL. 2, 21～24）

調査区中央部から北東部、溝SD77の南に位置する直線的溝で、北東から南西方向に流れる。幅1.0m～1.5m、深さ0.2m～0.5m、全長50mを測る。溝SD58・64より古い。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。遺物は、須恵器、土師器・皿が出土している。

SD60（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区中央部、溝SD58の東に位置する直線的東西溝で、幅0.7m～1.0m、深さ0.2m、全長15.2mを測る。西端部は溝SD58に、東端部は溝SD64により壊されており不明。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。溝SD58・64より古い。遺物は、土師器・椀・甕、白磁・碗が出土している。

SD63（Fig. 5, 9　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央、SD26の南に位置する直線的南北溝で、幅1.2m、深さ0.4m、全長59mを測る。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。溝SD42・43より古い。 遺物は、黒色土器・椀、土師器・杯・小皿が出土している。

SD64（Fig. 5, 10　PL. 2, 21～24）

調査区南辺部中央、溝SD59の南に位置するＬ字溝で、幅0.8m～1.2m、深さ0.2m～0.5m、全長42mを測る。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。溝SD60より新しい。遺物は、土師器・椀、須恵器・蓋、滑石製石鍋が出土している。

SD77（Fig. 5, 11　PL. 2, 21～24）

調査区中央、溝SD63の途中から分岐する東西溝で、幅 1.2m～1.8m、深さ0.3m、全長31mを測る。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。溝SD64より古い。

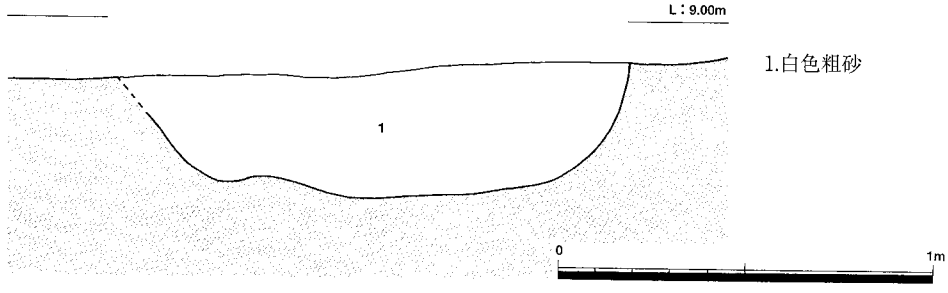


Fig. 6　溝SD26土層実測図（1/20）

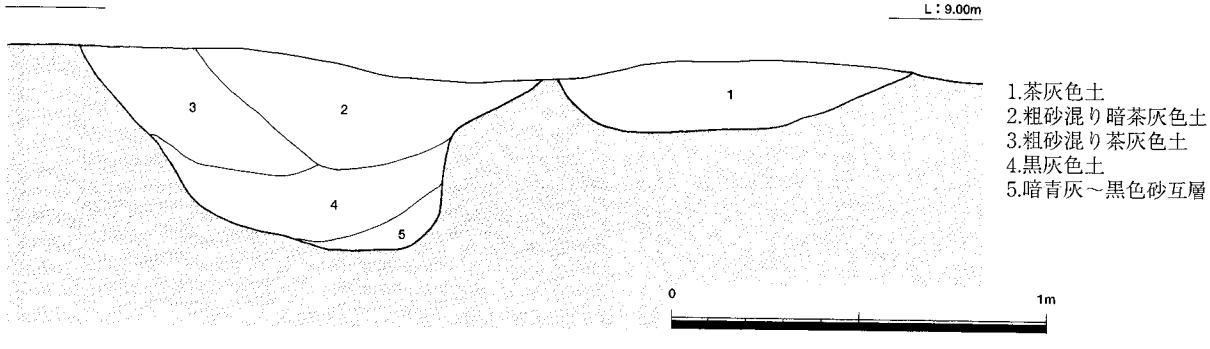


Fig. 7　溝SD58・59土層実測図（1/20）

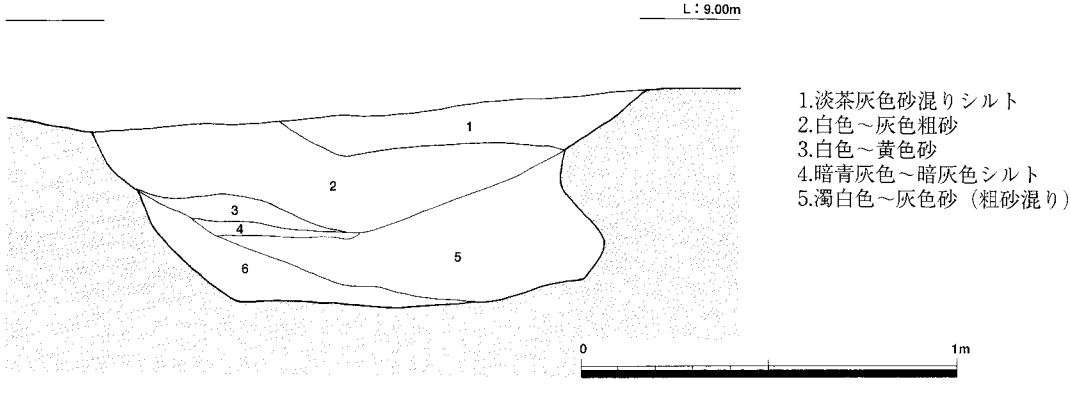


Fig. 8　溝SD59土層実測図（1/20）

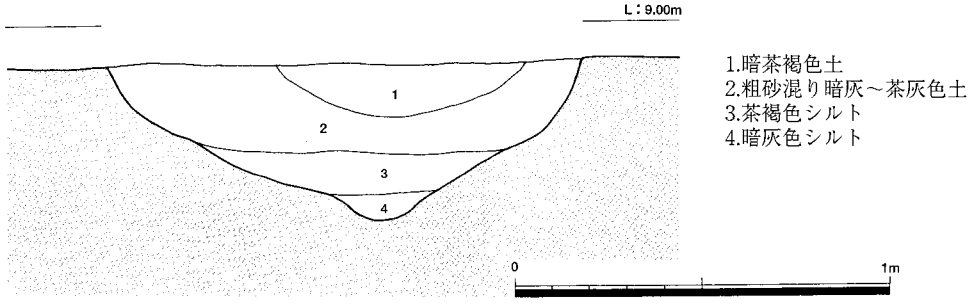


Fig. 9　溝SD63土層実測図（1/20）

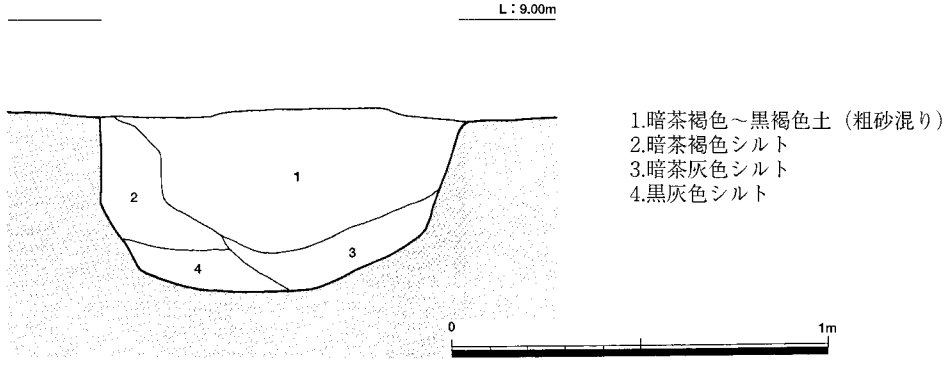


Fig.10　溝SD64土層実測図（1/20）

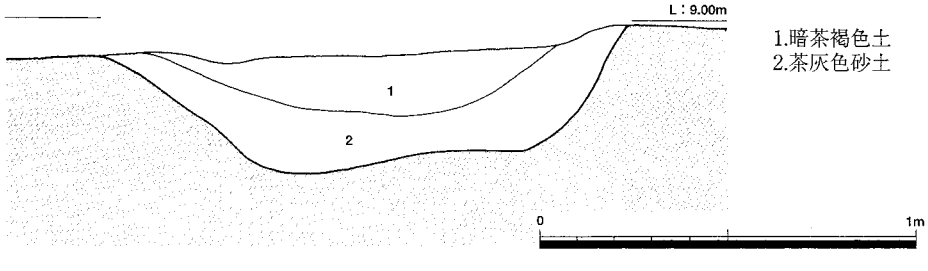


Fig.11　溝SD77土層実測図（1/20）

井　戸（SE）

第１検出面では６基の井戸を検出した。

SE68（Fig. 5, 12　PL. 2, 21～25）

調査区中央部、溝SD77の南に位置する井戸である。掘形は円形を呈し、上部径1.2m、底部径0.6mを測る。底面は平坦で、壁面は底から0.6mほどは直に立ち上がり、上部は漏斗状に直線的な斜面を呈する。井戸底には径43cmを測る底板を取り除いた曲物桶が残り、内には白色粗砂が認められる。遺物は、土師器・椀、瓦質土器・椀、曲物が出土している。

SE69（Fig. 5, 13　PL. 2, 21～24）

調査区中央部、井戸SE68の東に位置する素掘りの井戸である。掘形は楕円形の平面形、長軸は南北方向を呈し、上面で長径1.4m、短径1.2m、坑底で長径0.8m、短径0.6m、深さ0.8mを測る。底面は平坦で、壁面は底から0.5mほどは直に立ち上がり、上部は漏斗状に直線的な斜面を呈する。遺物は、土師器・椀、瓦質土器・椀、曲物が出土している。

SE73（Fig. 5, 14　PL. 2, 21～26）

調査区中央部、溝SD58・60・64に囲まれる位置にあり、方形隅柱横桟縦板を井筒とする井戸である。掘形は楕円形の平面形、長軸は東西方向を呈し、上面で長径1.8m、短径1.5m、坑底で長径1.4m、短径1.2m、深さ1.2mを測る。底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。井筒の構築方法は①掘形の底に径８cm～10cmを測る四本の丸太隅柱を方75cmに配する。②小口に仕口の有る径５センチ弱の丸太を井桁に組み、井桁の外側と隅柱が接するように配する。このことにより、土圧による隅柱の内側への倒れ込みを防ぐ。③四辺に幅840cm、厚さ１cmの板を重なるようにして囲む。遺物は、土師器・鉢が出土している。

SE80（Fig. 5　PL. 2, 21～25）

調査区南辺部中央、溝SD58の東に位置する井戸である。掘形は円形を呈し、上部径1.5m、底部径1.2m、深さ0.6mを測る。底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。井戸底には径35cmを測る底板を取り除いた曲物桶が残り、曲物が出土している。溝SD58により掘形からの西辺部が壊されている。

SE82（Fig. 5　PL. 2, 21～25）

調査区南東隅部に位置する井戸である。掘形は円形を呈し、上部径1.1m、底部径0.7m、深さ0.5mを測る。底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。井戸底には径36cmを測る底板を取り除いた曲物桶が残る。

SE83（Fig. 5　PL. 2, 21～25）

調査区西辺部中央、井戸SE84の南に位置する井戸である。掘形は楕円形の平面形、長軸は南北方向を呈し、上面で長径1.1m、短径1.0m、坑底で長径0.7m、短径0.5m、深さ0.2mを測る。井戸底には底板を取り除いた曲物桶片が残る。復元径50cm。

SE84（Fig. 5　PL. 2, 21～25）

調査区西辺部中央、井戸SE83の北に位置する井戸である。掘形は円形を呈し、上部径2.2m、底部径1.8m、深さ0.2mを測る。底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。井戸底には幅15cm、全長60cm～75cm、厚さ１cmを測り、両側縁にはＶ字形の切り込みが施された２枚の板材と瓢箪が残る。板材は井戸枠材としての可能性があるが、側縁部の加工痕は井桁組には適してないことから転用材と考えるのが妥当であろう。

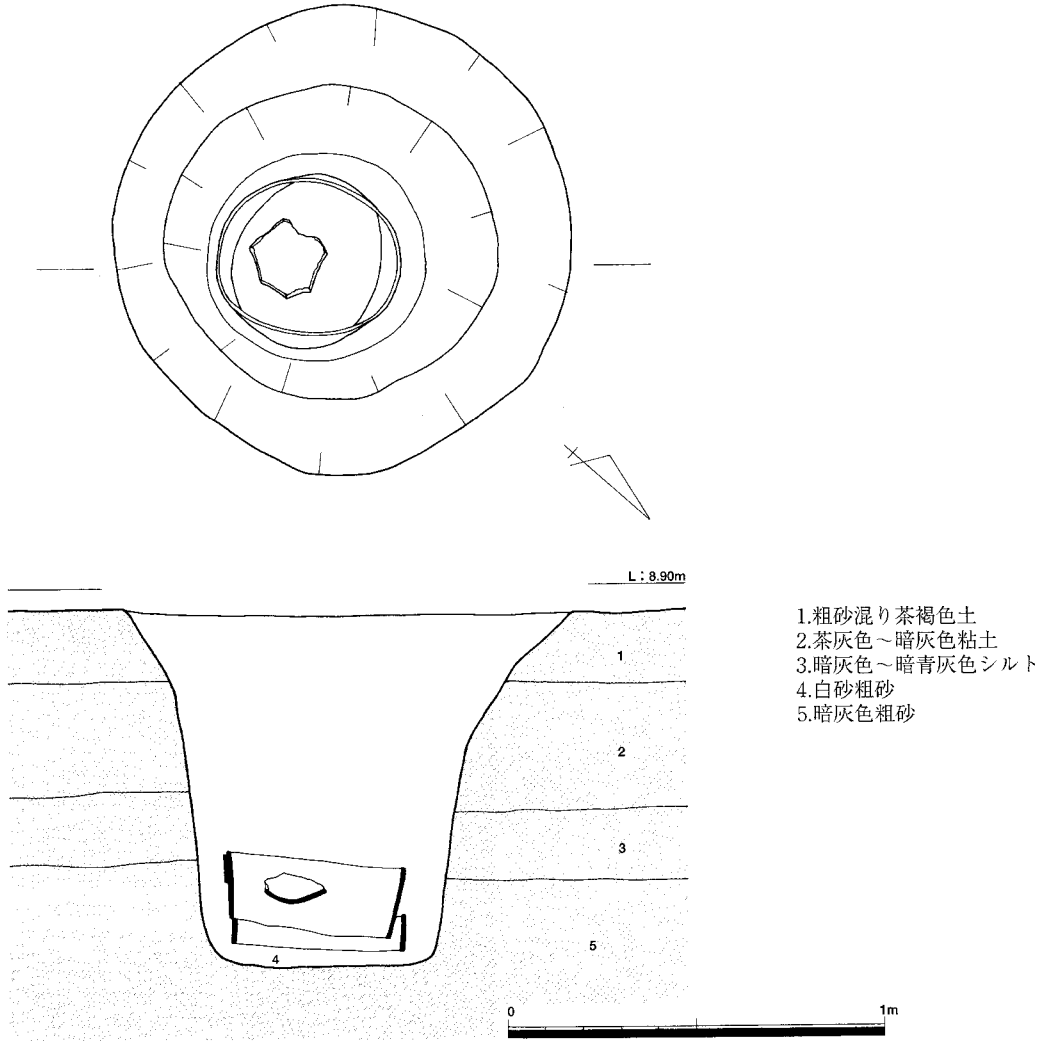


Fig.12　井戸SE68実測図（1/20）

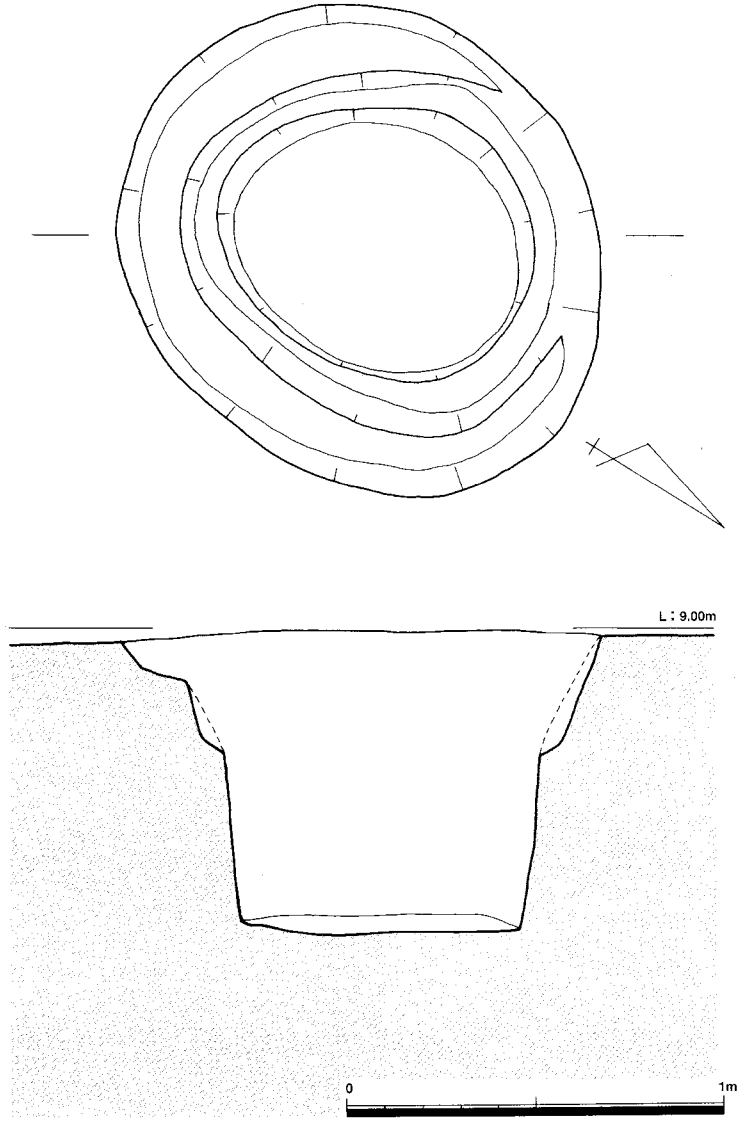


Fig.13　井戸SE69実測図（1/20）

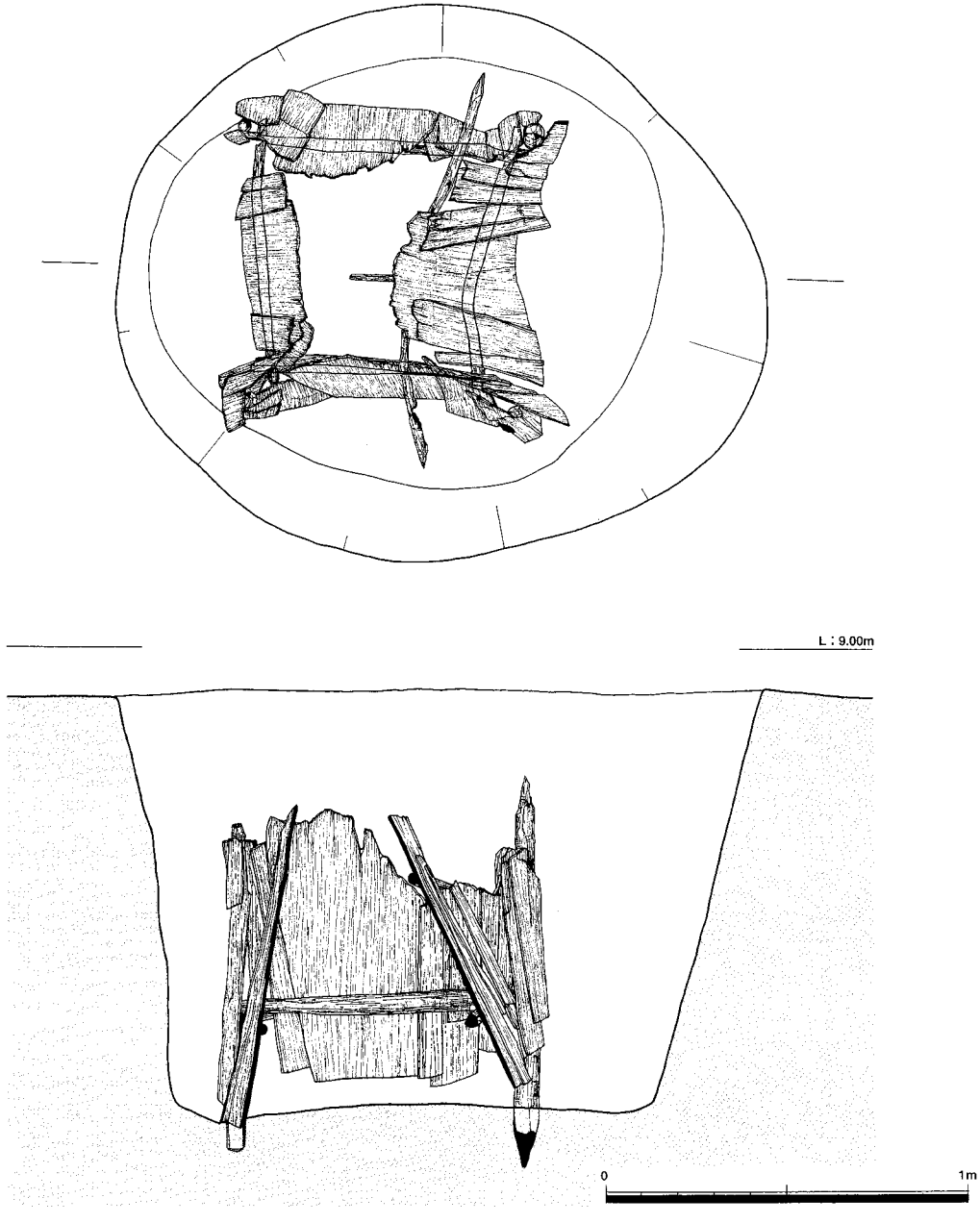


Fig.14　井戸SE73実測図（1/20）

土　坑（SK）

SK03（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区南西隅部、土坑SK04の西に位置する。楕円形の平面径を呈し長軸は東西方向である。坑底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長径1.2m、短径0.8m、坑底で長径0.9m、短径0.6m、深さ0.2mを測る。

SK04（Fig. 5, 15　PL. 2, 21～24, 27）

調査区南西隅部、土坑SK03の東に位置する。楕円形の平面形を呈し長軸は北西－南東方向である。坑底面は丸味を有し、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長径1.4m、短径1.1m、坑底で長径0.7m、短径0.6m、深さ0.7mを測る。遺物は、黒色土器・椀が出土している。

SK16（Fig. 5　PL. 2, 21～24, 27）

調査区西辺部中央、土坑SK78の南に位置する。楕円形の平面形を呈し長軸は東西方向である。坑底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長径1.0m、短径0.8m、坑底で長径0.8m、短径0.5m、深さ0.3mを測る。

SK30（Fig. 5　PL. 2, 21～24, 27）

調査区西辺部中央、土坑SK32の東に位置する。楕円形の平面形を呈し長軸は南北方向である。坑底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長径0.4m、短径0.3m、坑底で長径0.3m、短径0.2m、深さ0.1mを測る。

SK32（Fig. 5　PL. 2, 21～24, 27）

調査区西辺部中央、土坑SK30の西に位置する。溝状の平面形を呈し長軸は南北方向である。坑底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長径4.0m、短径1.3m、坑底で長径3.6m、短径1.1m、深さ0.1mを測る。遺物は、土師器・甕が出土している。

SK36（Fig. 5　PL. 2, 21～24, 27）

調査区西辺部中央、土坑SK37の西に位置する。楕円形の平面形を呈し長軸は南北方向である。坑底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長径1.0m、短径0.7m、坑底で長径0.7m、短径0.5m、深さ0.15mを測る。

SK37（Fig. 5　PL. 2, 21～24, 27）

調査区西辺部中央、土坑SK36の東に位置する。楕円形の平面形を呈し、長軸は南北方向である。遺構の東半部は攪乱によって残存しない。上面で残存長径2.9m、残存短径2.3m、坑底で残存長径2.6m・残存短径0.8m、深さ0.1mを測る。遺物は、土師器・椀が出土している。

SK38（Fig. 5　PL. 2, 21～24, 27）

調査区西辺部中央、土坑SK40の南に位置する。不正形な平面形を呈し、長軸は東西方向である。遺構の西半部は攪乱によって残存しない。上面で残存長径3.2m、残存短径2.3m、深さ0.2mを測る。

SK39（Fig. 5　PL. 2, 21～24, 27）

調査区西辺部中央、土坑SK37の北に位置する。円形の平面形を呈し、上面で径1.2m、坑底で径1.0m、深さ0.2mを測る。坑底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。

SK40（Fig. 5　PL. 2, 21～24, 27）

調査区西辺部中央、土坑SK37の北に位置する。楕円形の平面形を呈し長軸は東西方向である。上面で長径0.7m、短径0.5m、坑底で長径0.4m、短径0.3m、深さ0.1mを測る。

SK41（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央、溝SD42南端の西に位置する。東半部は溝SD42によって壊されている。不整形な平面形を呈し長軸は南北方向である。上面で長径2.5m、短径0.7m、坑底で長径2.3m、短径0.6m、深さ0.2mを測る。溝SD42より古い。

SK44（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央、土坑SK45の北に位置する。楕円形の平面形を呈し長軸は東西方向である。上面で長径2.3m、短径0.9m、坑底で長径1.9m、短径0.6m、深さ0.2mを測る。坑底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。

SK45（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央、土坑SK46の北に位置する。不整形な平面形を呈し、西半部は現代攪乱によって欠失し不明。長軸は東西方向である。上面で長径5.5m、短径4.7m、坑底で長径5.1m、短径4.3m、深さ0.1mを測る。坑底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。溝SD63より古い。

SK46（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央、土坑SK45の南に位置する。隅丸方形の平面形を呈するが、西半部は現代攪乱によって欠失し不明。長軸は東西方向である。上面で長径4.2m、短径3.1m、坑底で長径3.9m、短径2.8m、深さ0.1mを測る。坑底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。溝SD63より古い。

SK47（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央、土坑SK46の南に位置する。不整形な平面形を呈し、西半部は攪乱や溝によって欠失し不明。長軸は東西方向である。上面で長径7.2m、短径4.5m、坑底で長径6.8m、短径4.0m、深さ0.1mを測る。坑底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。溝SD63より古い。

SK51（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央、土坑SK47の南に位置する。楕円形の平面形を呈し長軸は南北方向である。坑底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長径2.5m、短径1.3m、坑底で長径2.1m、短径1.1m、深さ0.1mを測る。溝SD63より古い。

SK52（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央、溝SD42南端の東に位置する。円形の平面形を呈し、上面で径0.7m、坑底で径0.4m、深さ0.1mを測る。坑底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。

SK55（Fig. 5, 16　PL. 2, 21～24, 27）

調査区西辺部中央、溝SD58の西端部近くに位置する。円形の平面形を呈し、上面で径0.9m、坑底で径0.5m、深さ0.3mを測る。坑底面は平坦で、壁面は直線的に外反しながら立ち上がる。溝SD58より新しい。遺物は、土師器・甕・碗が出土している。

SK56（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央、土坑SK55の南に位置する。楕円形の平面形を呈し長軸は南北方向である。上面で長径1.1m、短径0.8m、坑底で長径0.8m、短径0.6m、深さ0.2mを測る。坑底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。

SK57（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区北西部、溝SD23の北に位置する。楕円形の平面形を呈し長軸は南北方向である。上面で長径0.6m、短径0.5m、坑底で長径0.5m、短径0.4m、深さ0.2mを測る。坑底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。

SK65（Fig. 5, 17　PL. 2, 21～24）

調査区中央、溝SD77の南に位置する。やや不整形な円形の平面形を呈し、上面で径0.9m、坑底で径0.7m、深さ0.4mを測る。坑底面は平坦で、壁面は直線的に直に立ち上がる。

SK66（Fig. 5, 18　PL. 2, 21～24）

調査区中央、土坑SK65の東に位置する。楕円形の平面形を呈し上面の長軸は東西方向で、坑底面の長軸は南北方向である。上面で長径2.6m、短径2.2m、坑底で長径1.0m、短径0.8m、深さ0.8mを測る。坑底面は平坦で、壁面は緩やかな直線的な斜面を呈する。 遺物は、土師器・椀・皿、瓦質土器・椀、須恵器・甕、砥石が出土している。

SK67（Fig. 5, 19　PL. 2, 21～24）

調査区中央、土坑SK66の東に位置する。楕円形の平面形を呈し長軸は南北方向である。上面で長径1.6m、短径1.3m、坑底で長径0.6m、短径0.4m、深さ0.5mを測る。坑底面は丸味を有し、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。遺物は、土師器・甕、須恵器・蓋が出土している。

SK70（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

調査区中央部、溝SD77の北に位置する。溝状の平面形を呈し長軸は南北方向である。上面で長径4.6m・短径0.8m、坑底で長径4.1m、短径0.5m、深さ0.2mを測る。壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。 遺物は、瓦質土器・椀が出土している。

SK71（Fig. 5, 20　PL. 2, 21～24, 27）

調査区中央部、土坑SK70の東に位置する。隅丸長方形の平面形を呈し長軸は東西方向である。上面で長辺2.5m、短辺1.1m、坑底で長辺1.8m、短辺0.4m、深さ0.4mを測る。坑底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。土坑墓の可能性がある。 遺物は、土師器・小皿、白磁・碗が出土している。

SK75（Fig. 5, 21　PL. 2, 21～24, 27）

調査区西辺部中央、土坑SK47の南に位置する。掘形は二段から成り、上段の掘形は楕円形の平面形を呈し長軸は東西方向である。上面で長径2.1m、短径1.7m、坑底で長径1.8m、短径1.4m、深さ0.15mを測る。下段の掘形は上段掘形底の西半部に位置し、楕円形の平面形を呈した長軸は南北方向である。上面で長径1.3m、短径1.0m、坑底で長径0.8m、短径0.5m、深さ0.4mを測る。坑底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。

SK78（Fig. 5, 22　PL. 2, 21～24）

調査区西辺部中央、土坑SK20の南に位置する。掘形は二段から成り、上段の掘形は不整形な隅丸方形の平面形を呈する。上面で長径1.6m、坑底で短径1.4m、深さ0.2mを測る。下段の掘形は上段掘形底の東半部が0.2m一段深くなっている。坑底面は平坦で、壁面は直に立ち上がる斜面を呈する。溝SD17より新しい。

SK79（Fig. 5　PL. 2, 21～24）

遺物は、土師器・甕・椀が出土している。

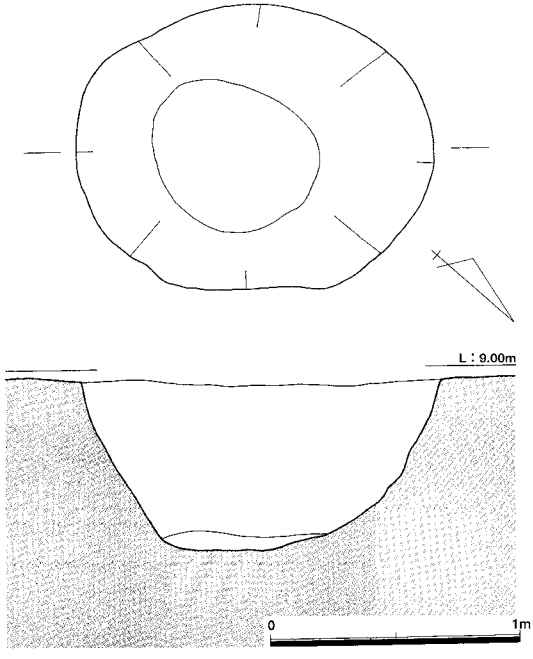


Fig.15　土坑SK04実測図（1/30）

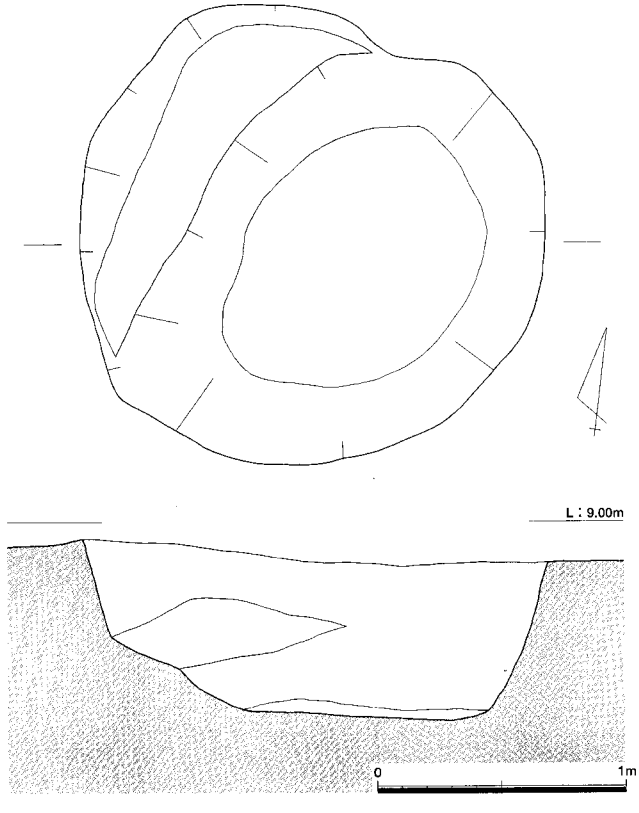


Fig.16　土坑SK55実測図（1/30）

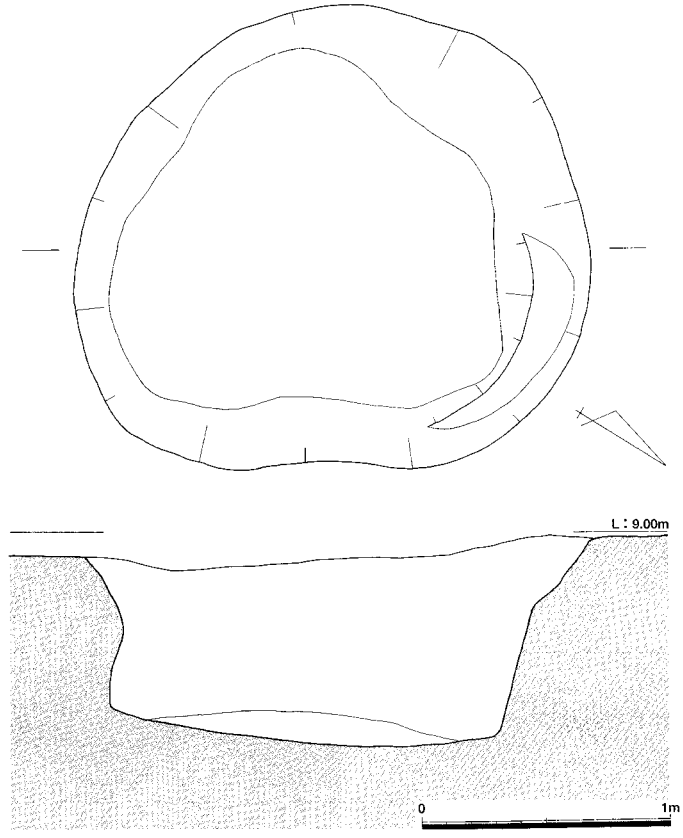


Fig.17　土坑SK65実測図（1/30）

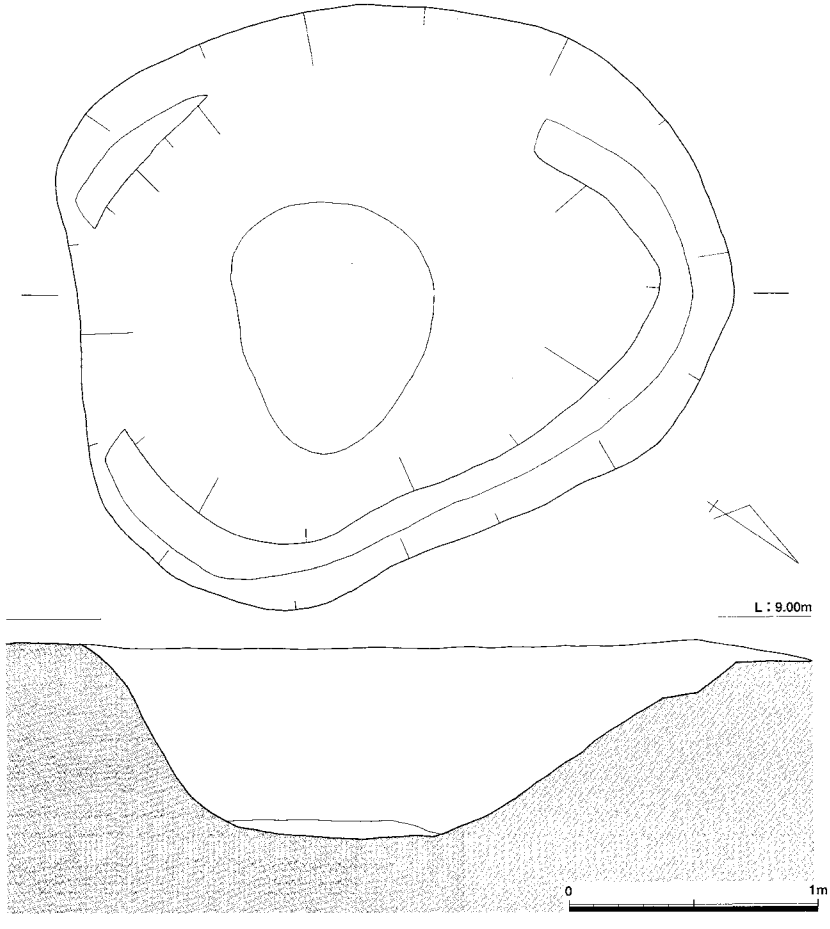


Fig.18　土坑SK66実測図（1/30）

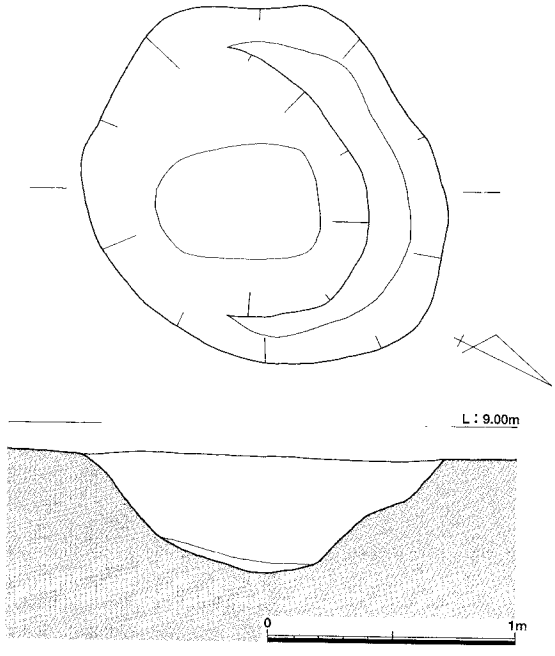


Fig.19　土坑SK67実測図（1/30）

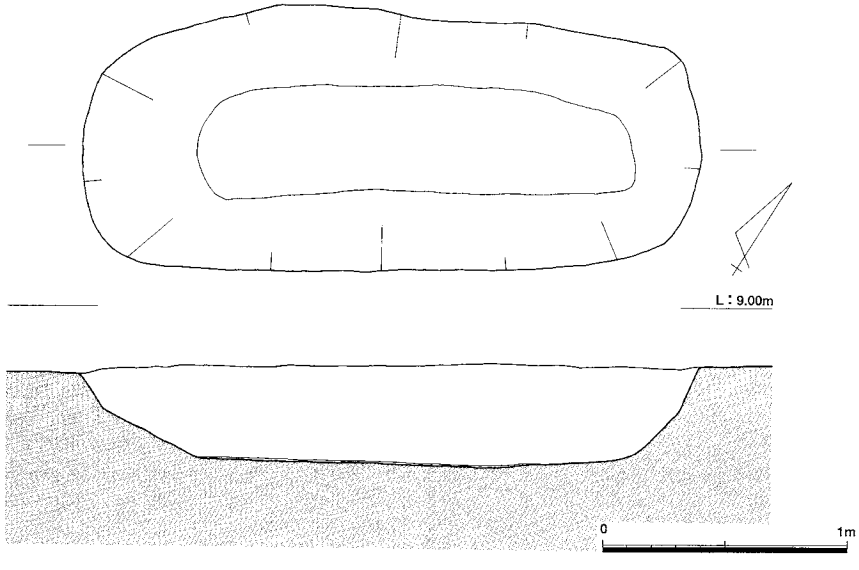


Fig.20　土坑SK71実測図（1/30）

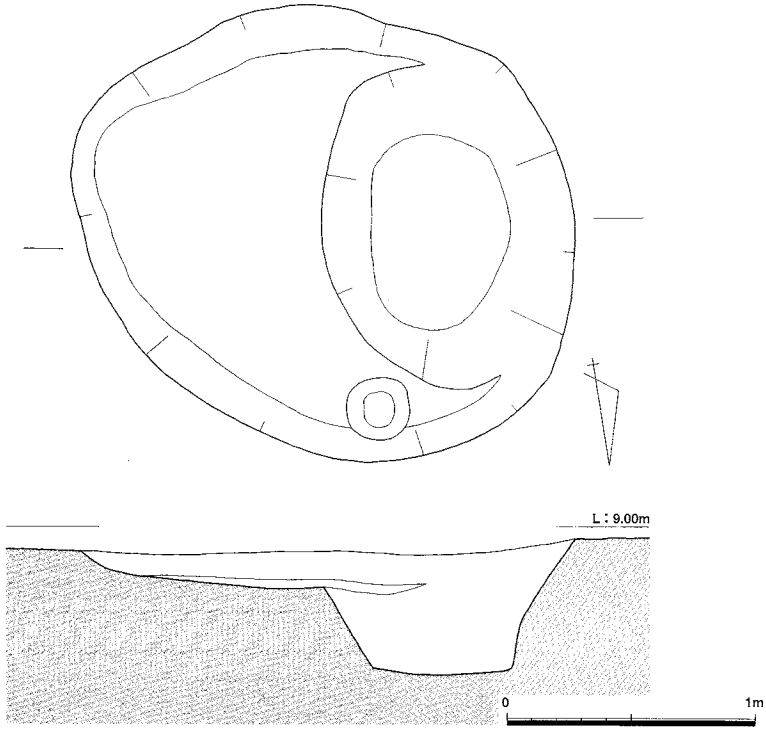


Fig.21　土坑SK75実測図（1/30）

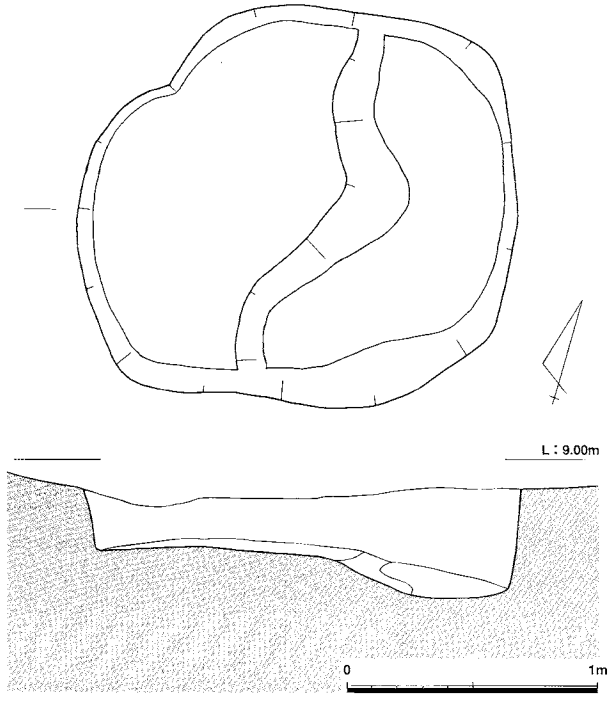


Fig.22　土坑SK78実測図（1/30）

（2）第2遺構検出面

河　川（SD）

SD81（Fig. 23　PL. 3, 28, 31）

調査区の南辺部中央縁部から15mほど北で流れを大きく東へ変え、調査区を北へ斜行する河川である。幅8.5m～15m、深さ1.4m～1.8mを測る。溝埋土は白色～褐色粗砂だけで満たされている。遺物は、弥生土器・高坏・甕・器台・鉢、石斧未製品、黒曜石片、土師器・杯、須恵器・杯・蓋・高坏・甕、土錘、加工木製品が出土している。

水　田（SX）

調査区全面で検出したが、良好な状態で畦畔が残存していたのは南辺部中央と北西部である。その大半は洪水等の影響により水田が流失した結果と推定される。このため、水田規模や土地区割りなどは明らかにすることはできなかった。調査区東半部中央には水田畦畔とは異なる大規模な畦畔が南東－北西方向に位置する。水田はこの大畦畔にほぼ並行および直交する位置関係にある畦とによって区画されている。このため水田の平面形は方形もしくは長方形を呈しているが、総じて整然とは区画されていない。

便宜的に河川SD81より東側に位置する水田をSX86、西側に位置する水田をSX85とし、さらに小水田に番号を付した。

SX85（Fig. 23　PL. 21～22）

調査区北辺部中央（水田SX85-①）、北西隅（水田SX85-②）、南西隅（水田SX85-③）で検出したが、良好な状態で残っていたのは北西隅水田（水田SX85-②）である。

水田SX85-①は幅20cm～30cm、高さ10cmを測る畦で区画される。水口は不明。畦畔の方位は真北より36°30′西偏（磁北より30°西偏）する。土壌は粘性の細砂質土でシルトに近い。水田一枚の単位面積は不明。

水田SX85-②は幅30cm～50cm、高さ10cmを測る畦で区画される。水口は水田南西隅に設けられているが、不明瞭で僅かに畦が低い地点もある。足跡が水田面全面に残るが、畦状には少ない。畦畔の方位は真北より36°30′西偏（磁北より30°西偏）する。土壌は粘性の細砂質土でシルトに近い。水田一枚の単位面積は不明。

水田SX85-③は幅20cm～30cm、高さ15cmを測る畦で区画される。水口は水田南西隅に設けられている。畦畔の方位は真北より37°30′西偏（磁北より31°西偏）する。土壌は粘性の細砂質土でシルトに近い。水田一枚の単位面積は不明。

遺物は、水田覆土中から弥生土器・甕・高坏、石斧未製品、古墳時代須恵器・杯、奈良時代須恵器・蓋・碗・甕、土師器・小皿が水田覆土中から出土している。

SX86（Fig. 23　PL. 3～4, 28～29）

調査区南辺部中央（水田SX86-①）、北東部（水田SX86-②）で検出した。良好な状態で残っていたのは南辺部中央（水田SX86-①）である。他の水田より規模の大きい大畦畔が南北に直線的に延び、その両側に畦畔で方形に区画した水田が配置される。大畦畔は、幅50cm～70cm、高さ20cmを測り、方位は真北より36°30′西偏（磁北より30°西偏）する。

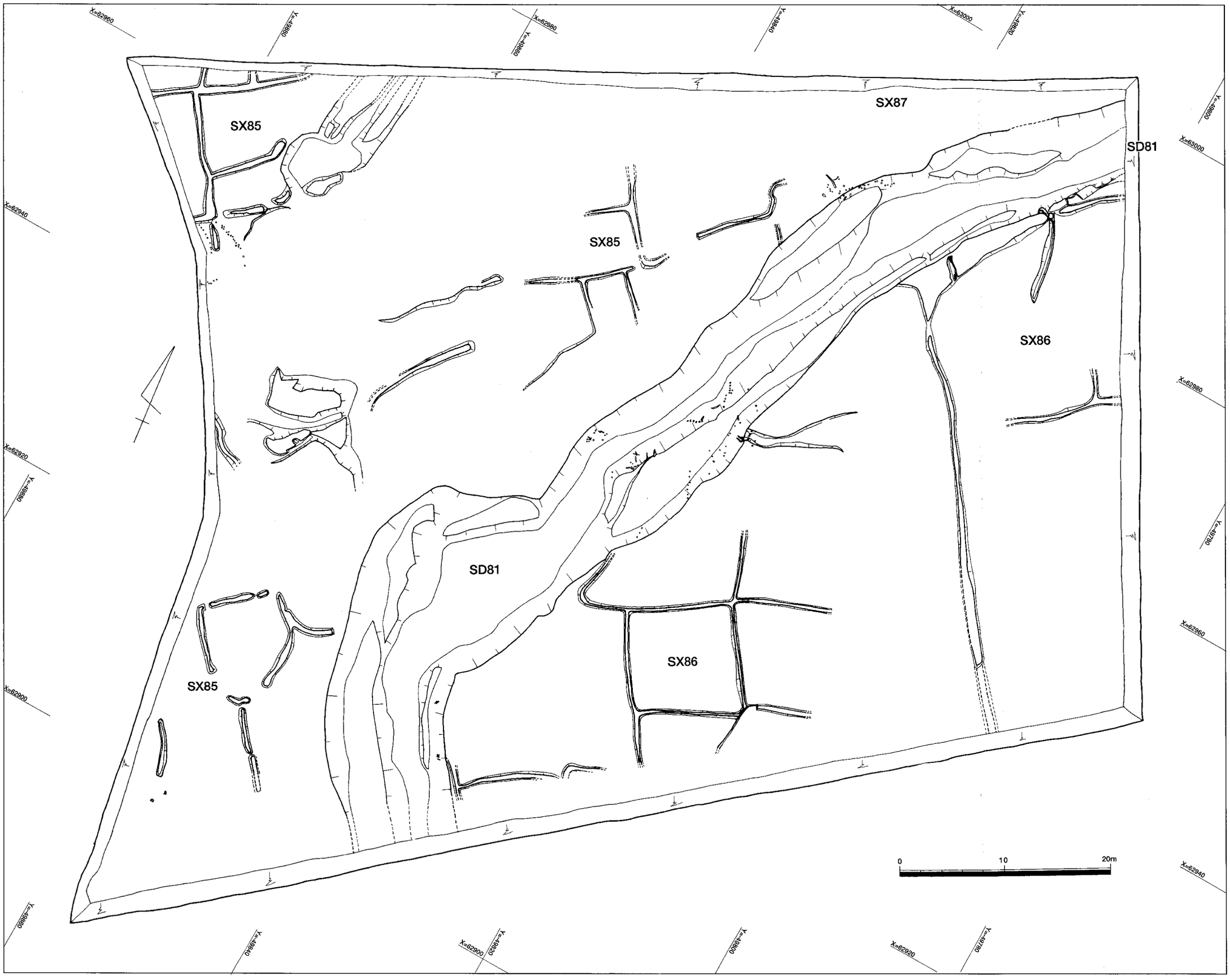


Fig.23　第２遺構検出面遺構配置図（1/400）

水田SX86-①では９枚の水田を検出したが、全体を確認できたのは１枚の水田にとどまる。

幅30cm～50cm、高さ10cmを測る畦で区画される。水田面には足跡が全面に残る。水口は不明。畦畔の方位は真北より35°30′～36°30′西偏（磁北より29°～30°西偏）する。土壌は粘質土。水田規模は、１枚しか確認できなかったが98.6m²を測る。遺物は、水田覆土中から奈良時代須恵器・碗・甕、土師器・碗が水田覆土中から出土している。

水田SX86-②は幅30cm～40cm、高さ10cmを測る畦で区画される。水田面には足跡が全面に残る。水口は不明。畦畔の方位は真北より36°30′西偏（磁北より30°西偏）する。土壌は粘質土。

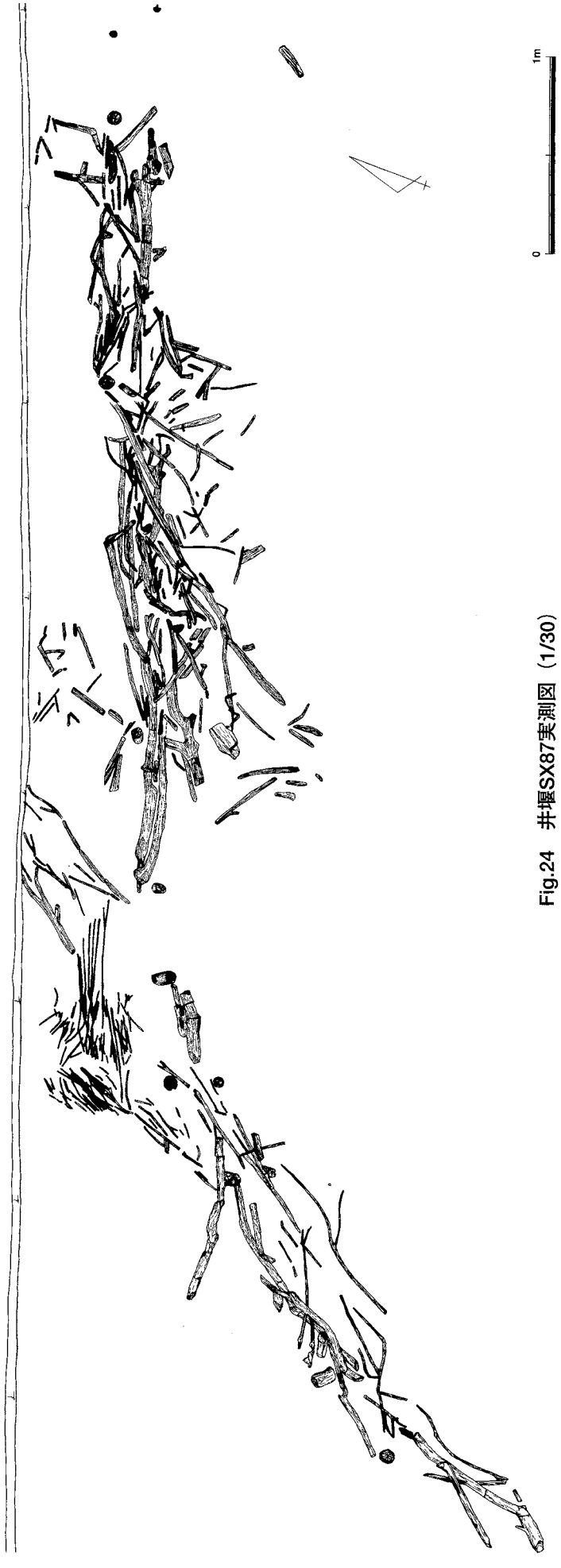


Fig.24　井堰SX87実測図（1/30）

（3）第3遺構検出面

河　川（SD）

SD102（Fig. 25～28　PL. 3, 28, 31）

調査区南西部～北東部に位置する南北溝でやや蛇行する。上層遺構である溝SD85によって溝の両端部は壊されている。幅1.2m～1.5m、深さ0.4m、全長83.5mを測る。遺物は、弥生土器・甕、須恵器・蓋、土師器・椀・甕、曲物桶の底板、鋤が出土している。

土　坑（SK）

SK90（Fig. 25　PL. 3, 28）

調査区西辺部中央、土坑SK91の北に位置する。楕円形の平面形を呈し上面の長軸は東西方向である。上面で長径4.7m、短径1.3m、坑底で長径2.8m、短径0.8m、深さ0.3mを測る。坑底面は丸味を呈し、壁面は緩やかな弧を描くように立ち上がる。

SK91（Fig. 25　PL. 3, 28）

調査区西辺部中央、土坑SK90の南に位置する。不整形な楕円形の平面形を呈し上面の長軸は南北方向である。上面で長径5.8m、短径2.1m、坑底で長径4.3m、短径1.6m、深さ0.5mを測る。坑底面は丸味を呈し、壁面は緩やかな弧を描くように立ち上がる。

SK99（Fig. 25　PL. 3, 28）

調査区西辺部中央、土坑SK100の北に位置する。不整形な平面形を呈し上面の長軸は南北方向である。上面で長径2.6m、短径1.3m、坑底で長径1.8m、短径0.4m、深さ0.4mを測る。坑底面は丸味を呈し、壁面は緩やかな弧を描くように立ち上がる。

SK100（Fig. 25　PL. 3, 28）

調査区西辺部中央、土坑SK99の南に位置する。楕円形の平面形を呈し上面の長軸は南北方向である。上面で長径5 6m、短径1.0m、坑底で長径4.3m、短径0.5m、深さ0.13mを測る。坑底面は丸味を呈し、壁面は緩やかな弧を描くように立ち上がる。

水　田（SX）

調査区の東辺部と北西部の一部で検出した。畦畔の残存状態は良好とは言い難い。

SX89（Fig. 25　PL. 3～4, 28, 32）

調査区北西隅に位置し、水田SX85の直下層に位置する。幅40～50cm、高さ5cmの畦で長方形に画される。水口は調査範囲に限れば認められない。南北畦畔の方向は真北に対して9°東偏（磁北より15°30′東偏）する。水田の1枚あたりの面積は不明。遺物は、弥生土器・甕・鉢、須恵器・甕、扁平片刃石斧が水田覆土中から出土している。

SX95

調査区北辺部東に位置する。

遺物は、弥生土器・甕が出土している。

SX98（Fig. 25　PL. 3～4, 28, 32）

調査区東辺部に位置し、水田SX86の直下層に位置する水田で二枚の畦畔を検出した。幅40～50cm、高さ10cmの畦で長方形に画される。水口は調査範囲に限れば認められない。南北畦畔の方位は真北に対して5°東偏（磁北より11°30′東偏）する。水田の1枚あたりの面積は不明。 遺物は、弥生土器・甕が水田覆土中から出土している。

Fig.25　第 3 遺構検出面遺構配置図（1/400）

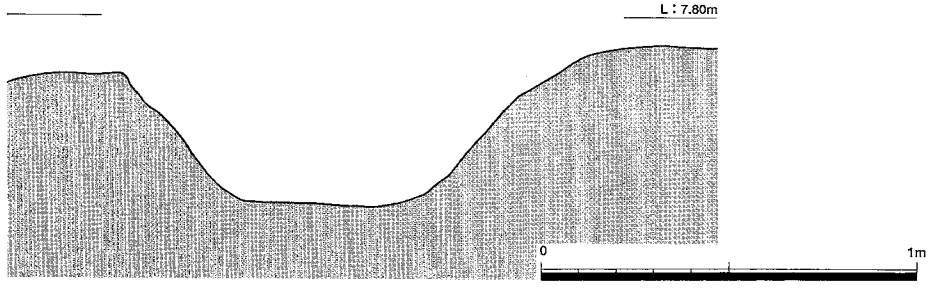


Fig.26　溝SD102断面実測図①（1/20）

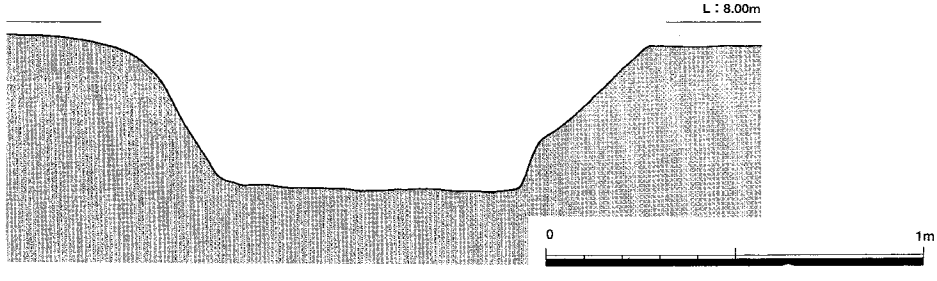


Fig.27　溝SD102断面実測図②（1/20）

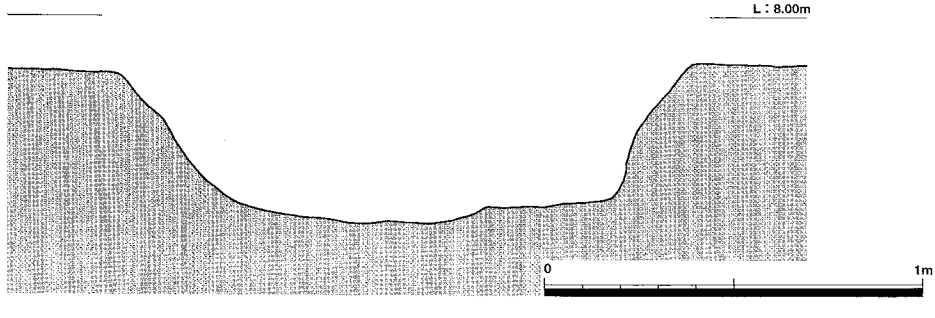


Fig.28　溝SD102断面実測図③（1/20）

（4）第4遺構検出面

溝・河川（SD）

SD103（Fig. 29　PL. 5, 35～39）

調査区南半部中央に位置する南北溝である。南端は調査区外に続き、北端は溝SD108と合流する。幅3.5m～5.1m、深さ1.1m、全長35mを測る。溝底は若干の凹凸が認められるものの、全体的には平坦を呈し、壁面は直線的な斜面を呈する。遺物は、弥生土器・短頸壺・手捏小型碗・鉢・甕、木製品杓文字・机の脚・槽、木製農具広鍬・鍬・鋤が出土している。

SD104（Fig. 29, 30　PL. 5～6, 35, 36, 38～43）

調査区北半部中央に位置する南北溝である。北端部は調査区外に続き、南端部は溝SD105・108と合流する。幅5.5m～15m、深さ2.3m、全長23mを測る。溝底は深みがあり、若干の凹凸が認められるもの、全体的には平坦を呈し、壁面は直線的な斜面を呈する。遺物は、弥生土器・石斧、木製品机の脚・槽、木製農具二又鍬・二又鍬未製品・杵・砧・平鍬・エブリ・泥避け、建築材扉・梯子・柱、板状木製品が出土している。

SD105（Fig. 29　PL. 5, 35～39）

調査区南半部中央に位置する南北溝である。南端は調査区外に続き、北端で溝SD104と合流する。幅1.4m～3.0m、深さ0.5m、全長23.3mを測る。溝底は若干の凹凸が認められるものの、全体的には平坦を呈し、壁面は直線的な斜面を呈する。遺物は、弥生土器・甕、木製農耕具平鍬・二又鍬・ナスビ型二又鍬が出土している。

SD108（Fig. 29, 31　PL. 5, 7, 35, 36, 38～39, 44～53）

調査区中央部に位置する東西溝で、溝SD103・104・105と一連の流路を形成する。幅2.8～4.4m、深さ0.6m～1.9m、全長11mを測る。溝の西端部、溝SD103との合流部には丸太杭と建築部材や丸太材を組み合わせた堰が築かれている。遺物は、弥生土器・甕・高坏・壷・鉢・器台、太型蛤刃石斧・石皿、竹製編物笊、木製品槽・円筒容器、木製農具二又鍬・三又鍬・杵・砧・平鍬・鋤・泥避け、建築材ネズミ返し付梁・高床建物柱が出土している。

SD109（Fig. 29　PL. 5, 35, 36）

調査区中央部、溝SD108の北に位置する小規模な東西溝で、幅0.2m～0.4m、深さ0.05m、全長6.8mを測る。溝の東端部はSD81により壊されて不明、西端部は土坑SK115の東側で立ち上がる。溝の壁面は弧を描くように緩やかに立ち上がる。遺物は、弥生土器・甕が出土している。

SD110（Fig. 29　PL. 5, 35, 36）

調査区中央部、溝SD109の北に位置する小規模な東西溝で、幅0.4m、深さ0.05m、全長1.7mを測る。溝の東端部はSD81により壊されて不明、西端部は土坑SK115の東側で立ち上がる。溝の壁面は弧を描くように緩やかに立ち上がる。遺物は、弥生土器・甕が出土している。

SD112（Fig. 29　PL. 5, 35～38, 54～56）

調査区西半部中央に位置し、土坑的形状を呈する。南北に長軸を有する楕円形の平面形を呈する。底面は中央部が盛り上がり、二分した形となる。上面で長径22.3m、幅5.5m～7.1m、深さ1.1mを測る。坑底面は丸味を有し、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。

遺物は、弥生土器・甕・高坏・細頸壷・鉢・短口壷、石包丁・砥石・石鏃・太型蛤刃石斧、木製品机、木製武具楯、木製農具二又鍬・砧・石斧の柄・容器・鋤未製品、建築材柱が出土している。

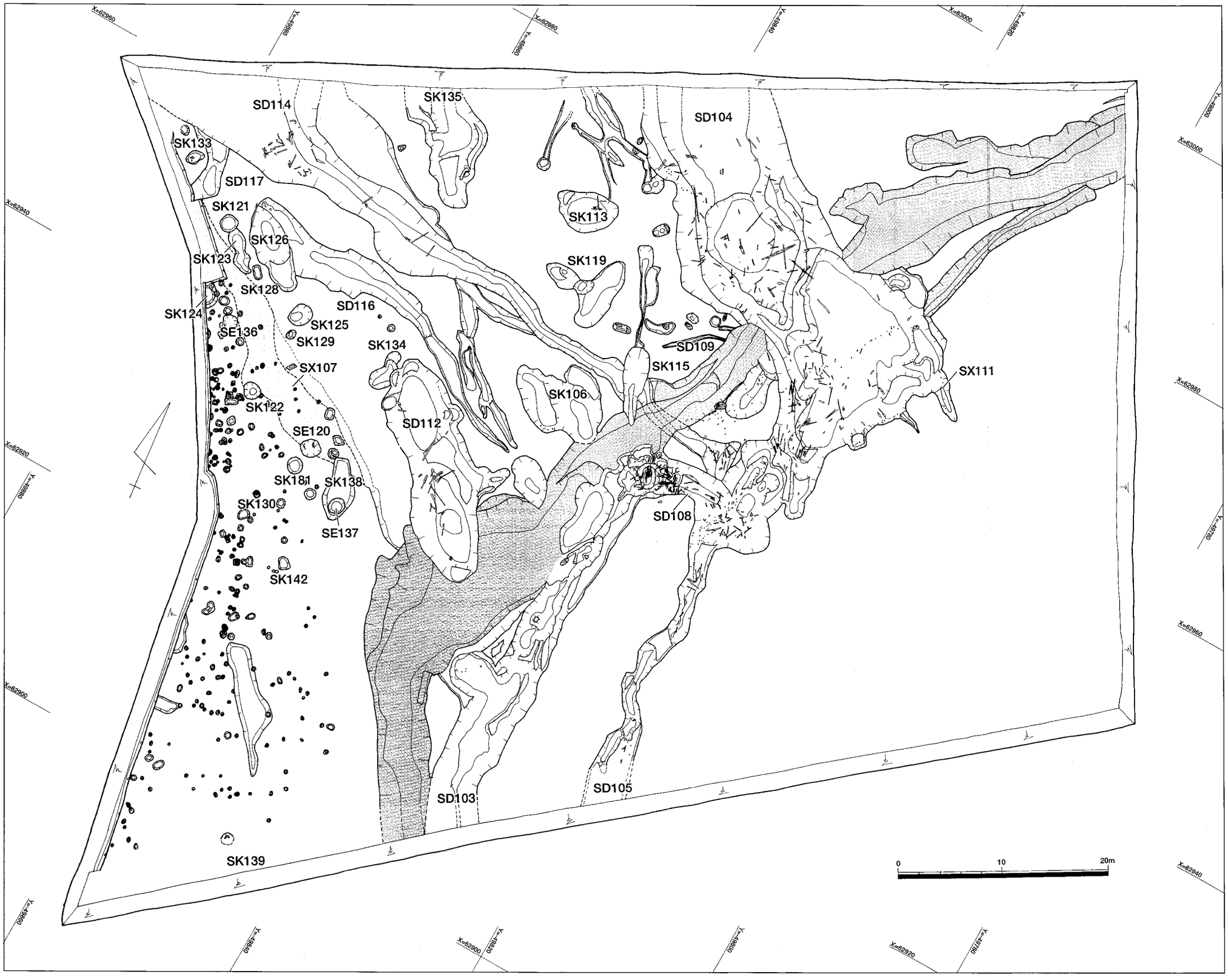
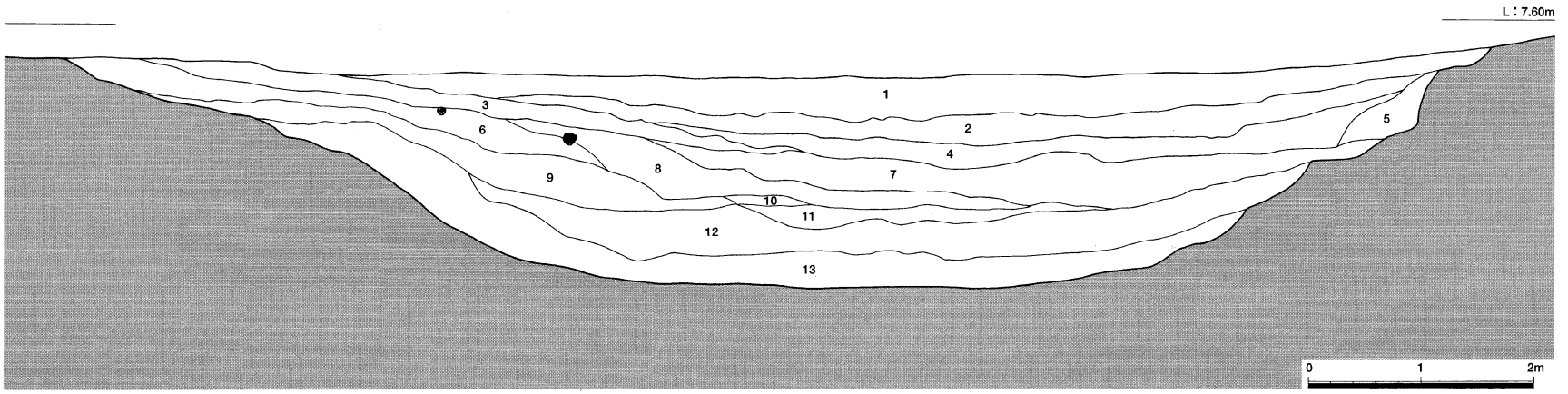


Fig.29　第４遺構検出面遺構配置図（1/400）



1.暗灰～黒灰色粘土
2.暗灰～黒灰色粘土（少々の粗砂混り）
3.暗灰～黒灰色粘土（粗砂混り）
4.暗灰～黒灰色粘土
5.粘土と砂混り土
6.黒灰色シルト混り黒灰色粘質土（砂混り）
7.暗灰～黒灰色粘土（粗砂混り）
8.黒灰色粘土混り白色～茶褐色砂土
9.粗砂混り暗灰色粘砂土（粘質砂土）
10.粘質土
11.黒灰色粘土混り白色～茶褐色砂土
12.粗砂混り黒灰色粘土
13.白色～茶褐色粗砂

Fig.30　溝SD104土層実測図（1/60）

SD114（Fig. 29　PL. 5, 35～38, 56, 57）

調査区中央から北西隅に位置する直線的東西溝で、東端部は溝SD104によって壊されて不明、西端部は調査区外に続く。中央部では幅員1.6mと狭いが西方に位置するに従って広くなり端部では9mを測る。深さは0.6m。溝の底面は丸味を持ち、壁面は弧を描くように緩やかに立ち上がる。
遺物は、弥生土器・甕・鉢・壷・丹塗研磨壷・器台・石剣・太型蛤刃石斧・砥石・土製紡錘車、木製品槽・円盤形・高坏、木製農具平鍬が出土している。

SD116（Fig. 29　PL. 5, 35～38, 56）

調査区西半部に位置するやや蛇行気味の東西溝で、西端部は土坑SK126と一体化する。溝の幅は一定しておらず、東端部では細くなり立ち上がり消滅するのに対して、SK126に近づくに従って広くなり一体化する地点ではSK126の長径とほぼ同じ規模を呈する。深さは0.6m。

遺物は、弥生土器・甕・器台・鉢・高坏・小型壷・杓型土製品・手捏鉢・土製紡錘車・投弾土製品、太型蛤刃石斧・石包丁・石斧・砥石・石製紡錘者、木製農具三又鍬、建築部材が出土している。

SD117（Fig. 29　PL. 5, 35, 36）

調査区北西隅に位置する南北溝で、調査区縁で向きが西に変わる。幅員1.5m～1.7m、深さ0.2m、全長5.5mを測る。遺物は、石包丁が出土している。

井　戸（SE）

SE120（Fig. 29, 32　PL. 5, 35, 36, 61）

調査区西辺部中央、土坑SK181の北に位置する。掘形は隅丸方形を呈し、上部辺1.6m、底部径1.3m、深さ0.9mを測る。底面は平坦で、壁面は直に立ち上がる。掘形底面に径15cmの丸太杭や割材を長辺1.2m、短辺0.9mを測る隅丸長方形状に打設し、丸太を刳抜いた円筒半裁物を杭列の短辺外側に配する。井戸としたが、その特異的な形状から別の性格を有する可能性が高い。遺物は、弥生土器・甕・器台・高坏・小型鉢が出土している。

SE136（Fig. 29, 32　PL. 5, 35, 36, 59）

調査区西辺部中央、土坑SK124の南に位置する素掘りの井戸である。掘形はやや不整形な円形を呈し、上部径1.3m～1.5m、底部径1.0m、深さ0.7mを測る。底面は平坦で、壁面は直線的に直に立ち上がる。

SE137（Fig. 29　PL. 5, 35, 36, 59）

調査区西辺部中央、土坑SK181の北に位置する素掘りの井戸である。掘形はやや不整形な円形を呈し、上部径1.4m、底部径0.9m、深さ0.6mを測る。底面は平坦で、壁面は直線的に直に立ち上がる。遺物は、弥生土器・椀・甕・器台・高坏、太型蛤刃石斧が出土している。

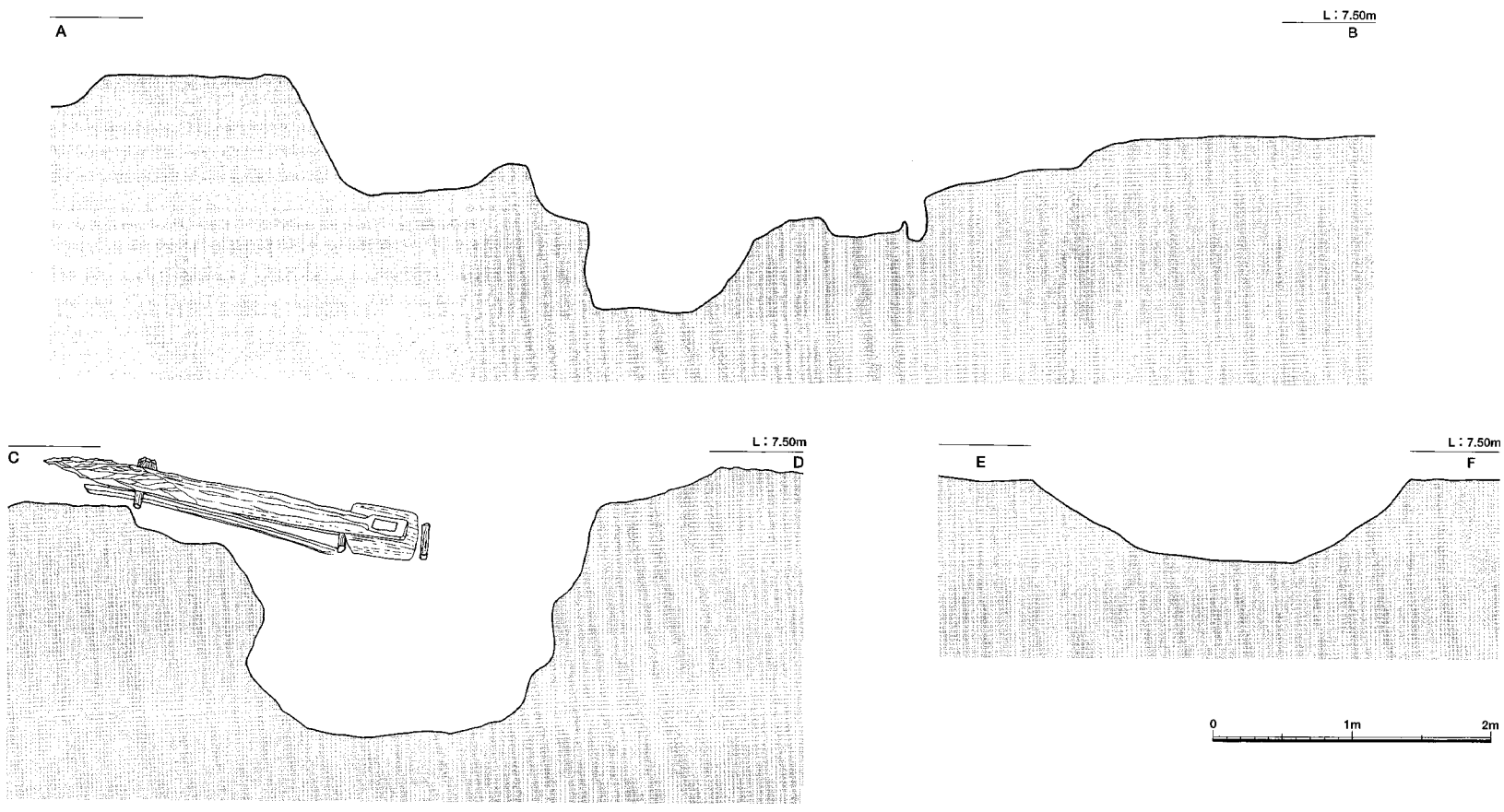


Fig.31　溝SD108・井堰実測図（1/50）

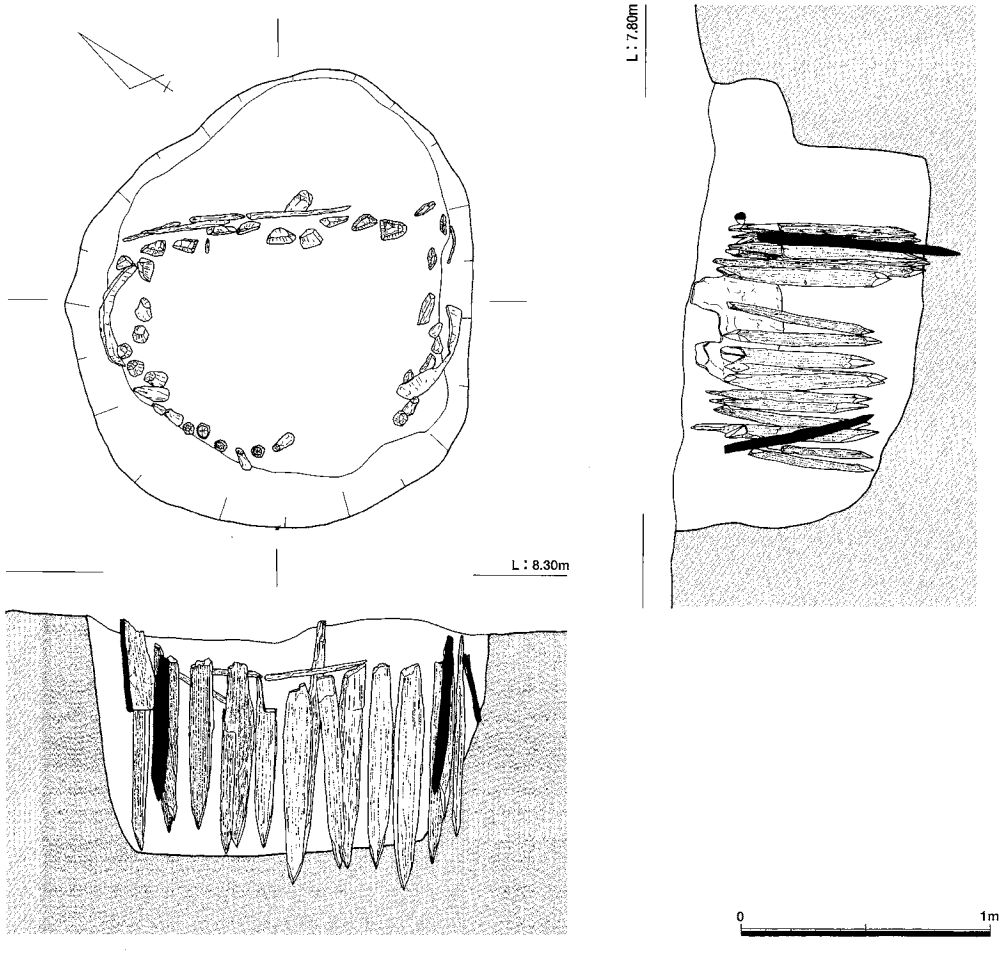


Fig.32　井戸SE120実測図（1/30）

土　坑（SK）

SK106（Fig. 29　PL. 5, 35～39, 58）

調査区中央、土坑SK115の西に位置する。掘形は不整形な楕円形を呈し、長軸は東西方向である。底面は東半部が一段深い。上面で長径6.8m、短径4.8m、深さ0.5mを測る。中段の底面は楕円形の平面形を呈し、長軸は南北方向である。長径4.4m、短径1.3mを測る。下段の底面は楕円形の平面形を呈し、長軸は南北方向である。長径3.5m、短径1.2m、深さ0.2mを測る。坑底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。遺構の南部は上層遺構の溝SD81によって壊されて不明。
遺物は、弥生土器・甕・高坏、砥石・石包丁が出土している。

SK113（Fig. 29　PL. 5, 35～38, 58）

調査区中央、土坑SK119の北に位置する。楕円形の平面形を呈し上面の長軸は東西方向である。上面で長径5.5m、短径3.8m、坑底で長径3.7m、短径2.4m、深さ0.9mを測る。坑底面は平坦で、壁面は緩やかな直線的な斜面を呈する。

SK115（Fig. 29　PL. 5, 35～39, 58）

調査区中央、土坑SK106の東に位置する。溝状的楕円形の平面形を呈し、長軸は南北方向である。上面で長径7.4m、短径2.5m、坑底で長径4.0m、短径0.4m、深さ0.6mを測る。坑底面は平坦で、壁面は緩やかな直線的な斜面を呈する。溝SD114より新しい。遺物は、弥生土器・高坏・甕が出土している。

SK119（Fig. 29　PL. 5, 35～39, 58）

調査区中央、土坑SK113の南に位置する。掘形はT字形の平面形を呈する。底面は交差部が一段と深い。上面で東西6.8m、南北7.4m、深さ0.7mを測る。下段の底面は楕円形の平面形を呈し、長軸は南北方向である。長径6.1m、短径1.6mを測る。坑底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。遺物は、弥生土器・甕・高坏、石包丁、木製農具二又鍬が出土している。

SK121（Fig. 29　PL. 5, 35～37, 58）

調査区北西部、土坑SK123の北に位置する。円形の平面形を呈し、上面で径1.6m、坑底で径1.2m、深さ0.3mを測る。坑底面は平坦面を呈し、壁面は直線的に立ち上がる。遺物は、弥生土器・甕・鉢、投弾土製品、石包丁が出土している。

SK122（Fig. 29　PL. 5, 35～37）

調査区西辺部中央、井戸SE136の南に位置する。やや不整形な円形の平面形を呈し、上面で径1.5m、坑底で径0.9m、深さ0.43mを測る。坑底面は平坦面を呈し、壁面は緩やかに直線的な斜面を呈する。遺物は、弥生土器・甕・高坏・器台が出土している。

SK123（Fig. 29　PL. 5, 35～37, 58）

調査区北西部隅、土坑SK121の南に位置する。溝状的楕円形の平面形を呈し、長軸は南北方向である。上面で長径4.4m、短径1.2m、坑底で長径3.7m、短径0.5m、深さ0.4mを測る。坑底面は平坦で、壁面は緩やかな直線的な斜面を呈する。遺物は、弥生土器・甕・高坏・石斧が出土している。

SK124（Fig. 29　PL. 5, 35～37）

調査区西辺部北、井戸SE136の北に位置する。遺構の西半部は調査区外に位置するが、現況から円形の平面形が推定される。上面で復元径2.1m、坑底で復元径1.4m、深さ0.6mを測る。坑底面は平坦面を呈し、壁面は直線的に直に立ち上がることから、素掘り井戸の可能性がある。遺物は、弥生土器・甕・器台・壷、石皿が出土している。

SK125（Fig. 29　PL. 5, 35～37, 58）

調査区西辺部中央、土坑SK126の南に位置する。やや不整形な惰円形の平面形を呈し、長軸は東西方向である。上面で長径2.3m、短径1.9m、坑底で長径1.3m、短径0.9m、深さ0.3mを測る。坑底面は平坦面を呈し、壁面は緩やかに直線的な斜面を呈する。 遺物は、弥生土器・甕・大型甕・手捏小型鉢が出土している。

SK126（Fig. 29　PL. 5, 35～37）

調査区北西部、土坑SK121の東に位置する。楕円形の平面形を呈し上面の長軸は南北方向である。溝SD116の西端部で一体化しており、溜り的様相がある。上面で長径8.7m・短径3.1m、坑底で長径2.9m、短径1.0m、深さ0.7mを測る。坑底面は北半部が一段深く、壁面は緩やかな直線的な斜面を呈する。遺物は、弥生土器・甕・高坏・壷・鉢・器台・手捏小型碗、石包丁・扁平片刃石斧・太型蛤刃石斧、木製農具二又鍬、円盤形木製品が出土している。

SK128（Fig. 29　PL. 5, 35～37, 58）

調査区西辺部北、土坑SK123の東に位置する。隅丸長方形の平面形を呈し、長軸は南北方向である。長辺1.4m、短辺0.7m、坑底で長辺1.2m、短辺0.5m、深さ0.45mを測る。坑底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。 遺物は、弥生土器・甕・高坏が出土している。

SK131（Fig. 29　PL. 5, 35～37）

調査区西辺部中央、土坑SK126の南に位置する。やや不整形な円形の平面形を呈し、上面で径1.6m、坑底で径1.2m、深さ0.6mを測る。坑底面は平坦面を呈し、壁面は緩やかに直線的な斜面を呈する。 遺物は、弥生土器・甕・手捏小型碗、石皿が出土している。

SK132（Fig. 29　PL. 5, 35～37）

調査区西辺部北、井戸SE120の北に位置する。隅丸長方形の平面形を呈し、長辺1.1m、短辺0.9m、坑底で長辺0.7m、短辺0.6m、深さ0.35mを測る。坑底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。遺物は、弥生土器・甕が出土している。

SK133（Fig. 29　PL. 5, 35～37, 59）

調査区北西隅、溝SD117の西に位置する。不整形な楕円形の平面形を呈し上面の長軸は東西方向である。上面で長径1.5m、短径1.15m、坑底で長径1.2m、短径0.9m、深さ0.4mを測る。坑底面は平坦で、壁面は直に立ち上がる。底面中央には丸太と角材が重なった状態で出土していることから柱穴の可能性が残る。 遺物は、弥生土器・甕・鉢が出土している。

SK134（Fig. 29　PL. 5, 35～37）

調査区西辺部中央、溝SD112の北に位置する。不整形な楕円形の平面形を呈し上面の長軸は南北方向である。上面で長径3.3m、短径1.8m、坑底で長径2.4m、短径0.8m、深さ0.4mを測る。坑底面は平坦であるが東部が一段浅く、壁面は緩やかな直線的な斜面を呈する。 遺物は、弥生土器・甕・高坏が出土している。

SK135（Fig. 29　PL. 5, 35～38, 59）

調査区北辺部中央に位置し、調査区外に広がる。不整形な楕円形を呈し、長軸は南北方向である。溜り的な様相が見られる。上面で長径10.7m、短径5.4m、坑底で長径4.5m、短径3.8m、深さ0.7mを測る。坑底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。

SK138（Fig. 29　PL. 5, 35～37）

調査区西半部中央、土坑SK131の東に位置する。不整形な楕円形を呈し、長軸は南北方向である。溜り的な様相が見られる。上面で長径6.1m、短径2.8m、坑底で長径5.4m、短径2.0m、深さ0.2mを測る。

坑底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。遺物は、弥生土器・甕・高坏・手捏小型鉢が出土している。

SK139（Fig. 29　PL. 5, 35～37, 59）

遺物は、弥生土器・甕、焼壁が出土している。

SK142（Fig. 29　PL. 5, 35～37, 59）

調査区西半部中央に位置する。不整形な楕円形を呈し、長軸は南北方向である。溜り的な様相が見られる。上面で長径1.3m、短径1.0m、坑底で長径0.9m、短径0.7m、深さ0.3mを測る。坑底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。遺物は、弥生土器・甕・器台、鍬が出土している。

甕棺墓（SK）

SK129（Fig. 29, 33　PL. 5, 35～37, 60）

調査区西辺部中央、土坑SK125の南に位置する甕棺墓である。墓坑掘形は惰円形の平面形を呈し、長軸は南北方向である。上面で長径0.9m、短径0.7m、坑底で長径0.5m、短径0.4m、深さ0.2mを測る。甕棺の上部は欠失する。坑底面は平坦で、壁面は弧を描くように緩やかに立ち上がる。遺物は、弥生土器・甕が出土している。

SK130（Fig. 29, 34　PL. 5, 35～37, 61）

調査区西辺部中央、土坑SK181の南に位置する甕棺墓である。墓坑掘形は円形の平面形を呈し、上面で径0.6m、坑底で径0.2m、深さ0.2mを測る。坑底面は平坦で、壁面は弧を描くように緩やかに立ち上がる。遺物は、弥生土器・甕・手捏小型鉢が出土している。

土器集積（SX）

SX107（Fig. 29　PL. 8, 63～66）

調査区西辺部中央に位置する土器などの集中出土集積地である。 遺物は、弥生土器・甕・高坏・器台・鉢・壷、太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・黒曜石製石鏃・砥石・石包丁・小玉・滑石製紡錘車、土製投弾が出土している。

SX111（Fig. 29　PL. 5, 43）

調査区東半部中央、溝SD104の南東隅に設けられた水利施設。

SX127

遺物は、弥生土器・甕・高坏・器台、太型蛤刃石斧が出土している。

SX141

遺物は、弥生土器・甕・高坏・鉢が出土している。

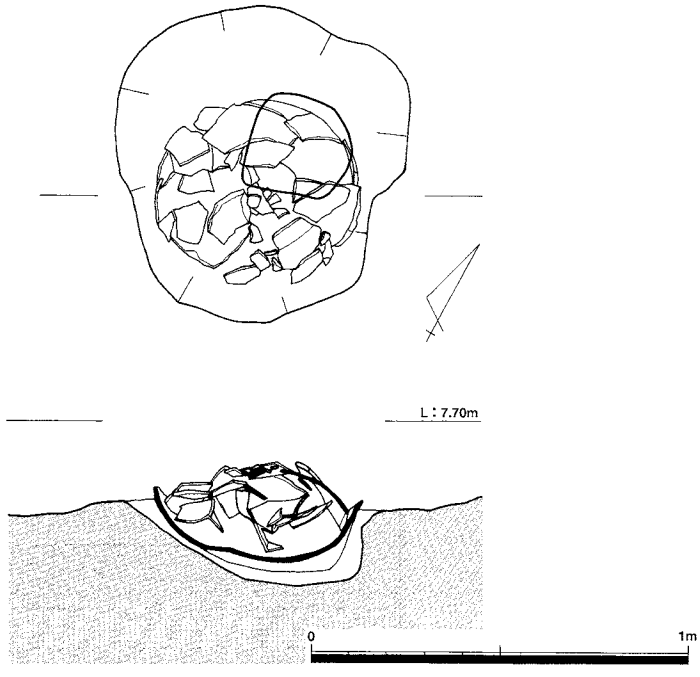


Fig.33　甕棺墓SK129実測図（1/20）

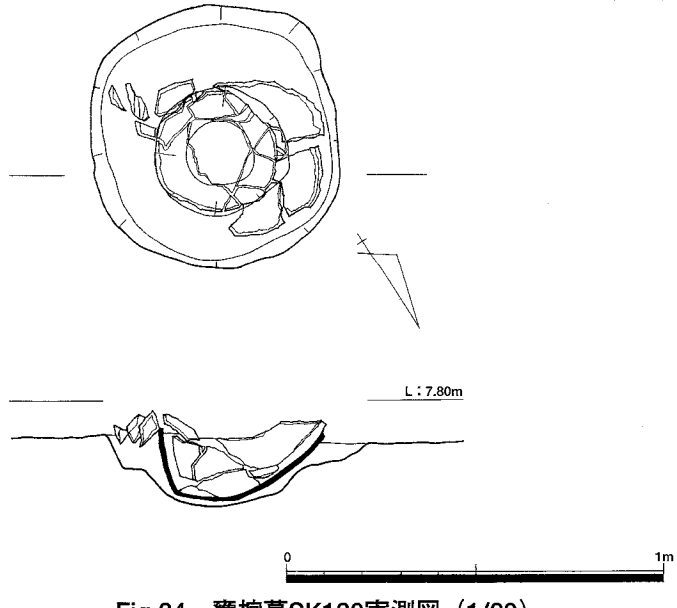


Fig.34　甕棺墓SK130実測図（1/20）

2．遺　物

（1）土器・陶磁器・土製品

1）第1遺構検出面

溝（SD）

SD18

土師器椀、須恵器甕、越州窯産青磁碗、白磁碗、平瓦が出土している。

SD26

黒色土器碗、土師器碗、須恵器杯が出土している。

SD42

土師器蓋・杯・小皿、須恵器甕、黒色土器碗が出土している。

SD58（Fig.35　PL.71）

土師器杯・碗・小皿、黒色土器碗、須恵器杯・甕、青磁碗、白磁碗が出土している。**1**は土師器の小皿で口径9.6cm、底径6.7cm、器高1.3cmを測る。口縁部は直線的に外反しながら立ち上がる。底部切り離しはヘラ切り。胎土は僅かに1㎜ほどの砂粒を含むものの総じて細砂粒である。色調は淡褐色を呈する。口縁端部には煤が付着していることから灯明皿として使用されていたと考えられる。

SD59（Fig.36　PL.71）

須恵器、土師器皿が出土している。**2**は土師器の皿で口径16.9cm、底径13.5cm、器高1.8cmを測る。口縁部は直線的に外反しながら立ち上がる。底部切り離しはヘラ切り。胎土は僅かに1㎜ほどの砂粒を含むものの総じて細砂粒である。色調は橙褐色を呈する。

SD60

土師器碗・甕、白磁碗が出土している。

SD63

黒色土器碗、土師器杯・小皿が出土している。

SD64

土師器碗、須恵器・蓋が出土している。

井　戸（SE）

SE73

土師器鉢が出土している。

土　坑（SK）

SK04

黒色土器碗が出土している。

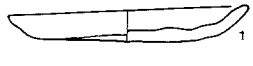


Fig.35　溝SD58出土遺物実測図（1/3）

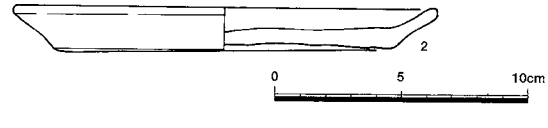


Fig.36　溝SD59出土遺物実測図（1/3）

SK32

土師器甕が出土している。

SK62

土師器片、須恵器甕が出土している。

SK66（Fig. 37　PL. 71）

土師器小皿・椀、黒色土器椀、須恵器甕が出土している。**3**は土師器の小皿で口径10.1cm、底径7.8cm、器高1.4cmを測る。口縁部は直線的に外反しながら立ち上がり、底部外面には篦による切り離し痕跡と板目圧痕が残る。胎土は僅かに1mmほどの砂粒を含むものの総じて細砂粒である。色調は淡黄褐色を呈する。**4**は土師器碗で口径14.6cm、器高1.4cmを測る。底部は丸味を持ち、底部外面には篦による切り離し痕跡が残る。内面にはコテ工具による調整痕跡が残る。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は丸く調整している。胎土は僅かに1cmほどの砂粒を含むものの総じて細砂粒である。色調は淡褐色を呈する。**5**は黒色土器碗で、口径15.4cmを測る。内外面には篦磨きが施されている。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は丸く調整している。胎土は僅かに0.5mm～2mmほどの砂粒を含むものの総じて細砂粒である。色調は灰褐色を呈する。

SK67

土師器甕、須恵器蓋が出土している。

SK68

土師器碗、瓦質土器碗が出土している。

SK70

瓦質土器碗が出土している。

SK71

土師器小皿、白磁碗が出土している。

SK72（Fig. 38）

土師器小皿・皿・杯・甕、須恵器甕、丸瓦が出土している。**7**・**8**は土師器の皿である。**7**は口径13.4cm、底径10.8cm、器高2.3cmを測る。口縁部は直線的に外反しながら立ち上がり、底部外面には篦による切り離し痕跡が残る。胎土は僅かに1mmほどの砂粒を含むものの総じて細砂粒である。色調は淡灰橙色を呈する。**8**は口径15.6cm、底径11.8cm、器高1.6cmを測る。口縁部は直線的に外反しながら立ち上がり、底部外面には篦による切り離し痕跡が残る。胎土は僅かに1mmほどの砂粒を含むものの総じて細砂粒である。色調は淡橙色を呈する。**9**・**10**は土師器の杯で、**9**は口径15.8cm、底径9.1cm、器高4.0cm、**10**は口径13.8cm、底径8.2cm、器高3.3cmを測る。ともに口縁部は直線的に外反しながら立ち上がる。胎土は僅かに1mmほどの砂粒を含むものの総じて細砂粒である。色調は淡橙色・白褐色を呈する。**11**は土師器の甕で体部下半部を欠失する。口径は26.4cmを測り、口縁部は大きく外反する。外面は縦方向の刷毛調整、内面はヘラ削り調整を行っている。

SK74（Fig. 38　PL. 71）

土師器小皿、瓦質土器椀、白磁碗が出土している。**13**は瓦質土器の椀で、口径15.6cm、高台径6.9cm、器高6.0cmを測る。**12**は白磁の玉縁付碗で、口径16.5cm、高台径7.6cm、器高6.7cmを測る。口縁は直線的に外傾しながら立ち上がる。玉縁は折り返しで、断面形は三角形を呈する。体部外面の下半部は露胎で、釉は濁オリーブ白色である。

SK79

土師器甕・碗が出土している。

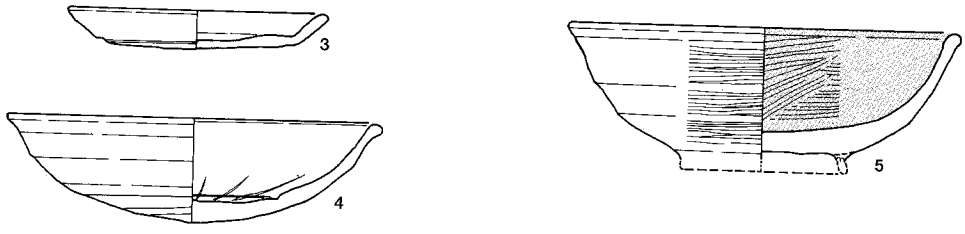


Fig.37　土坑SK66出土遺物実測図（1/3）

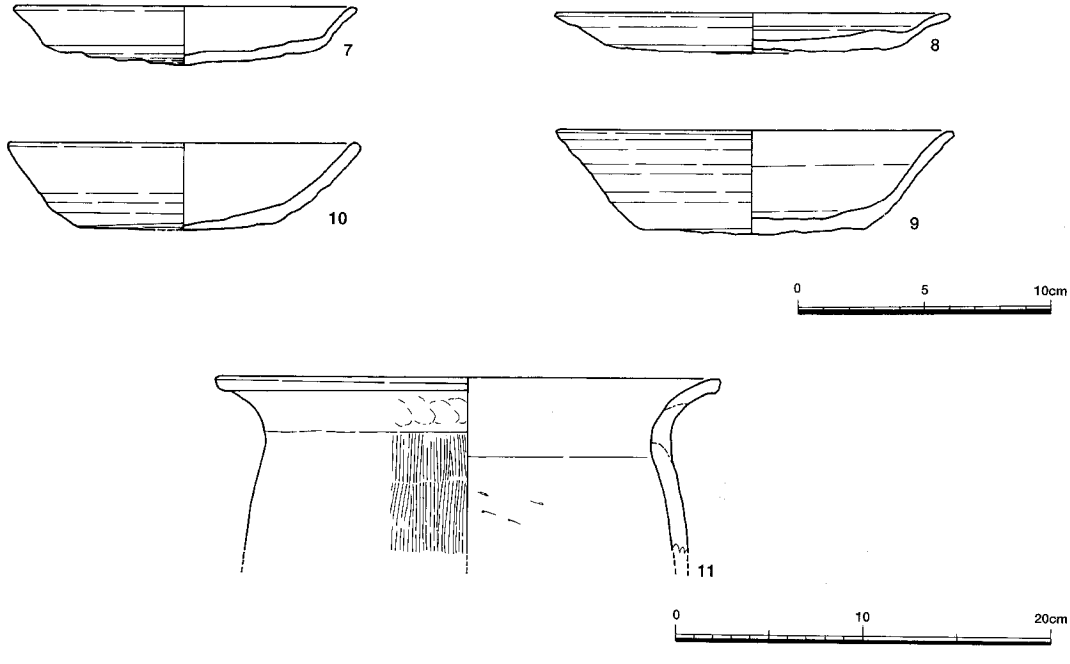


Fig.38　土坑SK72出土遺物実測図（1/3・1/4）

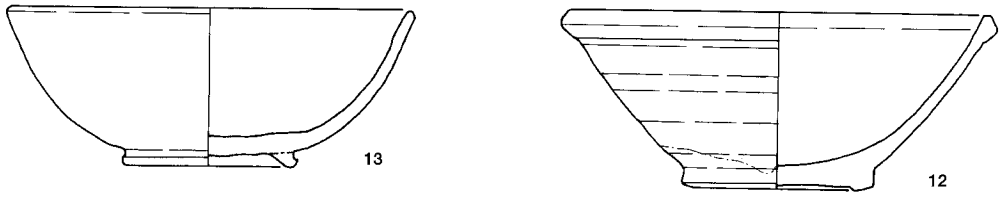


Fig.39　土坑SK74出土遺物実測図（1/3）

2）第2遺構検出面

河　川（SD）

SD81（Fig.40～42　PL.72,106）

須恵器杯・蓋・高坏・甕、土師器杯、黒色土器杯、土錘、弥生土器高坏・甕・器台・鉢が出土している。**28・874**は須恵器の杯。**28**は口径11.2cmを測り、底部は浅く、体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。受部は水平に外方へのび、端部は横ナデ調整により丸く仕上げている。口縁部の立ち上がりは小さく、受部を形成した後に粘土紐を巻付けて横ナデ調整を施している。底部外面には回転ヘラ削りを施している。胎土は精選され、1㎜ほどの砂粒を含むが総じて細砂粒である。色調は暗青灰色を呈する。**874**は口径12.4cmを測り、底部は浅く、体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。受部は水平に外方へのび、端部は横ナデ調整により丸く仕上げている。口縁部は大きく内傾しながら立ち上がり、受部を形成した後に粘土紐を巻付けて横ナデ調整を施している。底部外面には回転ヘラ削りを施している。胎土は僅かに1㎜ほどの暗茶褐色砂粒を含み、橙褐色を呈する。**27・29・30・877**は内面にかえりを有する須恵器蓋である。口径10.6cm～11cmを測り、内面のかえりは内傾しながら短く立ち上がる。胎土は、**29・877**が1㎜ほどの砂粒を多く含むのに対して、**27・30**は1㎜ほどの砂粒をほとんど含まない細砂粒である。色調は、**877**が淡灰色、他は灰色～暗青灰色を呈する。**865・873・879**は頂部に平坦なつまみを有し、口縁部が下方に折れ曲がる須恵器蓋である。外面頂部にはヘラ切り離し痕が残る。口径は16.4cm～17cmを測る。胎土は僅かに1㎜ほどの暗茶褐色砂粒を含む。色調は、**865**が淡橙褐色、**873**は青灰色、**879**は白色を呈する。**19**は黒色土器の杯である。口径15.5cm、底径13.6cm、器高2.4cmを測る。口縁部は直線的に外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸味を持つ。内面はヘラ磨き調整が施され、内黒を呈する。胎土は僅かに1㎜ほどの砂粒を含むが総じて細砂粒で、色調は淡橙褐色を呈する。**866・871**は土師器の杯である。いずれも口縁部は外傾しながら直線的に立ち上がる。**871**の口縁端部は丸く仕上げている。**866**は口径18.5cm、底径16.6cm、器高2.8cmを測る。胎土は僅かに1㎜ほどの砂粒を含む。色調は暗茶灰色を呈する。**871**は口径14.0cm、底径8.6cm、器高3.0cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰橙色を呈する。**14・16・867**は須恵器の杯で、いずれも口縁部は外傾しながら直線的に立ち上がる。切り離しはヘラ切りによる。**14**は口径13.9cm、底径10.2cm、器高3.7cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰色を呈する。口縁部には重ね焼きの痕跡が残る。**16**は口径15.3cm、底径11.3cm、器高3.8cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、灰色を呈する。**867**は口径14.2cm、底径9.7cm、器高3.7cmを測る。胎土は1㎜ほどの黒色砂粒を多く含み、灰白色を呈する。 **15・17・18・21～26・862・867・870・872・875・876・878**は高台を有する須恵器の杯である。いずれの杯も口縁部は外傾しながら直線的に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。さらに、底部切り離しはヘラ切りによる。高台の位置が、底部外縁に位置するA型と外縁よりやや内側に位置するB型とに二分される。**15**は口径12.2cm、器高4.0cm、高台径9.1cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を僅かに含み、灰色を呈する。高台の位置はB型。**17**は口径14.9cm、器高5.5cm、高台径10.6cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗青灰色を呈する。高台は高く、位置はA型。**18**は口径12.6cm、器高4.1cm、高台径8.4cmを測る。胎土は僅かに2㎜ほどの砂粒を含み、暗青灰色を呈する。高台の位置はB型。**21**は口径14.0cm、器高4.0cm、高台径9.6cmを測る。胎土は僅かに1㎜～3㎜ほどの砂粒を含み、淡青灰色を呈する。高台の位置はB型。**22**は口径12.2cm、器高4.0cm、高台径8.4cmを測る。胎土は僅かに1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡青灰色を呈する。高台の位置はB型。**23**は口径13.4cm、器高4.0cm、高台径9.6cmを測る。胎土は僅かに1㎜ほどの砂粒を含み、暗青灰色を呈する。高台の位置はB型。**24**は口径11.2cm、器高3.8cm、高台径7.4cmを測る。胎土

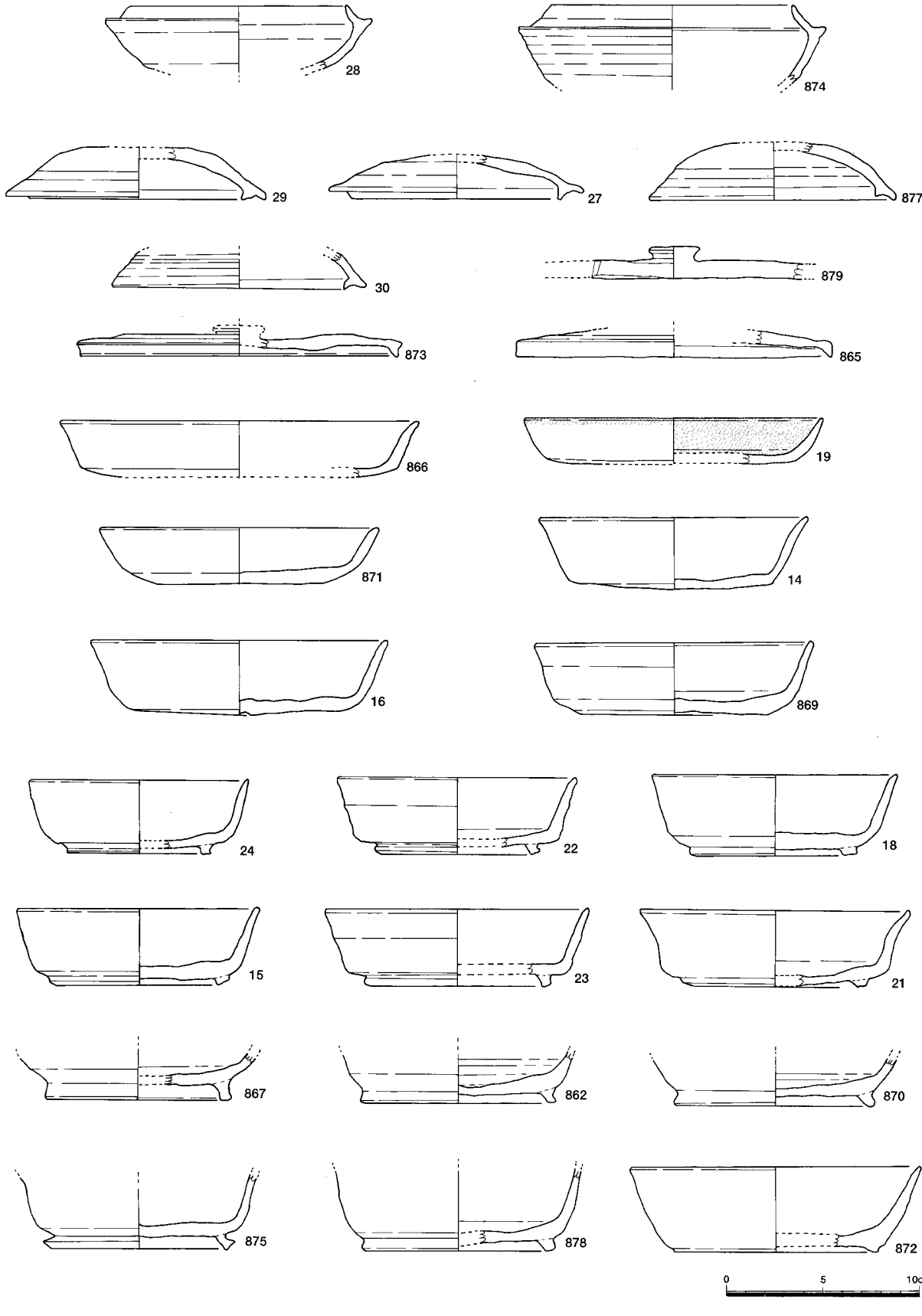


Fig.40　溝SD81出土遺物実測図１（1/3）

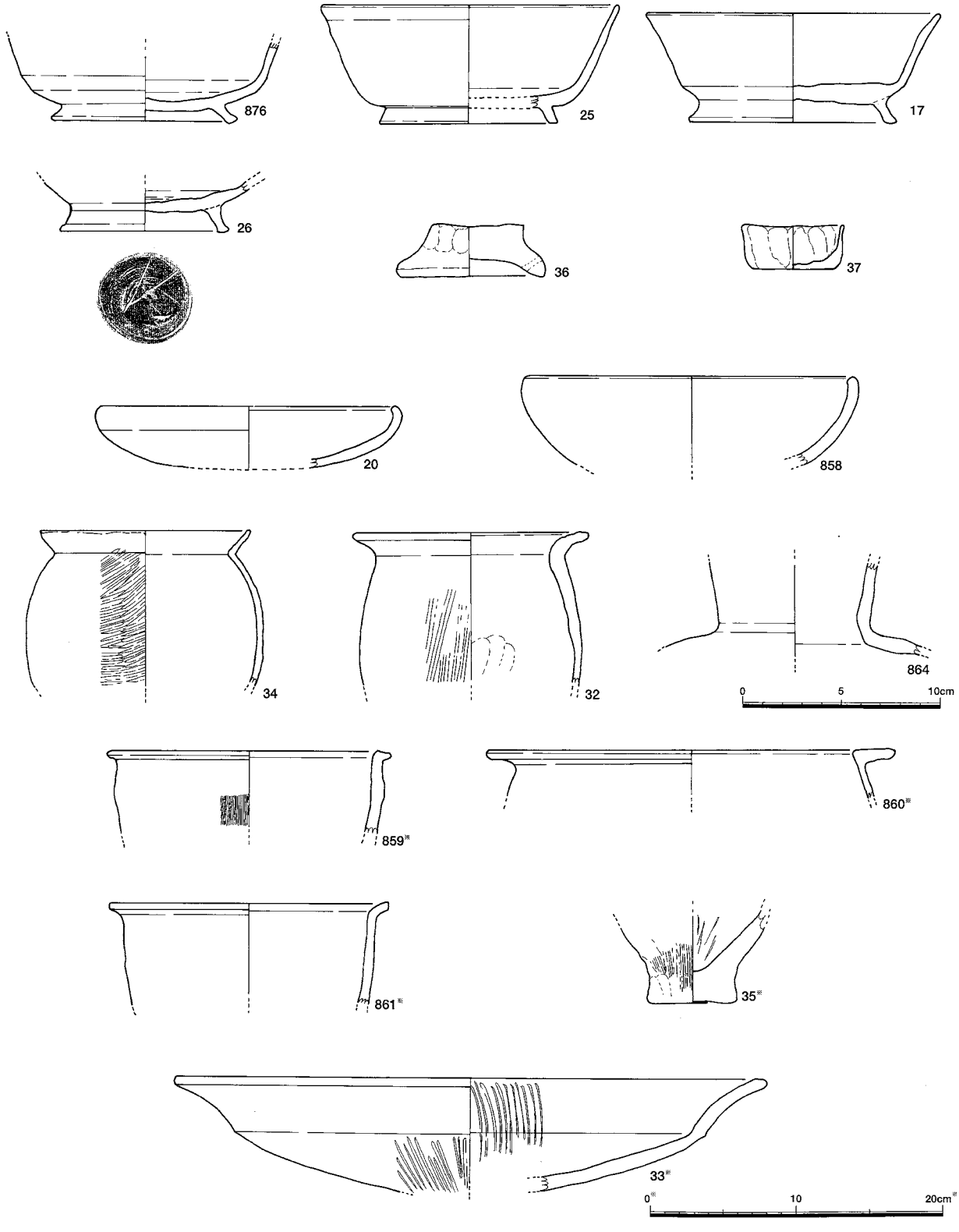


Fig.41　溝SD81出土遺物実測図２（1/3・1/4※）

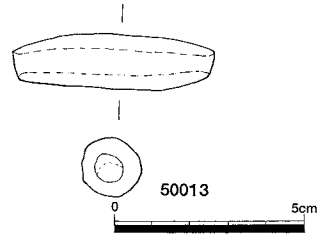


Fig.42　溝SD81出土遺物実測図3（1/2）

は１㎜～２㎜ほどの砂粒を多く含み、暗青灰色を呈する。高台は他の杯より幅および高さが小さく、Ｂ型。**25**は口径14.9cm、器高6.0cm、高台径8.9cmを測る。胎土は１㎜ほどの砂粒を多く含み、暗青灰色を呈する。高台は高く、位置はＡ型。**26**は口縁部を欠き、高台径8.4cmを測る。胎土は１㎜ほどの砂粒を多く含み、灰白色を呈する。底部外面には「V」字形のヘラ記号が施されている。高台は高く、位置はＡ型。**862**は口縁部を欠く。高台径は10.0cmを測る。胎土は僅かに0.5㎜ほどの砂粒を多く含み、暗灰褐色を呈する。高台は高く、Ａ型。**867**は口縁部を欠き、高台径9.5cmを測る。胎土は１㎜ほどの暗褐色砂粒を多く含み、橙灰色を呈する。高台は高く、Ａ型。**870**も口縁部を欠き、高台径10.4cmを測る。胎土は１㎜ほどの砂粒を多く含み、橙灰色を呈する。高台は高く、Ａ型。**872**は口径14.7cm、器高4.3cm、高台径10.7cmを測る。胎土は0.5㎜ほどの細砂粒で、灰白色を呈する。高台は低く、Ａ型。**875**は口縁部を欠き、高台径9.8cmを測る。胎土は１㎜ほどの砂粒を多く含み、暗青灰色を呈する。高台の位置はＢ型。**876**は口縁部を欠き、高台径9.2cmを測る。胎土は１㎜ほどの砂粒を多く含み、暗青灰色を呈する。高台の位置はＢ型。**878**は口縁部を欠き、高台径は10.0cmを測る。胎土は僅かに0.5㎜ほどの砂粒を多く含み、暗青灰色を呈する。高台の位置はＡ型。**20**は土師器の皿で底部を欠き、口径9.8cmを測る。口縁は内湾気味に立ち上がり、端部は横ナデ調整で丸く仕上げている。胎土は精選され緻密である。**858**は土師器の鉢で底部を欠き、口径11cmを測る。口縁は内湾気味に立ち上がり、端部は横ナデ調整で丸く仕上げている。内面にはベンガラが一部に残る。胎土は１㎜～２㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。**33**は高坏で、口径40.4cmを測るが、頸部以下を欠く。胎土は精選され、淡茶灰色～淡茶白色を呈する。器面にはヘラ磨き痕がのこり、丁寧な調整が施されている。**36**は蓋と推定される土器で、口径7.6cm、器高2.7cmを測る。２ヶ所に径２㎜ほどの穿孔が施されている。胎土には２㎜～３㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰色を呈する。**37**は手捏ねの小型椀で、口径５cm、底径4.4cm、器高2.3cmを測る。底部は平坦で、口縁は直立する。器面には指頭圧痕が全面に残る。胎土は僅かに砂粒を含み、淡茶灰色～淡灰色を呈する。**32**は甕で口径15.8cm、胴部径15cmを測る。胴部外面は縦方向の刷毛目整形の後に粗いヘラ磨き調整を施している。内面整形はヘラ削り。口縁は「く」の字状に外湾する。胎土は１㎜ほどの砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。**34**は土師器の甕で口径14cm、胴部径16cmを測り、底部は欠失する。胴部は球形を呈し、外面には叩き目痕が全面に残る。内面の調整は、粘土紐のつなぎ目が明瞭に残るほど粗い。口縁は「く」の字状に外反する。胎土は１㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶色～黒色を呈する。**859**は甕で、口径19.3cmを測る。口縁は僅かに「く」の字状に外反する。胎土は１㎜～２㎜ほどの砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。**860**は弥生土器の甕で、口径27.7cmを測る。口縁は「く」の字状に外反する。胎土は１㎜～２㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**861**も弥生土器の甕形土器で、口径19.0cmを測る。口縁は「く」の字状に外反する。外面には煤が全面に付着している。胎土は１㎜～２㎜ほどの砂粒を多く含み、茶灰色を呈する。**35**は甕形土器の底部で、底径は6.2cmを測る。内外面には刷毛目調整痕が残る。胎土は１㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色～淡灰色を呈する。**50013**は素焼きの土錘である。

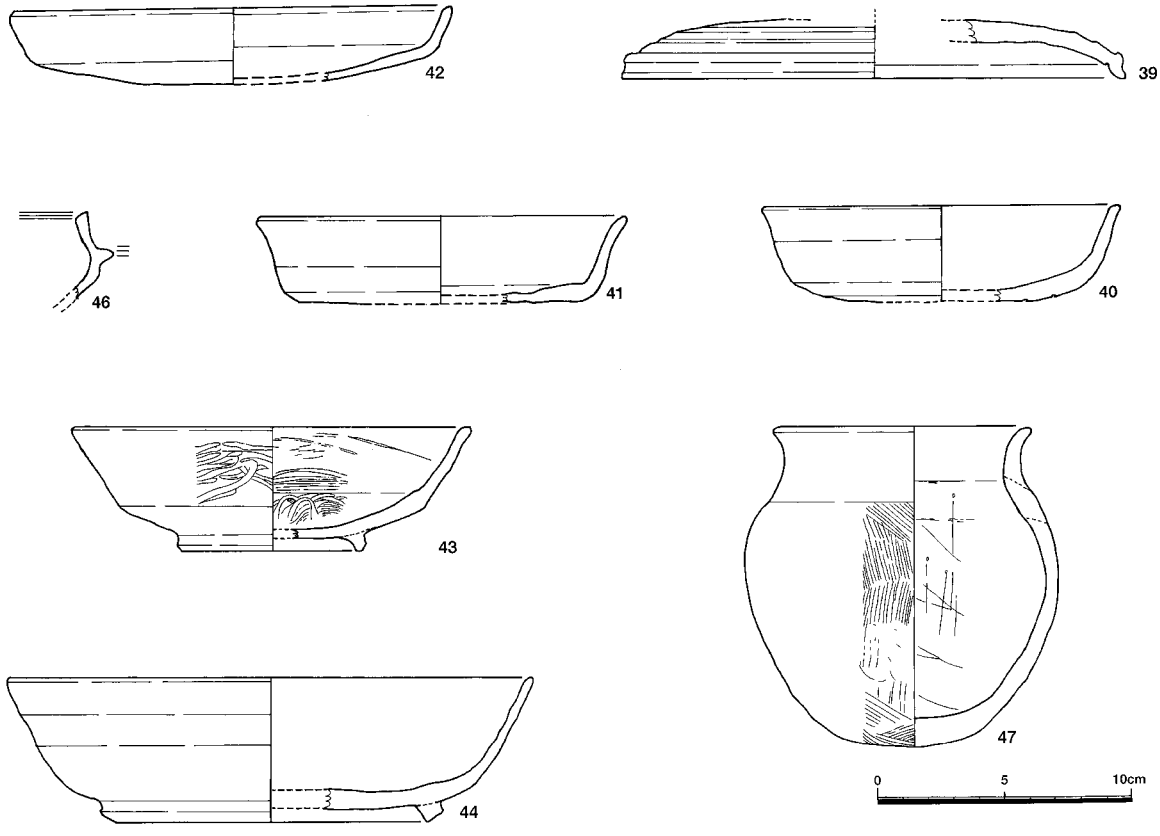


Fig.43　水田SX85出土遺物実測図（1/3）

水　田（SX）

SX85（Fig. 43）

弥生土器甕・高坏、古墳時代須恵器杯、奈良時代須恵器蓋・杯・碗・甕、土師器皿が出土している。**46**は須恵器の杯で、底部を欠く。口径11.2cmを測る。体部は直線的に外傾しながら立ち上がり、受部は水平に外方へのび、端部は横ナデ調整により丸く仕上げている。口縁部はやや内傾しながら直線的に立ち上がる。胎土は僅かに1㎜ほどの砂粒を含むものの総じて細砂粒である。色調は暗青灰色を呈する。**39**は須恵器の蓋で天井部中央を欠く。口径は19.8cmを測る。天井部は平坦で、口縁部が下方に折れ曲がる。**43**は土師器の椀で内外面に粗いヘラ磨きが施されている。口径15.6cm、器高4.9cm、高台径7.0cmを測る。胎土は0.5㎜ほどの細砂粒で、灰白色を呈する。**40**は土師器の杯で、口径14.2cm、底部径10.2cm、器高3.8cmを測る。口縁部は僅かに外反しながら直立する。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、灰色を呈する。**41**は土師器の杯で、口径14.4cm、底部径11.0cm、器高3.5cmを測る。口縁部は僅かに外反しながら直立する。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**44**は須恵器の椀で、口径19.8cm、器高5.7cm、高台径11.8cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗灰色を呈する。**42**は土師器の杯で底部を欠く。底部は浅く、口縁部は僅かに外反しながら直立する。口径は17cmを測り、胎土は1㎜ほどの赤色砂粒を含み暗橙色を呈する。

SX86

奈良時代の須恵器椀・甕、土師器椀が出土している。

SX87

弥生土器甕・器台が出土している。

3）第３遺構検出面

河　川（SD）

SD102

弥生土器甕、須恵器・蓋、土師器碗・甕が出土している。

土　坑（SK）

SK90

弥生土器甕・鉢・壷が出土している。

SK91（Fig.44）

弥生土器鉢が出土している。**49**は底部を欠き、口径は33cmを測る。口縁部は水平に外方へのび、端部は横ナデ調整により丸く仕上げ、ヘラ状工具によるキザミ目を２㎜～５㎜ほどの間隔で施している。体部には目の細かい刷毛目調整痕が残る。外面の口縁部下にはヘラ先による１条の凹線を施している。胎土は１㎜～３㎜ほどの砂粒を多く含み、暗橙色～暗茶褐色を呈する。

SK99（Fig.45）

弥生土器甕・手捏土器が出土している。**53**は底部を欠く。体部は球形で、口縁部は短く直立し、端部は横ナデ調整により丸く仕上げている。外面は極めて目の細かい刷毛目調整が施され、煤が口縁端部まで付着している。胎土は僅かに１㎜ほどの砂粒を含む細砂粒で、暗橙褐色を呈する。

SK100

弥生土器甕が出土している。

SK101

弥生土器高坏・甕が出土している。

水　田（SX）

SX89

弥生土器甕・鉢、須恵器甕が出土している。

SX93（Fig.46）

弥生土器器台が出土している。**50**は器台で脚部を欠く。口径13.8cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端面には１cm～1.5cmの間隔でハケ工具の小口面を連続押圧している。内面は目の粗いハケ工具による調整を施している。胎土は１㎜～３㎜ほどの砂粒を多く含み、暗橙褐色を呈する。

SX95

弥生土器甕が出土している。

SX96（Fig.47）

弥生土器小型鉢が出土している。**52**は手捏ねによる小型鉢形土器で、全面に指頭圧痕が残る。底部は平坦で、口縁部はやや外反しながら直線的に立ち上がる。口径3.6cm、底部径1.6cm、器高2.9cmを測る。胎土は僅かに１㎜ほどの砂粒を含む細砂粒で、淡茶灰色を呈する。

SX98

弥生土器甕が出土している。

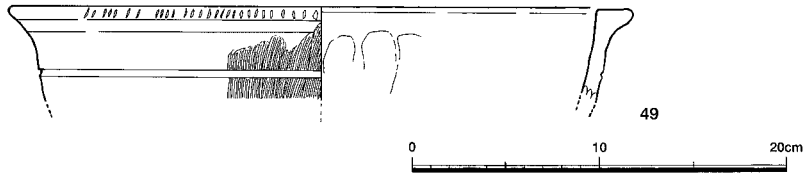


Fig.44　土坑SK91出土遺物実測図（1/4）

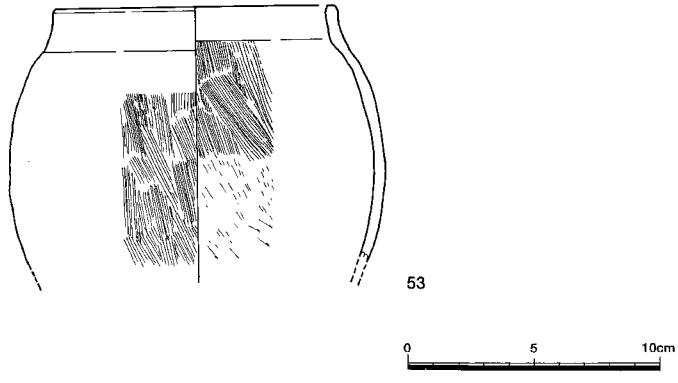


Fig.45　土坑SK99出土遺物実測図（1/3）

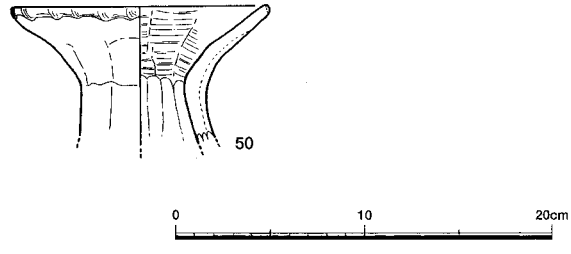


Fig.46　水田SX93出土遺物実測図（1/4）

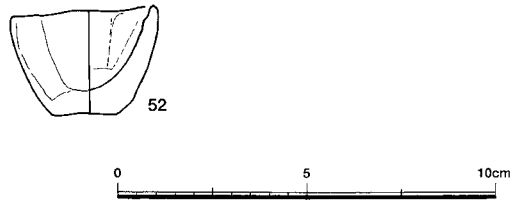


Fig.47　水田SX96出土遺物実測図（1/2）

4）第4遺構検出面

溝（SD）

SD103（Fig. 48　PL. 73）

弥生土器壷・鉢・甕・手捏小型椀・支脚・土製品等が出土している。**64**は手捏ねによる小型の鉢形土器である。底部は丸味を持ち、口縁部は外反し口縁部下で直立する。口径5.5cm、器高3.5cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**65**は土製品で、取手もしくは柄の一部と思われる。胎土は精選された細砂粒で、淡褐色を呈する。**66**は支脚で、脚部を欠く。頂部は平面を呈するが僅かに傾斜し、中央部には径7mm前後を測る穿孔を1ヶ所持つ。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**56**は鉢形土器で底部を欠き、口径は15.6cmを測る。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は横ナデ調整により丸く仕上げている。内・外面ともハケ目整形の後に丁寧なナデ調整を施している。胎土は1mmほどの暗赤色砂粒を含む特徴がある。**68**は壷で胴部位下を欠く。口縁は二重口縁で、極めて目の細かいハケ目調整を施している。口径は13.6cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**61**は底部を欠き、口径は19.2cmを測る。口縁部は水平に外方へのび、端部は横ナデ調整により丸く仕上げている。外面の口縁部下2.5cmにはヘラ先による1条の凹線を施している。胎土は1mm～3mmほどの砂粒を多く含み、灰褐色～橙灰色を呈する。**57**は甕形土器で、胴部下半を欠く。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は横ナデ調整によって丸く仕上げている。口径は17.0cmを測る。胎土は僅かに0.5mm～1mmほどの砂粒を含む細砂土で、淡茶灰色を呈する。**58**は甕形土器で、胴部下半を欠く。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は横ナデ調整によって丸く仕上げている。口径は19.4cmを測る。胎土は0.5mm～1mmほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。外面には煤が付着している。**67**は甕形土器の底部で、上部を欠く。底部径は7.4cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、暗橙色を呈する。**60**は鉢形土器で、胴部下半を欠く。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は横ナデ調整によって丸く仕上げている。口径は22.4cmを測る。胎土は0.5mm～1mmほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。

SD104（Fig. 49, 50　PL. 73, 74）

弥生土器甕・鉢・壷、土師器甕・器台・壷・製塩土器・高坏が出土している。**91**は土師器の器台でほぼ完形の状態で出土している。杯部口径8.2cm、脚部口径10.7cm、器高7.9cmを測る。脚部は直線的に外反し、中位3ヶ所に径1cmを測る円形の穿孔が施されている。杯部は口縁が直立する。脚部および杯部外面は回転を用いたヘラ磨き調整が施されている。また、杯部内面には放射状にヘラ磨き調整が施されている。胎土は極めて精選されており、0.5mm以上の砂粒は認められない。淡灰褐色を呈している。**72**は土師器壷で口縁部を欠く。胴部は球状、丸底を呈し、胴部最大径14.0cmを測る。口縁部は直線的に外反しながら立ち上がる。煤が底部から肩部まで全面的に付着している。胎土は僅かに1mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。**90**も土師器壷で底部を欠く。胴部は球状を呈し、胴部最大径14.2cmを測る。口縁部は直線的に外反しながら立ち上がり、口径8.4cmを測る。胴部外面には整形時の細目のハケ目が残る。胎土は僅かに1mmほどの砂粒を含む細砂土で、淡灰褐色を呈する。**81**は土師器の小型鉢形土器で底部を欠くが、底部は深い。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は横ナデ調整により丸く仕上げている。口径17.0cmを測る。胎土は0.5mm～1mmほどの砂粒を含む細砂土で、橙色を呈する。**82**も土師器の小型鉢形土器で底部を欠くが、底部は浅い。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は横ナデ調整により丸く仕上げている。口径14.2cmを測る。胎土は0.5mm～1mmほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色～灰褐色を呈する。**78**は鉢形土器で、口径26.0cm、底径7.2cm、器高8.6cmを測る。底部は狭小。ハケ目整形の後に横ナデ調整を施している。口縁部は「く」の字に外反し、端部

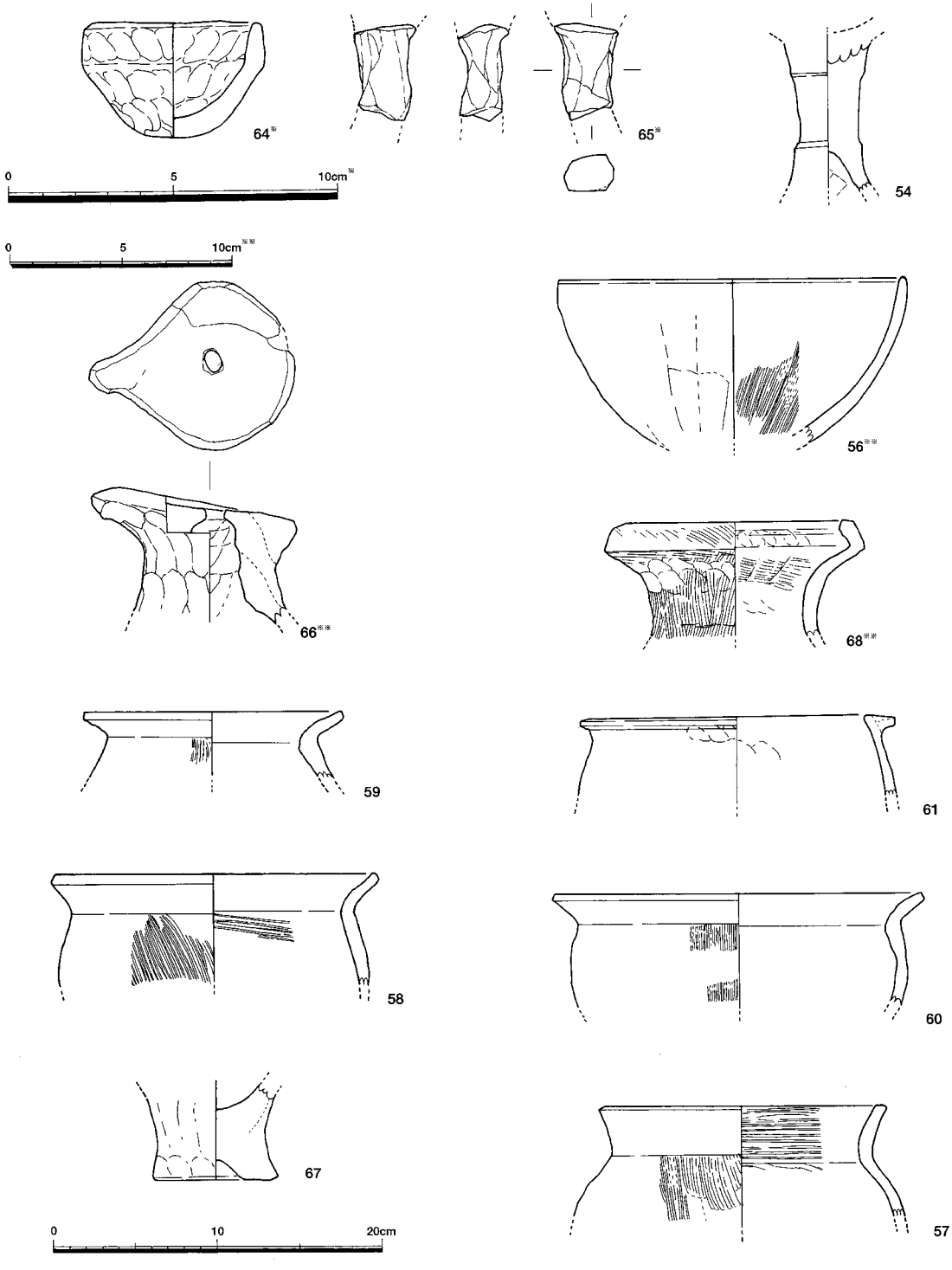


Fig.48　溝SD103出土遺物実測図（1/2※・1/3※※・1/4）

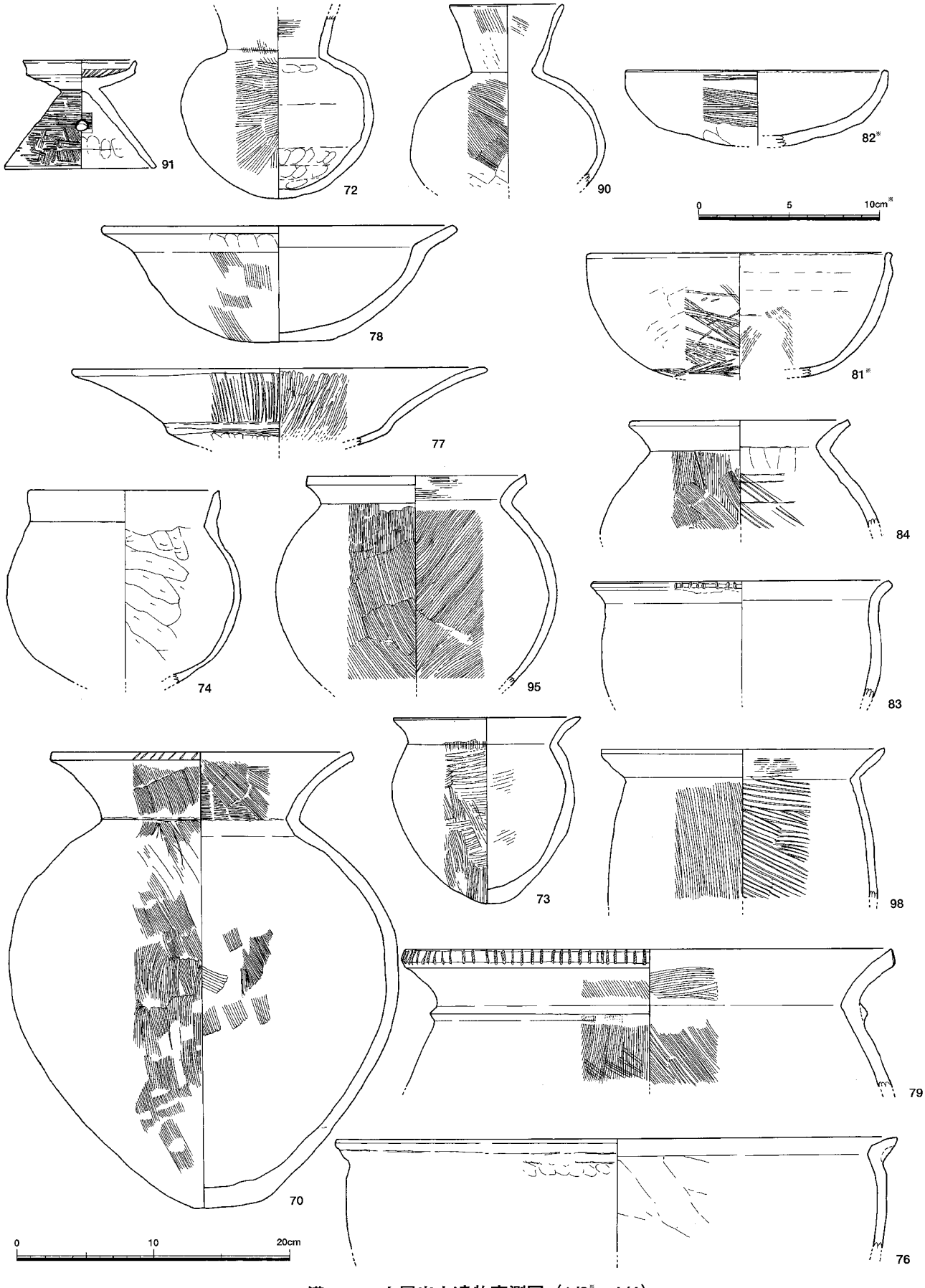
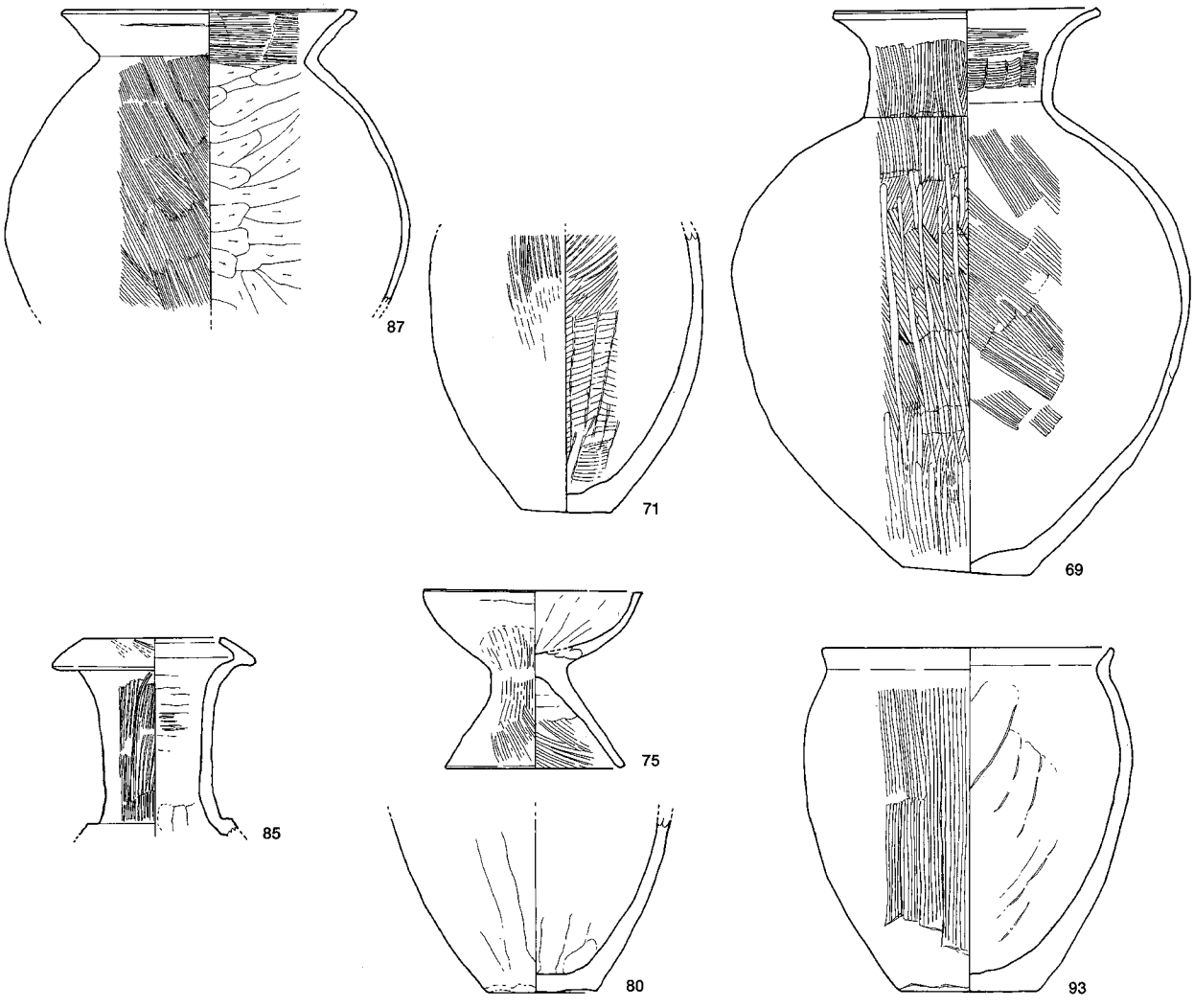


Fig.49 溝SD104上層出土遺物実測図（1/3※・1/4）

中層～下層



最下層

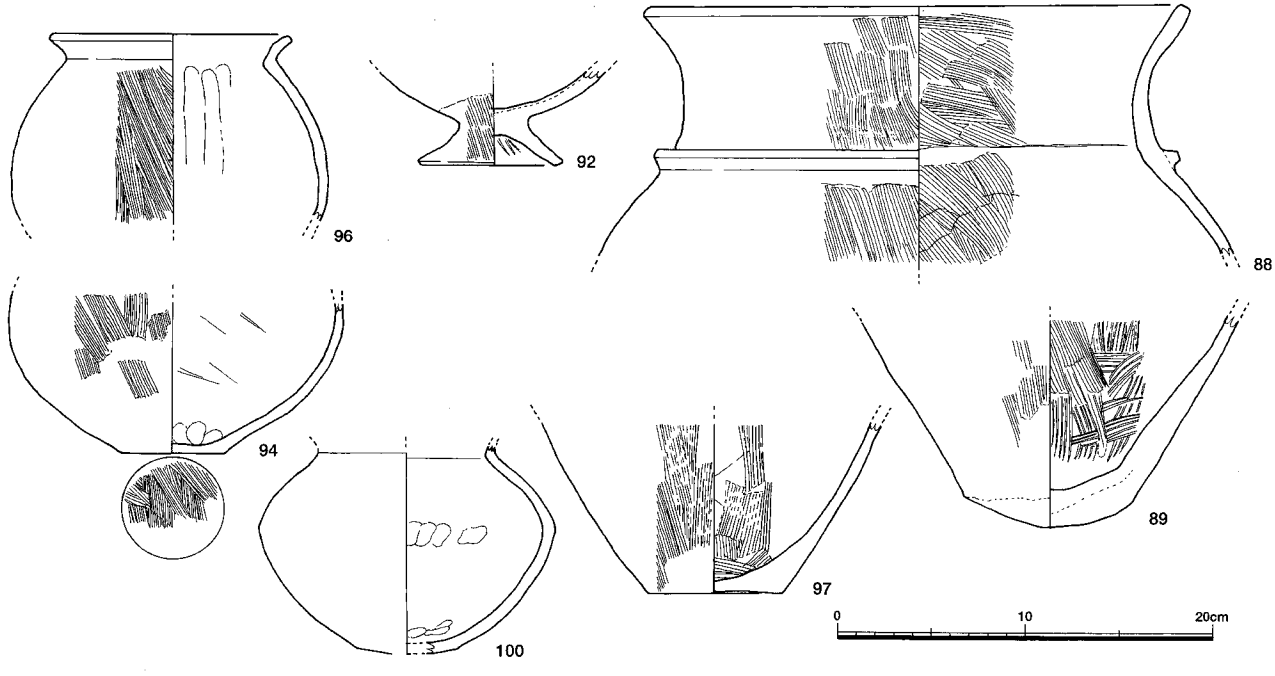


Fig.50　溝SD104中層～最下層出土遺物実測図（1/4）

には面を持つ。を持つ。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を極めて多く含み、淡灰褐色～橙灰色を呈する。**77**は高坏で脚部を欠く。杯部は、口径30.5cmを測り、内外面ともに放射状のヘラ磨きが暗紋風に施されている。胎土は僅かに1㎜程の砂粒を含み、橙灰色を呈する。**83**は甕形土器で胴部下半を欠く。口縁は外湾し、端部にはヘラ状工具によるキザミ目を5㎜前後の間隔で施している。器面外面には煤が厚く付着している。口径は22cmを測る。**84**は甕形土器で胴部下半を欠く。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は横ナデ調整によって面を成す。口径は16.0cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。外面には煤が口縁端部まで付着している。**74**は底部を欠く。胴部は球形を呈し、最大径17.2cmを測る。口縁部は短く直立し、口径14.0cmを測る。内面はヘラ削り調整している。外面には口縁端部まで煤が付着している。**79**は弥生土器甕形土器で口径36.0cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は横ナデ調整によって幅1cm～1.2cmを測る面を成し、ハケ工具によるキザ目が施されている。頸部には凸帯が一条巡る。胎土は僅かに1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。**76**は鉢形土器で底部を欠く。口縁部は水平に外方へのび、端部は横ナデ調整により丸く仕上げている。口径は41.8cmを測る。内・外面ともにハケ目整形の後にナデ調整を施している。胎土は1㎜～2㎜の砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**95**は甕形土器で底部を欠く。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は面を成す。口径は16.0cmを測る。胴部は球状を呈し、最大径20.5cmを測る。内外面ともにハケ目が残る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。**73**は甕形土器で、口径13.8cm、胴部最大径13.6cm、器高13.9cmを測る。底部は尖る。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸く仕上げている。胴部全面には整形時の叩き目と部分的なハケ目調整痕が残る。器面外面全面には煤が付着している。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡茶灰色～橙灰色を呈する。**98**は甕形土器で、胴部下半を欠く。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は横ナデ調整によって丸く仕上げている。口径は21.0cmを測る。胎土は0.5㎜～1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。煤が外面全面に付着している。**70**は口径22.0cm、底部径4.5cm、胴部最大径28.8cm、器高33.5cmを測る。極めて目の細かいハケが用いられている。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は横ナデ調整によって幅6㎜～8㎜を測る面を成し、ハケ工具による斜行キザ目が6㎜～9㎜間隔で施されている。口径14.6cm、底部径6.1cm、胴部最大径25.6cmを測る。**69**は壷形土器で口径14.6cm、底部径6.1cm、胴部最大径25.6cm、器高31.4cmを測る。口縁部下半は直立、上半部は外湾する。口縁端部は幅5㎜を測る面を呈する。整形には極めて目の細かいハケが用いられ、部分的にヘラ磨きが施されている。胎土は僅かに1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、橙褐色を呈する。**75**は高坏で、脚部は直線的に外反し、杯部口縁は内湾しながら立ち上がる。口径12.1cm、脚部口径9.6cm、器高9.8cmを測る。**71**・**80**は口縁部を欠く甕形土器で、胴部最大径15.2cm、底径4.8・6.1cmを測る。内面はハケ目整形、特に外面下半部は丁寧なヘラ磨き調整をハケ目整形の後に施している。**87**は土師器の甕で、胴部は球形を呈し、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁端部は水平な平坦面を呈するが、その際の横ナデ調整によって内縁が玉縁状となっている。外面には目の細かいハケ目整形、内面はヘラ削りが施されている。口径16.2cm、胴部最大径22.0cmを測る。胎土は0.5㎜～1㎜砂粒を多く含み、暗茶褐色砂粒を含む特徴を持つ。

SD105

弥生土器甕・高坏が出土している。

SD108（Fig. 51　PL. 75）

弥生土器甕・高坏・壷・鉢・器台が出土している。**418**は小型の鉢形土器で、底部は丸味を持ち、口縁部は僅かに外反しながら立ち上がる。口径10.8cm、器高8.2cmを測る。ハケ目整形の後に横ナデ調整を施している。**415**は高坏の杯部で、口縁部は外反しながら直線的に立ち上がり、途中で上方に屈

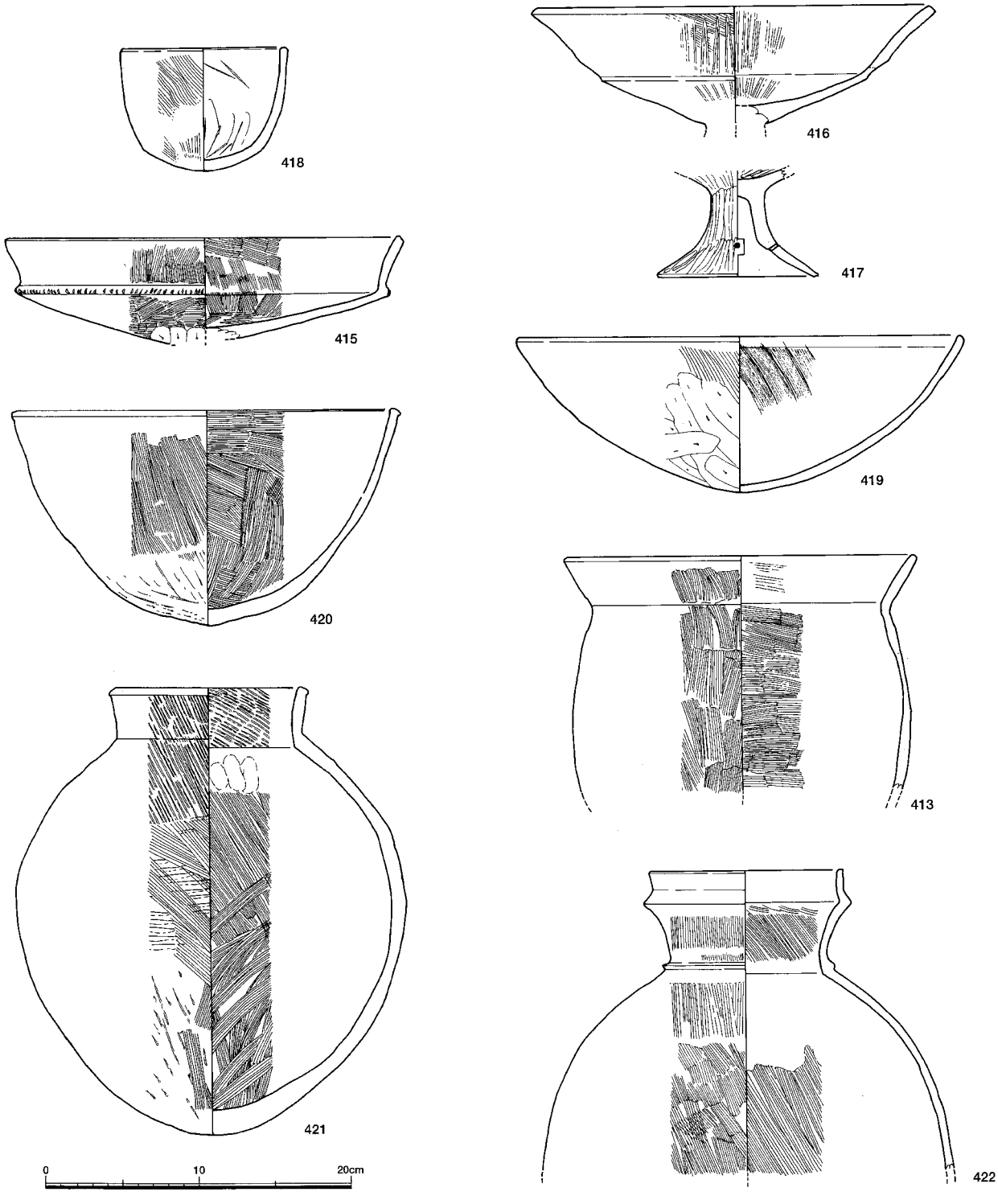


Fig.51　溝SD108出土遺物実測図（1/4）

曲する。屈曲する外面にはハケ工具を用いたキザミ目が2～3㎜間隔で施されている。口縁部外面には横ナデ調整の後に縦方向のハケ目が装飾的に施されている。口径25.4cmを測る。**417**は高坏の脚部で、器面は丁寧なヘラ磨きが施されている。脚部中位の4ヶ所に径2㎜～3㎜の穿孔が施されている。**419**は鉢形土器で器面をハケ目整形の後に、底部外面をヘラ削りしている。口径29.2cm、器高10.4cmを測る。**420**は深鉢形土器で、内面は器面にハケ目を残し、外面はハケ目整形の後に横ナデおよびヘラ削りを施している。口径24.4cm、器高14.2cmを測る。**421**は短口壷形土器の完形品で、口径12.4cm、最大胴部径25.6cm、器高29.6cmを測る。叩き板による整形の後に粗い刷毛目調整を施し、下半部にはヘラ削りしている。

SD109

弥生土器甕が出土している。

SD110

弥生土器甕が出土している。

SD112（Fig.52～54　PL.76,77）

弥生土器甕・高坏・細頸壷・鉢・丸底壷・器台が出土している。**427**は手捏の小型浅鉢形土器で、口径6.8cm、器高2.4cmを測る。胎土は僅かに1㎜程の砂粒を含み、灰橙色を呈する。**428**は手捏の小型鉢形土器で、底部は平坦、口縁部は外反しながら立ち上がる。底径3.9cm、口径6.2cm、器高4.1cmを測る。**426**は小型丸底壷形土器で、口縁部を欠く。最大胴部径は4.8cm。**430**は器台の脚部で口縁部を欠き、脚部口径は9.8cmを測る。脚部中位には径5㎜前後の穿孔が5ヶ所にある。ハケ目整形の後にヘラ磨き調整を施している。**424**は鉢形土器で、底部は丸く、口縁部は外反しながら直線的に立ち上がる。口径24.6cm、器高7.2cmを測る。内外面ともにヘラ磨きが施されている。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈している。**438**は二重口縁部壷形土器で口径20.4cmを測る。器面にはハケ目を残す。**436**は壷形土器で胴部下を欠く。口縁部は外湾しながら立ち上がり、口縁端部は上下両方にのび、ハケ目工具によるキザミ目を施している。頸部にはハケ目工具によるキザミ目を施した凸帯が巡る。口径は25.2cm。**464**は完形の壷形土器で、口径15.2cm、最大胴部径24.6cm、器高29.2cmを測る。胴部は球状を呈し、底部は丸底。口縁部はやや外湾しながら立ち上がる。胴部整形は叩き板で、ハケ目調整を丁寧に施した後にナデている。内面はヘラ削り調整。**445**も壷形土器で口縁部上部を欠く。胴部は球状を呈し、底部は丸底。胴部外面全面にハケ目が残る。内面調整はヘラ削り。胴部最大径は29.6cmを測る。胴部中位には長径5cm・短径4cmを測る楕円形の孔があけられている。**462**は口縁部を欠くが壷形土器と考えられる。球状の胴部を呈し、最大径は24.6cmを測る。外面は目の細かいハケ目整形の後に横ナデ調整。波状文が施されている。内面はヘラ削りが施され、器壁厚は2.5㎜～3.5㎜を測る。**434**は甕形土器で底部を欠く。胴部は球状、口縁部は「く」の字状に外反する。口径13.8cm、最大胴部径16.0cmを測る。胴部外面は叩き板による整形の後、目の細かいハケ目調整で仕上げている。器壁厚は内面のヘラ削りで3㎜ほどに仕上げている。外面には煤が付着している。**463**は甕形土器で、極めて狭小な底部を持ち、胴部は球状、口縁部は「く」の字状に外反する。口径16.2cm、最大胴部径20.6cm、底径3.0cm、器高21.8cmを測る。胴部外面は叩き板による整形の後、目の細かいハケ目調整で仕上げている。器壁厚は内面のヘラ削りで3㎜ほどに仕上げている。胎土に暗赤褐色の砂粒を含む特徴を持つ。外面には煤が付着している。**466**は甕形土器で、底部は極めて狭小な底部を持ち、胴部は球状、口縁部は「く」の字状に短く外反する。口径14.4cm、最大胴部径16.6cm、底径3.2cm、器高18.6cmを測る。胴部外面は叩き板による整形の後、目の粗いハケ目調整で仕上げている。器壁厚は内面をヘラ削りの後にナデ調整して6㎜ほどに仕上げている。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙

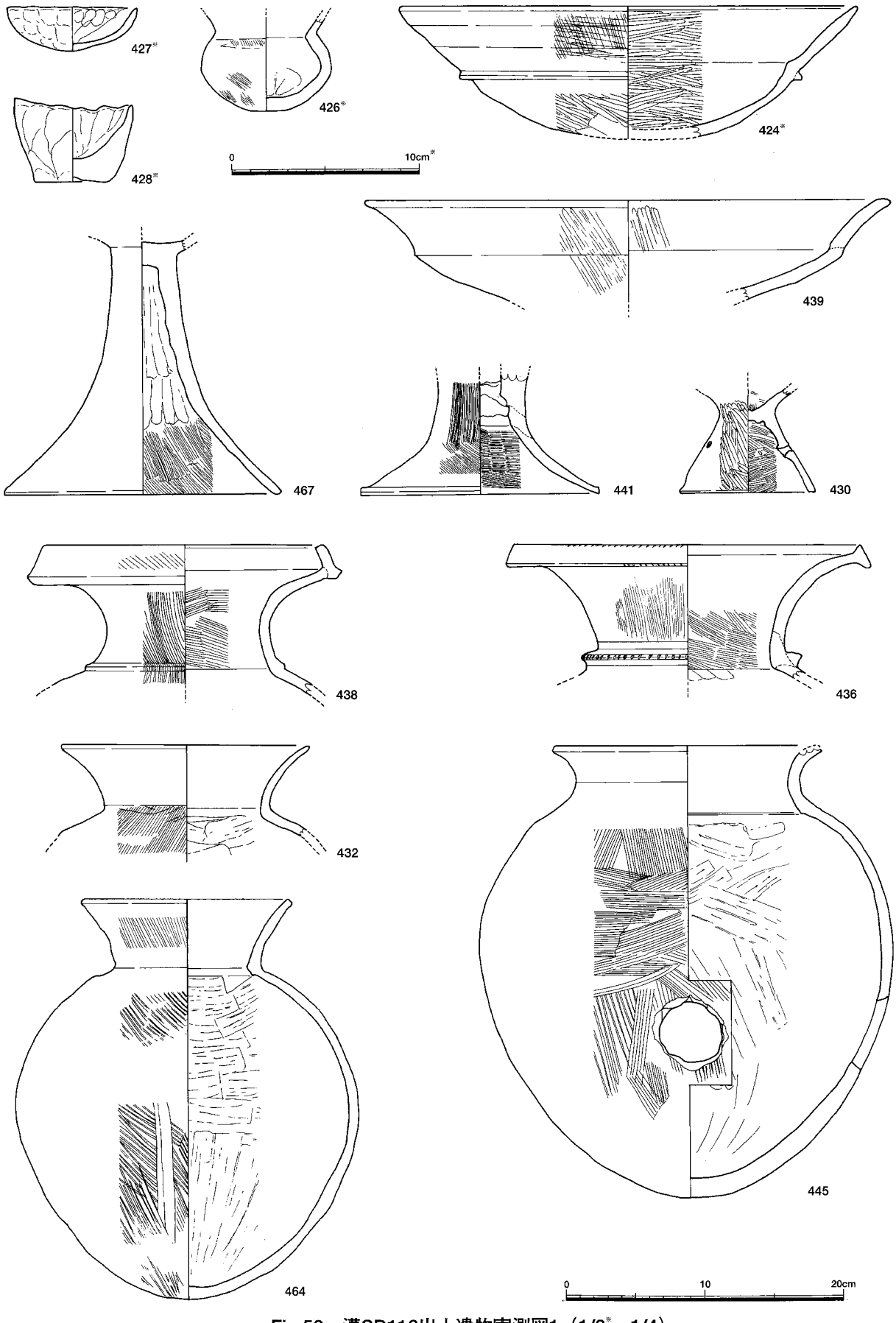


Fig.52　溝SD112出土遺物実測図1（1/3※・1/4）

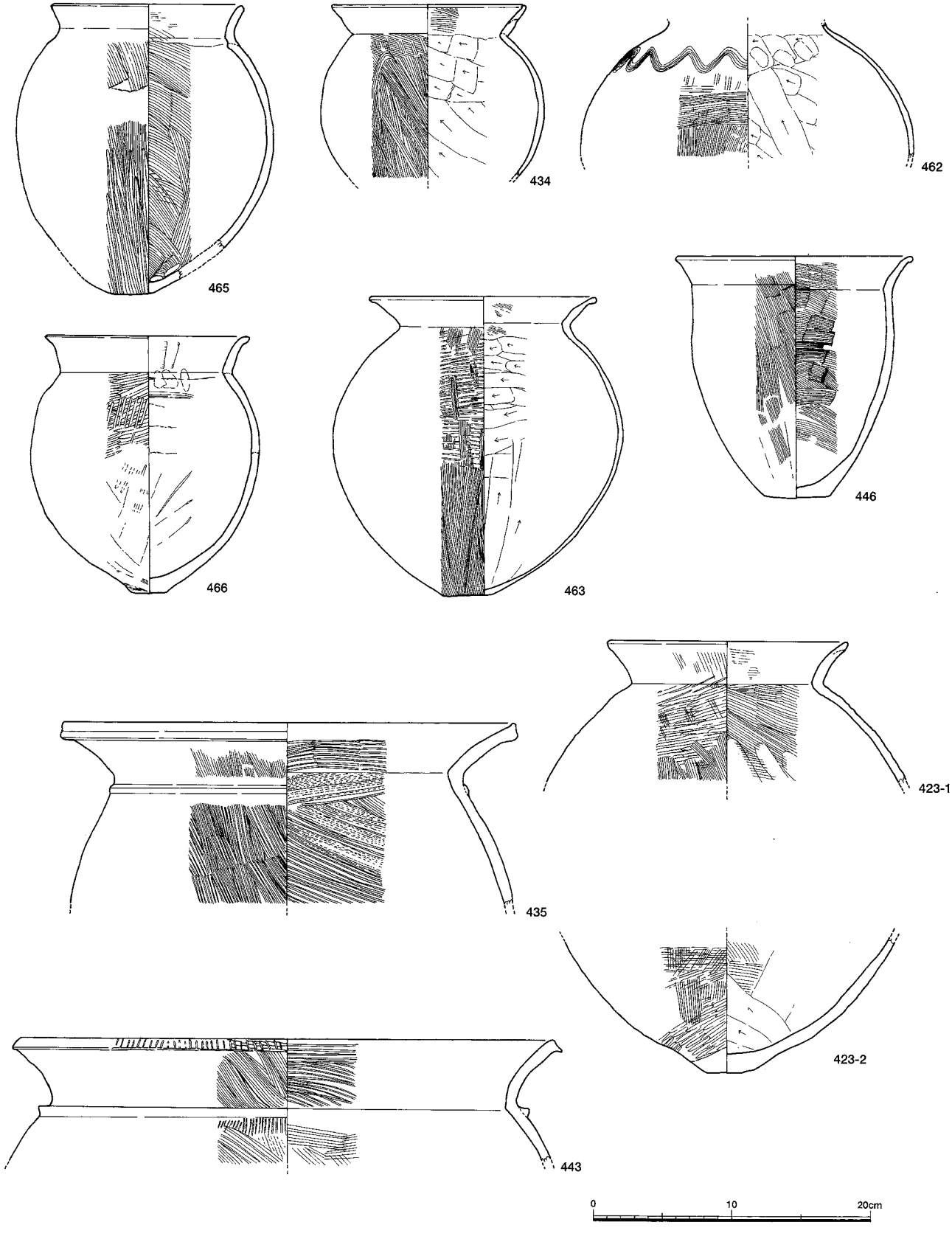


Fig.53 溝SD112出土遺物実測図2（1/4）

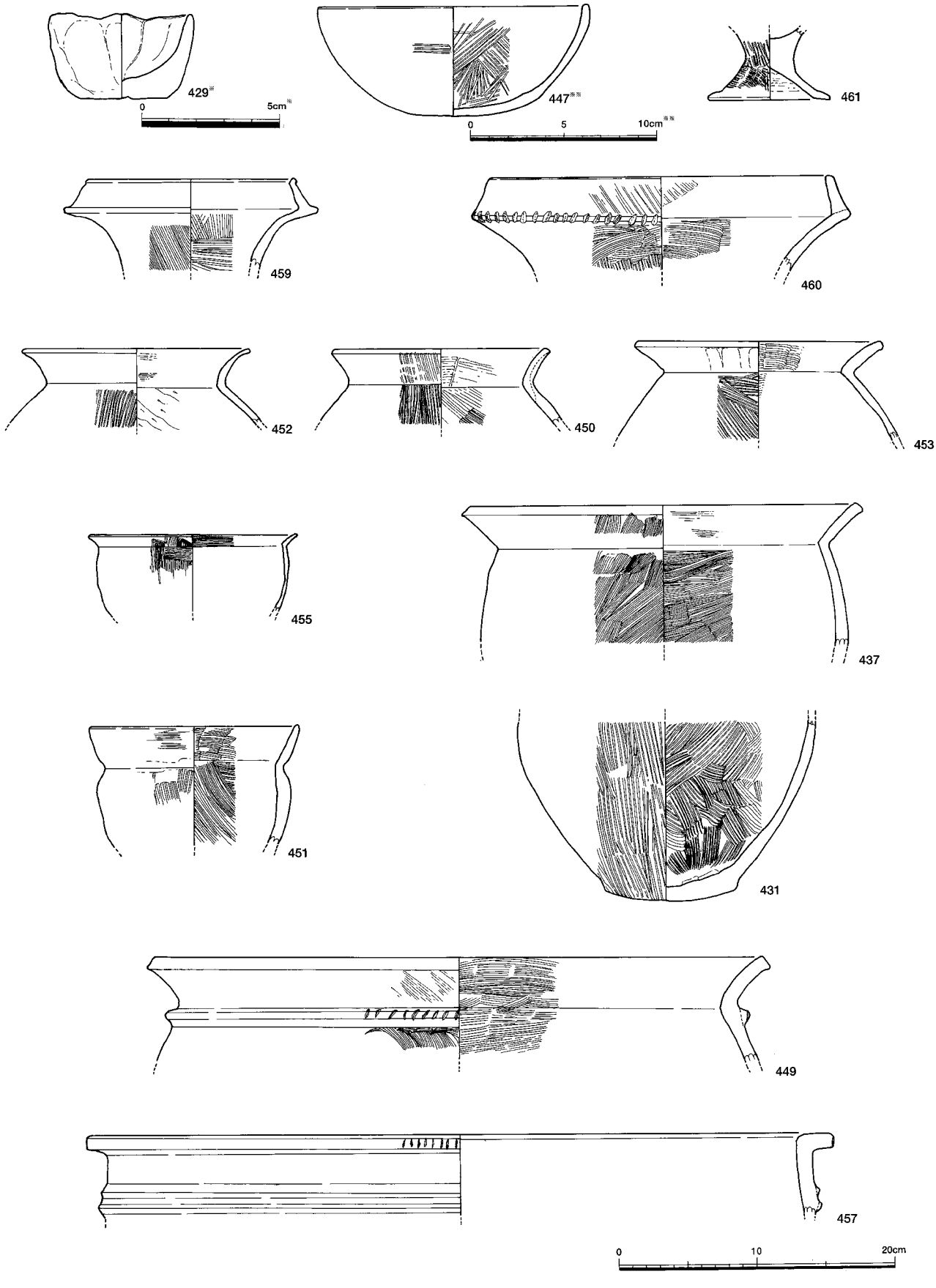


Fig.54　溝SD112出土遺物実測図3（1/2※・1/3※※・1/4）

灰色を呈する。外面には煤が付着している。**465**は甕形土器で、丸底の底部を持ち、胴部は球状、口縁部は「く」の字状に外反し短く立ち上がる。口径13.2cm、最大胴部径18.4cm、器高21.0cmを測る。胴部外面はハケ目整形の後、上半部はナデ調整、下半部はヘラ磨き調整している。内面には目の粗い刷毛目が残る。器壁厚は5㎜～6㎜を測る。**446**は甕形土器で平坦な底部を持ち、胴部は細長の球状、口縁部は「く」の字状に短く外反する。口径16.9cm、最大胴部径14.6cm、底径5.6cm、器高17.6cmを測る。胴部は内外面とも目の粗いハケ目調整で仕上げている。淡灰褐色を呈する。**435**・**443**は甕形土器で胴部下を欠く。いずれも口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部に面を持つ。内外面はハケ目調整。**443**の口縁部端面にはヘラ工具によるキザミ目が施されている。口径は**435**が32.3cm、**443**が38.0cmを測る。

下層出土の**429**は手捏ねの小型鉢形土器で底部は平坦、口縁部は直立する。口径5.1cm、器高3.1cmを測る。

447は小型の鉢形土器で、底部は丸く、口縁部は内湾気味に立ち上がる。ハケ目整形の後にナデ調整を施している。口径14.6cm、器高6.0cmを測る。**459**・**460**は二重口縁を持つ壷形土器で、胴部下を欠く。いずれもハケ目整形。**460**の口縁部屈曲部外面にはハケ状工具によるキザミ目が5㎜～8㎜間隔で施されている。**455**は鉢形土器で、下半部を欠き、口径15.2cmを測る。口縁部は短く外反する。1㎜～3㎜ほどの砂粒を多く含み、茶灰色を呈する。器壁厚は2㎜～3㎜を測る。**437**・**450**・**452**・**453**は甕形土器で同部下半部を欠く。**452**は口縁部が外湾しながら立ち上がり、胴部内面にヘラ削りが施されている。他の甕形土器は口縁部は直線的に外反しながら立ち上がり、内面整形はハケ目。**457**は口縁部が「L」字状に折れ曲がり、端面にはヘラ工具によるキザミ目が3㎜～5㎜間隔で施されている。口縁部下には2条の凸帯が巡る。

SD114（Fig. 55～58　PL. 78, 79, 106）

弥生土器甕・鉢・壷・器台・土製紡錘車が出土している。**472**は黒色研磨の鉢形土器で、口径16.2cm、底径7.8cm、器高9.6cmを測る。口縁は横ナデにより「S」字状に作り出されている。底部は高台風に立ち上がる。器面は丁寧なヘラ磨きが施されている。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**473**・**491**は底部を欠き、黒色研磨の鉢形土器もしくは高坏の杯部と考えられる。口縁部は**472**と同様に「S」字状口縁を呈している。**491**は口径21.3cmを測る。器面は黒色で、緻密なヘラ磨きが施されている。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を僅かに含み、暗灰色を呈する。**473**は底部が浅く、口径21.0cmを測る。器面は黒色で、ヘラ磨きが施されている。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を僅かに含み、淡灰褐色を呈する。**492**は黒色研磨の壷形土器で、緻密なヘラ磨きが器面内外面に施されている。口縁端部には櫛歯紋が、外面口縁部下には条線が赤色顔料で彩色されている。**486**は赤色研磨の壷形土器で胴部下を欠く。頸部は内傾し、口縁部は外方に屈曲する。口径18.4cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗灰褐色を呈する。**485**も赤色研磨の壷形土器で、口縁部および胴部下を欠く。**610**は大型の壷形土器で、口径38.0cmを測る。口縁の内外面を肥厚させ、口縁上端部を平面に仕上げている。1㎜ほどの砂粒を多く含み、暗灰白色を呈する。**468**も大型の壷形土器で、口径45.0cmを測る。口縁内面を肥厚させている。緻密なヘラ磨きが施されている。**470**・**471**・**487**・**605**・**606**・**843**は胴部が「く」の字状に屈曲する甕形土器で、いずれも底部を欠く。粘土紐の貼付けによるキザミ目凸帯が口縁端部直下と屈曲部とに施されている。外面に煤が厚く付着している。**470**は口径20.8cm、胴部最大径23.2cm、器壁厚0.5cm～0.6cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。器面はハケ目状もしくはカイガラ条痕で整形後に、ナデ調整を施している。**471**は口径24.0cm、胴部最大径27.3cm、器壁厚0.5cm～0.6cmを測る。器面はハケ目状もしくはカイガラ

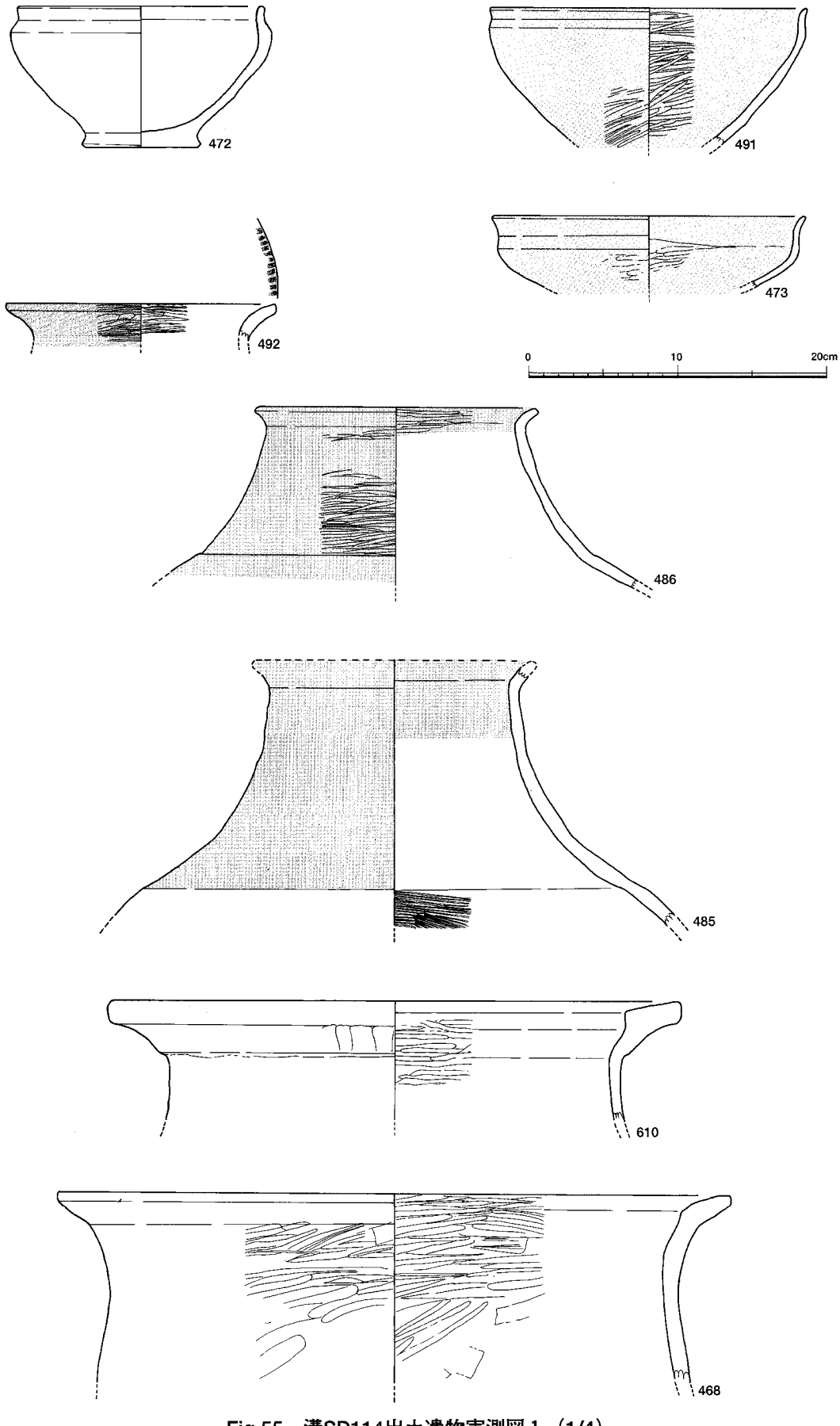


Fig.55　溝SD114出土遺物実測図１（1/4）

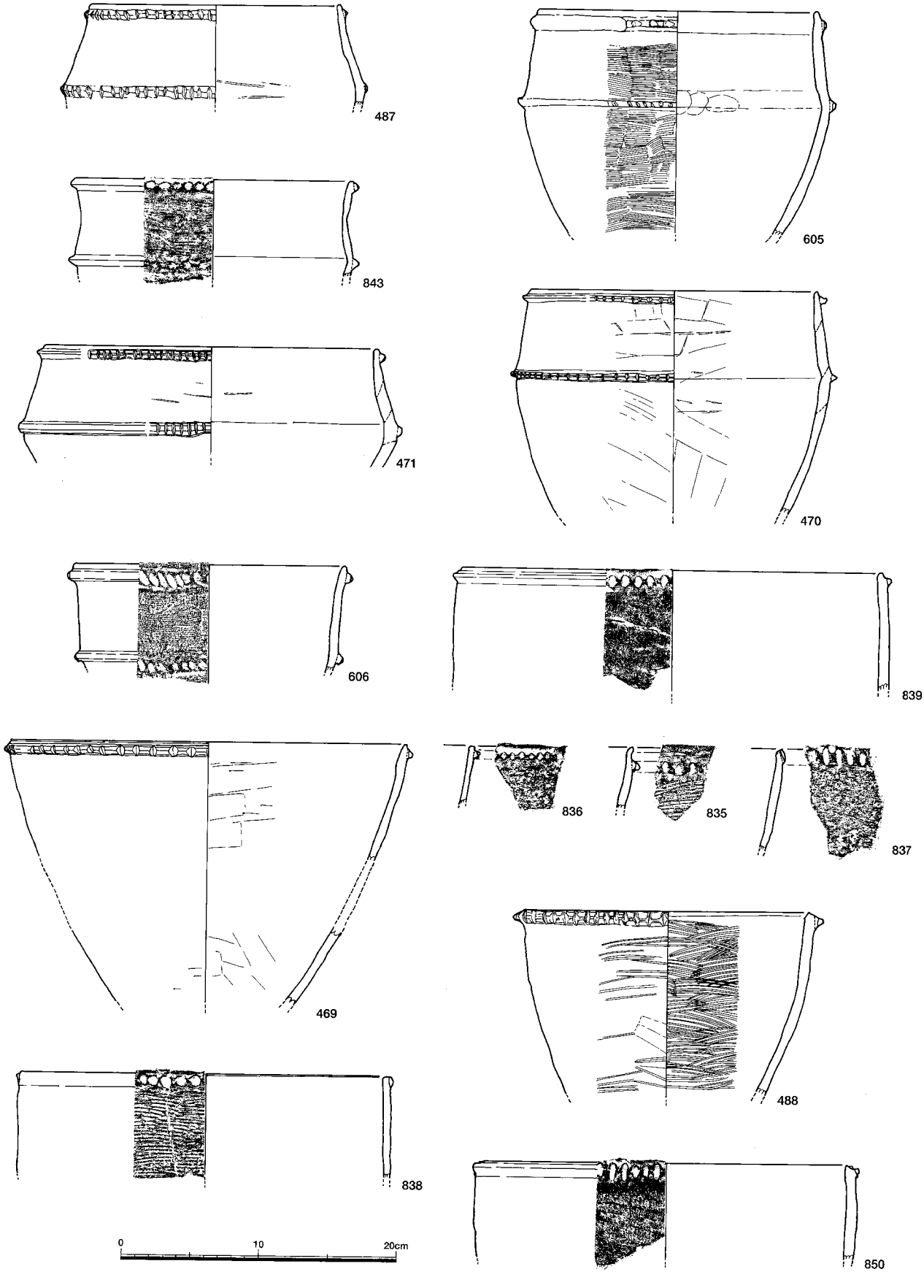


Fig.56　溝SD114出土遺物実測図2（1/4）

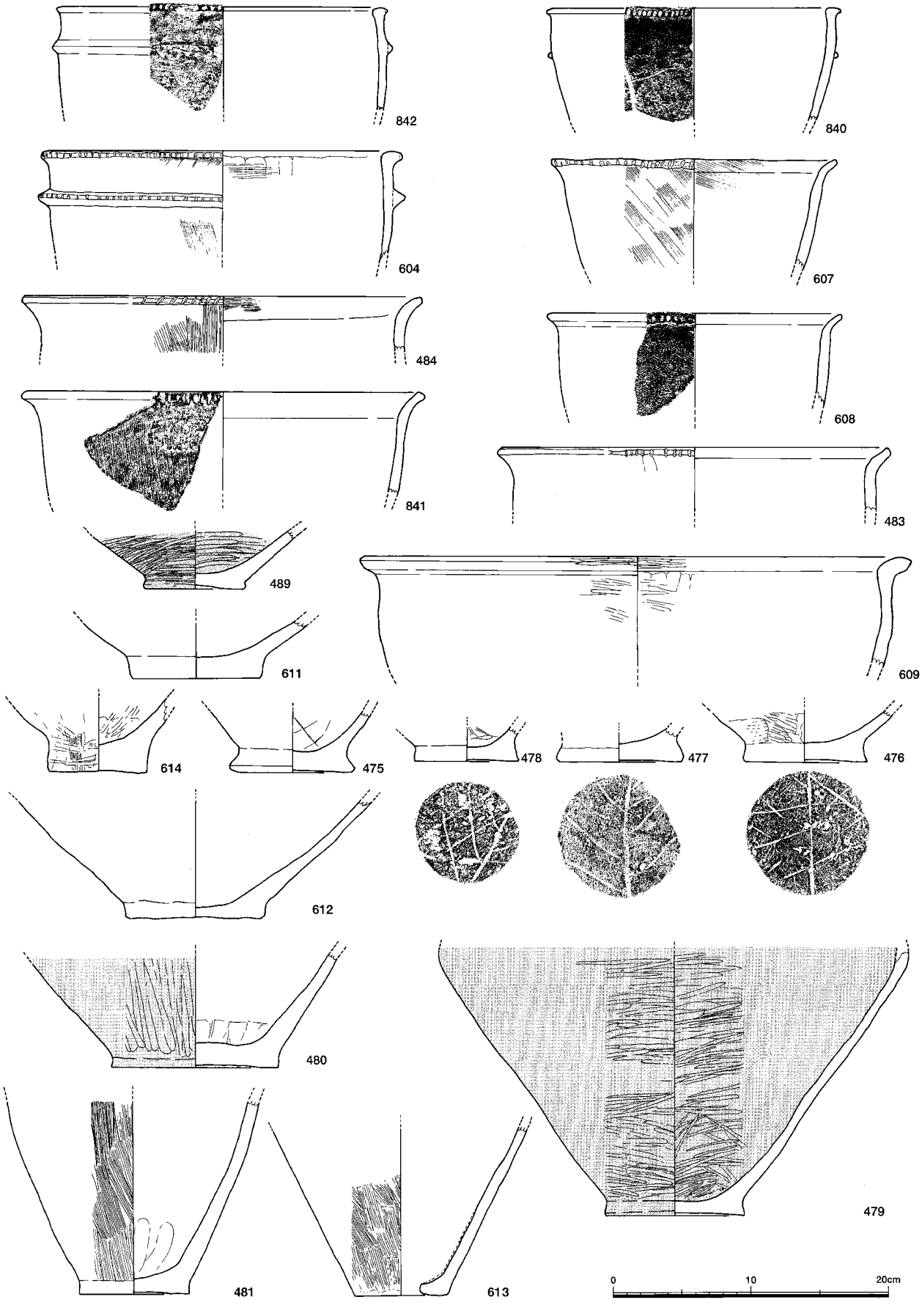


Fig.57　溝SD114出土遺物実測図3（1/4）

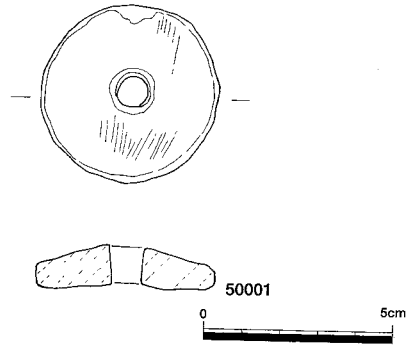


Fig.58 溝SD114出土遺物実測図4（1/2）

条痕で整形後にナデ調整を施している。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**487**は口径17.8cm、胴部最大径22.2cm、器壁厚0.5～0.7cmを測る。器面はハケ目状もしくはカイガラ条痕で整形後、整形痕が残らない程度にナデ調整を施している。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。**605**は口径20.2cm、胴部最大径23.1cm、器壁厚0.6cm～0.7cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。**606**は口径19.5cm、胴部最大径20.0cm、器壁厚0.5cm～0.7cmを測る。器面の外面には整形痕である目の細かいハケ目状もしくはカイガラ条痕が残り、内面はナデ調整を施している。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。**843**は口径19.6cm、胴部最大径21.0cm、器壁厚0.5cm～0.6cmを測る。器面内外面には目の細かいハケ目状もしくはカイガラ条痕が残る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。**469・488・835～839・850**は口縁から底部に向かってすぼまる甕形土器で、いずれも底部を欠く。粘土紐の貼付けによるキザミ目凸帯が口縁端部直下に施されている。**469**は口径28.4cm、器壁厚0.5cm～0.7cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**488**は口径20.8cm、器壁厚0.7cm～0.8cmを測る。器面内外面には粗いハケ目状もしくはカイガラ条痕が残る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。器面外面には煤が厚く付着している。**838**は口径26.5cm、器壁厚0.6cm～0.7cmを測る。器面外面には目の粗いハケ目状もしくはカイガラ条痕が残り、内面はナデ調整により僅かに目の粗いハケ目状もしくはカイガラ条痕が残る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。外面に厚い煤が付着している。**839**は口径30.2cm、器壁厚0.6cm～0.7cmを測る。器面は内外面ともにナデで仕上げている。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**850**は口径26.5cm、器壁厚0.6cm～0.7cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。外面に厚い煤が付着している。**604・840・842**は甕形土器で、下半部を欠くが、胴部が底部に向かってすぼまる器形である。口縁上端部を平面に仕上げ、端部は外方向へのばしてキザミ目を施し、口縁下にも一条のキザミ目凸帯を廻らしている。ハケ目整形の後に丁寧なナデ調整を施している。**604**は口径26.1cm、器壁厚0.6cm～0.7cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。外面に厚い煤が付着している。**840**は口径21.5cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。外面に厚い煤が付着している。**842**は口径24.2cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。**483・484・607・608・841**は底部を欠く甕形土器で、口縁を外湾させ、口縁端部にキザミ目を施している。器面整形はハケ目工具により、内面はナデ調整している。いずれも外面には厚く煤が付着している。**483**は口径28.4cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。**484**は口径28.7cm、

器壁厚0.7cm～0.8cmを測る。この個体だけ口縁端部に施されたキザミ目が斜めである。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。**607**は口径21.1cm、器壁厚0.6cm～0.7cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。**608**は口径21.8cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。**841**は口径23.8cm、器壁厚0.6cm～0.7cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。**609**は鉢形土器で胴部下半を欠く。口縁は外方に屈曲し、上部は平坦的である。器面は内外面ともナデて仕上げている。口径40.0cm、器壁厚0.7cm～0.8cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。**479**は赤色研磨の壷形土器で口縁部を欠く。内外面とも丁寧なヘラ磨きが施されている。底径10.3cm、胴部最大径33.9cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**480**も赤色研磨の壷形土器で、胴部の大半と口縁部を欠く。器満外面は粗いヘラ磨きが施されている。底径12.5cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**476**・**477**・**478**は甕形土器もしくは鉢形土器の底部と考えられ土器片で、いずれも底部に葉脈が印刻されている。**476**は底径8.8cmを測り、胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、暗茶灰色を呈する。**477**は底径8.8cmを測り、胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、淡橙色を呈する。**478**は底径7.4cmを測り、胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。**489**は黒色研磨の鉢形土器の底部と考えられる。内外面とも丁寧なヘラ磨きが施されている。底径7.2cmを測り、胎土は1mmほどの砂粒を含み、暗橙灰色を呈する。**481**・**613**は甕形土器で、口縁部を欠く。底部から立ち上がる胴部の器形から、口縁部が外反し、端部にキザミ目を持つ甕形土器類の底部と考えられる。外面の器面調整は細かいハケ目。内面底には炭化物が付着している。**481**は底径8.1cm、器壁厚0.7cmを測り、胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。**613**は底径6.7cm、器壁厚0.6cmを測り、胎土は1mmほどの砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。

50001は土製の紡錘車である。外径4.7cm、厚さ0.7cm～0.9cmを測る円盤形を呈し、中心に径0.6cmの孔が貫通する。

SD116（Fig. 59～65　PL. 80～82, 106）

弥生土器甕・器台・鉢・高坏・小型壷・杓形土製品・手捏鉢・土製紡錘車・投弾土製品が出土している。**582**・**572**・**573**は壷形土器形の研磨土器で底部を欠く。**582**の頸部は内傾し、肥厚させて段を呈する口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部内面から外面にかけて丁寧なヘラ磨きを施している。外面の口縁部との境には赤色顔料による彩文。口径9.1cmを測る。胎土は0.5mm以上の砂粒は含まれておらず、淡灰褐色を呈する。**572**は黒色研磨の壷形土器で、頸部は内傾し、口縁部は外反する。頸部には沈線状の段を持つ。口縁部内面から外面にかけて丁寧なヘラ磨きを施している。口径15.5cmを測る。胎土は僅かに1mm～2mmの砂粒を含み、暗灰色を呈する。**573**は黒色研磨の壷形土器で、頸部が内傾し、肥厚させて段を呈する口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部内面から外面にかけて丁寧なヘラ磨きを施している。口径8.9cmを測る。胎土は0.5mm以上の砂粒は含まれておらず、灰色を呈する。**515**・**523**の甕形土器は底部を欠くが、口縁部から底部に向かってすぼまる器形と考えられる。口縁を外湾させ、口縁端部にキザミ目を施している。器面整形はハケ目工具により、内面はナデ調整している。いずれも外面には厚く煤が付着している。**515**は口径22.6cm、器壁厚0.4cm～0.5cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。**523**は口径23.0cm、器壁厚0.6cm～0.7cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**511**の甕形土器は底部を欠くが、口縁部から底部に向かってすぼまる器形と考えられる。口縁を外湾させ、口縁端部にキザミ目を施している。さらに口縁部下にはキザミ目が施されている断面形が三角形の突帯文を廻らしている。器面整形はハケ

目工具により、内面はナデ調整している。外面には煤が付着している。口径26.8cm、器壁厚0.7cm～0.8cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**514**は甕形土器で、下半部を欠くが、胴部が底部に向かってすぼまる器形である。口縁上端部を平面に仕上げ、端部は外方向へのばしてキザミ目を施し、口縁下にも断面形が三角形の凸帯を廻らしている。ハケ目整形の後、内面はナデ調整を施している。口径22.8cm、器壁厚0.5cm～0.8cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。外面には厚い煤が付着している。**571**は甕形土器の底部で、胴部上半部以上を欠く。台付とでも称すべく、底部から胴部にむかっては底部近くでくびれる器形である。底径7.6cm、器壁厚0.6cm～0.7cmを測る。目の細かいハケ目による器面調整が施されている。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**569**は甕形土器の底部で、胴部上半部以上を欠く。胴部は底部近くは直立し、その上部は外反しながら立ち上がる。底径6.2cm、器壁厚0.9cm～1.0cmを測る。目の細かいハケ目による器面調整が施されている。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡褐灰色を呈する。**558**は甕形土器の底部で、胴部上半部以上を欠く。胴部は、底部から直線的に外反しながら立ち上がる。底径8.2cm、器壁厚0.7cm～0.8cmを測る。器面は内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗茶褐色～淡灰褐色を呈する。**577**は手捏の小型浅鉢形土器で、底部は丸味を持つ。器面には指頭圧痕が残る。口径9.8cm、器高3.4cmを測る。胎土は僅かに1㎜程の砂粒を含み、灰橙色を呈する。**505**も手捏の小型鉢形土器で、底部を欠く。器面には指頭圧痕が残る。口径は8.4cmを測る。胎土は僅かに1㎜程の砂粒を含み、灰橙色を呈する。**579**は手捏ねの小型壷形土器で、胴部は球体を呈し、口縁は外反する。口径5.6cm、胴部最大径6.1cm、器高6.6cmを測る。胎土は僅かに1㎜～2㎜程の砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。

580は杓子形土製品で柄と身の一部である。柄は身と水平に接合されており、断面形は7㎜～9㎜の径を測る楕円形である。身の形状は、残存する部分から浅いものと推定される。胎土は僅かに1㎜程の砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**575**は小型の鉢形土器で、底部はあるものの狭小でわずかに丸味を呈する。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。ハケ目整形の後にナデ調整を施している。口径16.4cm、器高6.5cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶褐色～淡灰褐色を呈する。**556**は鉢形土器で、底部を欠く。口縁は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は平坦。外面はハケ目整形の後にナデ調整を施し、内面は外面と同じ工程の後に丁寧なヘラ磨きが施されている。口径23.2cm、器壁厚0.4cm～0.5cmを測る。胎土は僅かに1㎜ほどの砂粒を含み、淡茶褐色～灰褐色を呈する。**516・551・590・591**は口縁部が外反する鉢形土器で、いずれも底部を欠く。**516**は口縁が僅かに外反し、体部との屈曲は不明瞭である口縁端部には面を持つ。器面内外面ともナデ調整の後に粗いヘラ磨きが施されている。胎土は0.5㎜ほどの砂粒を含み、淡灰褐色～黒色を呈する。**551**は口縁が「く」の字状に外反し、鍔状の短い口縁部を有する鉢形土器である。体部は深く屈曲部が明瞭である。口径17.3cm、器壁厚0.7cm～0.8cmを測る。内外面ともハケ目整形の後にナデ調整を施している。胎土は0.5㎜ほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。**590**は「く」の字状に強く外反し、発達した鍔状の口縁部を有する鉢形土器である。体部は深く屈曲部が明瞭である。口径30.1cm、器壁厚0.8cm～0.9cmを測る。内外面ともハケ目整形の後にナデ調整を施している。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**591**は「く」の字状に外反し、やや発達した鍔状の口縁部を有する鉢形土器である。体部は深く屈曲部が明瞭である。口径17.8cm、器壁厚0.5cm～0.6cmを測る。内外面ともハケ目整形の後にナデ調整を施し、体部外面はヘラ削りしている。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**578**は椀状の杯部と低く広がる脚を持つ。ハケ目整形の後に丁寧なヘラ磨きが施されている。口径11.4cm、底径13.8cm、器高8.3cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含

み、淡橙灰色を呈する。**585**は高坏の脚部である。脚は長く、透孔が脚の中位と低位に３ヶ所ずつ、合計６孔ある。胎土は１㎜～２㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**587**は高坏で、脚部を欠く。口縁部は杯部との屈曲が明瞭でやや外湾気味に立ち上がる。器面は内外面とも丁寧なヘラ磨きが施されている。口径は36.6㎝を測る。胎土は１㎜ほどの砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。**588**は高坏で、脚部を欠く。口縁部は杯部との屈曲が明瞭でやや外湾気味に長く立ち上がる。器面は内外面とも丁寧なヘラ磨きが施されている。口径は34.２㎝を測る。胎土は僅かに0.5㎜ほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。**493**・**557**は杯もしくは鉢形土器が上にのるものと思われる土器の脚部である。**493**は低くやや外湾気味に広がる。中位に３ヶ所の透孔がある。ハケ目整形の後、部分的にヘラ磨きが施されている。脚部口径は9.8㎝を測る。胎土は１㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**557**は外面が丁寧なヘラ磨きが施されている。**537**は甕形土器で胴部以下を欠く。口縁は「L」字状で、端部を外方にのばして鍔状の口縁である。上端は平坦面である。ハケ目整形の後にナデを施している。口径30.9㎝、器壁厚0.4㎝～0.5㎝を測る。胎土は１㎜～２㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**540**は甕形土器で胴部以下を欠く。口縁は「L」字状で、端部を外方にのばして鍔状の口縁である。上端は平坦面である。ハケ目整形の後にナデを施している。口径27.8㎝、器壁厚0.4㎝～0.5㎝を測る。胎土は１㎜～２㎜ほどの砂粒を多く含み、灰橙色を呈する。**542**は大型の甕形土器で胴部以下を欠く。口縁部上端は平坦で、内と外の両方向に端部をのばしている。ハケ目整形の後にナデを施している。口径59.8㎝、器壁厚1.2㎝～1.4㎝を測る。胎土は１㎜～２㎜ほどの砂粒を含み、淡灰橙色を呈する。**517**は小型の甕形土器で、胴部下半を欠く。口縁は外反し、端部には面がある。内外面とも細かいハケ目整形の後にナデ調整を施している。口径13.8㎝、器壁厚0.4㎝～0.5㎝を測る。胎土は１㎜ほどの砂粒を含み、淡灰橙色を呈する。器面外面には煤が付着している。**544**は小型の甕形土器で、胴部下半を欠く。口縁は外反し、頸部内外面には明瞭な稜線がある。内外面とも細かいハケ目整形を施している。口径17.0㎝、器壁厚0.4㎝を測る。胎土は１㎜ほどの砂粒を含み、淡灰橙色を呈する。器面外面には煤が付着している。**549**は小型の甕形土器で、胴部下半を欠く。口縁は僅かに外反し、短く、端部には面がある。内外面ともハケ目整形痕を残す。口径12.2㎝、器壁厚0.4㎝を測り、胎土は１㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。**522**は小型の甕形土器で、胴部下半を欠く。口縁は外反するものの弱く、短い。このため、屈曲部の内面は丸味を呈し、頸部における明瞭な稜線は認められない。内外面とも細かいハケ目整形痕を残す。口径17.0㎝、器壁厚0.5㎝～0.7㎝を測り、胎土は１㎜ほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。**549**は小型の甕形土器で、胴部下半を欠く。口縁は僅かに外反し、短く、端部には面がある。内外面ともハケ目整形痕を残す。口径12.2㎝、器壁厚0.4㎝を測り、胎土は１㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。**546**は甕形土器で、口縁は短く外反する。内外面とも細かいハケ目調整を行い、さらに口縁部のみ横ナデ調整を行っている。口径15.8㎝、器壁厚0.4㎝～0.5㎝を測り、胎土は１㎜ほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。器面外面には口縁端部まで煤が付着している。**499**は甕形土器で胴部下半を欠く。口縁部は直線的に外反する。内外面ともハケ目整形の後、横ナデ、ナデ調整を施している。口径26.7㎝、器壁厚0.5㎝を測る。胎土は１㎜ほどの砂粒を含み、淡灰白色を呈する。**500**は甕形土器で胴部下半を欠く。胴部の張りは弱い。口縁部は外反するものの、屈曲部における境の度合いは弱い。内外面ともハケ目整形の後、口縁部のみ横ナデ調整を施している。口径21.4㎝、器壁厚0.6㎝～0７㎝を測る。胎土は１㎜ほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。器面外面には口縁端部まで煤が付着している。**506**は頸部が締まる甕形土器で胴部下半を欠く。胴部が張り、口縁部は直線的に外反する。内外面ともハケ目整形の後、口縁部のみ横ナデ調整を施している。口径19.2㎝、器壁厚0.5㎝～0.6㎝を測る。胎土は１㎜ほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡茶

灰色を呈する。**507**は頸部が締まる甕形土器で胴部下半を欠く。胴部が張り、口縁部は直線的に外反する。内外面ともハケ目調整痕を全面に残している。口径16.2cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を含み、淡灰橙色～淡茶灰色を呈する。**509**は甕形土器で胴部下半を欠く。口縁は短く外反するものの弱く、屈曲部の内面は丸味を呈しており頸部の明瞭な境は認められない。内外面とも細かいハケ目調整を行い、さらに口縁部のみ横ナデ調整を行っている。口径21.2cm、器壁厚0.7cm～0.8cmを測り、胎土は1mmほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。器面外面には口縁端部まで煤が厚く付着している。**513**は甕形土器で胴部下半を欠く。口縁は外反するものの弱く、短い。このため、屈曲部の内面は丸味を呈し、頸部における口縁部との境を示す明瞭な稜線は認められない。内外面とも細かいハケ目調整を行い、さらに口縁部のみ横ナデ調整を行っている。口径22.1cm、器壁厚0.7cmを測り、胎土は1mmほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。器面外面には口縁端部まで煤が厚く付着している。**597**は甕形土器で胴部下半を欠く。胴部は僅かに張る。口縁部は直線的に外反し、屈曲部における境は明瞭である。内外面とも細かいハケ目整形の後、ナデ調整を施している。口径18.5cm、胴部最大径20.5cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。**598**・**599**は甕形土器で胴部下半部を欠く。**598**は胴部が張り、口縁部がそり気味に外反する。外面は叩き目整形の後、器面に叩き目痕が明瞭に残存する程度にハケ目調整を行っている。口径17.2cm、胴部最大径19.8cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、灰橙色～黒色を呈する。**599**も胴部が張り、口縁部がそり気味に外反する。外面は叩き目整形の後、器面に叩き目痕が明瞭に残存する程度にハケ目調整を行っている。内面は丁寧なハケ目調整を施している。口径15.2cm、胴部最大径20.2cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を含み、灰橙色を呈する。外面には煤が付着している。**538**は胴部の張らない甕形土器で、胴部下半を欠く。頸部は僅かに締まり、口縁の外反も緩やかである。口縁の長さは、甕形土器の大きさから比較すると短い。頸部外面には、ハケ工具によるキザミ目が施された凸帯が巡る。キザミ目の間隔は雑然である。頸部内面には口縁部と胴部との境を示す稜線が明瞭である。器面整形は目の粗いハケ工具により行われ、さらに口縁の内外面にはナデ調整が施されている。口径35.1cm、器壁厚0.7cm～0.8cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡灰橙色を呈する。**538**は胴部の張りが弱い甕形土器で、胴部下半を欠く。頸部は僅かに締まり、口縁の外反も緩やかである。口縁は長くのびる。頸部外面には、ハケ工具により斜行するキザミ目が施された凸帯が巡る。キザミ目の間隔は雑然である。頸部内面には口縁部と胴部との境を示す稜線が明瞭である。器面整形は目の粗いハケ工具により行われている。口縁端部は横ナデ調整で面を呈する。口径35.9cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、淡灰橙色を呈する。**497**は甕形土器で、胴部下半を欠く。胴部が球状に強く張り、頸部も締まる。口縁は外反し、短い。口縁端部には横ナデにより面を呈している。頸部外面に巡る断面形が台形の低い凸帯は横ナデにより整形されている。頸部内面の口縁部と胴部との境を示す稜線は弱い。器面整形は目の粗いハケ工具により行われ、さらに口縁の外面にはナデ調整が施されている。口径30.3cm、器壁厚0.9cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。胴部外面には煤が付着している。**518**は大型の甕形土器で、胴部下を欠く。残存状況から胴部の張りは弱いと思われる。頸部の締まりも弱い。口縁は外反し、長い。口縁端部は横ナデにより面を呈し、ハケ工具の小口面を用いた斜交文が施されている。頸部外面には断面形が三角形の高い凸帯が廻り、凸帯にはキザミ目が施されている。頸部内面における口縁部と胴部との境を示す稜線は強い。器面整形が目の細かいハケ工具により行われた後、ナデ・横ナデが器面全体に丁寧に行われている。口径38.0cm、器壁厚0.8cm～0.9cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を含み、淡灰色～淡橙灰色を呈する。**535**は甕形土器で、胴部下半を欠く。胴部が球状に強く張り、頸部も締まる。口縁は外反

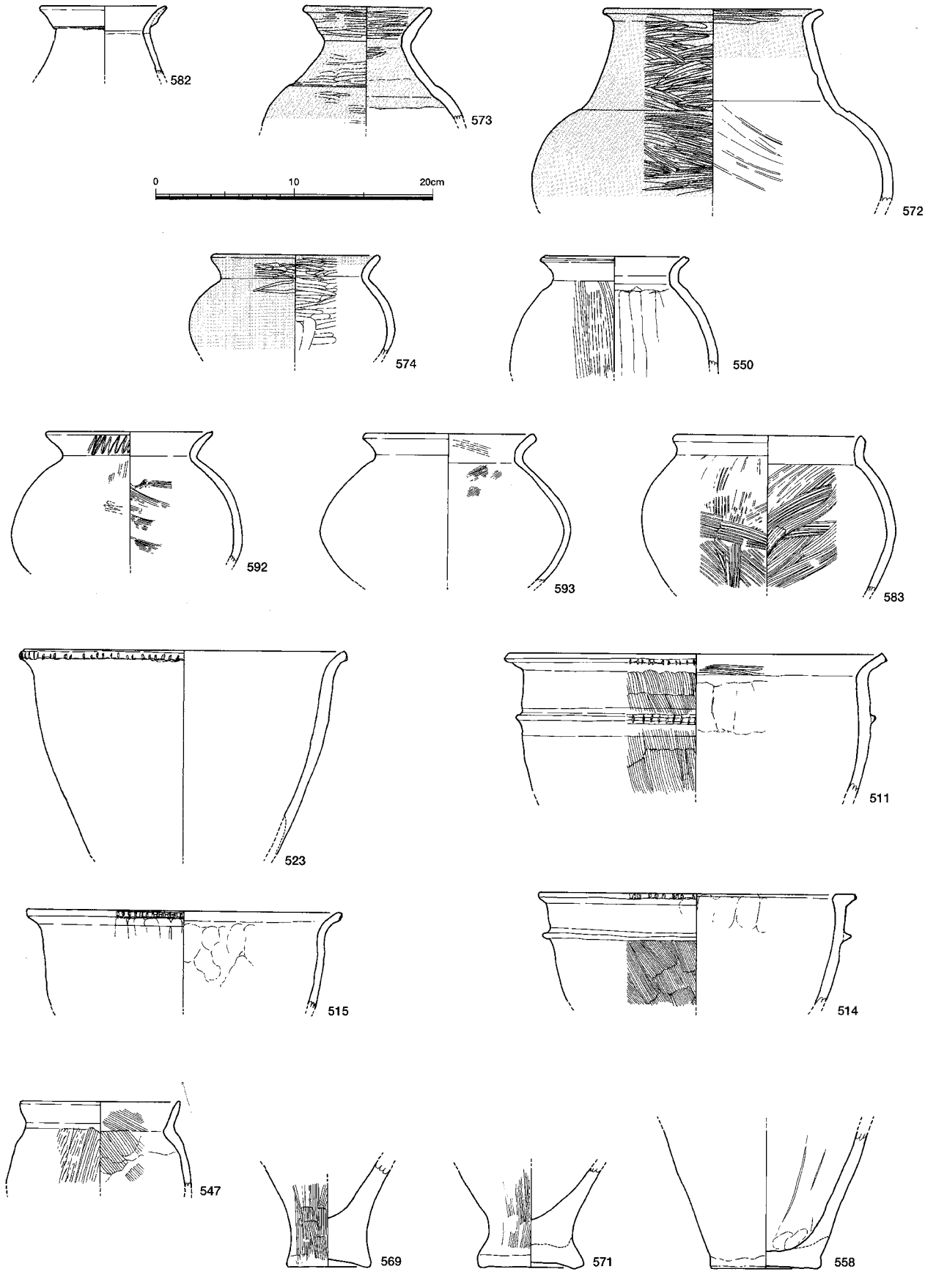


Fig.59　溝SD116出土遺物実測図1（1/4）

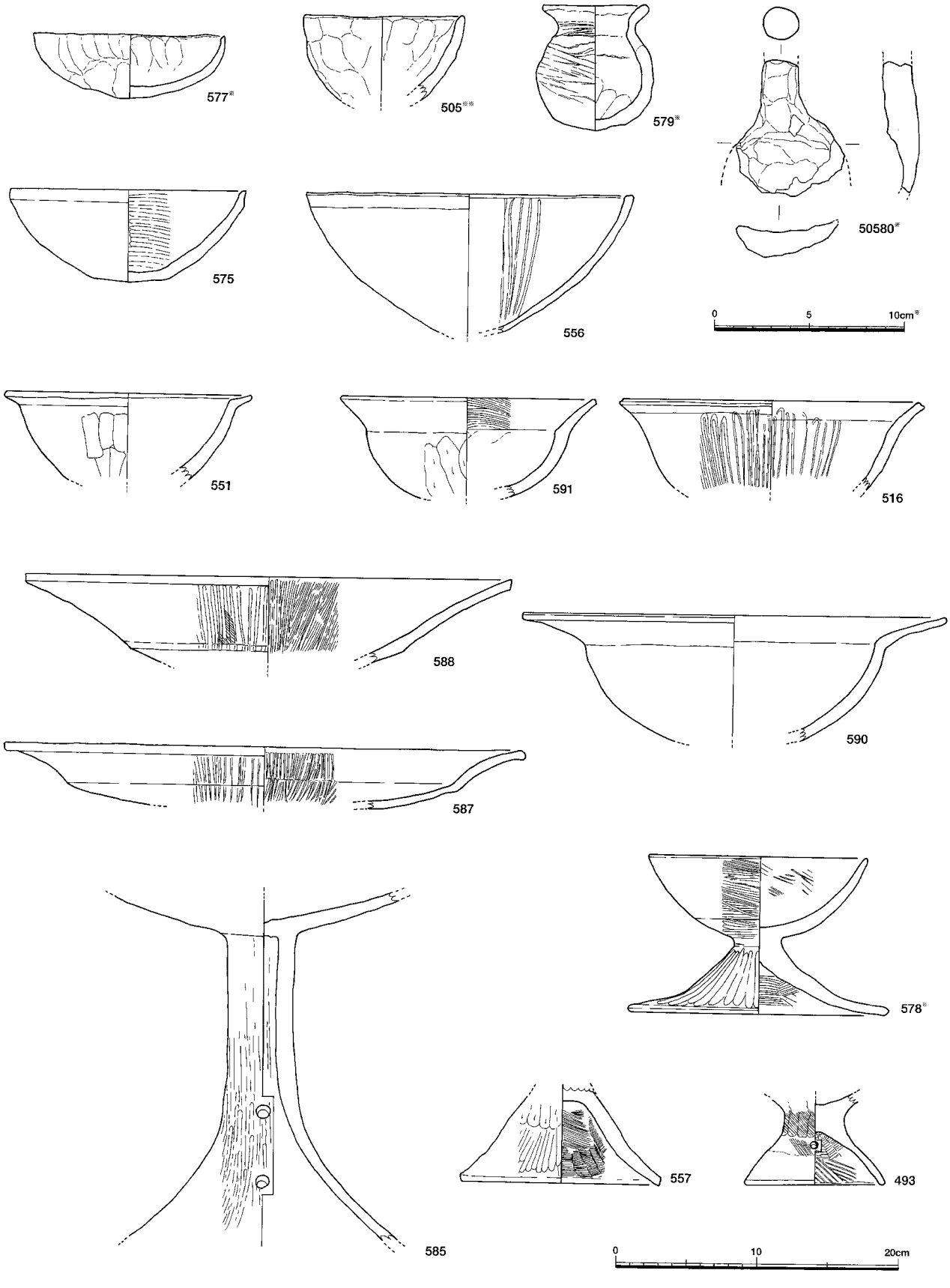


Fig.60 溝SD116出土遺物実測図2（1/3※・1/4）

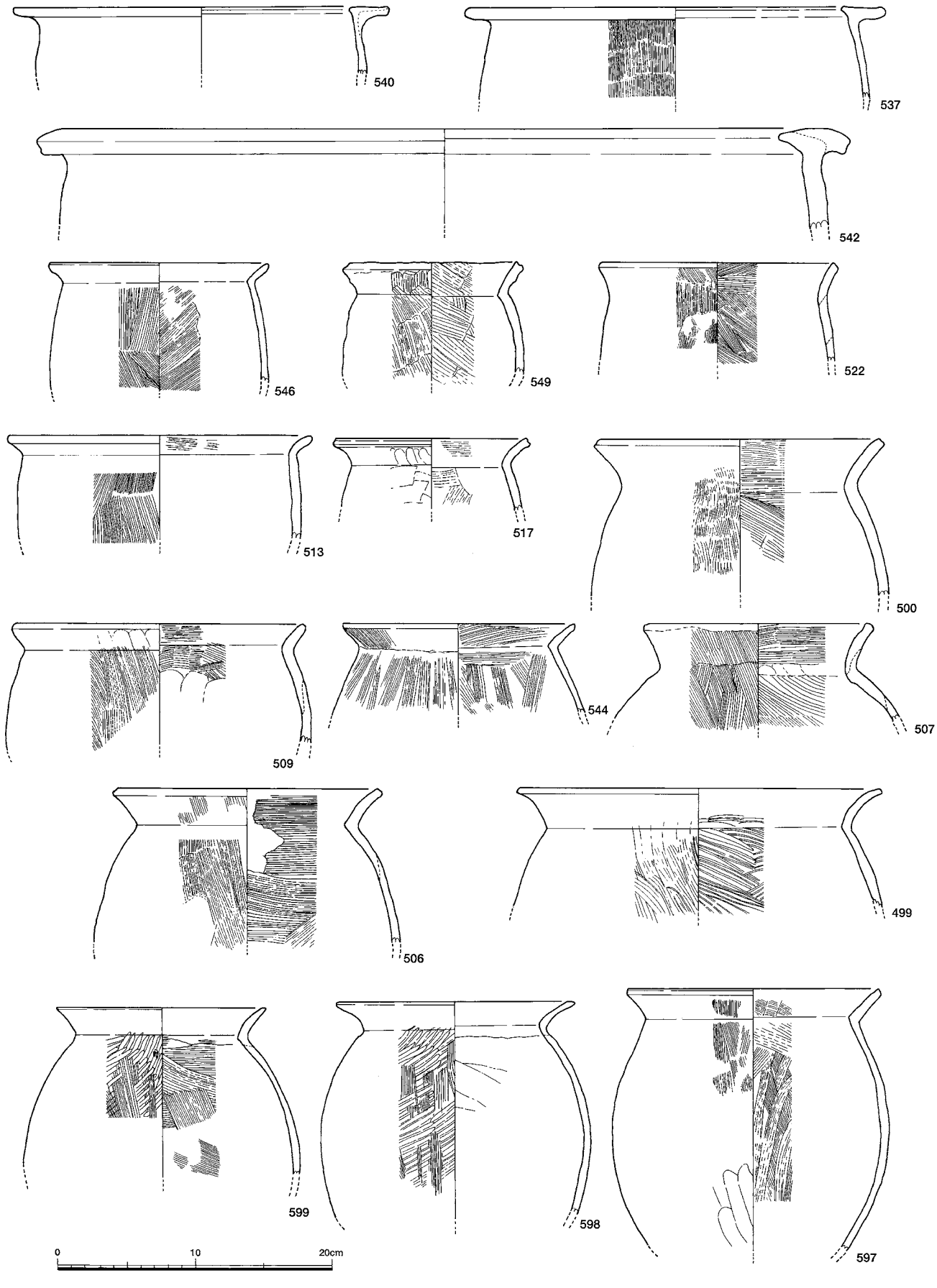


Fig.61　溝SD116出土遺物実測図3（1/4）

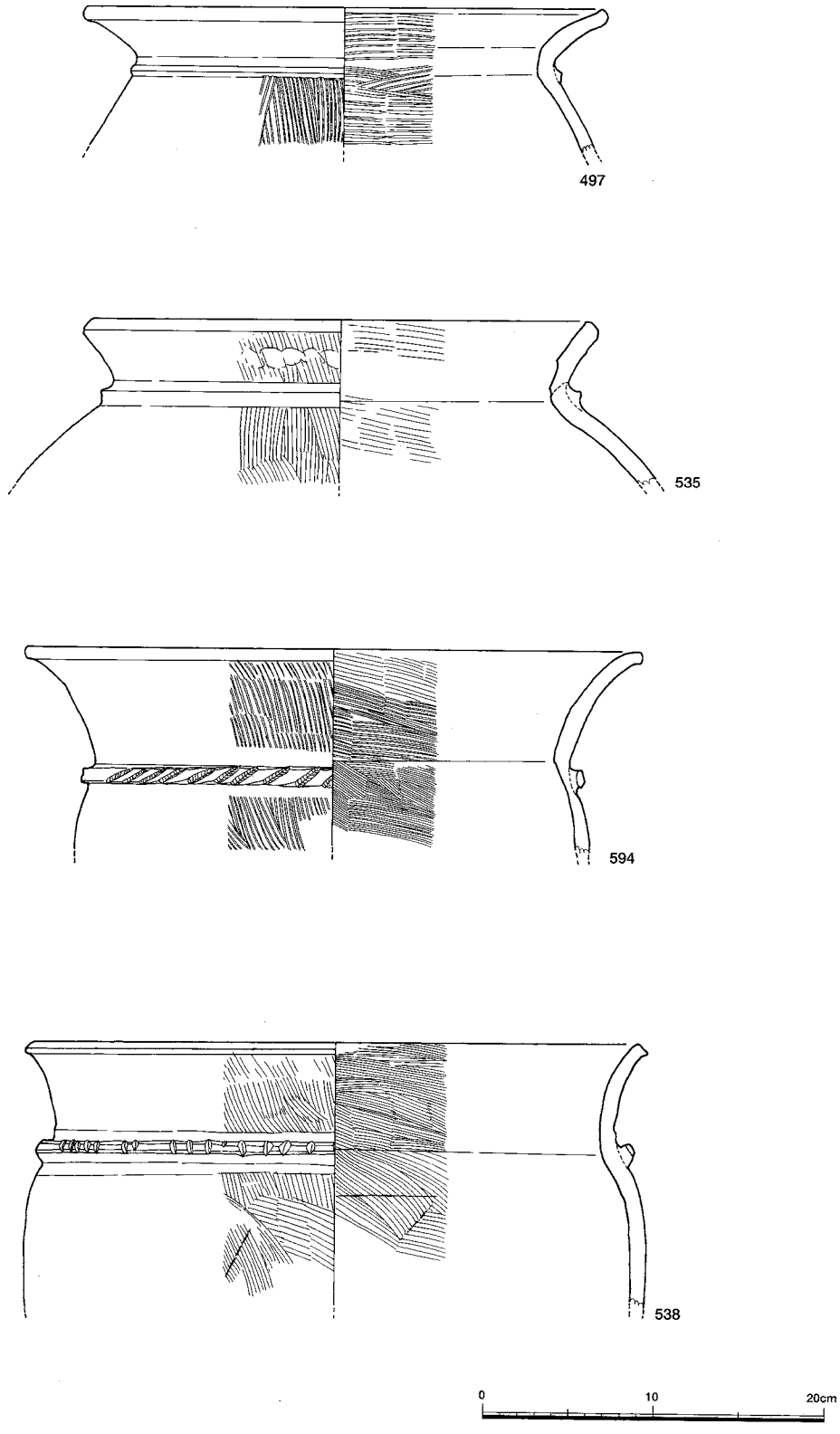


Fig.62　溝SD116出土遺物実測図4（1/4）

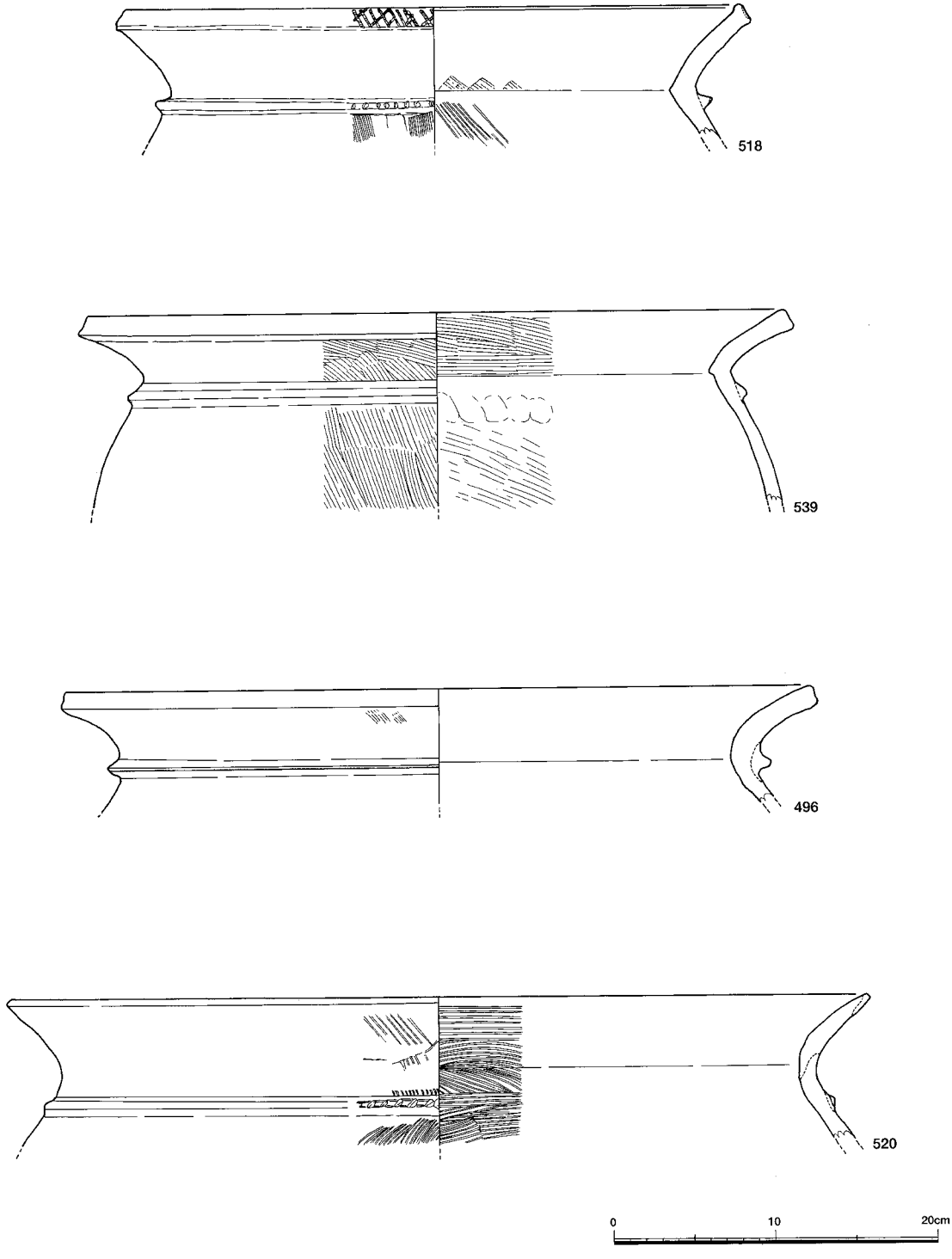


Fig.63　溝SD116出土遺物実測図5（1/4）

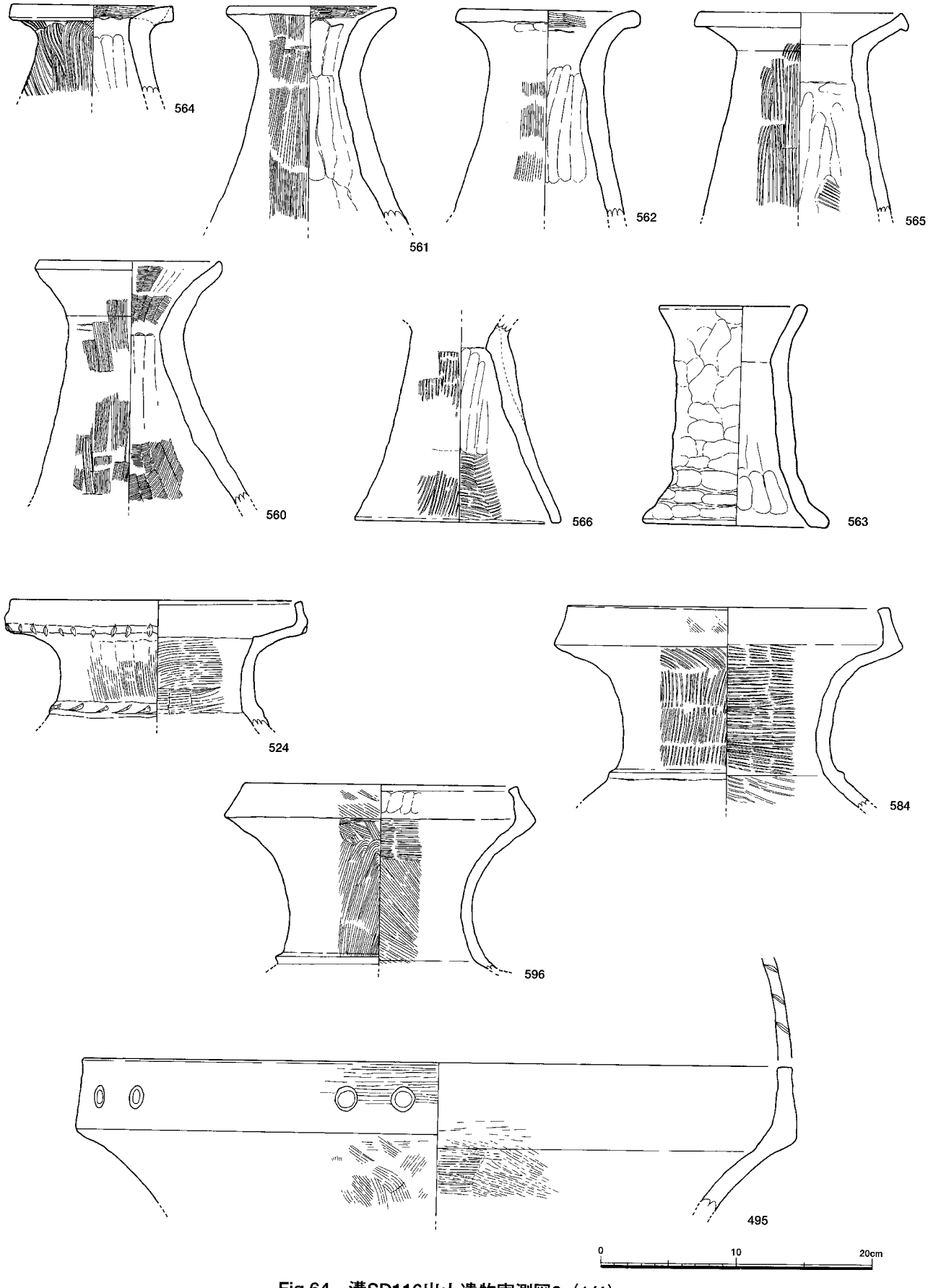


Fig.64　溝SD116出土遺物実測図6（1/4）

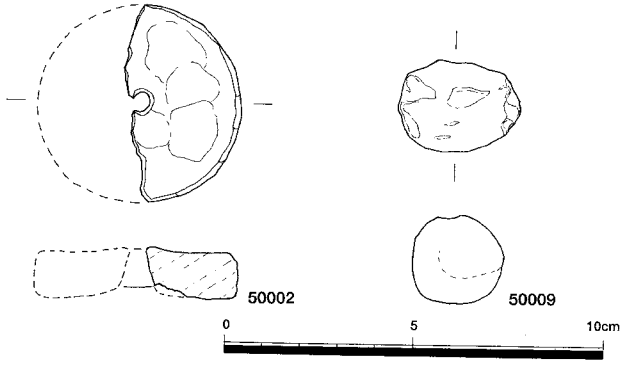


Fig.65　溝SD116出土遺物実測図7（1/2）

し、短い。口縁端部は横ナデにより面を呈している。頸部外面に巡る断面形が三角形の低い凸帯は横ナデにより整形されている。頸部内面の屈曲部は丸味を持ち、口縁部と胴部との境を示す明瞭な稜線は認められない。器面整形は目の粗いハケ工具により行われた後、ナデ・横ナデが器面全体に丁寧に行われている。口径29.1cm、器壁厚0.9cmを測る。胎土は1㎜～3㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。**496**は大型の甕形土器である。胴部下半を欠くが、残存状況から胴部が球状に強く張り、頸部も締まる器形と推定される。口縁は肥厚で外反し、短い。口縁端部は横ナデにより面を呈している。頸部外面に巡る断面形が三角形の高い凸帯は横ナデにより整形されている。頸部内面の屈曲部は丸味を持ち、口縁部と胴部との境を示す明瞭な稜線は認められない。器面整形は目の粗いハケ工具により行われた後、ナデ・横ナデが器面全体に丁寧に行われている。口径46.1cm、器壁厚0.9cm～1.0cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**539**は大型の甕形土器で、胴部下半を欠く。胴部が球状に張り、頸部も締まる。口縁は肥厚で、強く外反する。口縁端部は横ナデにより面を呈している。頸部外面に巡る凸帯は断面形が三角形で低く、横ナデにより整形されている。頸部内面の屈曲部は、口縁部と胴部との境を示す稜線は強い。器面整形は目の粗いハケ工具により行われた後、ナデ・横ナデが器面全体に行われている。口径42.8cm、器壁厚0.9cmを測る。胎土は1㎜～3㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色～淡灰白色を呈する。**520**は大型の甕形土器である。胴部下半を欠くが、残存状況から胴部が球状に強く張り、頸部も締まる器形と推定される。口縁は外反し、短い。口縁端部は横ナデにより面を呈している。頸部外面には断面形が三角形の低い凸帯が巡り、凸帯には斜行するキザミ目が施されている。横ナデにより整形されている。頸部内面の屈曲部は丸味を持ち、口縁部と胴部との境を示す明瞭な稜線は認められない。器面整形は目の細かいハケ工具により行われた後、ナデ・横ナデが器面全体に行われている。口径52.8cm、器壁厚0.9cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡橙灰色を呈する。

524は二重口縁を持つ壺形土器で、胴部下半を欠く。頸部は短く外湾しながら立ち上がり、口縁はやや内傾気味に屈曲して立ち上がる。口縁端部上面は平坦面を呈している。頸部には断面形が三角形の凸帯を巡らし、ハケ工具による斜行のキザミ目が施されている。口縁屈曲部の外面にも頸部凸帯と同様なキザミ目が施されている。器面整形を目の粗いハケ目の後、口縁部を横ナデ調整している。口径21.2cm、器壁厚0.7cm～0.8cmを測る。胎土は1㎜～3㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**584**は二重口縁を持つ壺形土器で、胴部下半を欠く。頸部は短く外湾しながら立ち上がり、口縁はやや内傾気味に屈曲して立ち上がる。このため口縁屈曲部には明瞭な稜線がある。口縁端部上面は平坦面を呈している。頸部には断面形が三角形の小さい凸帯を巡らしている。器面整形を目の粗いハケ目の後、口縁部を横ナデ調整している。口径23.9cm、器壁厚0.6cm～0.8cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**596**は二重口縁を持つ壺形土器で、胴部下半を欠く。頸部は短く外湾しながら立ち上がり、口縁は内傾気味に屈曲して立ち上がる。このため口縁屈曲部には明瞭な稜線がある。口縁端部上面は平坦面を呈している。頸部には断面形が三角形の凸帯を巡らしている。器面整形を目の粗いハケ目の後、口縁部を横ナデ調整している。口径20.2cm、器壁

厚0.6cm～0.7cmを測る。胎土は1cm～2cmほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色～淡茶灰色を呈する。**495**は二重口縁を持つ特大の壷形土器で、頸部下半を欠く。頸部は外湾しながら立ち上がり、口縁は直立気味に屈曲して立ち上がる。このため口縁屈曲部には明瞭な稜線がある。口縁端部上面は平坦面を呈し、端面にはハケ工具による斜行のキザミ目を施している。口縁部外面には、径1.7cmを測る2個を単位とした竹管文が施されている。器面整形は目の粗いハケ目の後、口縁部を横ナデ調整している。口径52.1cm、器壁厚1.3cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**564**は器台で、脚部下半を欠く。脚部は残存状況から直線的に裾が広がる。口縁は直角気味に折れ曲がり、平坦に近い。このため屈曲部の内面には稜線が認められる。口縁端部は「コ」の字状を呈している。外面は目の粗いハケ目整形である。口径は11.7cm、器壁厚1.0cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**561**は器台で、脚部下半を欠く。脚部は直線的に裾が広がる。口縁は緩やかに外湾する。口縁端部は「コ」の字状を呈している。口縁部は目の細かいハケ目整形の後、内面は横ナデしている。脚部の整形は外面が目の細かいハケ目、内面はナデによる。口径は12.1cm、器壁厚1.0cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**562**は器台で、脚部下半を欠く。脚部は直線的に裾が広がる。口縁は緩やかに外湾する。口縁端部は「コ」の字状を呈している。口縁部は指押さえによる整形の後、内面だけを目の粗いハケ目調整を施している。脚部の整形は外面が目の細かいハケ目、内面はナデによる。口径は13.1cm、器壁厚1.1cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの暗茶褐色砂粒を多く含む特徴を持ち、淡橙灰色を呈する。**565**は器台で、脚部下半を欠く。脚部は直線的に裾が広がる。口縁は強く外反し、口縁端部は上下両方に短くのびる。口縁部は目の細かいハケ目整形の後、横ナデ調整を施している。脚部の整形は外面が目の細かいハケ目、内面はナデによる。口径は14.9cm、器壁厚0.7cm～0.8cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**560**は器台で、脚部下半を欠く。脚部は直線的に裾が広がる。口縁は緩やかに外湾する。口縁端部は「コ」の字状を呈している。口縁部はハケ目整形の後、外面だけをナデ調整している。脚部の整形は目の細かいハケ目、外面はさらにナデを施している。口径は14.2cm、器壁厚1.0cm～1.1cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、淡灰白色を呈する。**566**は器台で、口縁部を欠く。脚部は直線的に裾が広がる。脚部口縁端部は平坦面を成す。脚部の整形は内外面とも目の粗いハケ目、さらに外面はナデを施している。脚部口径は15.2cm、器壁厚0.9cm～1.4cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。**563**は鼓状に、中央部が筒状で両端が広がる器形の器台である。口縁部は外反するものの弱く、短い。口縁端部は丸味を持つ。脚部も底部近くで外反し、端部は丸味を持つ。手捏ねによるもので、器面全面に指頭圧痕が残る。口径は11.1cm、器高16.3cm、脚部口径13.8cm、器壁厚0.8cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。

50002は土製の紡錘車で、半部を欠く。復元外径5.1cm、厚さ1.1cm～1.3cmを測る円盤形を呈し、中央が肉厚。中心に径0.6cmの孔が貫通する。器面はナデている。胎土は1mmほどの砂粒を多く含み、暗灰褐色を呈する。**50009**は土製でラグビーボールの形状を呈する。いわゆる、土製投弾で、両端部を欠く。胎土は僅かに0.5cmほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。

井　戸（SE）

SE120（Fig. 65, 66　PL. 83）

弥生土器甕・壷・器台・高坏・小型鉢、土製小玉が出土している。**617**は小型の鉢形土器で、完形品である。丸底で、口縁はやや内湾気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。内面は目の細かいハケ目調整、外面はナデを施している。口径10.2cm、器高4.1cmを測る。胎土は僅かに1.0mmほどの砂

粒を含み、橙灰色を呈する。**618**は高坏で脚部を欠く。坏部の屈曲は明瞭で、口縁はやや外湾気味に立ち上がる。このため屈曲部外面には稜線が認められる。坏部は目の細かいハケ目整形の後、横ナデを施している。口径は19.3cmを測る。胎土は僅かに0.5mmほどの砂粒を含み、淡橙色を呈する。**620**は底部を欠く壷形土器である。頸部は締まり、胴部は球状に強く張る。口縁は外反しながら立ち上がり、端部近くでさらに外湾させている。口縁端部は横ナデにより「コ」の字状の面を成す。胴部外面は目の粗いハケ目による整形が行われ、内面はヘラ削りが行われている。口径19.1cm、胴部最大径26.8cm、器壁厚0.6cm～0.7cmを測る。胴央部以下には煤が付着している。胎土は1mm～3mmほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**615**は甕形土器で、胴部下半を欠く。頸部は締まり、口縁は「く」の字状に折れ曲がる。このため、頸部内面における口縁部と胴部との境を示す稜線は強い。目の細かいハケ目整形の後、口縁部を横ナデ調整している。口径20.8cm、器壁厚0.5cmを測る。胎土は1mm～3mmほどの砂粒を多く含み、灰白色を呈する。**616**は甕形土器の底部であろう。丸底気味であるが僅かに狭小な底部が見られる。外面はハケ目整形の後にナデ調整。内面はヘラ削りを行っている。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡橙色を呈する。**50018**は土製の小型の玉である。径1.6cm～1.7cmを測り、器面に凹凸は認められない。胎土は僅かに0.5mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色～黒色を呈する。

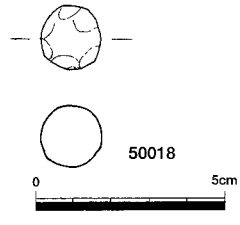


Fig66　井戸SE120出土遺物実測図1（1/2）

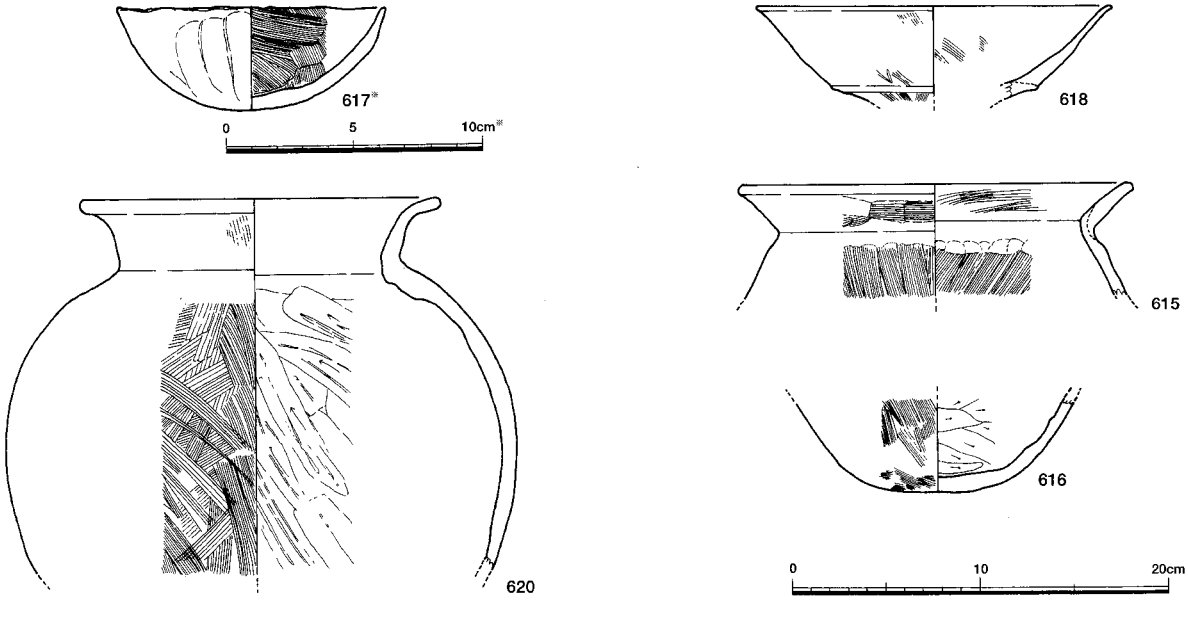


Fig67　井戸SE120出土遺物実測図2（1/3※・1/4）

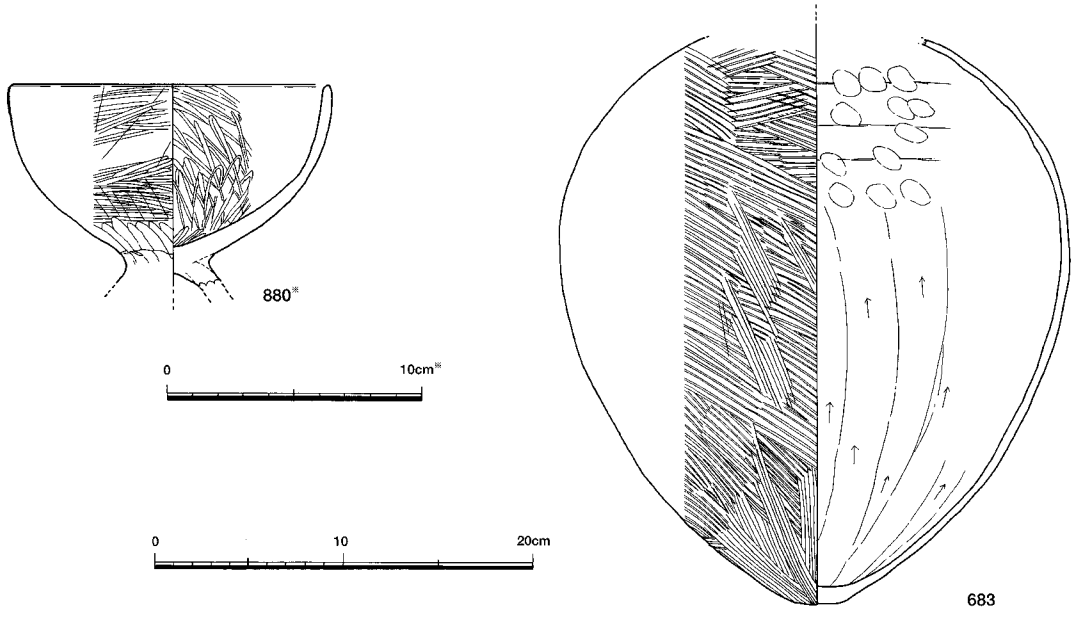


Fig.68　井戸SE136出土遺物実測図（1/3※・1/4）

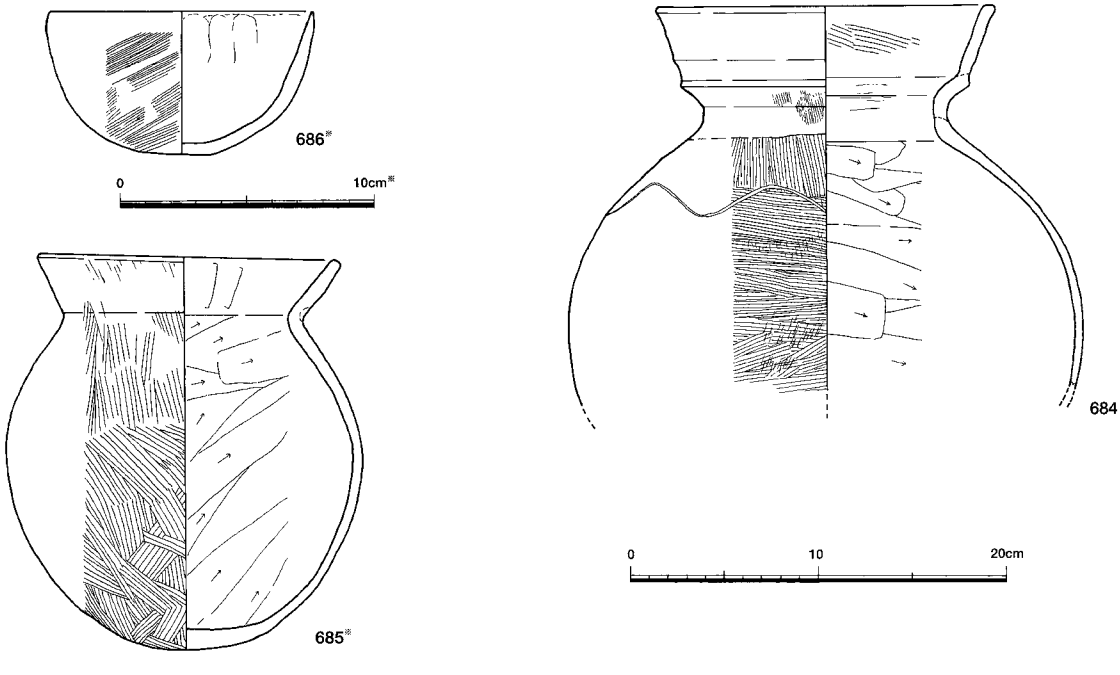


Fig.69　井戸SE137出土遺物実測図（1/3※・1/4）

SE136（Fig. 68）

弥生土器碗・甕・器台・高坏が出土している。**683**は壷形土器で、口縁部を欠くが、残存状況から二重口縁と考えられる。頸部は締まり、胴部は球状に張る。底は極めて狭小で、底部が尖った様相を呈する。ハケ目により器面を整えている。内面下半部はヘラ削りを施している。胴部最大径27.1cm、器壁厚0.3cm～0.5cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。器面外面には煤が付着している。**880**は台もしくは脚が底部に付く鉢形土器である。杯部は底が深く、口縁はやや外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。器面内外面ともヘラ磨きを施している。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、橙灰色を呈する。

SE137（Fig. 69）

弥生土器甕・鉢・器台が出土している。**686**は椀状の小型の鉢形土器である。丸底で、口縁はやや外反しながら立ち上がる。目の細かいハケ目で整形した後、ナデ調整している。口径10.4cm、器高5.6cmを測る。胎土は僅かに1㎜ほどの砂粒を含むものの総じて細砂粒である。色調は淡茶灰色を呈する。**684**は二重口縁を持つ壷形土器で、胴部下半を欠く。頸部は短く外湾しながら立ち上がり、口縁は僅かに外反気味に屈曲して立ち上がる。このため口縁屈曲部には明瞭な稜線がある。口縁端部上面は平坦面を呈している。外面はハケ目整形の後、口縁部だけ横ナデ調整している。胴部内面はヘラ削りしている。口径18.1cm、器壁厚0.3cm～0.6cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色～淡茶灰色を呈する。**685**は小型の甕形土器で、完形品である。丸底で、胴部は球状に張り、頸部は締まっている。口縁は「く」の字状に外反する。胴部外面は目の細かいハケ目調整、内面はヘラ削りしている。口径11.6cm、器高15.5cm、胴部最大径14.0cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。

土　坑（SK）

SK106（Fig. 70）

弥生土器甕・鉢・高坏が出土している。**103**は鉢形土器である。底部は平坦である。口縁端部は外向に折れ曲がり、口縁上部は平面的である。屈曲部の外面は明瞭であるが、内面は丸味を呈して稜線などの明瞭な境は認められない。内面調整は巾の広いヘラによる磨きが丁寧に施されている。口径17.5cm、器高11.5cm、底径6.3cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、暗褐色～暗茶褐色を呈する。

104の甕形土器は底部を欠くが、口縁部から底部に向かってすぼまる器形と考えられる。口縁を外湾させ、口縁端部にキザミ目を施している。器面整形はハケ目工具により、内面はナデ調整している。いずれも外面には厚く煤が付着している。口径26.8cm、器壁厚0.8cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。器面外面には煤が口縁端部まで付着している。**102**甕形土器で、下半部を欠くが、胴部が底部に向かってすぼまる器形である。口縁上端部を平面に仕上げ、端部は外方向へのばし、断面形が三角形を呈するキザミ目凸帯的である。口縁下にも2条の断面形が三角形のキザミ目凸帯を巡らしている。外面には目の細かいハケ目痕を残し、内面は丁寧なナデ調整を施している。口径30.8cm、器壁厚0.8cm～0.9cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。外面には煤が口縁端部まで付着している。**101**は中型の甕形土器で底部を欠く。頸部はやや締まり、胴部は張る。口縁は「く」の字状に外反し、「コ」の字状を呈する口縁端面にはハケ工具による「×」文様が施されている。頸部にはハケ工具による「×」文様が施された低い凸帯が巡る。胴部の内外面はハケ目調整を施している。口径24.5cm、胴部最大径26.8cm、器壁厚0.6cm～0.8cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。

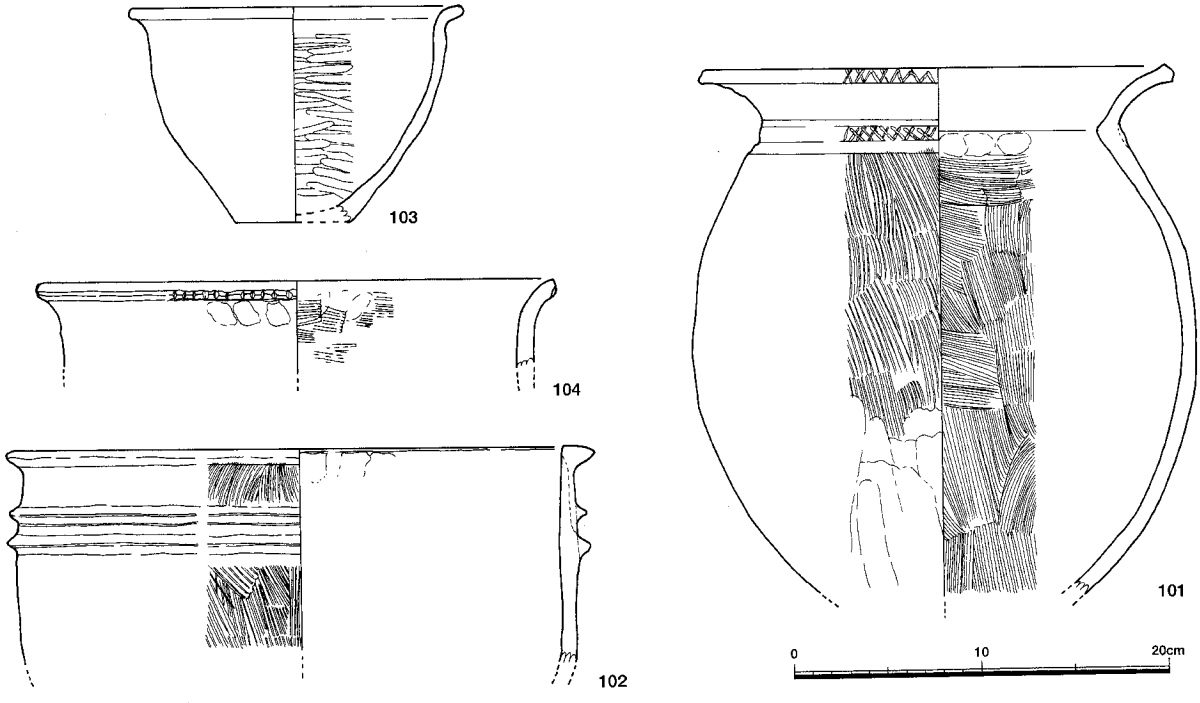


Fig.70　土坑SK106出土遺物実測図（1/4）

SK121（Fig. 71, 72　PL. 84, 106）

弥生土器甕・高坏・鉢、投弾土製品が出土している。**625**は手捏による小型の鉢形土器である。底部は丸底で、口縁は外反しながら立ち上がる。内面はハケ目調整、外面はナデによる。口径5.4cm、器高2.4cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、灰白色を呈する。**624**は小型の甕形土器で、完形品である。底部はすぼまり、尖底的である。口縁は「く」の字状に外反する。口径9.1cm、器高10.0cm、胴部最大径8.8cmを測る。**621**は甕形土器で、底部を欠くが、胴央部が張り、底部に向かってすぼまって尖底的な底を呈していると思われる。頸部は締まり、口縁は「く」の字状に外反し短い。叩き目による整形の後、胴部下半だけナデを施す。口径15.8cm、胴部最大径25.7cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗褐色を呈する。**622**は甕形土器で、胴部下を欠く。頸部は締まり、胴部は張る。短い口縁は「く」の字状に折れ曲がり、屈曲部内面には稜線を呈する。口径15.8cm、器壁厚0.5cm～0.6cmを測る。整形はハケ目により、口縁部と胴部外面にはナデを行っている。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗褐色を呈する。**623**は甕形土器の底部と考えられる。胴部は底部直上で強くすぼまる。

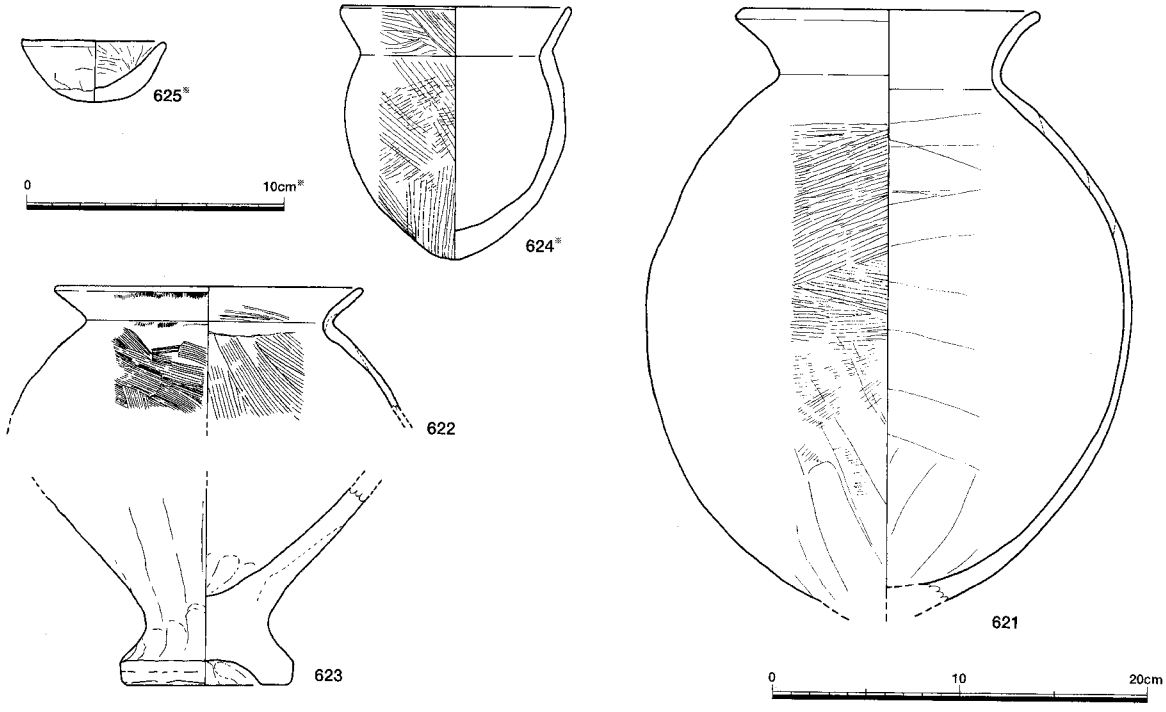


Fig.71　土坑SK121出土遺物実測図1（1/3※・1/4）

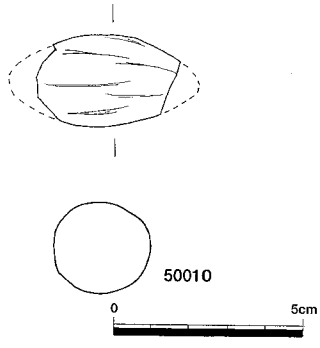


Fig.72　土坑SK121出土遺物実測図2（1/2）

SK122（Fig. 73）

弥生土器甕・高坏・器台が出土している。**627**は甕形土器で、頸部は極めて僅かに締まり、胴部は頸部直下で最大径を呈して底部に向かってすぼまる。口縁は外反するものの弱く、短い。このため、頸部屈曲部の内面は丸味を呈する。口縁端部にはハケ工具の角を用いてキザミ目を施しており、キザミ目の間隔は狭い。外面の頸部直下には一条の沈線が巡る。胴部外面は目の細かいハケ目整形。沈線から上部はさらに横ナデ調整を施している。口径24.8cm、胴部最大径24.4cm、器壁厚0.6cm～0.7cmを測る。胎土は1㎜～3㎜ほどの砂粒を多く含み茶灰色～茶褐色を呈する。**628**は甕形土器もしくは鉢形土器で、口縁は外方に屈曲させているが弱く、短い。このため、頸部屈曲部の内面は丸味を呈する。口縁端部にはヘラ工具によるキザミ目を施している。胴部外面は目の細かいハケ目整形を施している。口径25.1cm、器壁厚0.7cm～0.8cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み淡灰褐色を呈する。**631**は大型の甕形土器である。頸部はやや締まり、口縁は直線的で外反するものの、頸部屈曲部の内面は丸味を呈する。端部は断面形が「コ」の字状の端面を呈する。頸部には断面形が三角形の凸帯が巡る。口径50.7cm、胴部最大径54.8cm、器壁厚1.0cm～1.1cmを測る。胎土は1㎜～3㎜ほどの砂粒を多く含み淡橙灰色～黒灰色を呈する。**626**は大型の甕形土器である。口縁は緩やかに外反させているため頸部屈曲部の内面は丸味を呈する。肥厚させた口縁内面の上端は平面に仕上げ、縁にヘラ工具によるキザミ目を施している。さらに、外面も肥厚させて、段を呈している。端部は断面形が「コ」の字状の端面を呈し、上下の縁にもヘラ工具によるキザミ目を施している。器面は内外面とも丁寧なヘラ磨きが施されている。口径41.5cm、器壁厚0.8cm～1.1cmを測る。胎土は1㎜～3㎜ほどの砂粒を多く含み橙灰色を呈する。**629**は甕形土器の底部と思われる。底部は小さく、胴部は口縁部に向かって張りを思わせるように広がる。内外面とも丁寧なヘラ磨きが行われている。底径7.1cm、器壁厚0.5cm～0.6cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み淡橙灰色を呈する。**631**は甕形土器の底部である。底部は平坦で、胴部は張りも持つ。器面整形はハケ目。さらに内外面ともナデ調整している。底径9.2cm、器壁厚0.8cm～0.9cmを測る。胎土は1㎜～3㎜ほどの砂粒を含み淡橙灰色～黒灰色を呈する。

SK123（Fig. 74）

弥生土器甕・高坏が出土している。**845**の甕形土器は口縁部から底部に向かってすぼまる。口縁を弱く外反させ、短い。このため、頸部屈曲部の内面は丸味を呈する。口縁端部にはキザミ目を施している。目の細かいハケ目により、内外面の器面整形を行い、胴部内面だけさらにナデ調整している。口径21.0cm、器壁厚0.8cm～0.9cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、暗茶褐色を呈する。**844**は甕形土器で、胴部が底部に向かってすぼまる器形である。口縁上端部を平面に仕上げ、端部は外方向へのばして三角形の断面形を呈する。端部にはキザミ目を施し、口縁下にも断面形が三角形の凸帯を廻らしている。ハケ目整形の後、内面はナデ調整を施している。口径29.8cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色～灰色を呈する。外面には煤が口縁端部まで付着している。

SK124（Fig. 74　PL. 84）

弥生土器甕・器台・壷が出土している。**635**は大型の甕形土器で、口縁は緩やかに外反し、短い。このために頸部屈曲部の内面は丸味を呈する。口縁外面を肥厚させ、頸部には段を呈する。端部は「コ」の字状の断面形を呈する。器面は内外面とも丁寧なヘラ磨きが施されている。口径36.1cm、器壁厚0.8cm～0.9cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み淡茶褐色を呈する。**633**の甕形土器は口縁部から底部に向かってすぼまる。口縁は短く、外反させている。頸部屈曲部の内面は丸味を呈する。口縁端部にはハケ目工具の側縁を用いてキザミ目を施している。目の細かいハケ目により、内外面の器面整形を行っており、さらに口縁部内外面と胴部内面だけはナデ調整している。口径28.2cm、

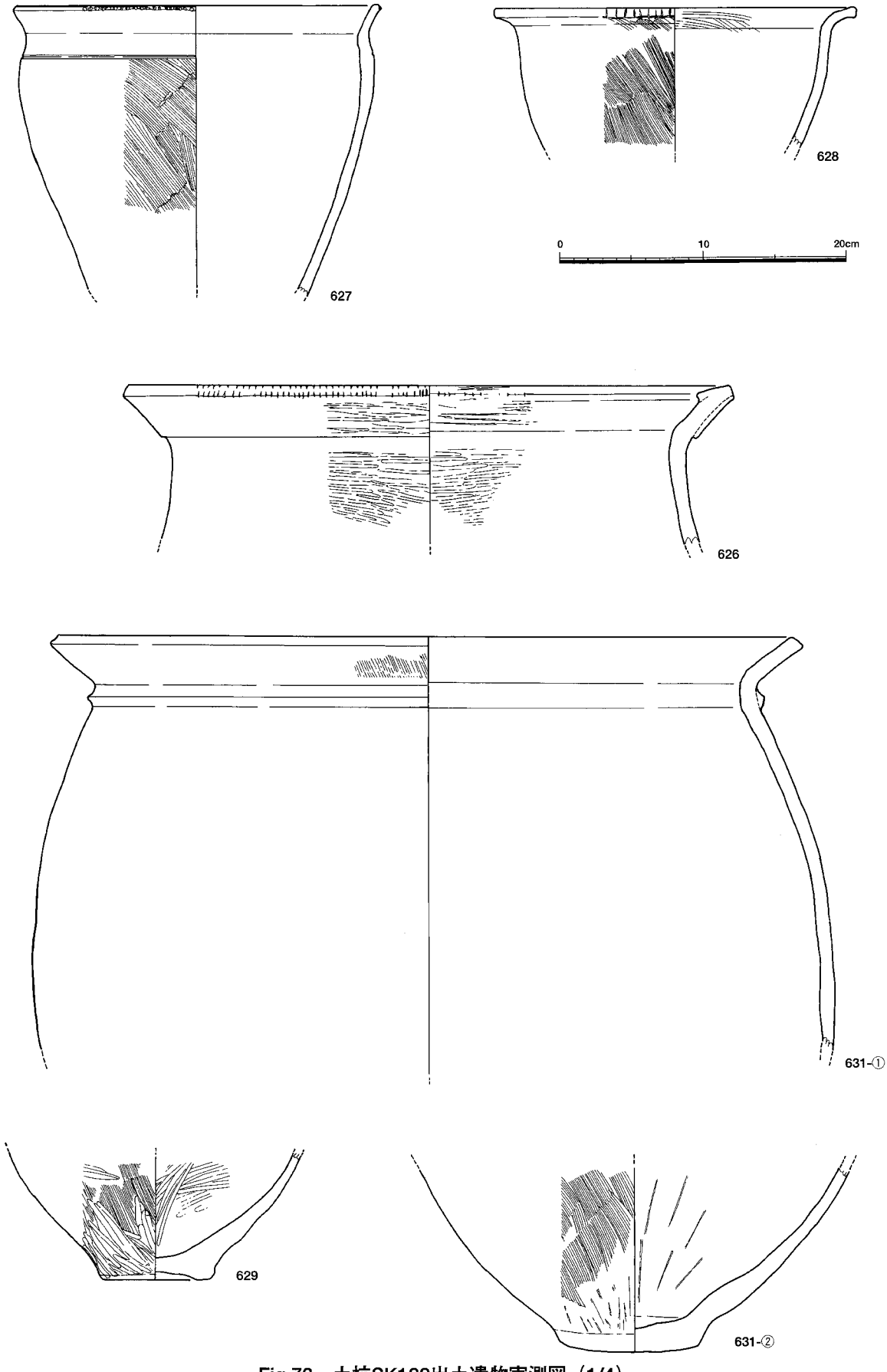


Fig.73　土坑SK122出土遺物実測図（1/4）

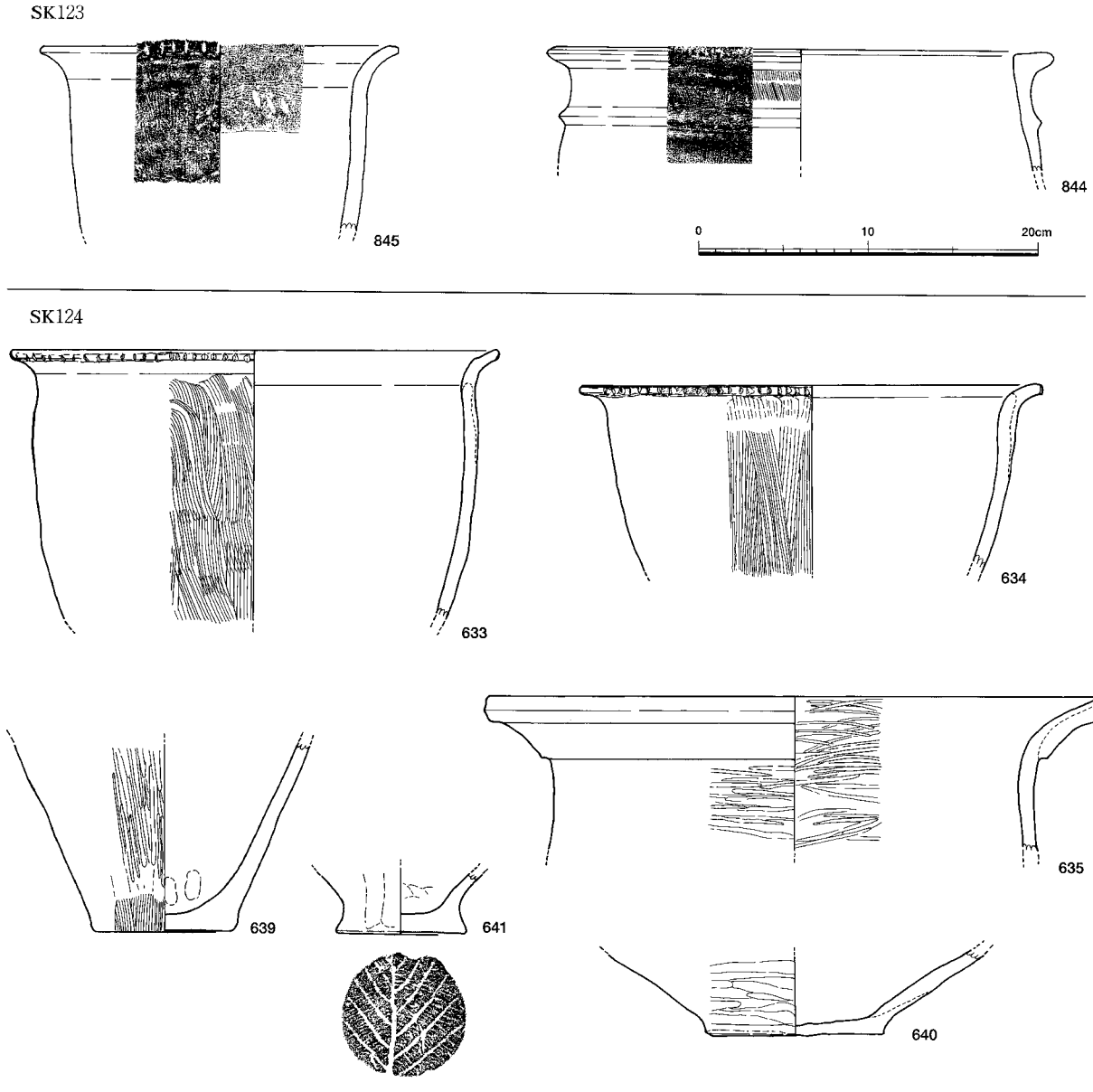


Fig.74　土坑SK123・124出土遺物実測図（1/4）

器壁厚0.6cm～0.8cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。**634**の甕形土器は口縁部から底部に向かってすぼまる。口縁は短く、外反させているが、頸部屈曲部の内面は丸味を呈する。口縁端部にはハケ目工具の小口を用いてキザミ目を施している。目の細かいハケ目により、内外面の器面整形を行っており、さらに口縁部内外面と胴部内面だけはナデ調整している。口径27.1cm、器壁厚0.6cm～0.7cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、暗茶褐色～灰褐色を呈する。**640**は大型壷形土器の底部と思われる。底部は径10.7cm、器壁厚0.7cmを測る。外面は丁寧なヘラ磨きが施されている。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。**639**は甕形土器の底部で、底部からの器壁の立ち上がり方は、胴長の器形を示す。外面はハケ目整形の後、丁寧なヘラ磨きを施している。底部は径8.1cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**641**は甕形土器もしくは壷形土器の底部である。胴部は底部近くで括れる。底部外面には葉脈が刻されている。底部は径7.6cm、器壁厚0.5cmを測る。外面は丁寧なヘラ磨きが施されている。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。

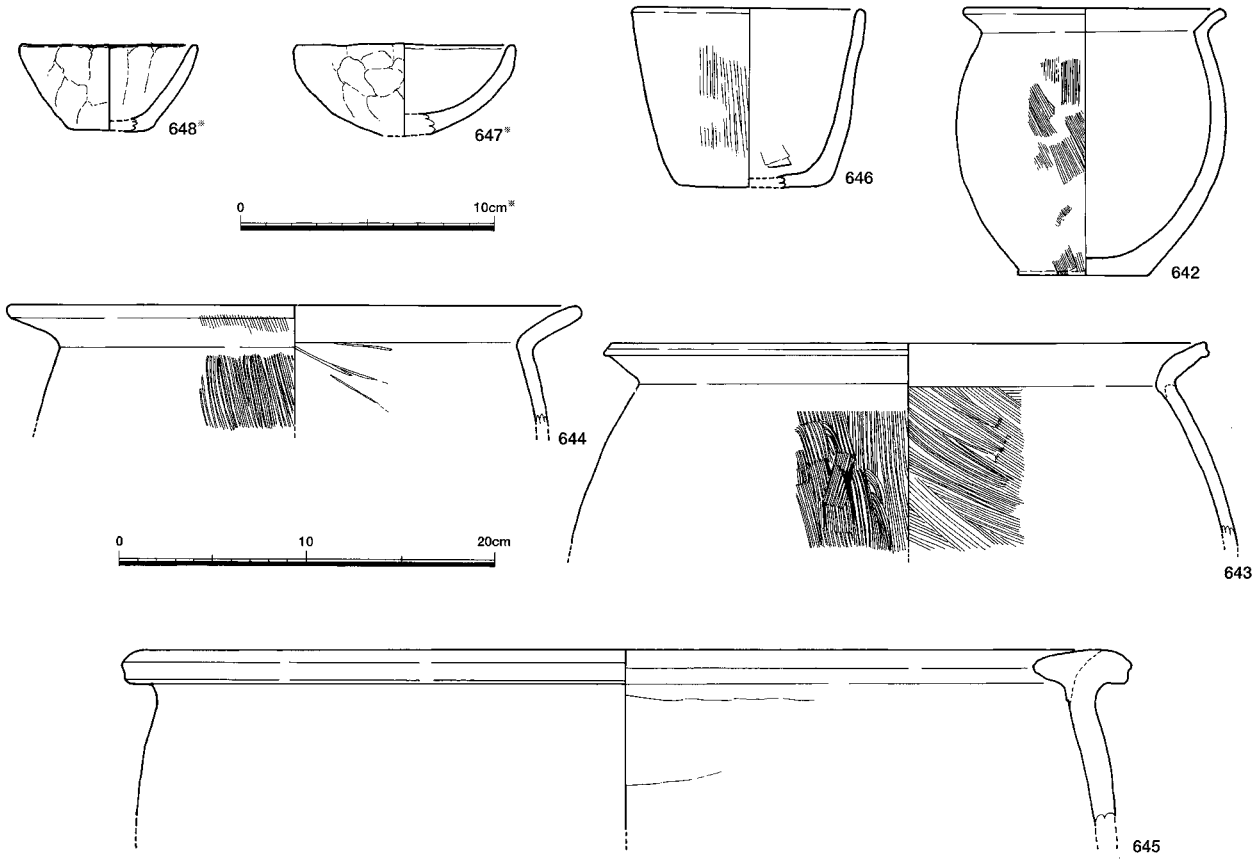


Fig.75　土坑SK125出土遺物実測図（1/3*・1/4）

SK125（Fig. 75　PL. 85）

弥生土器甕・大型甕・小型鉢が出土している。**647**は手捏のミニチュア鉢形土器で浅い。丸底の底部で、口縁は内湾気味に立ち上がる。口径8.6cm、器高3.5cmを測る。胎土は1㎜ほどの暗褐色砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**648**も手捏のミニチュア鉢形土器である。底部は平坦で、口縁は直線的に外反する。口径7.0cm、器高3.4cm、底径3.0cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗褐色を呈する。**646**は鉢形土器である。底部は平坦で、口縁は直線的に外反しながら立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げている。ハケ目による器面整形の後、ナデ調整している。口径11.9cm、器高9.6cm、底径7.4cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、茶灰色を呈する。**642**は小型の甕形土器で、口縁は「く」の字形に外反し、短い。頸部屈曲部の内面は弱い稜線である。頸部の締まりは弱く、底部は平坦である。目の細かいハケ目による器面整形の後にナデを施している。口径13.5cm、器高14.5cm、底径7.0cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。**644**は甕形土器で、胴部下半を欠く。口縁は「く」の字形に外反し、短い。このため頸部の屈曲部内面には明瞭な稜線となる。器面全体にハケ目が残る。口径30.5cm、器壁厚0.6cm～0.7cmを測り、胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、灰褐色を呈する。

643は甕形土器で胴部下半を欠く。頸部は締まり、胴部は張りを呈する。口縁は「く」の字形に外反し、短い。内外面ともハケ目整形の後、口縁部に限って横ナデ調整を施している。口径31.6cm、器壁厚0.5cm～0.6cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、暗茶褐色を呈する。**645**は大型の甕形土器で、口縁端部は内側と外側の両方にのばして断面形が「T」字形を呈する。内側の端部は丸く仕上げ、外側の端部は「コ」の字状の断面形である。上端部は平坦で、ナデで仕上げている。口径53.8cm、器壁厚1.1cmを測る。胎土は1㎜ほどの暗褐色砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

SK126（Fig. 76～78　PL. 85, 86, 107）

甕・高坏・壷・鉢・器台・手捏小型鉢が出土している。**669**は手捏の小型鉢形土器で浅い。丸底の底部で、指押さえによって整形された口縁は内湾気味に立ち上がる。口縁外面には指頭圧痕が残る。内面の調整はナデ。口径9.8cm、器高4.5cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、暗橙灰色を呈する。**670**は手捏の小型鉢形土器で、半球状を呈する。丸底の底部で、口縁は内湾気味に立ち上がる。口径8.9cm、器高5.5cmを測り、器壁は厚い。胎土は1mmほどの砂粒を僅かに含み、暗白色を呈する。**667**は高坏で、脚部を欠く。杯部口縁の屈曲は弱く緩やかに長く立ち上がる。このため屈曲部外面の稜線は弱い。器面は丁寧なヘラ磨きが施されている。口径36.1cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は0.5mmほどの砂粒を僅かに含み、淡茶灰色を呈する。**668**は脚部で、上部は欠く。ハケ目整形の後、脚部口縁だけを横ナデしている。脚部口径15.0cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、褐色を呈する。**650**は小型の丸底甕形土器で完形品である。口縁が短く直立し、胴部は球状を呈する。外面は目の細かいハケ目整形の後に口縁だけ横ナデ調整している。内面はヘラ削りである。口径9.7cm、器高12.2cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、暗橙色を呈する。**652**は甕形土器で胴部下半を欠く。口縁は外反し、端部は下方に横ナデでつまみ出している。頸部内面の屈曲部は丸味を呈し、稜線は認められない。目の粗いハケ目整形の後、口縁部だけ横ナデしている。口径25.0cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、灰褐色～黒色を呈する。**653**は甕形土器で胴部下半を欠く。口縁は「く」の字形に外反し、短い。頸部屈曲部の内面は弱い稜線を呈している。頸部の締まりは弱い。ハケ目による器面整形の後、口縁だけに横ナデを施している。口径18.3cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は僅かに1mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**656**は甕形土器で胴部下半を欠く。口縁は直線的に外反し、端部に面を持つ。頸部屈曲部の内面は丸味を呈し、稜線は弱い。器面全面に整形痕であるハケ目を残す。口径20.6cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、暗茶灰色を呈する。外面には煤が口縁端部まで付着している。**660**は甕形土器で胴部下半を欠く。口縁は直線的に外反し、端部に面を持つ。頸部屈曲部の内面は丸味を呈し、稜線は弱い。器面全面に整形痕であるハケ目を残す。口径20.0cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、暗茶灰色を呈する。**662**は甕形土器で胴部下半を欠く。口縁は「く」の字形に外反し、短い。頸部屈曲部の内面は弱い稜線を呈している。頸部の締まりは弱い。ハケ目による器面整形の後、口縁だけに横ナデを施している。口径17.8cm、器壁厚0.5cmを測る。胎土は僅かに1mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。外面には煤が口縁端部まで付着している。**663**は小型の壷形土器で胴部下半を欠く。胴部は張り、球状を呈する。口縁は外反し、端部を丸く仕上げている。頸部内面の屈曲部における稜線は弱い。目の細かいハケ目整形の後に粗いヘラ磨きを施している。口径16.1cm、胴部最大径17.6cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、灰褐色を呈する。**664**は小型の壷形土器で胴部下半を欠く。胴部は張り、球状を呈する。口縁は外反し、短い。端部を丸く仕上げている。頸部内面の屈曲部は丸味を呈し、稜線は認められない。目の細かいハケ目整形。口径12.2cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、灰色を呈する。

665は甕形土器で下半部を欠くが、胴部が底部に向かってすぼまる器形である。口縁上端部を平面に仕上げ、端部は外方向へのばして三角形の断面形を呈する。ハケ目整形の後、さらに内面だけナデ調整を施している。口径32.2cm、器壁厚0.5cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。外面には煤が口縁端部まで付着している。**649**は大型の甕形土器で、頸部の締まりは弱く、口縁は外反する。口縁端部は横ナデにより「コ」字形の断面形面を呈している。頸部外面には横ナデにより整形された断面形が台形の凸帯が巡り、凸帯にはハケ工具の小口を用いた斜行するキザミ目が施されている。

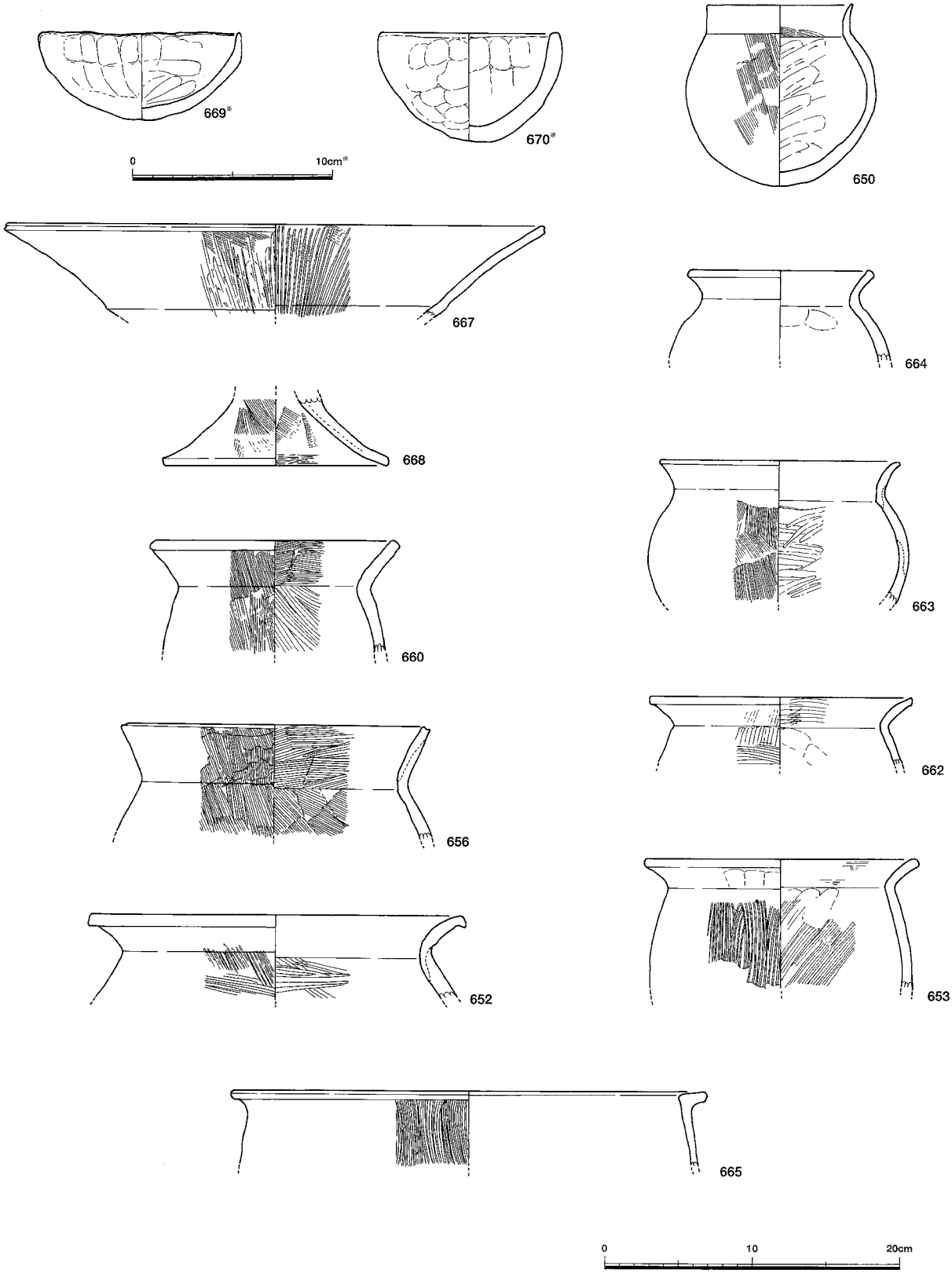


Fig.76　土坑SK126出土遺物実測図1（1/3※・1/4）

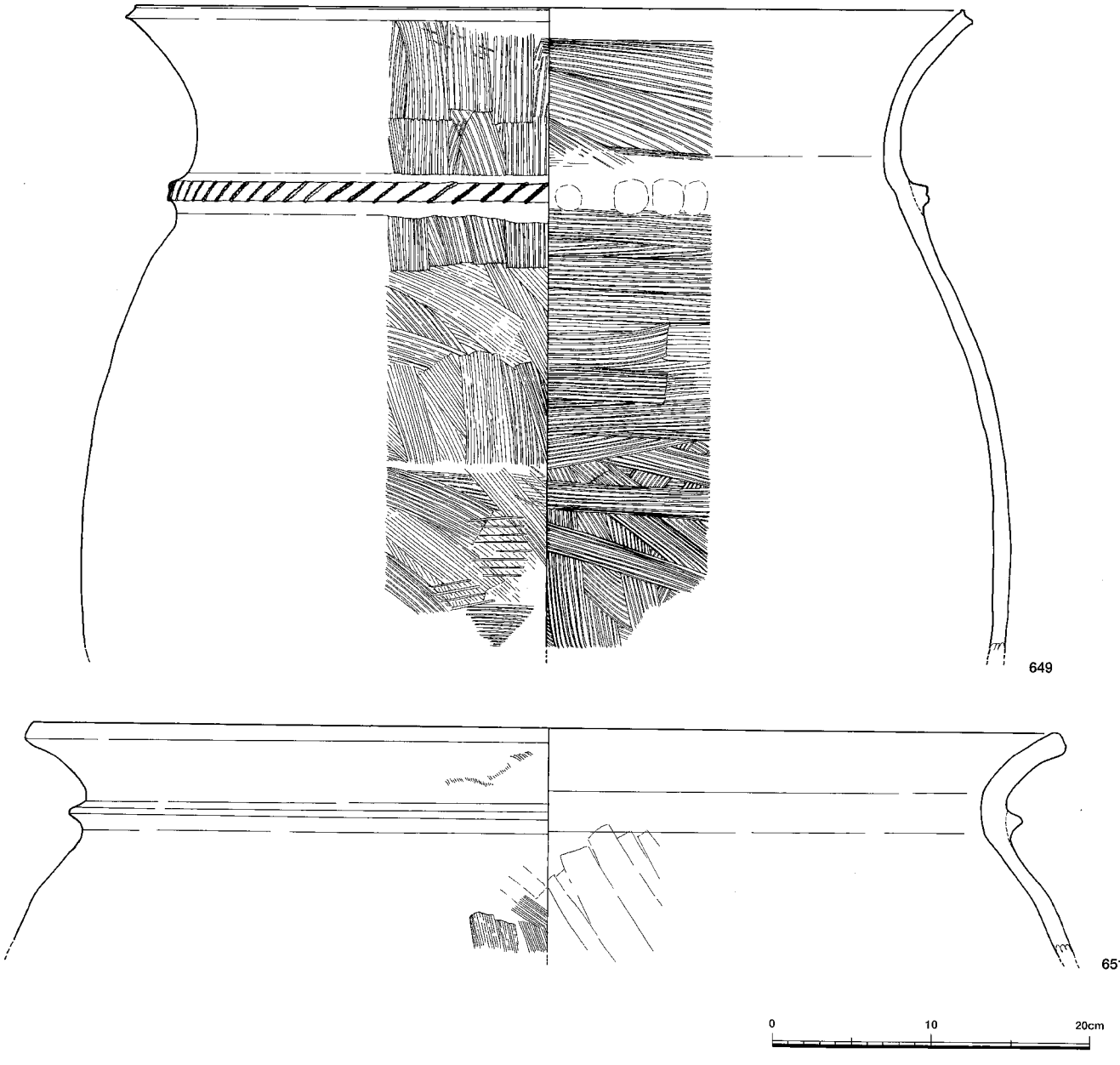


Fig.77　土坑SK126出土遺物実測図2（1/4）

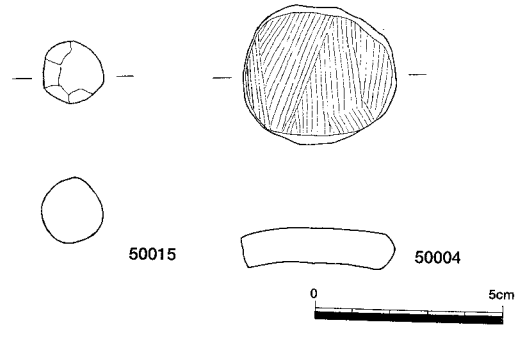


Fig.78　土坑SK126出土遺物実測図3（1/2）

頸部内面の屈曲部は丸味を呈しており、口縁部と胴部との境を示す明瞭な稜線は認められない。器面成形は叩き板により、目の細かいハケ工具での整形を行っている。口縁外面にはヘラによる暗紋風の磨きが縦方向に施されている。口径51.4cm、器壁厚0.8cm～1.0cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、暗褐色を呈する。**651**は大型の甕形土器で胴部下半を欠く。口縁は短く肥厚で、強く外反する。口縁端部は横ナデにより「コ」字形の断面形面を呈している。頸部外面には横ナデにより整形された断面形が三角形の凸帯が巡る。頸部内面の屈曲部は丸味を呈しており、口縁部と胴部との境を示す明瞭な稜線は認められない。器面整形は目の細かいハケ工具により行われた後、頸部より上部を横ナデ調整している。口径63.8cm、器壁厚0.9cm～1.0cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。

50004は甕形土器の胴部を円盤状に加工したものである。反りを呈し、片面にはハケ目痕が残る。周縁は擦って整形している。径3.8cm～4.0cm、厚さ0.8cmを測る。胎土は1mmほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、灰褐色を呈する。**50015**は土製の小玉で、径1.6cm～1.7cmを測る。器面は滑らかで、暗茶灰色を呈する。

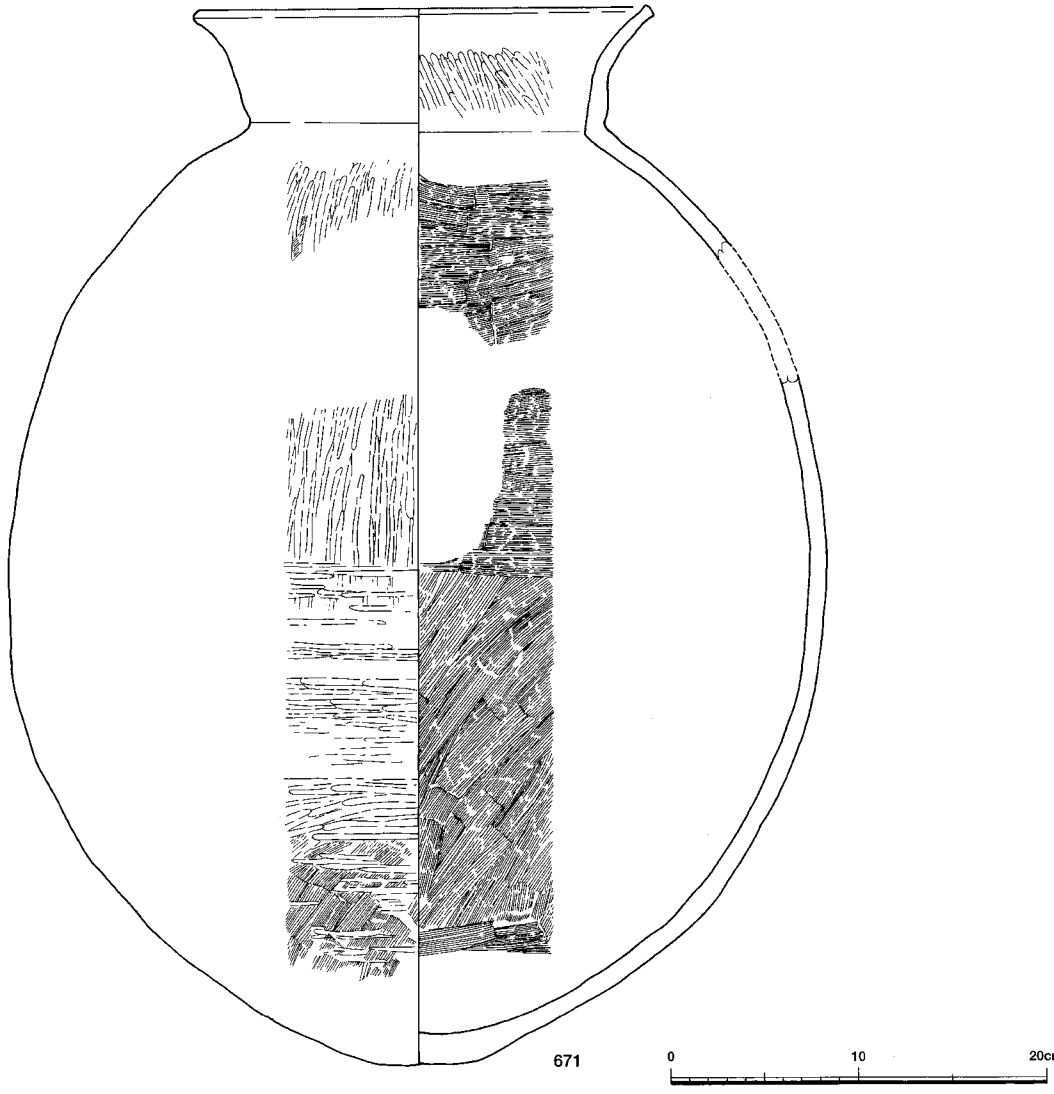


Fig.79　土坑SK129出土遺物実測図（1/4）

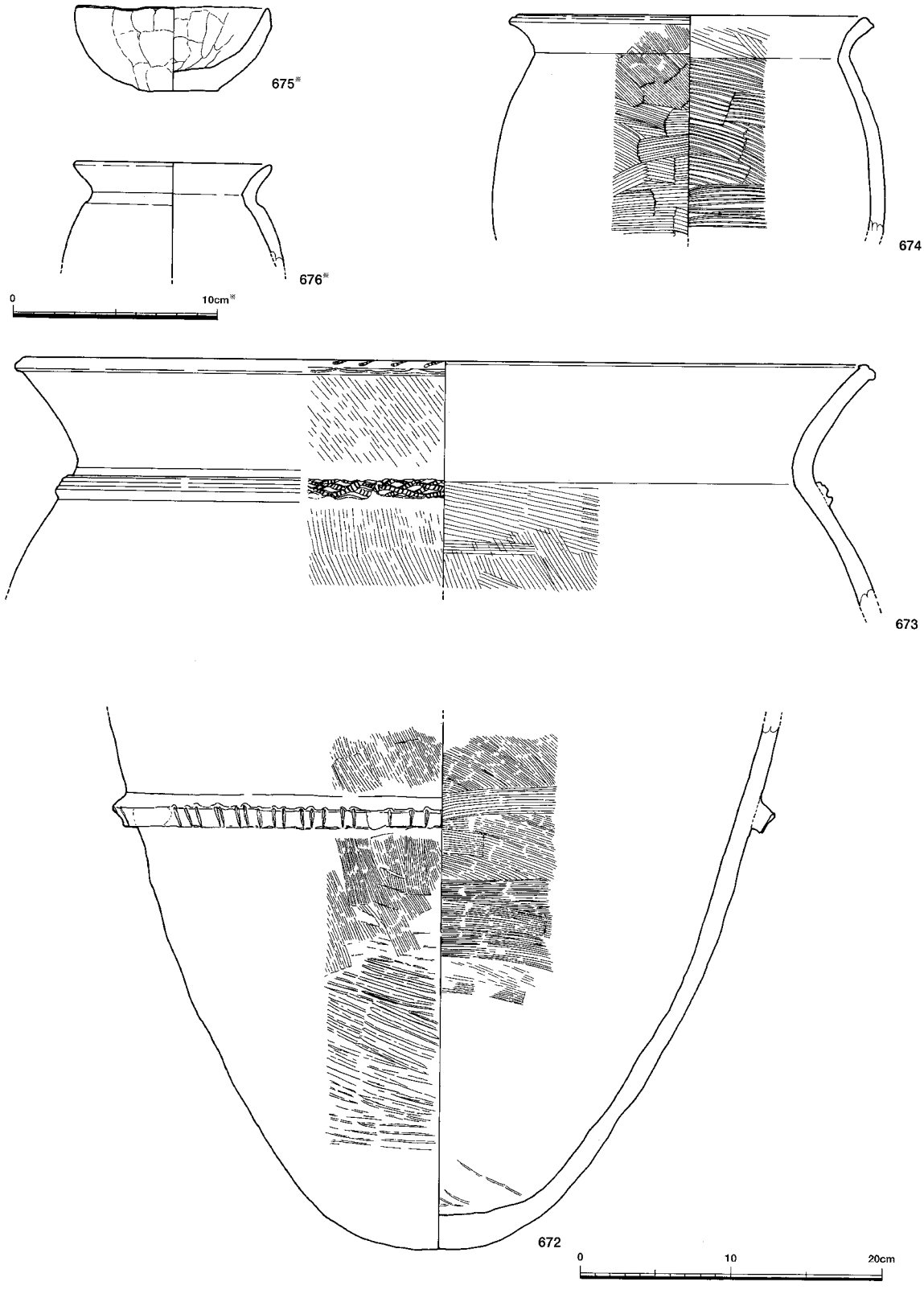


Fig.80 土坑SK130出土遺物実測図（1/3※・1/4）

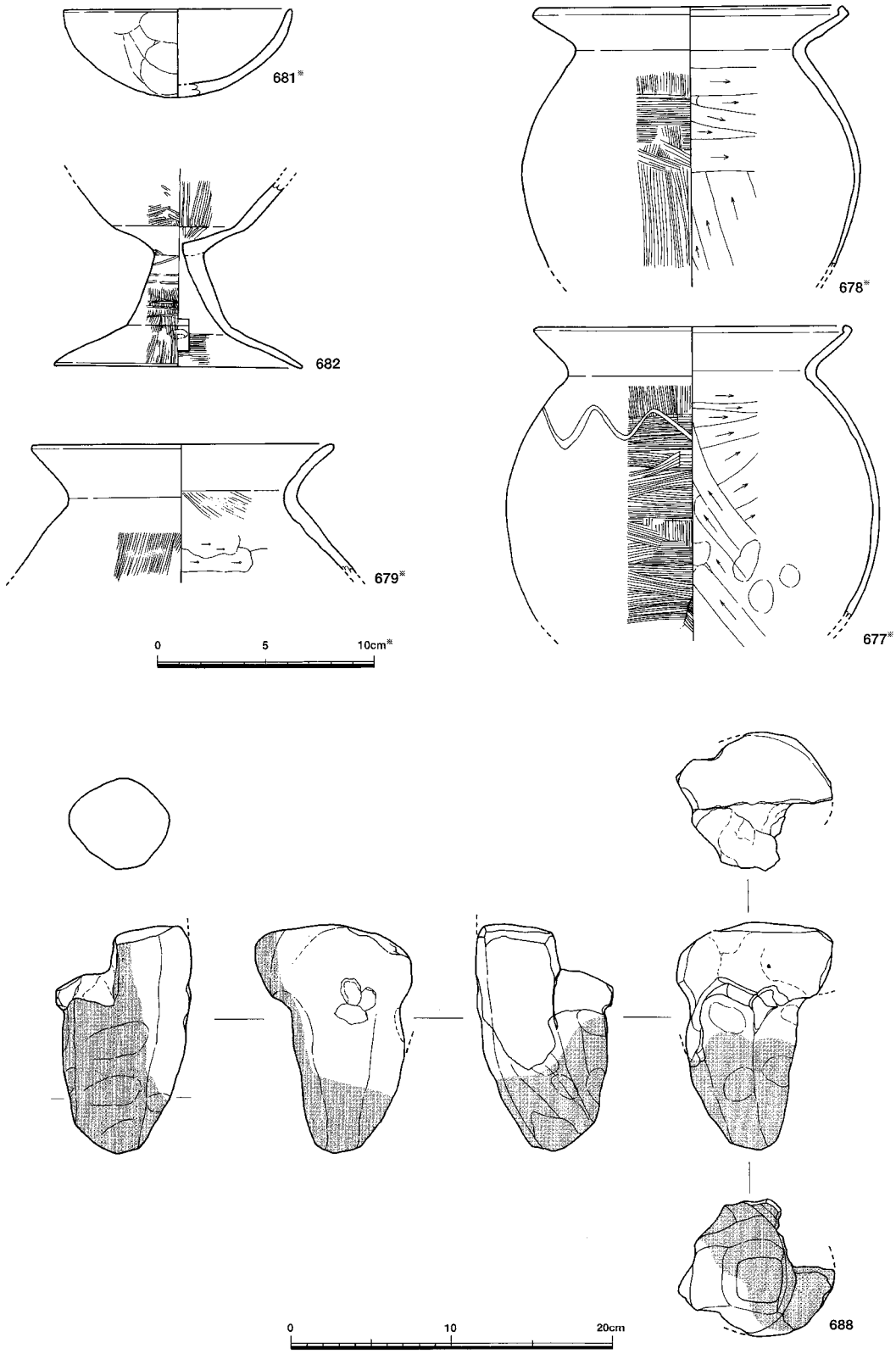


Fig.81 土坑SK131出土遺物実測図（1/3※・1/4）

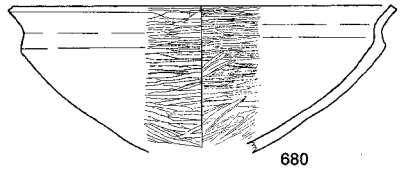


Fig.82　土坑SK133出土遺物実測図（1/4）

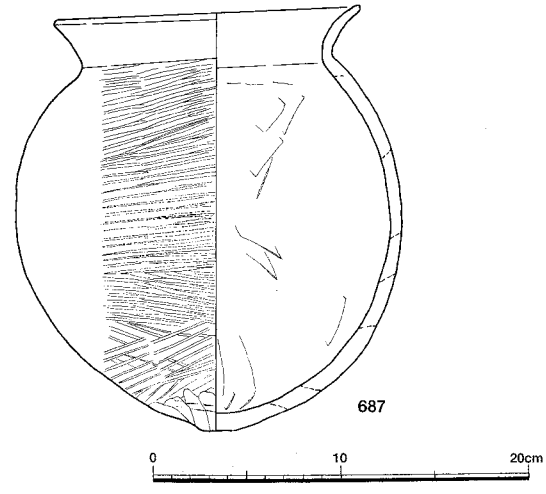


Fig.83　土坑SK139出土遺物実測図（1/4）

SK129（Fig. 79　PL. 86）

弥生土器壷が出土している。**671**は壷形土器で頸部は締まり、底部は極めて狭小で尖底的である。器形は胴央部が張って底部に向かってすぼまるラグビボール状を呈する。口縁は「く」の字状に外反する。口縁端部は横ナデ調整により「コ」字形の断面形面を呈している。頸部内面の屈曲部には口縁部と胴部との境を示す明瞭な稜線が認められる。目の細かいハケ工具で内外面を整形の後、外面と口縁部内面には粗いヘラ磨きを施している。口径23.6cm、器高58.3cm、胴部最大径43.0cmを測る。胎土は１mm～２mmほどの砂粒を含み、淡橙白色を呈する。

SK130（Fig. 80　PL. 86）

弥生土器甕・手捏小型鉢が出土している。**675**は手捏の浅い椀形の鉢形土器である。丸底の底部で、口縁は内湾気味に立ち上がる。口径9.5cm、器高4.1cmを測る。胎土は１mmほどの砂粒を多く含み、褐色を呈する。**676**は小型の甕形土器で、胴部下を欠く。口縁は短く、外反して端部は丸く仕上げている。頸部外面には横ナデによる口縁整形のために小さい段がある。頸部内面の屈曲部は丸味を持ち、口縁部と胴部との境を示す明瞭な稜線は認められない。器面は内外面ともにヘラ磨きを施している。口径9.6cm、器壁厚0.5cmを測る。胎土は１mmほどの砂粒を含み、灰褐色を呈する。**674**は甕形土器で胴部下半を欠く。頸部は締まり、胴部は張りを呈する。口縁は「く」の字形に外反し、短い。頸部の屈曲部内面には稜線が認められる。内外面ともハケ目整形の後、口縁部に限って横ナデ調整を施している。口径23.2cm、胴部最大径26.0cm、器壁厚0.7cm～0.8cmを測る。胎土は１mmほどの砂粒を含み、暗茶褐色を呈する。

672は大型甕形土器で胴部上を欠く。底部は極めて狭小で、尖底的な丸底である。外面胴央部下には断面形が台形の凸帯が巡り、凸帯にはハケ工具によるキザミ目が施されている。叩き板による成形の後、ハケ目整形を施している。胎土は１mm～２mmほどの砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。**673**は大型甕形土器で、底部を欠く。頸部はやや締まる。口縁は「く」の字状に外反し、「コ」の字状を呈する口縁端面にはハケ工具による斜行文が施されている。頸部にはハケ工具による斜交文様が施された低い凸帯が巡る。頸部屈曲部の内面は弱い稜線を呈している。内外面はハケ目整形の後、口縁内面だけ粗いヘラ磨きを施している。口径56.8cm、器壁厚1.1cmを測る。胎土は僅かに１mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

SK131（Fig. 81）

土師器甕・碗・高坏・支脚が出土している。**681**は浅い椀形の鉢形土器である。丸底の底部で、口縁は内湾気味に立ち上がる。口径10.6cm、器高4.1cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。**682**は高坏で、杯部の口縁を欠く。杯部の屈曲は弱く、境は弱い稜線である。脚部は中位で「く」の字に外反する。胎土は0.5mmほどの砂粒を含み、淡橙色を呈している。**677**は甕形土器で、胴部下を欠く。胴部は張り、球状を呈する。頸部は締まっている。口縁は「く」の字状に折れ曲がり、端部は上方に短くのびる。内面の頸部屈曲部には弱い稜線が認められる。外面頸部下にはヘラ状工具による波状文が施されている。外面は目の細かいハケ目、内面はヘラ削りしており、さらに口縁部だけ横ナデ調整している。口径14.3cm、胴部最大径17.4cm、器壁厚0.2cm～0.3cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈している。**678**も甕形土器で、胴部下を欠く。胴部は張り、球状を呈する。頸部は締まっている。口縁は「く」の字状に折れ曲がり、端部は上方に短くのびる。内面の頸部屈曲部には弱い稜線が認められる。外面は目の細かいハケ目、内面はヘラ削りしており、さらに口縁部だけ横ナデ調整している。口径14.3cm、胴部最大径16.0cm、器壁厚0.2cm～0.3cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈している。**679**は甕形土器で、胴部下を欠く。胴部は張り、球状を呈する。頸部は締まっている。口縁は「く」の字状に折れ曲がり、端部は丸く仕上げている。内面の頸部屈曲部は丸味を持ち、稜線は弱い。外面は目の細かいハケ目整形の後にナデ調整、内面はヘラ削りしている。さらに口縁部は横ナデ調整している。口径14.1cm、器壁厚0.3cm～0.4cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡灰褐色を呈している。**688**は支脚で、手捏による。高さ14.1cmを測る。壁色の差異により、火を受けた痕跡が明瞭に判断できる。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、淡橙色～灰色を呈している。

SK132

弥生土器甕が出土している。

SK133（Fig. 82）

弥生土器甕・高坏が出土している。**680**は高坏の杯部と考えられるが、鉢形土器の可能性もある。杯部の屈曲部は明瞭で、口縁は短く外湾しながら立ち上がる。器面は内外面とも極めて緻密なヘラ磨きが施されている。口径20.2cm、器壁厚0.5cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒が僅かに含まれ、暗茶褐色を呈する。

SK134

弥生土器甕・高坏が出土している。

SK138

弥生土器甕・高坏・手捏小型鉢が出土している。

SK139（Fig. 83　PL. 87）

弥生土器甕、焼壁が出土している。**687**は甕形土器で完形品である。胴部は球状を呈し、底部は狭小で尖底である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸く仕上げている。外面には叩き板成形痕を残す。内面はナデ調整し、口縁は横ナデ調整している。口径16.1cm、器高22.3cm、胴部最大径20.4cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を含み、灰橙色を呈する。外面には煤が付着している。

SK142

弥生土器甕・器台が出土している。

土器集積

SX107（Fig. 84～108　PL. 88～102, 107）

弥生土器甕・高坏・器台・鉢・壷・土製投弾が出土している。

377は甕形土器で底部を欠く。口縁は、外側に断面形が三角形の凸帯を巡らしたように肥厚させ、上端は平坦である。口縁下に１条の沈線が巡る。外面の整形は目の細かいハケ目、内面はナデ調整している。口径21.7cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は１mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

274は甕形土器で底部を欠く。口縁部は逆「L」字形状に短く折れ曲がり、上端は平坦である。口縁端部にはキザミ目が施されている。口縁下には断面形が三角形の凸帯が巡り、キザミ目が施されている。口径27.0cm、器壁厚0.7cmを測る。外面の整形はハケ目、内面はナデ調整している。胎土は１mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。**276**は甕形土器で底部を欠く。口縁部は逆「L」字形状に短く折れ曲がり、上端は平坦である。口縁端部にはキザミ目が施されている。口縁下には断面形が三角形の低く狭小な凸帯が巡り、キザミ目が施されている。口径29.5cm、器壁厚0.5cmを測る。外面の整形はハケ目、内面はナデ調整している。胎土は１mmほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡橙灰色～黒灰色を呈する。**371**甕形土器で底部を欠く。口縁部は逆「L」字形状に短く折れ曲がり、上端は平坦である。口縁端部にはキザミ目が施されている。口縁下には断面形が三角形の凸帯が巡り、キザミ目が施されている。口径27.0cm、器壁厚0.7cmを測る。外面の整形はハケ目、内面はナデ調整している。胎土は１mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**390**は甕形土器で底部を欠く。口縁部は逆「L」字形状に短く折れ曲がり、上端は平坦である。口縁端部にはキザミ目が施されている。口縁下には断面形が三角形の低く狭小な凸帯が巡り、キザミ目が施されている。口径24.2cm、器壁厚0.6cmを測る。外面の整形はハケ目、内面はナデ調整している。胎土は１mmほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡橙灰色を呈する。**391**は甕形土器で底部を欠く。口縁部は逆「L」字形状に短く折れ曲がり、上端はやや曲面である。口縁端部にはキザミ目が施されている。口縁下には断面形が三角形の低く狭小な凸帯が巡っている様に、横ナデで隆線状につまみ出している。口径22.8cm、器壁厚0.6cmを測る。内面はナデ調整。胎土は１mmほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡灰褐色を呈する。煤が口縁端部まで付着している。**389**は甕形土器で底部を欠く。口縁部は逆「L」字形状に短く折れ曲がり、上端は平坦である。口縁端部は先細でキザミ目が施されている。口径20.3cm、器壁厚0.5cmを測る。内面はナデ調整している。胎土は0.5mmほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡橙灰色を呈する。**254**は甕形土器で底部を欠く。口縁部は逆「L」字形状に短く折れ曲がり、上端は平坦である。端部は丸く仕上げている。口径27.2cm、器壁厚0.5cm～0.6cmを測る。内面はナデ調整している。胎土は１mmほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡橙灰色を呈する。**298**は甕形土器で底部を欠く。口縁部は逆「L」字形状に短く折れ曲がり、上端は平坦である。端部は丸く仕上げている。口径26.1cm、器壁厚0.6cmを測る。外面の整形はハケ目、内面はナデ調整している。胎土は１mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**333**は甕形土器で底部を欠く。口縁部は逆「L」字形状に短く折れ曲がり、上端は平坦である。端部は断面形が「コ」の字状に仕上げている。口径25.8cm、器壁厚0.6cmを測る。外面の整形はハケ目、内面はナデ調整している。胎土は１mmほどの砂粒を含み、淡茶褐色を呈する。煤が口縁端部まで付着している。**375**は甕形土器で底部を欠く。口縁部は逆「L」字形状に短く折れ曲がり、上端は平坦である。端部は丸く仕上げている。口径27.0cm、器壁厚0.5cm～0.6cmを測る。外面の整形はハケ目、内面はナデ調整している。胎土は１mmほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。**397**は甕形土器で底部を欠く。口縁部は逆「L」字形状に短く折れ曲がり、上端は平坦である。端部は丸く仕上げている。口径23.0cm、器壁厚0.6cm～0.7cmを測る。外面の整形はハケ目、内面はナデ調整している。胎土は１mmほ

どの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。**369**は甕形土器で底部を欠く。口縁部は「く」の字状に短く折れ曲がり、頸部屈曲部には弱い稜線を呈する。端部は丸く仕上げている。外面は目の細かいハケ目整形。口径26.1cm、器壁厚0.6cmを測る。外面の整形はハケ目、内面はナデ調整している。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡茶褐色を呈する。

358・**376**は壷形土器で、胴部下を欠く。頸部は短く、口縁は外反して内側を肥厚させている。口縁上端は**376**が曲面的であるのに対して**358**は平坦に仕上げている。いずれも器面は丁寧なヘラ磨きが施されており、口径は17.0cmを測る。

195は手捏による鉢形土器のミニチュアである。半球状を呈し、猪口程度の大きさである。器壁は肉厚で、親指と人差し指とで挟みながら成形している。口径3.1cm、器高2.3cmを測る。**218**は手捏による小型の鉢形土器である。底部は尖り、器面全面には成形時の指頭圧痕が残る。口径9.8cm、器高5.3cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を僅かに含み、淡灰褐色を呈する。**316**は小型の鉢形土器である。底部は狭小ながらも平坦である。器面調整はナデを施している。口径6.6cm、器高5.0cmを測る。胎土は1㎜～3㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色～灰色を呈する。**176**は手捏による小型の鉢形土器である。底部は丸く仕上げ、器面全面には成形時の指頭圧痕が残る。口径7.9cm、器高4.7cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**194**・**196**は丸底の半球形を呈した鉢形土器である。器面外面には成形時の指頭圧痕が残る。内面はナデを施して器面を整えている。**194**は口径8.6cm、器高4.2cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色～灰色を呈する。**196**は口径8.8cm、器高4.0cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を僅かに含み、淡灰褐色を呈する。**257**は小型の鉢形土器である。底部は尖り、口縁は直線的に外反する。ハケ目による器面整形の後、外面だけにナデ調整している。口径7.8cm、器高3.9cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を僅かに含み、淡灰褐色を呈する。**113**は丸底の半球形を呈した鉢形土器である。器面は内外面ともハケ目整形の後にナデを施し、さらに粗いヘラ磨きを施している。口径10.6cm、器高5.1cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色～灰色を呈する。**198**は手捏による小型の鉢形土器である。底部は丸く仕上げ、外面には成形時の指頭圧痕が残る。内面は目の粗いハケ目整形である。口径10.1cm、器高4.5cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**156**は鉢形土器で、平坦な底部に、口縁がやや内湾気味に外反しながら立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げている。底部は、成形時に丸底であったものを平坦にヘラ削りしている。器面整形は内外面ともハケ目の後にナデ調整している。口径14.8cm、底径5.8cm、器高5.3cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**165**は小型の鉢形土器で、底部は尖る。口縁は直線的に外反し、端部は丸く仕上げている。内面はハケ目整形の後にナデ調整している。外面はヘラ削りして器面を整えている。口径13.4cm、器高6.9cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を僅かに含み、淡灰褐色を呈する。**191**は浅い丸底の鉢形土器で、口縁端部は丸く仕上げている。器面は内外面ともハケ目整形の後にナデ調整している。口径14.6cm、器高5.2cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈する。**197**は丸底の半球形を呈した鉢形土器で、口縁端部は丸く仕上げている。器面は内外面ともハケ目整形の後にナデを施している。口径13.0cm、器高6.5cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**215**・**290**は半球状で底部が狭小な鉢形土器である。口縁端部は丸く仕上げている。内外面ともハケ目整形の後、ナデて仕上げている。**215**は口径11.1cm、底径5.2cm、器高6.2cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、暗灰色を呈する。**290**は口径14.5cm、底径5.1cm、器高6.8cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を僅かに含み、灰褐色を呈する。**216**・**362**は半球状で狭小な底部を持つ鉢形土器で、口縁端部は丸く仕上げている。内外面とも目の細かいハケ目整形の後、外面だけナ

デて仕上げている。**216**は口径15.2cm、底径2.3cm、器高6.8cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**362**は口径15.0cm、底径4.2cm、器高8.1cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を僅かに含み、暗灰白色を呈する。**250・378**は狭小な底部を持ち、底が浅い鉢形土器である。内外面とも目の細かいハケ目整形の後、外面だけヘラ磨きして仕上げている。**378**は口縁端部を丸く仕上げ、口径16.6cm測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、暗橙色を呈する。**250**は口縁端部に面を持ち、口径17.4cm、底径4.6cm、器高6.4cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡褐色を呈する。口縁端部まで煤が付着している。

338は口径に対して底が深く、短頸壷的な鉢形土器である。底部は狭小。器面は内外面ともナデて整形の後に粗いヘラ磨きを施している。口径9.1cm、底径4.1cm、器高7.2cmを測る。器面は内外面ともナデ調整の後にヘラ磨きをほどこしている。胎土は1㎜～2㎜ほどの暗褐色砂粒を多く含む特徴を持ち、濁白色を呈する。**200**は卵を横に半裁したような器形の鉢形土器で、完形品である。底部は極めて狭小である。内外面ともナデ調整の後に、外面は竪方向に丁寧なヘラ磨きを施し、内面は粗いヘラ磨きを施している。口径7.6cm、底径1.5cm、器高8.3cmを測る。胎土は0.5㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色～淡茶灰色を呈する。容器内における充填の有無にかかわらず自立できないことから、器台と組み合うものである。**255**も卵を横に半裁したような器形の鉢形土器で、底部には極めて狭小な高台が付く。口径6.1cm、底径1.1cm、器高9.2cmを測る。胎土は0.5㎜ほどの砂粒を含み、茶灰色を呈する。**278**は口径に対して底が深い鉢形土器で底部を欠く。口縁は内湾し、端部は平坦な面を持つ。器面は内外面ともにヘラ磨きを施している。口径15.0cmを測る。器面は内外面ともナデ調整の後にヘラ磨きを施している。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、濁白色を呈する。

201は狭小な底部を持つ中型の鉢形土器である。内外面とも目の細かいハケ目整形の後、内面はナデ、外面はナデ調整の後に粗いヘラ磨きしている。口縁端部を丸く仕上げ、口径21.2cm、底径6.6cm、器高8.6cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。

116は大型の鉢形土器で、丸底である。器面は内外面ともに粗いハケ目で整形した後、部分的にナデを施している。口径27.8cm、器高9.8cmを測る。胎土は0.5㎜ほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。

118も大型の鉢形土器で、丸底である。器面は内外面ともにハケ目整形した後、内面はナデ調整を行い、さらにヘラ磨きしている。外面はヘラ削りして器面を整えている。口径25.0cm、器高9.2cmを測る。胎土は1㎜～3㎜ほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。**154**は大型の鉢形土器で、丸底である。口縁端部は平坦である。器面は内外面ともにハケ目整形した後、外面は下半部をヘラ削りしてハケ目を施している。口径26.2cm、器高18.5cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡灰褐色を呈する。**226**は大型の鉢形土器で、丸底である。器面は内外面ともにナデて仕上げている。口径25.2cm、器高9.8cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。口縁外面には墨書がある。**152・308**は口縁部が外反する鉢形土器で、いずれも底部を欠く。**152**は口縁が「く」の字状に外反し、鍔状の短い口縁部を有する鉢形土器である。体部は深く丸味を呈し、屈曲部が明瞭である。口径24.6cm、器壁厚0.4cm～0.5cmを測る。内外面ともハケ目整形の後にナデ調整を施している。胎土は1㎜～2㎜ほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡橙灰色を呈する。**308**も口縁が「く」の字状に外反し、鍔状の短い口縁部を有する鉢形土器であるが、高坏杯部の可能性も残る。体部は浅く屈曲部が明瞭である。口径27.4cm、器壁厚0.4～0.5cmを測る。内外面ともハケ目整形の後にナデ調整を施しているが、内面のハケ目は外面と比べて極めて細かく、工具の使い分けをしている。胎土は1㎜～3㎜ほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。**171**は鉢形土器である。胴部は頸部下でやや張りを持ち、底部に向かってすぼむ。底部はヘラ削りによりやや尖り気味である。このため据わり

は極めて不安定で、自立できない。短い口縁が「く」の字状に外反し、頸部内面には明瞭な稜線がある。口縁端部は面を呈する。口径23.2cm、器高15.1cm、底径7.8cmを測る。ハケ目整形の後、外面の胴央部以下はヘラ削り調整し、口縁内外面は横ナデ調整している。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**127**は口縁が「く」の字状に外反し、鍔状の口縁部を有する鉢形土器である。体部は深く屈曲部が明瞭である。頸部内面には弱い稜線を呈する。底部は丸味を持ち、やや尖り気味である。このため据わりは極めて不安定で、自立できない。口径28.0cm、器高12.0cm、底径7.2cmを測る。内外面ともハケ目整形の後にナデ調整を施している。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**335**は台付の小型鉢形土器で、脚端部は欠く。鉢部は口縁が「く」の字状に外反し、鍔状の短い口縁部を有する。体部は深く丸味を呈し、屈曲部が明瞭である。口径16.8cmを測る。内外面ともハケ目整形の後にナデ調整を施している。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、黒色を呈する。**149**・**302**は台付の鉢形土器もしくは甕形土器と考えられる。

199はジョッキ形の鉢形土器で、取っ手の一部を欠く。口縁から底部に向かって曲面を呈しながらすぼみ、底部直上で締まる。端部は丸く仕上げている。目の細かいハケ目整形の後、内面はナデ、外面は粗いヘラ磨きを施している。口径9.5cm、器高9.5cm、底径6.4cm、器壁厚0.4cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。**256**もジョッキ形の鉢形土器で、取っ手を欠く。口縁は底部直上で僅かに締まるものの、ほぼ直立し、口縁端部は断面形が「コ」の字状の面を持つ。目の細かいハケ目整形の後、内外面ともヘラ磨きを施している。口径10.9cm、器高12.0cm、底径10.4cm、器壁厚0.4cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、橙灰色を呈する。**327**も**256**と同様な器形であると考えられる。口縁は直立し、口縁端部は断面形が「コ」の字状の面を持つ。ハケ目整形の後、内外面とも丁寧なヘラ磨きを施している。口径13.8cm、器壁厚0.3cmを測る。胎土は0.5㎜ほどの砂粒を含み、淡黄白色を呈する。

408は甕形土器のミニチュアで、口縁部を欠く。胴部は球状を呈し、頸部は僅かに締まる。叩き板による成形の後、胴部上半部外面だけナデて仕上げている。底径3.1cm、胴部最大径7.4cm、器壁厚0.4cmを測る。**139**は手捏による壷形土器のミニチュアで、口縁部を欠く。胴部は球状を呈し、頸部は締まる。ナデて仕上げている。底径3.8cm、胴部最大径7.5cm、器壁厚0.7cm～0.8cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡灰色を呈する。

409は小型丸底壷で、底部を欠く。胴部は球状を呈し、口縁は僅かに外反する。器面外面はハケ目整形の後にナデ調整している。口径6.2cm、器壁厚0.4cm～0.5cmを測る。胎土は僅かに0.5㎜ほど暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、橙色を呈する。

251・**412**は長頸の壷形土器である。**412**は胴央部が張り、球をやや押しつぶしたような胴部である。頸部は直線的で僅かに外反する。ハケ目による器面整形の後に粗いヘラ磨きを施している。口径9.4cm、器高20.0cm、底径6.9cm、胴部最大径17.1cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。

132・**141**・**284**は高坏で、杯部の屈曲が明瞭で口縁部が短く立ち上がる。**132**は口径32.7cmを測る。器面は目の細かいハケ目整形である。胎土は1㎜ほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、橙灰色を呈する。**141**は口径30.1cmを測る。器面は内外面とも目の細かいハケ目整形の後に丁寧なヘラ磨きが施されている。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**284**は口径35.3cm、器高26.6cm、底径18.9cmを測る。脚部内面を除く器面はハケ目整形の後に丁寧なヘラ磨きが施されている。胎土は1㎜ほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡橙灰色を呈する。

140・**162**は杯部の屈曲が明瞭で口縁部がやや長く立ち上がる高坏である。**140**は口径30.6cmを測る。

器面は内外面とも目の細かいハケ目整形の後、ヘラ磨きが施されている。特に内面は放射状に丁寧ヘラ磨き仕上げである。胎土は1㎜ほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡橙灰色を呈する。**162**は口径30.7㎝を測る。器面は内外面とも目の細かいハケ目整形の後、粗いヘラ磨きが施されている。胎土は0.5㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

311は杯部が椀状の高坏である。ハケ目整形の後に丁寧なヘラ磨きが施されている。口径19.1㎝、底径16.1㎝、器高13.5㎝を測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。

233は二重口縁を持つ器台で、やや大振りの完形品である。口縁は鋭角的に屈曲して強く内傾するため、口縁屈曲部は稜線を呈する。脚部は直線的に裾が広がる。器面整形は目の粗いハケ目による。口径12.1㎝、底径20.8㎝、器高25.5㎝を測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色～橙灰色を呈する。**122**は器台で、完形品である。口縁は「く」の字状に外反するものの、口縁屈曲部における外面は弧を呈し、内面は弱い稜線を呈する。脚部は直線的に裾広がりである。器面整形は目の粗いハケ目により、脚部内面はナデ。口径13.5㎝、底径15.8㎝、器高17.9㎝を測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**339**は器台で、口縁は「く」の字状に外反するものの短い。このため受部は狭小である。口縁屈曲部は内外面ともに弱い稜線を呈する。脚部は直線的に裾広がりである。器面整形は目の粗いハケ目による。口径10.6㎝、底径14.1㎝、器高17.8㎝を測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色～淡橙灰色を呈する。**178**は器台で、口縁は「く」の字状に外反し、脚部はやや外湾気味に裾が広がる。口縁端部は断面形が「コ」の字状を呈し、ヘラ工具によるキザミ目を施している。口縁屈曲部は内外面ともに弱い稜線を呈する。脚部は直線的に裾広がりである。器面整形は目の粗いハケ目による。口径12.0㎝、底径15.6㎝、器高17.5㎝を測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈する。**382**は器台で、口縁は「く」の字状に外反するものの短い。このため受部は狭小である。口縁屈曲部は内外面とも丸味を呈する。脚部は直線的に裾広がりである。器面整形は目の粗いハケ目による。口径11.9㎝、底径14.6㎝、器高18.6㎝を測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**223**は器台で、完形品である。口縁は「く」の字状に外反し、底径と同じほどに発達させている。口縁屈曲部は内外面とも丸味を呈する。脚部は直線的に裾広がりである。器面整形は目の粗いハケ目により、脚部内面はナデ。口径14.8㎝、底径15.1㎝、器高20.6㎝を測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗橙灰色を呈する。

188は支脚で、中空の裁頭円錐形の上端部に鳥のくちばし状の突起が付いた器形である。脚端部は欠く。上端は平坦で、弱い傾斜を呈する。上端面の頂部縁に角状の粘土塊を貼り付け、外向にのばしている。これは甕などを安定して支える機能向上を図ったものであろう。ハケ目整形の後にヘラで器面を仕上げている。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**164**は中空の裁頭円錐形を呈する支脚である。上端は平坦で狭小である。器面はヘラで仕上げている。上端径4.3㎝、器高9.5㎝、底径10.8㎝を測る。胎土は1㎜ほどの暗褐色砂粒や黒褐色砂粒を多く含む特徴を持ち、淡褐色を呈する。**189**は中空の裁頭円錐形を呈する支脚である。脚端部は欠く。上端は平坦で、弱い傾斜を呈する。器面はハケ目整形を施している。胎土は1㎜ほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡灰褐色～暗灰色を呈する。**304**は支脚で、円柱状の器形を呈する。径5.6㎝ほどを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

283は二重口縁を持つ壷形土器で、底部を欠く。胴部は球状を呈し、頸部は締まる。口縁は鋭角的に屈曲して直線的に強く内傾する。口縁屈曲部には狭小な鍔状が巡る。頸部には断面形が三角形の低い凸帯、胴央部にはハケ工具によるキザミ目を施した断面形が「コ」の字状の凸帯が巡る。器面整形はハケ目で、口縁部だけ横ナデ調整している。口径20.2㎝、胴部最大径28.8㎝を測る。胎土は1㎜～

２㎜ほどの砂粒を多く含み、淡褐色を呈する。**282**は二重口縁を持つ壷形土器で、完形品である。胴部は球状を呈し、頸部は締まる。口縁は鋭角的に屈曲して直線的に強く内傾するため、口縁屈曲部は強い稜線を呈する。頸部には断面形が三角形の低い凸帯、胴央部にはハケ工具によるキザミ目を施した断面形が「コ」の字状の凸帯が巡る。底部は狭小。器面整形は目の細かいハケ目で、口縁部だけ横ナデ調整している。口径18.9㎝、器高37.6㎝、底径7.4㎝、胴部最大径25.7㎝を測る。胎土は１㎜～２㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**365**は二重口縁を持つ壷形土器で、底部を欠く。胴部は球状を呈し、頸部は締まる。口縁は鋭角的に屈曲して直線的に強く内傾するため、口縁屈曲部は強い稜線を呈する。頸部には断面形が三角形の低い凸帯が巡る。器面整形は目の粗いハケ目で、口縁部だけ横ナデ調整している。口径21.8㎝、器壁厚0.5㎝を測る。胎土は１㎜～２㎜ほどの砂粒を多く含み、淡褐色を呈する。**341**は二重口縁を持つ壷形土器で、口縁を欠く。胴部は球状を呈し、頸部は締まる。頸部には断面形が三角形の低い凸帯、胴央部にはハケ工具によるキザミ目を施した断面形が「コ」の字状の凸帯が巡る。底部は狭小。器面整形は目の細かいハケ目である。底径7.7㎝、胴部最大径27.6㎝、器壁厚0.5㎝～0.6㎝を測る。胎土は１㎜～２㎜ほどの砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。

334は二重口縁を持つ壷形土器で、完形品である。胴部は球状を呈するものの、最大径の位置が中位よりやや頸部よりであるため、全体的に胴長の印象を与える。頸部は締まる。口縁は屈曲し、やや内傾気味ではあるが直に立ち上がる。口縁屈曲部は稜線を呈し、端部は平坦である。頸部には断面形が三角形で狭小な凸帯、胴央部には鍔状に発達させた断面形が「コ」の字状の凸帯が巡る。底部は狭小で、僅かに丸味を呈する。器面整形は目の粗いハケ目を施し、さらに口縁部には横ナデ調整、底部にはヘラ磨きして仕上げている。口径21.8㎝、器高38.1㎝、底径8.7㎝、胴部最大径25.3㎝を測る。胎土は１㎜～２㎜ほどの砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。**114**は二重口縁を持つ壷形土器で、胴部下を欠く。口縁は屈曲するものの、やや外反気味に立ち上がる。口縁屈曲部は稜線を呈し、端部は平坦である。頸部には断面形が三角形で狭小な凸帯が巡る。器面整形は目の粗いハケ目で、口縁部だけ横ナデ調整している。口径26.2㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は１㎜～２㎜ほどの砂粒を多く含み、淡褐色を呈する。

179・**343**は壷形土器で底部を欠く。胴部は球状を呈し、頸部は締まる。口縁は外湾しながら立ち上がり、端部は断面形が「コ」の字状に仕上げている。**179**の口縁端面にはヘラ状工具の小口面を用いた斜行文のキザミ目が施されている。器面は内外面とも目の細かいハケ目で整えられ、さらに外面は粗いヘラ磨きが、内面はナデが施されている。口径24.8㎝、胴部最大径29.8㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は１㎜～２㎜ほどの砂粒を含み、淡橙色を呈する。**343**も口縁端面にはヘラ状工具の小口面を用いた斜行文のキザミ目が施されている。器面は内外面とも目の細かいハケ目で整えられ、さらに口縁部だけ横ナデ調整している。口径24.1㎝、胴部最大径29.9㎝、器壁厚0.5㎝を測る。胎土は１㎜～２㎜ほどの砂粒を含み、淡橙色を呈する。

296は短頸直口壷で、胴部下を欠く。口縁が屈曲しながら直立し、頸部が締まっている。口縁屈曲部の内面は丸味を呈するものの、二重口縁を感じさせる。胴部の器壁厚に比べて口縁部は薄い。目の細かいハケ目で整形した後、横ナデで仕上げている。口径20.5㎝、器壁厚1.1㎝を測る。胎土は１㎜～２㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈する。

153は短頸の直口壷で、胴部下半を欠く。口縁部は極めて短く、直立する。ハケ目で内外面を整形の後、さらに口縁だけを横ナデ調整して仕上げている。口径9.8㎝、胴部最大径22.3㎝、器壁厚0.5㎝～0.7㎝を測る。胎土は１㎜～２㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈する。煤が口縁端部まで付着している。**285**は短頸の直口壷で、胴部下半を欠く。口縁部は短く、直立する。ハケ目で内外面を

整形の後、さらに口縁だけを横ナデ調整、胴部外面を粗いヘラ磨きして仕上げている。口径11.5cm、器壁厚0.4cm～0.5cmを測る。胎土は1mm～3mmほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**297**は短頸の直口壷で、胴部下半を欠く。口縁部は短く、僅かに外湾気味に直立する。ハケ目で内外面を整形の後、さらに口縁だけを横ナデ調整、胴部内面をナデて仕上げている。口径13.1cm、器壁厚0.6cm～0.8cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

231は小型の丸底壷である。球形の胴部を呈し、口縁部は短く外反する。頸部の屈曲部内面は丸味を呈し、稜線は弱い。器面は内外とも丁寧なヘラ磨きを施している。口径10.1cm、器高10.7cm、胴部最大径13.5cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。

137・138は丸底壷である。やや押しつぶした球形の胴部を呈し、口縁部は短く、「く」の字状に折れ曲がる。口縁端部の上縁は横ナデ整形時に上方へ僅かに引き出している。頸部の屈曲部内面には弱い稜線を呈する。器面は内外とも丁寧なヘラ磨きを施している。**137**は口径16.1cm、胴部最大径19.8cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**182**は口径15.8cm、胴部最大径19.6cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**131**は小型の丸底壷で、口縁部を欠く。胴部は球をやや押しつぶした形状を呈する。口縁は僅かに外反気味に直立する。ハケ目整形の後、底部はヘラ削りして仕上げている。胴部最大径12.9cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。**361**は小型の丸底壷である。胴部は球状を呈するものの、最大径の位置が胴央よりやや頸部よりであるため、全体的に底部が尖った印象を与える。口縁部は僅かに外反しながら立ち上がる。頸部の屈曲部内面には弱い稜線を呈する。器面は内外とも丁寧なヘラ磨きを施している。口径11.7cm、器高12.1cm、胴部最大径14.3cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色～黒色を呈する。**130**は小型の丸底壷である。胴部は球状を呈し、口縁部は僅かに外湾気味に直立する。頸部の屈曲部内面には弱い稜線を呈する。器面は胴央部以下はハケ目、それ以外はヘラ磨きを施している。口径12.1cm、器高15.0cm、胴部最大径17.0cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡褐色を呈する。

155は壷で、底部を欠く。胴部は球状を呈する。口縁は「く」の字状に外反し、口縁端部の上縁を横ナデで上方に短く発達させている。頸部の屈曲部内面は丸味を呈し、弱い稜線である。器面はハケ目整形の後、さらに口縁は横ナデ、底部はヘラ削り調整している。口径12.9cm、胴部最大径17.1cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。**174**は壷で、底部を欠く。胴部は球状を呈し、口縁部は僅かに外湾気味に直立する。頸部の屈曲部内面には弱い稜線を呈する。器面はハケ目整形し、口縁は横ナデ調整している。胴部最大径20.0cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡褐色を呈する。

129は丸底に近い小型の壷である。胴部は胴央部が張り、やや押しつぶした球形を呈する。口縁部は短く、外反しながら立ち上がる。口縁端部を横ナデで下方に短く発達させている。頸部の屈曲部内面は丸味を呈し、弱い稜線である。底部は狭小を呈するが、座りは安定している。器面はハケ目整形の後に粗いヘラ磨きを施し、口縁部だけは横ナデ調整している。口径12.5cm、器高12.0cm、底径3.8cm、胴部最大径17.1cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。**126**は小型の壷である。胴部は胴央部が張り、球状を呈する。口縁は「く」の字状に外反する。このため、頸部の屈曲部内面は稜線を呈している。底部は狭小を呈し、僅かに丸味を呈しているため座りは不安定である。器面はハケ目整形の後、外面の胴央から底部には粗いヘラ磨きを施し、内面は粗いナデ調整している。口径12.6cm、器高14.3cm、底径5.8cm、胴部最大径16.8cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を含み、淡灰色を呈する。**330**は小型の壷である。胴部は胴央部が張り、球状を呈する。口縁は「く」の字状に外反す

る。このため、頸部の屈曲部内面は稜線を呈している。底部は狭小で、僅かに丸味を呈しているため座りは不安定である。器面はハケ目整形の後、外面の胴央から底部には粗いヘラ磨きを施し、内面は粗いナデ調整している。口径13.8cm、器高14.6cm、底径5.8cm、胴部最大径16.2cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡橙白色を呈する。**287**は小型の壷で、底部を欠く。胴部は胴央部が張り、球状を呈する。口縁は「く」の字状に外反する。このため、頸部の屈曲部内面は稜線を呈している。器面はハケ目整形の後、外面の胴央から底部には粗いヘラ磨きを施し、口縁部だけ横ナデ調整している。口径11.9cm、胴部最大径15.8cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

161は壷としたが、甕とする見解もある。胴部は胴央部が張り、球状を呈する。口縁は「く」の字状に外湾する。このため、頸部の屈曲部内面は稜線を呈している。底部は狭小であるが平坦で、座りは安定している。器面はハケ目整形の後、外面の胴央から底部には粗いヘラ削りを施してさらに粗いハケ目調整している。内面は丁寧なナデ調整している。口径13.8cm、器高19.0cm、底径5.8cm、胴部最大径14.5cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。外面の胴央から底部には煤が付着している。

398は小型の甕で、胴央下を欠く。口縁は短く、「く」の字状に外反する。頸部は、内面に弱い稜線を、外面には曲面を呈している。口縁端部は横ナデで下方に短く発達させている。器面は内外面ともハケ目整形の後、内面だけ粗いヘラ磨きを施している。口径13.8cm、胴部最大径14.6cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡橙白色を呈する。煤が口縁端部まで付着している。

402は小型の甕で、胴央下を欠く。口縁は「く」の字状に外反しながら直線的に短く立ち上がる。頸部屈曲部は、内面に弱い稜線を持つ。器面は内外面とも目の粗いハケ目整形の後、口縁部だけ横ナデ調整している。口径18.1cm、器壁厚0.5cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。煤が口縁端部まで付着している。

142は小型の甕で、胴央下を欠く。口縁は「く」の字状に外反しながら直線的に立ち上がる。頸部屈曲部は、内面に稜線を持つ。口縁端部は断面形が「コ」の字状を呈する。器面は内外面ともハケ目整形の後、粗いヘラ磨きを施している。口径24.0cm、器壁厚0.5cmを測る。胎土は1㎜ほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡橙灰色を呈する。

136は小型の甕で、胴央下を欠く。口縁は「く」の字状に外反し、短い。頸部屈曲部は、内面に弱い稜線を持つ。器面整形は内面には目の細かいハケ、外面には目の粗いハケ刷毛をそれぞれ用いている。外面にはさらにナデ調整している。口径21.6cm、器壁厚0.4cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡橙色を呈する。

240は小型の甕で、胴央下を欠く。口縁は短く、「く」の字状に外反する。頸部屈曲部は、内面に弱い稜線を持つ。口縁端部は横ナデで上下両方に短く発達させている。器面は内外面ともハケ目整形の後、口縁部だけ横ナデ調整している。口径21.0cm、器壁厚0.4cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡橙白色を呈する。

211・**234**は小型の甕で、胴央が張り、胴長的器形である。口縁は短く、「く」の字状に外反する。頸部屈曲部は、内面に稜線を持つ。底部は小さく、平坦ではないため、座りは不安定で自立できない。器面は内外面ともハケ目整形の後に、口縁部だけ横ナデ調整している。**234**はさらに胴央以下の外面をナデて仕上げている。口径15.2cm、器高19.0cm、底径6.2cm、胴部最大径15.6cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡茶褐色～淡橙灰色を呈する。煤が口縁端部まで付着している。**211**は口径15.1cm、器高17.1cm、底径4.6cm、胴部最大径15.0cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

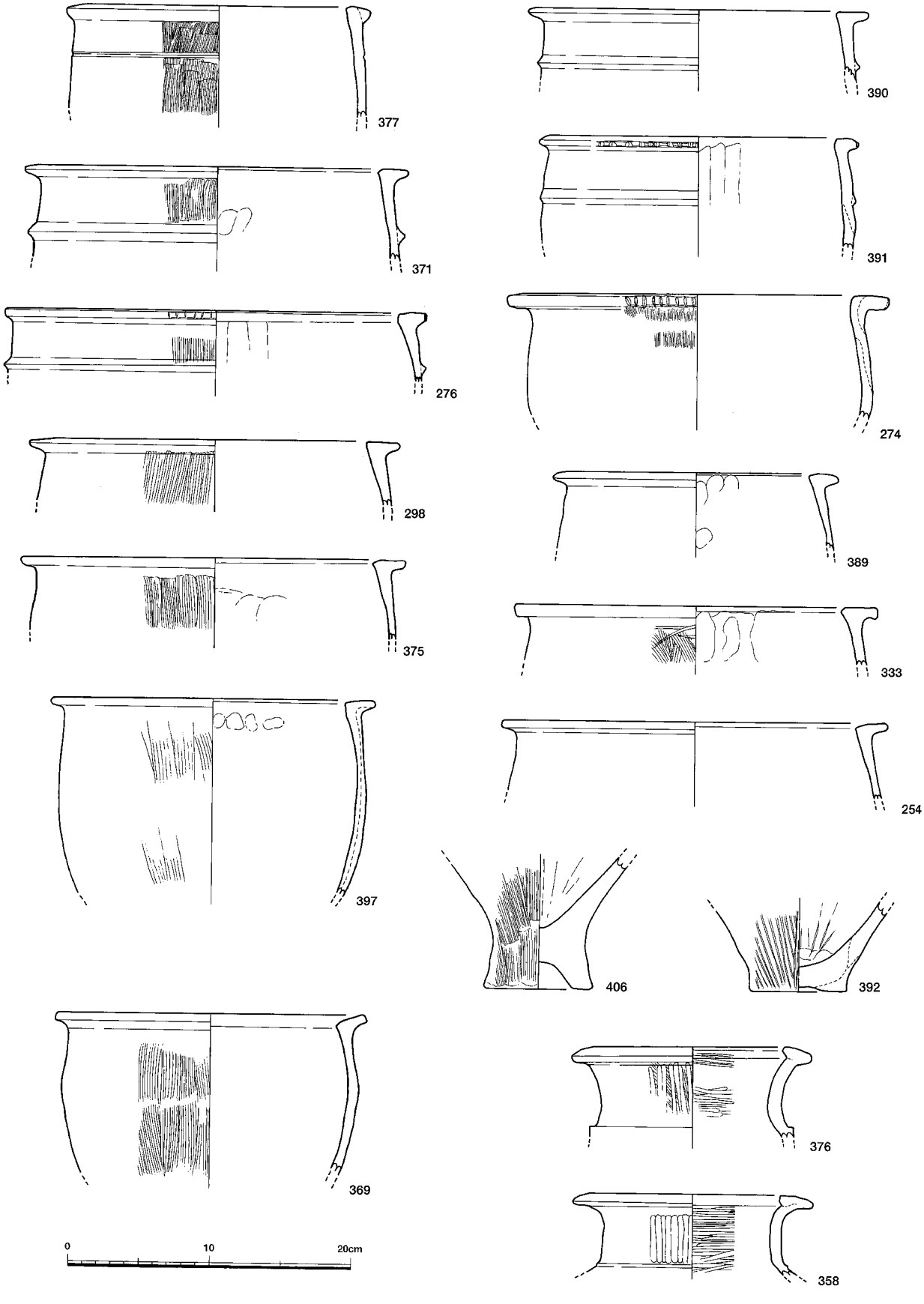


Fig.84　土器集積遺構SX107出土遺物実測図1（1/4）

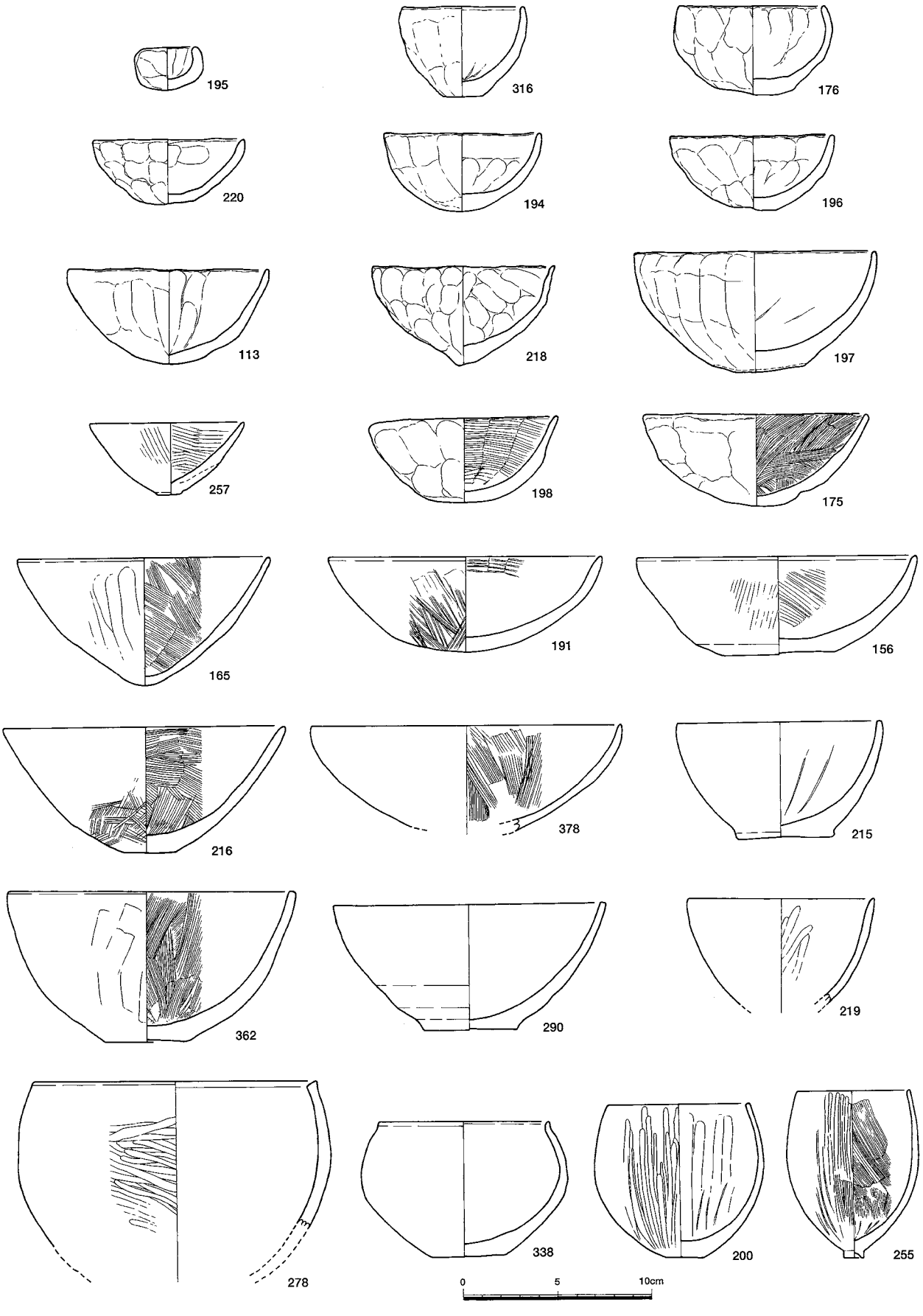


Fig.85　土器集積遺構SX107出土遺物実測図2（1/3）

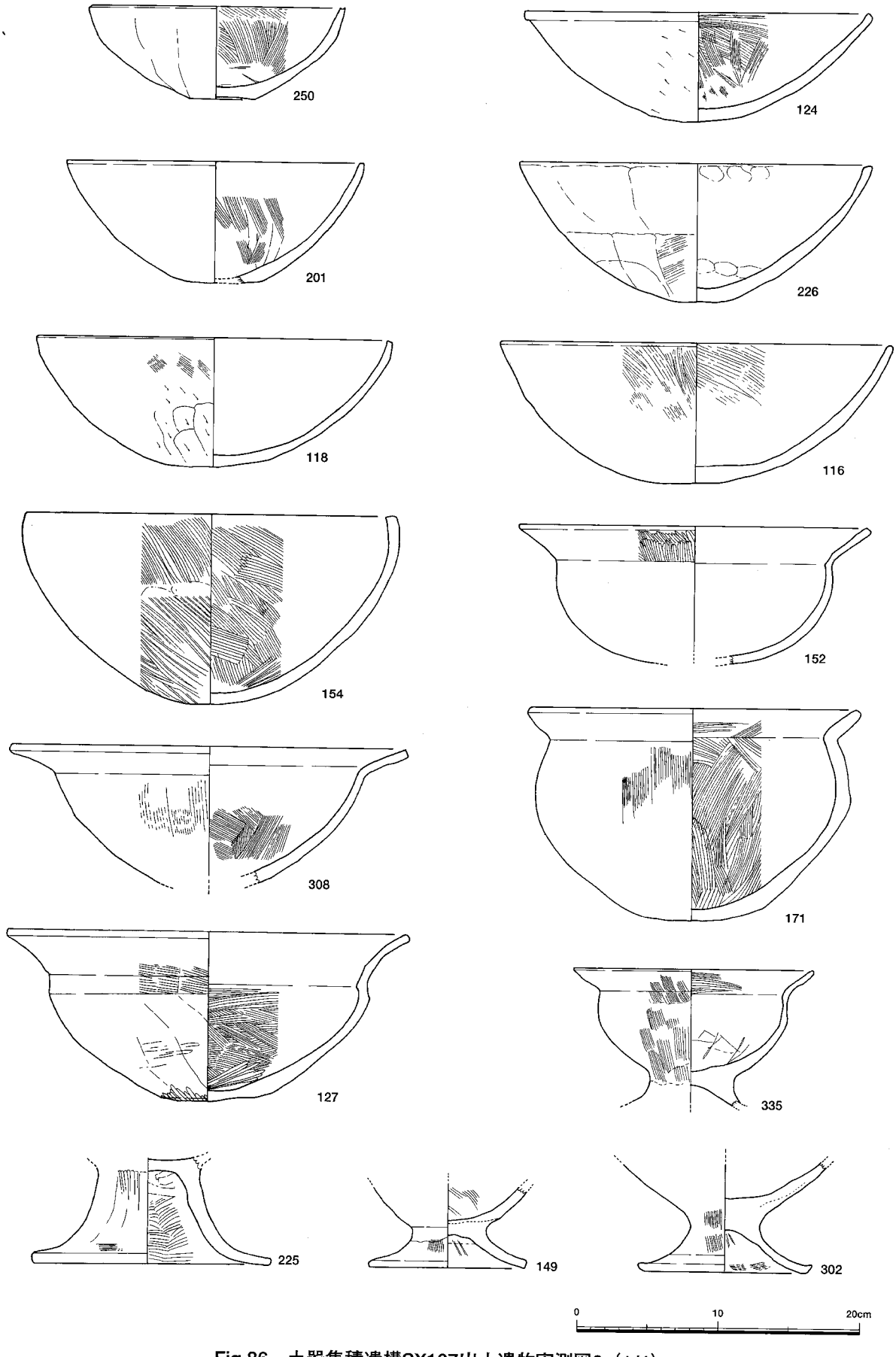


Fig.86　土器集積遺構SX107出土遺物実測図3（1/4）

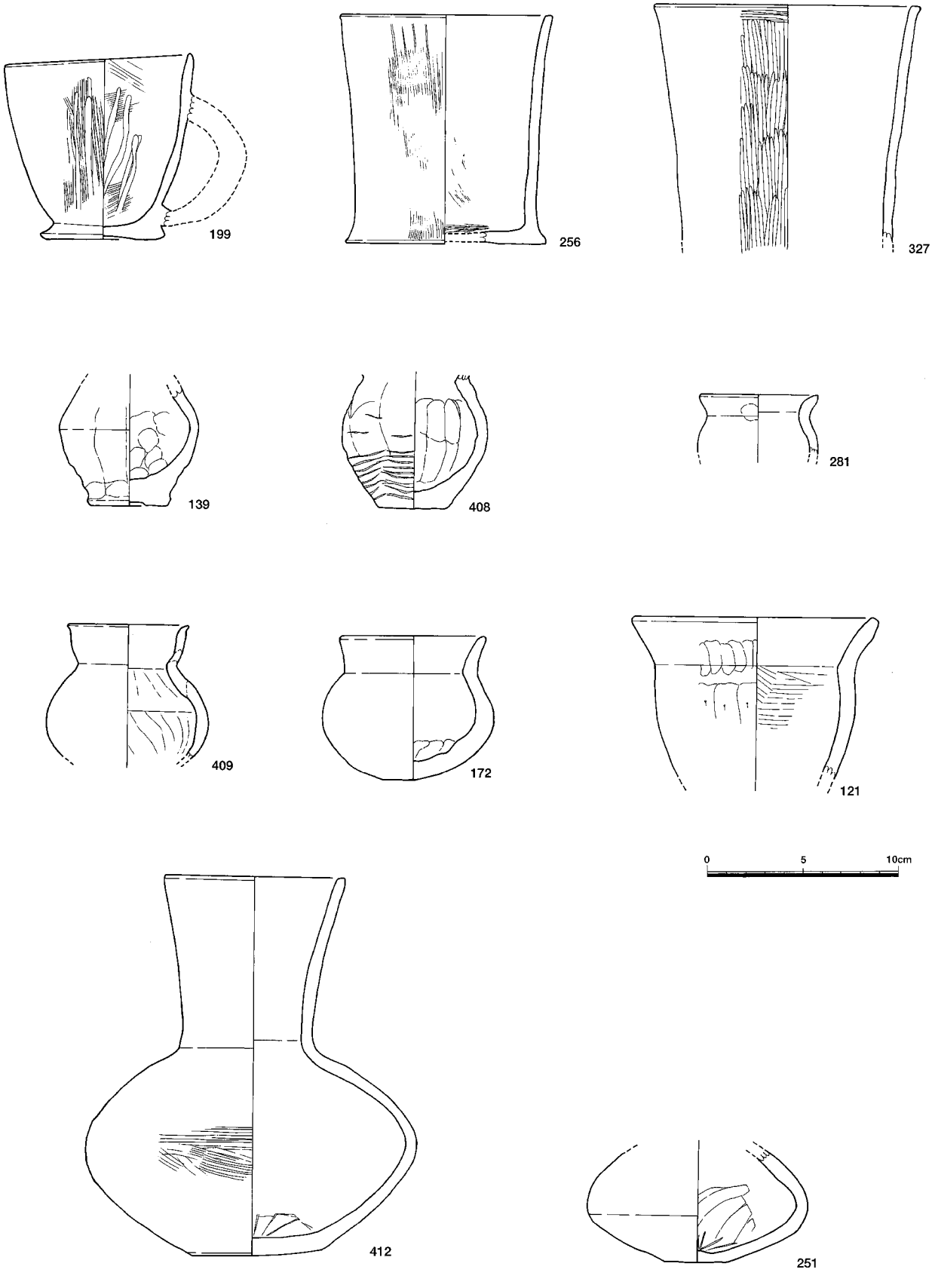


Fig.87　土器集積遺構SX107出土遺物実測図4（1/3）

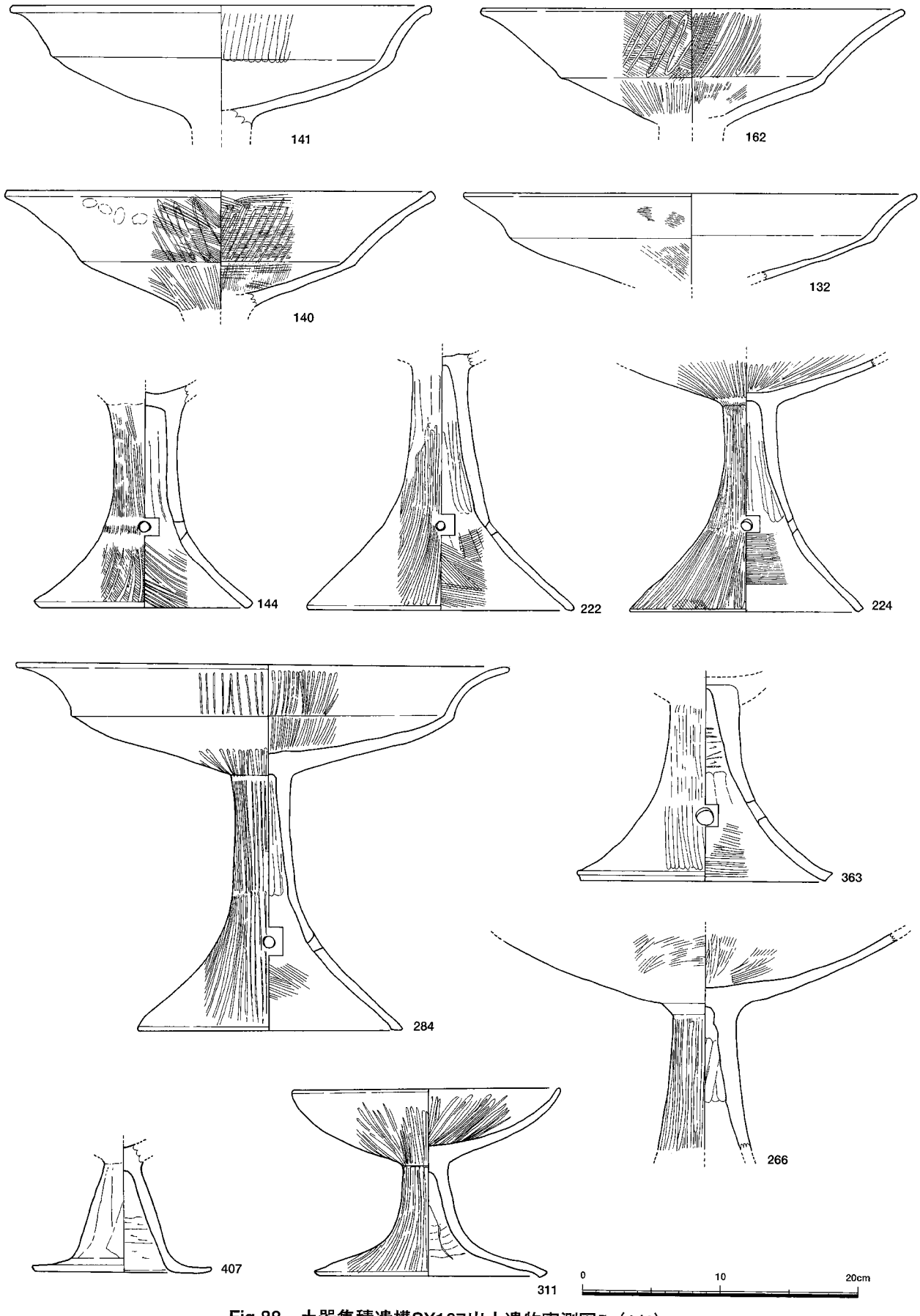


Fig.88 土器集積遺構SX107出土遺物実測図5（1/4）

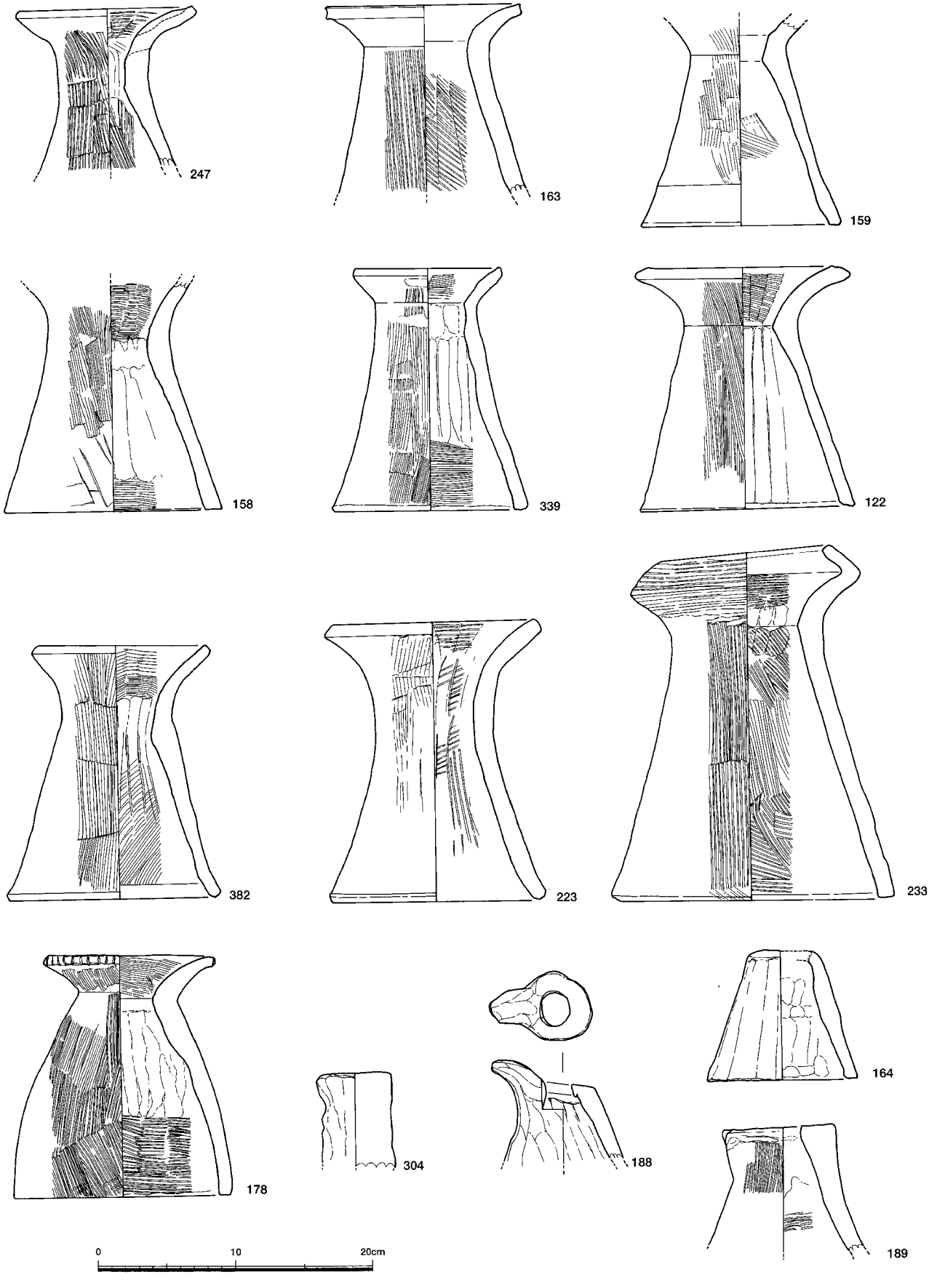


Fig.89　土器集積遺構SX107出土遺物実測図6（1/4）

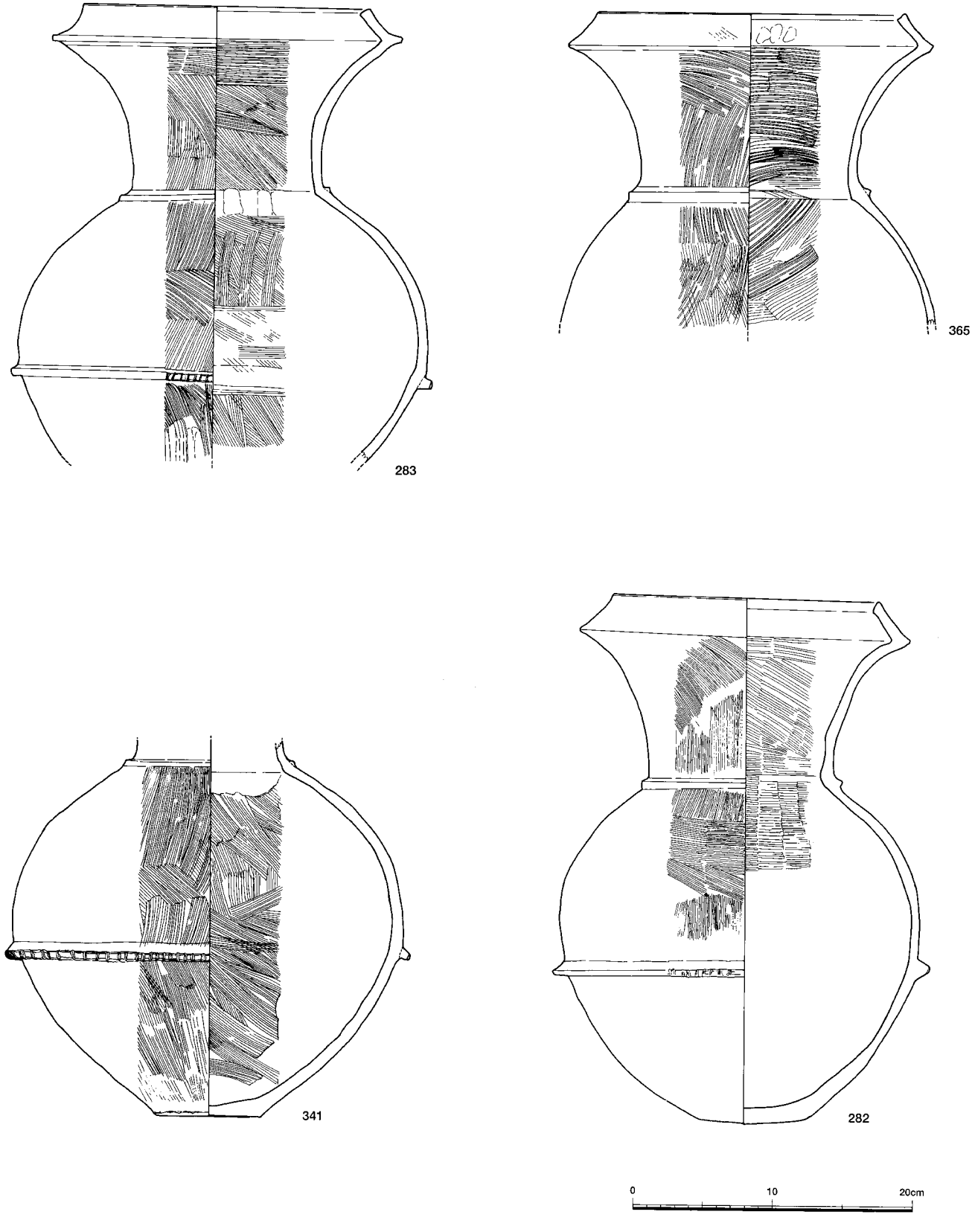
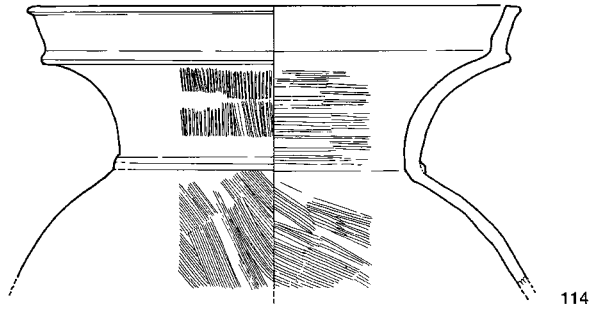
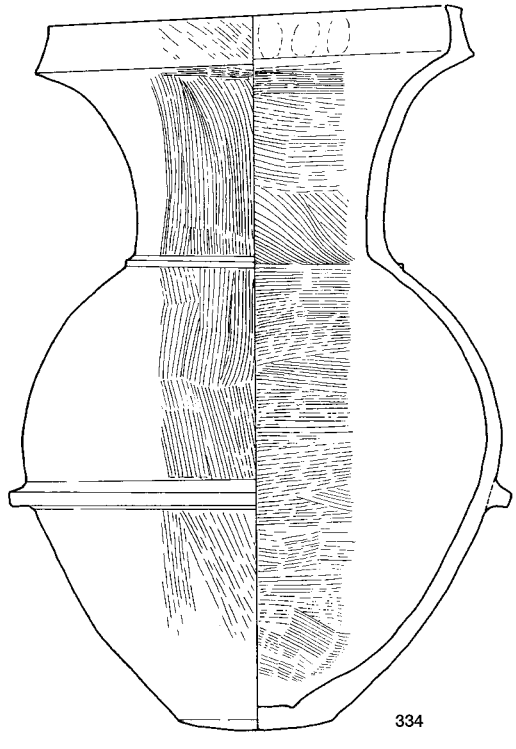


Fig.90 土器集積遺構SX107出土遺物実測図7（1/4）





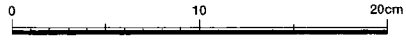


Fig.91　土器集積遺構SX107出土遺物実測図8（1/4）

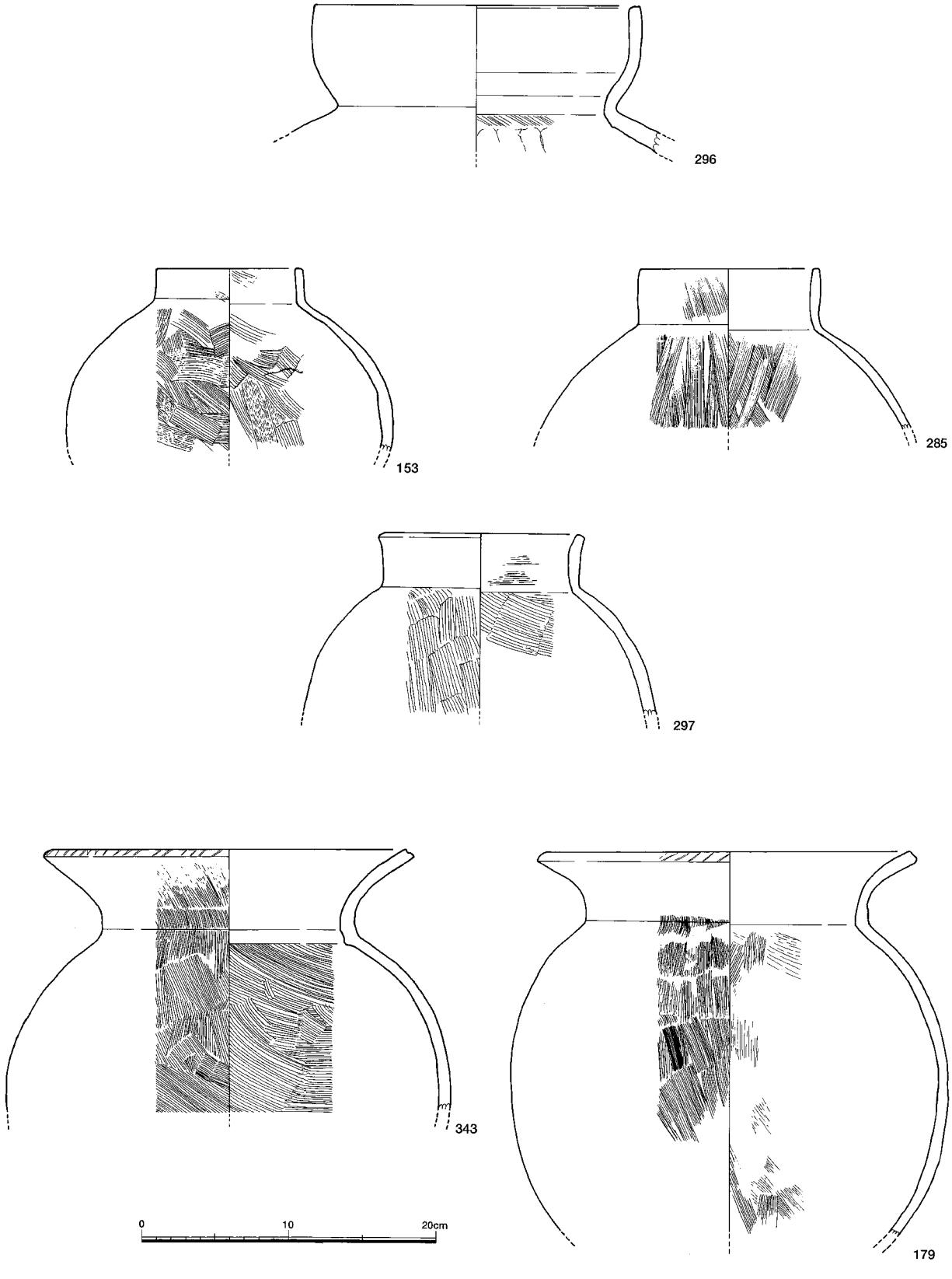


Fig.92　土器集積遺構SX107出土遺物実測図9（1/4）

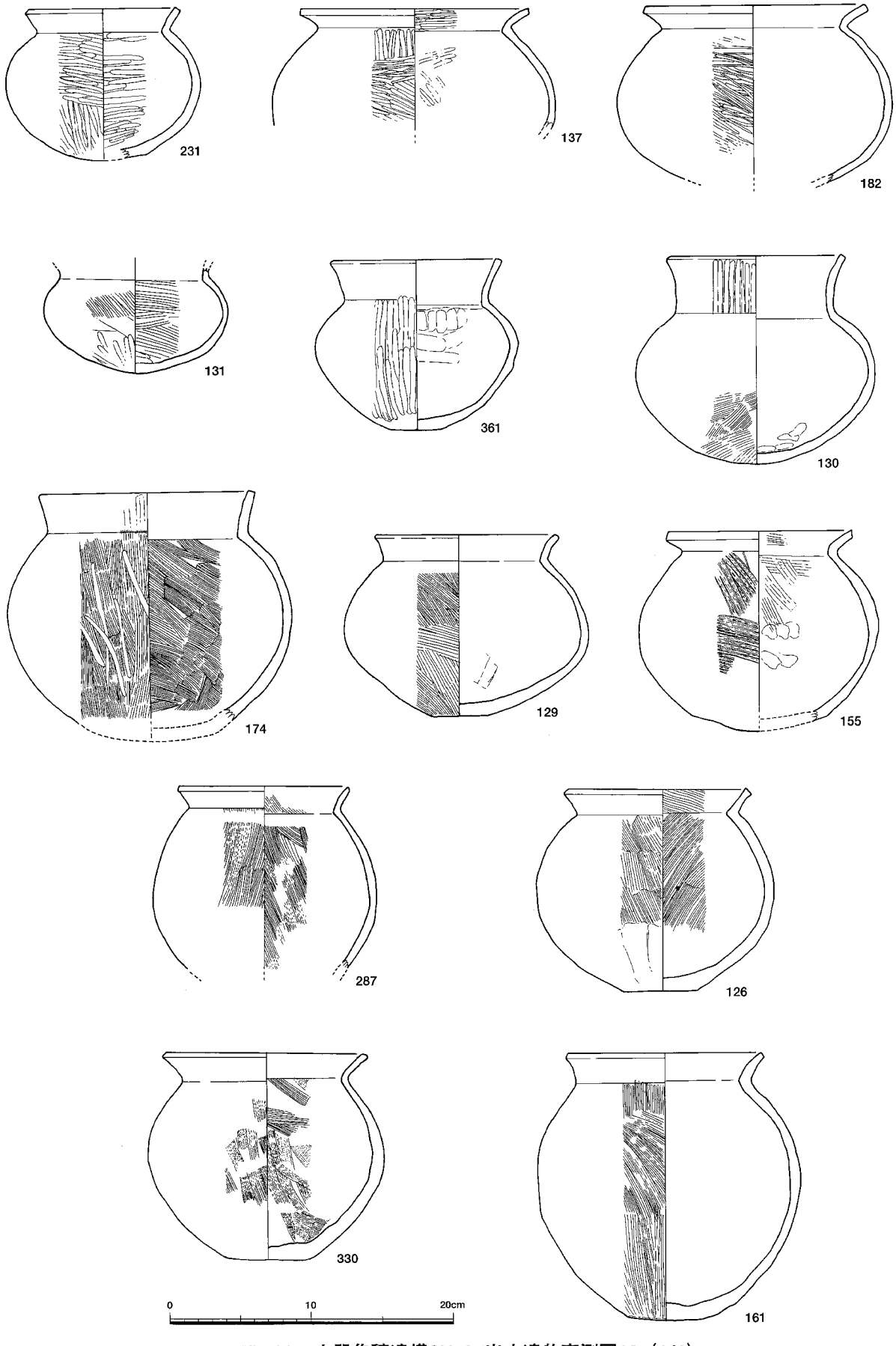


Fig.93　土器集積遺構SX107出土遺物実測図10（1/4）

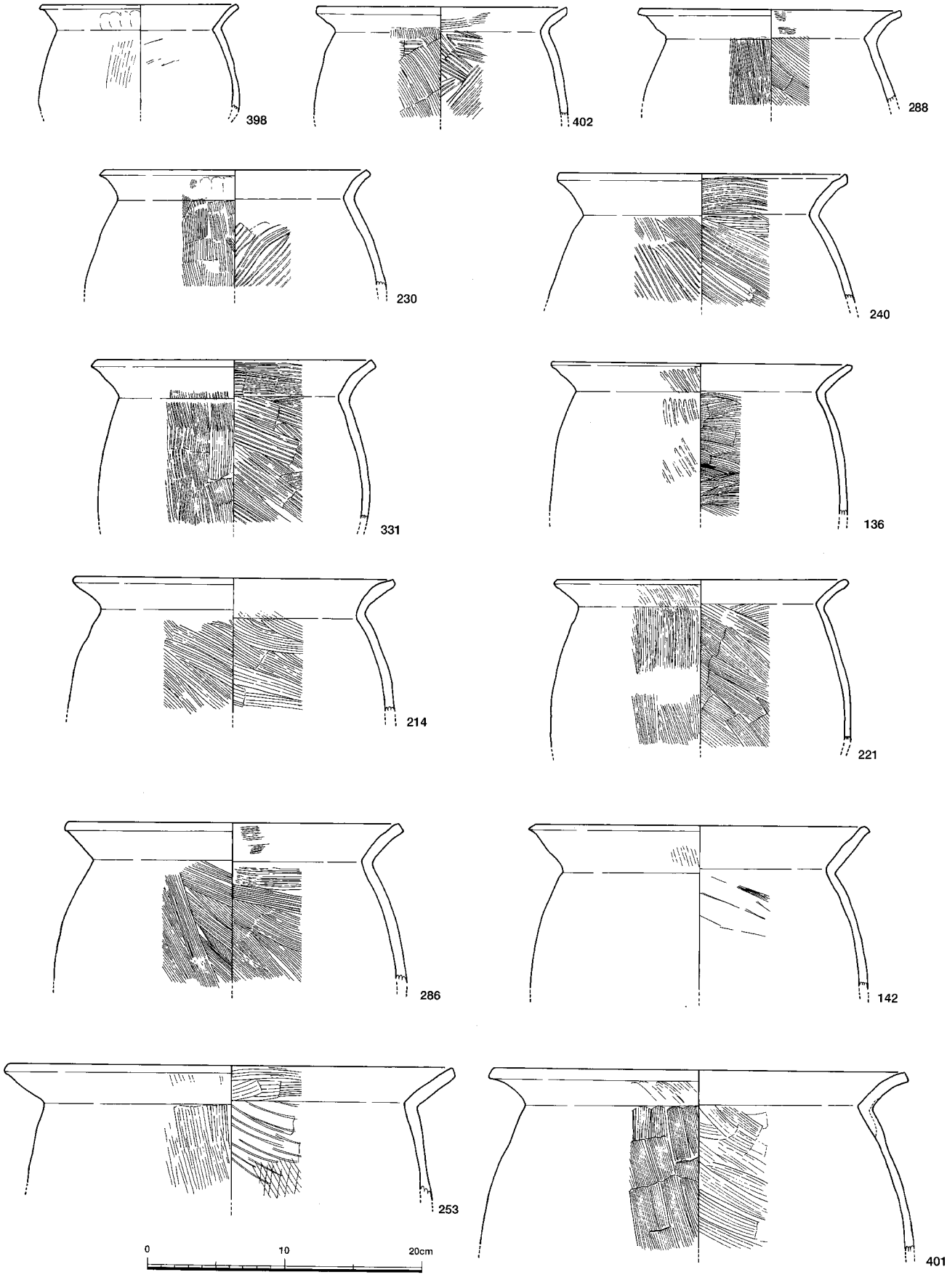


Fig.94　土器集積遺構SX107出土遺物実測図11（1/4）

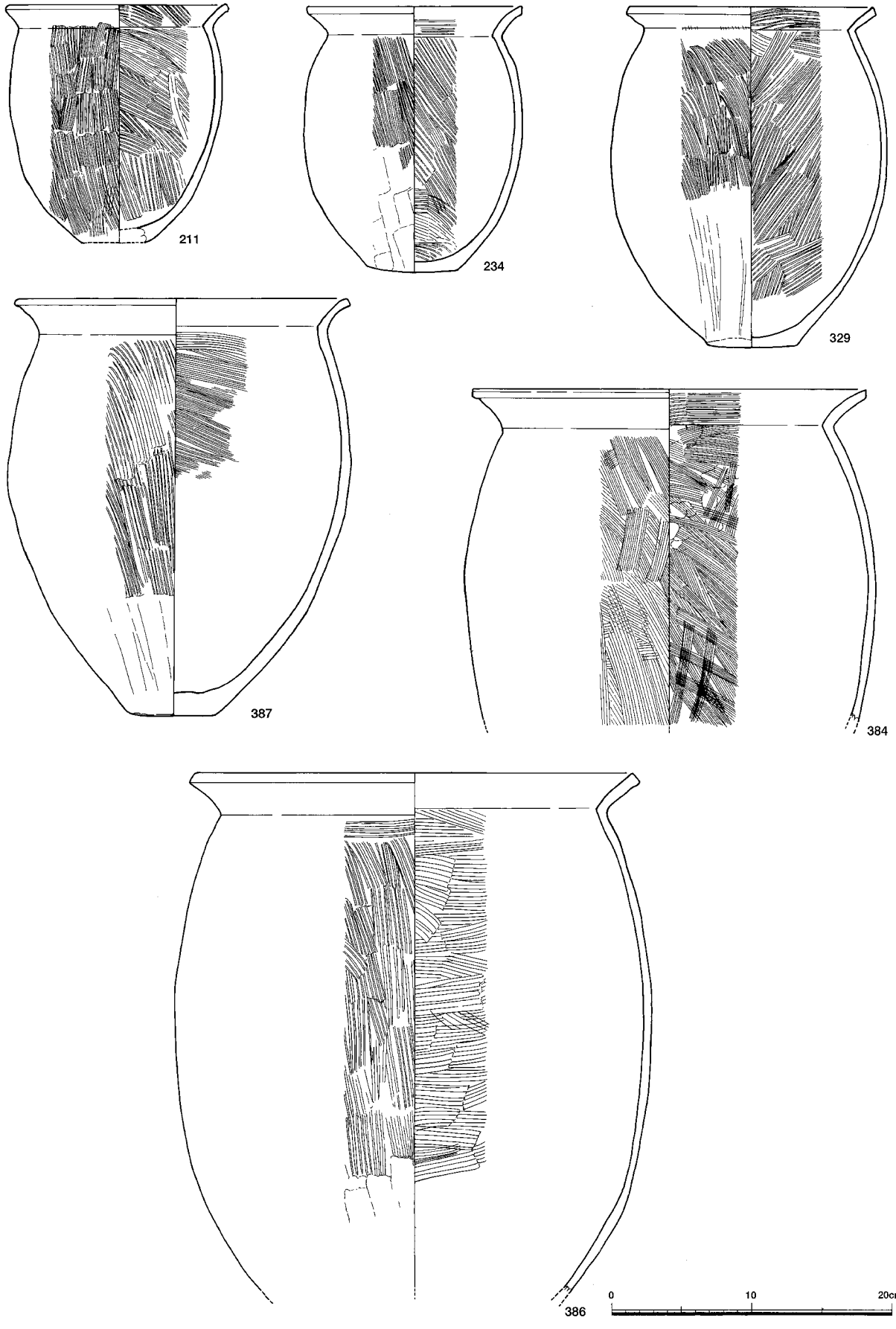


Fig.95　土器集積遺構SX107出土遺物実測図12（1/4）

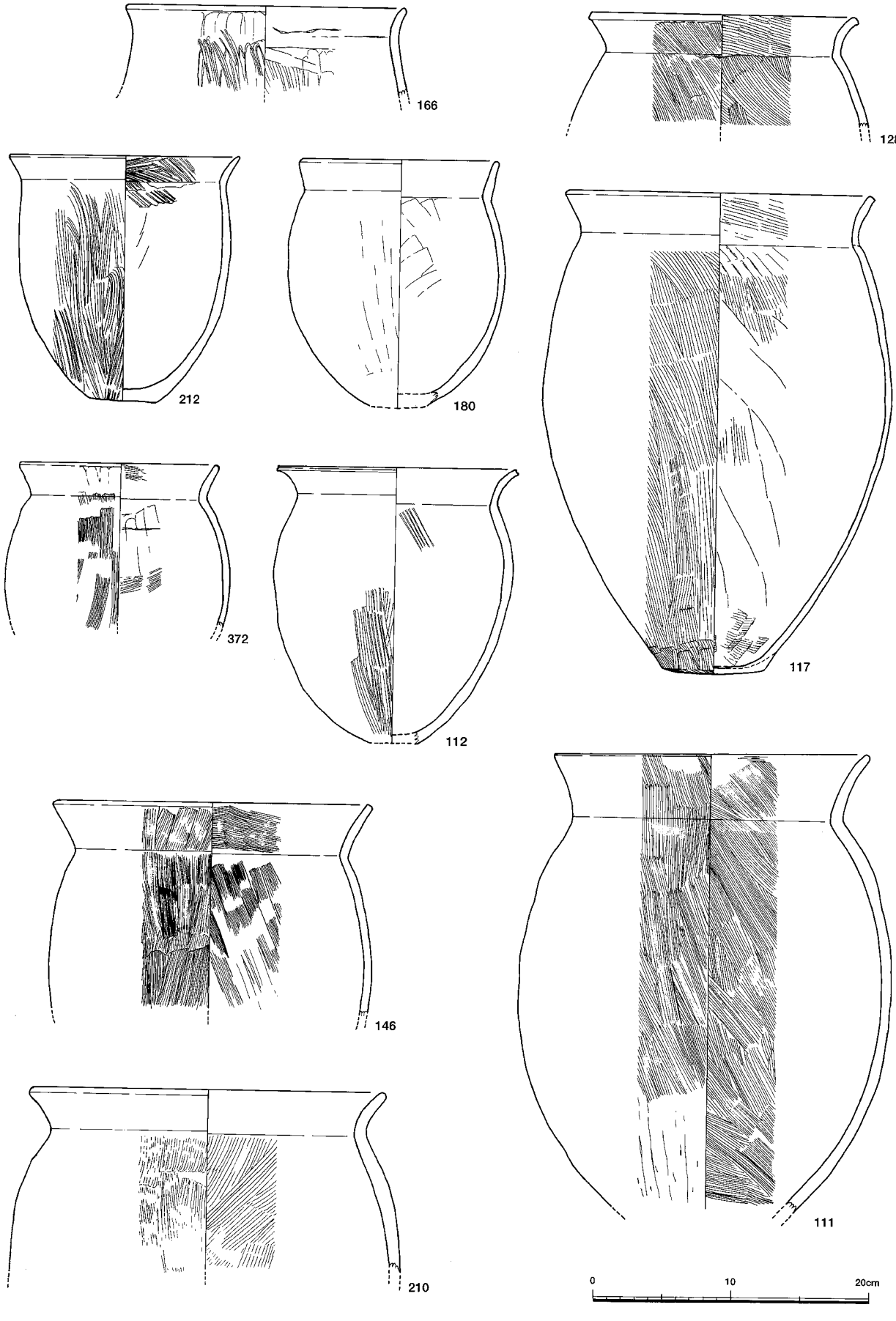


Fig.96　土器集積遺構SX107出土遺物実測図13（1/4）

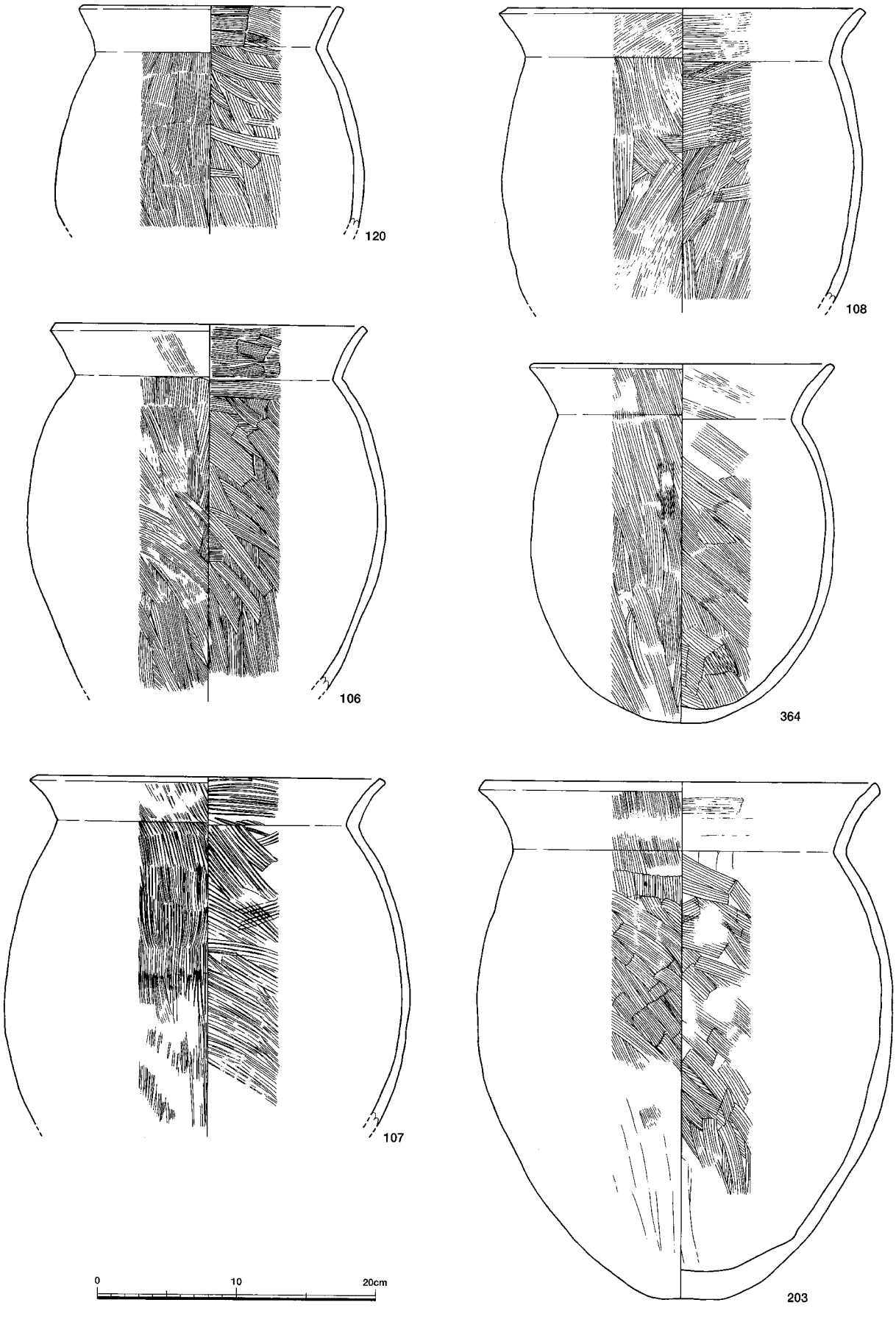


Fig.97　土器集積遺構SX107出土遺物実測図14（1/4）

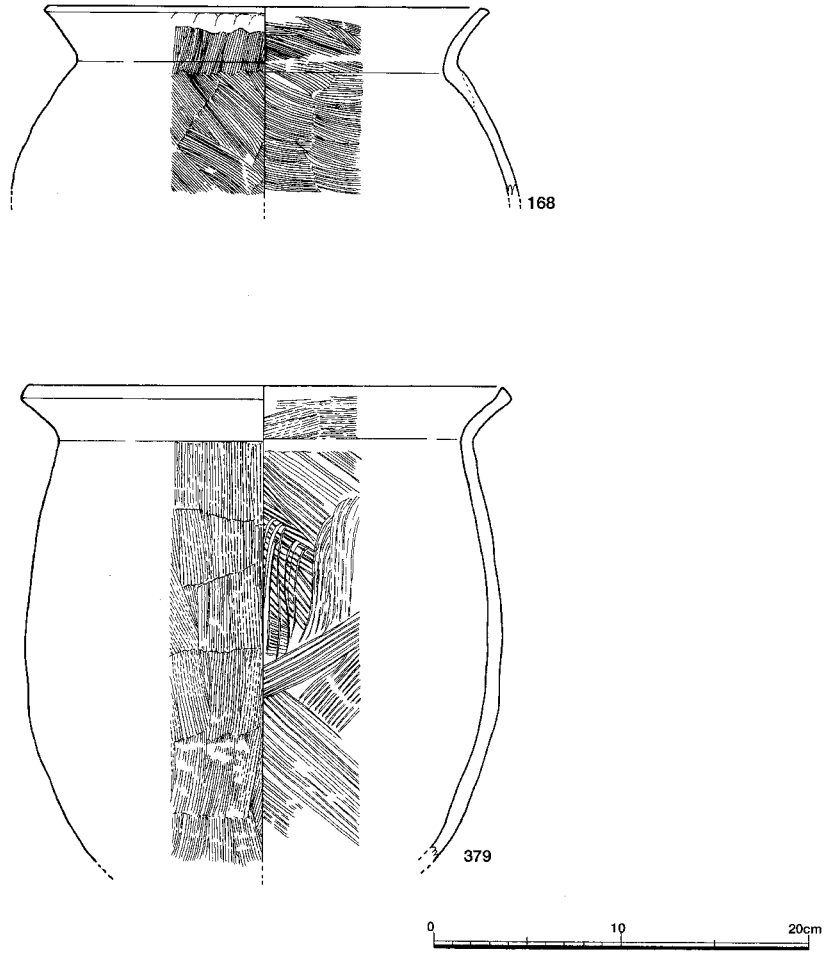


Fig.98　土器集積遺構SX107出土遺物実測図15（1/4）

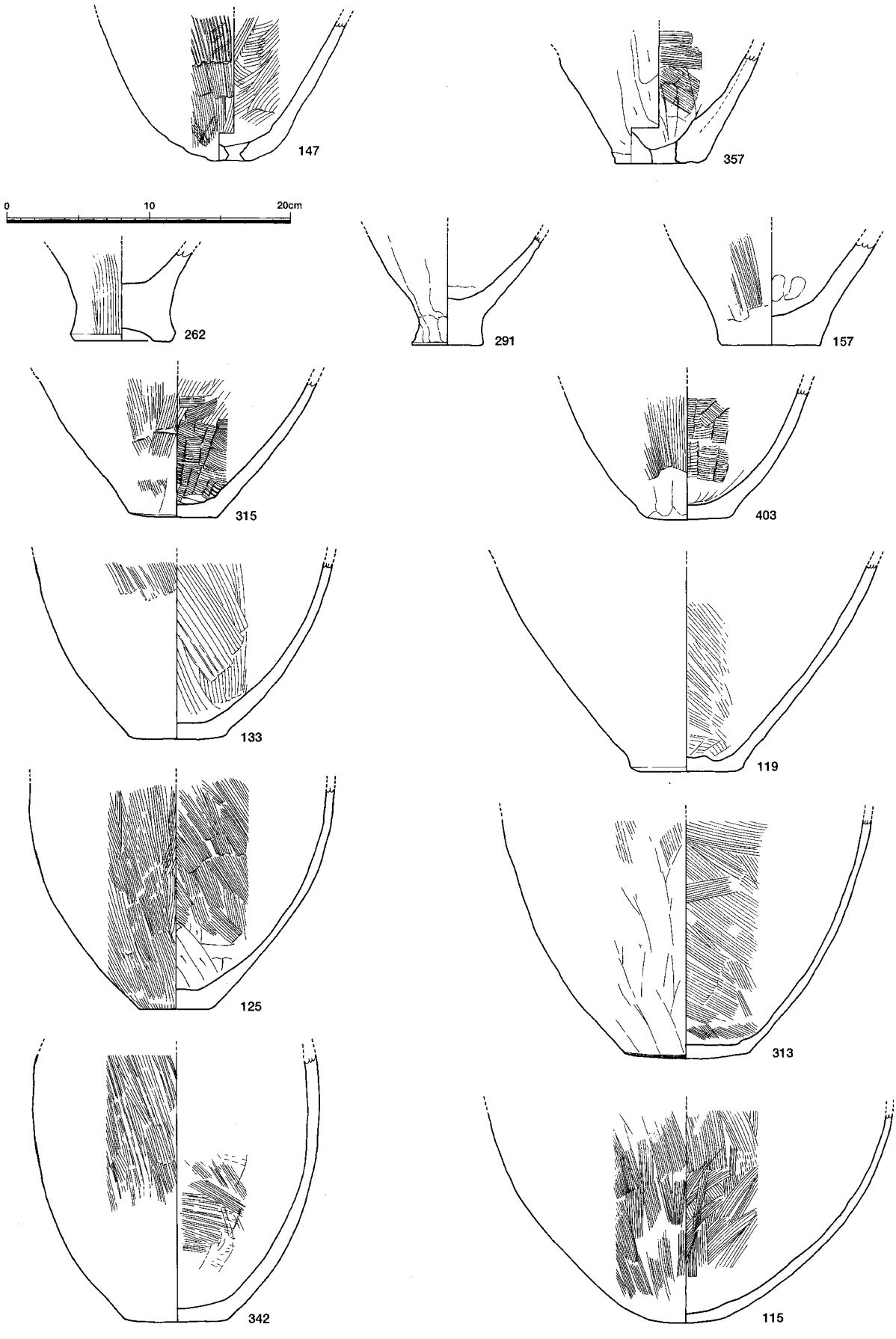
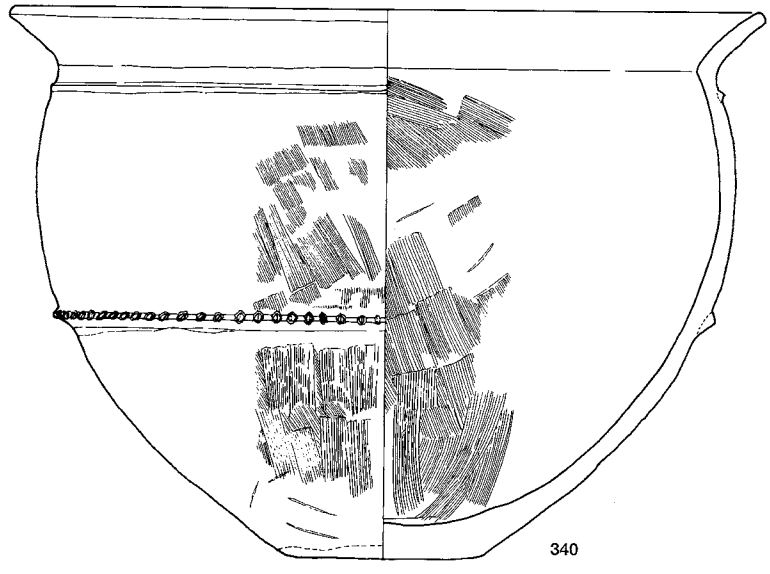
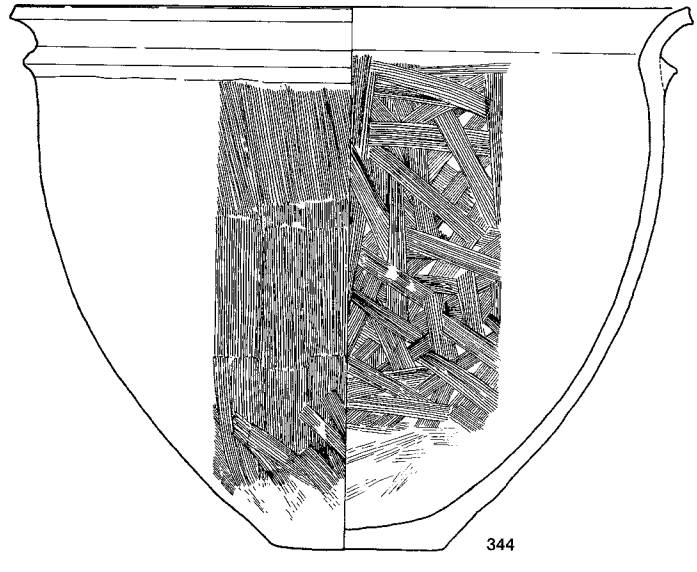


Fig.99　土器集積遺構SX107出土遺物実測図16（1/4）





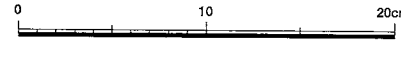


Fig.100　土器集積遺構SX107出土遺物実測図17（1/4）

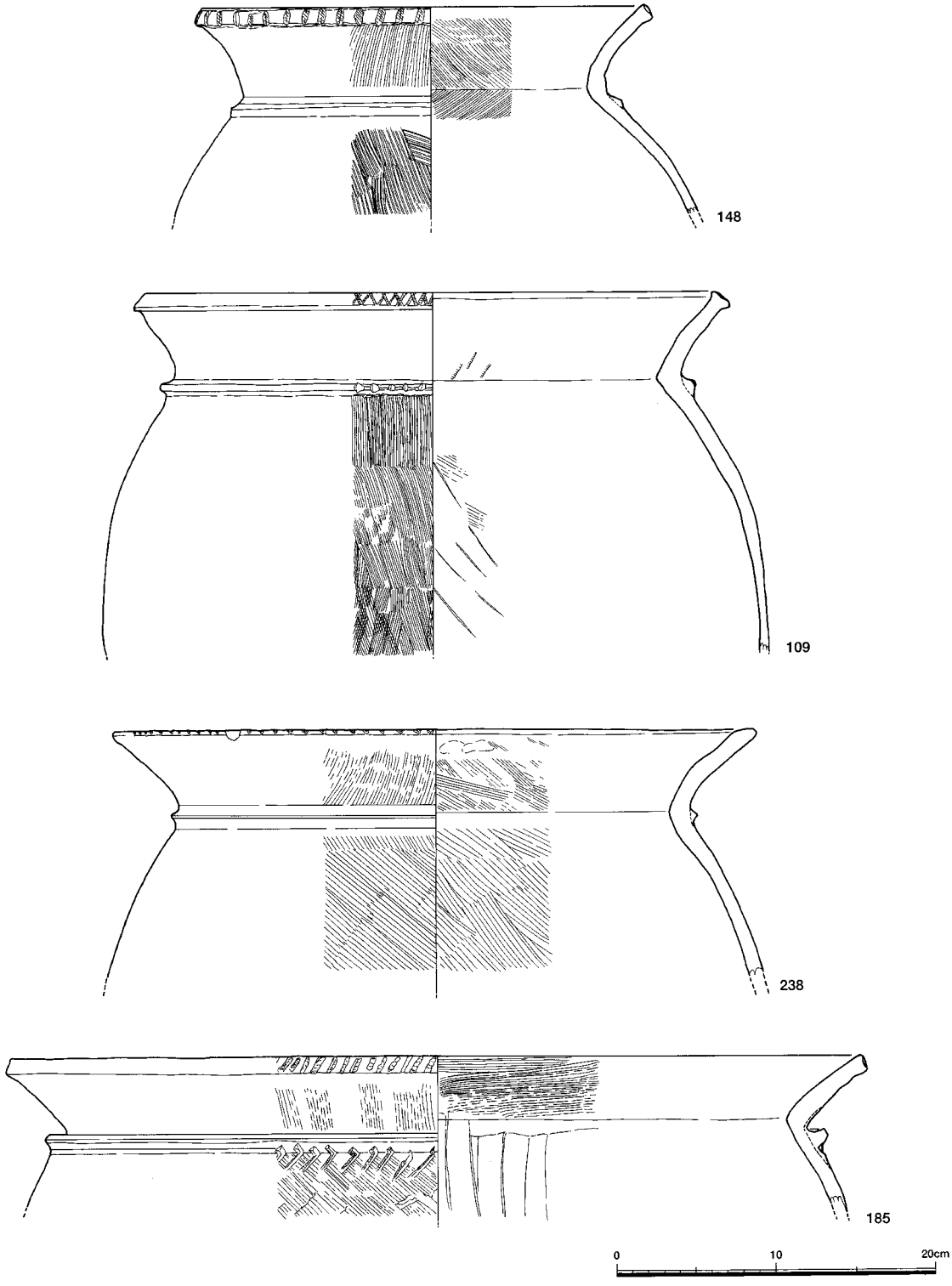


Fig.101　土器集積遺構SX107出土遺物実測図18（1/4）

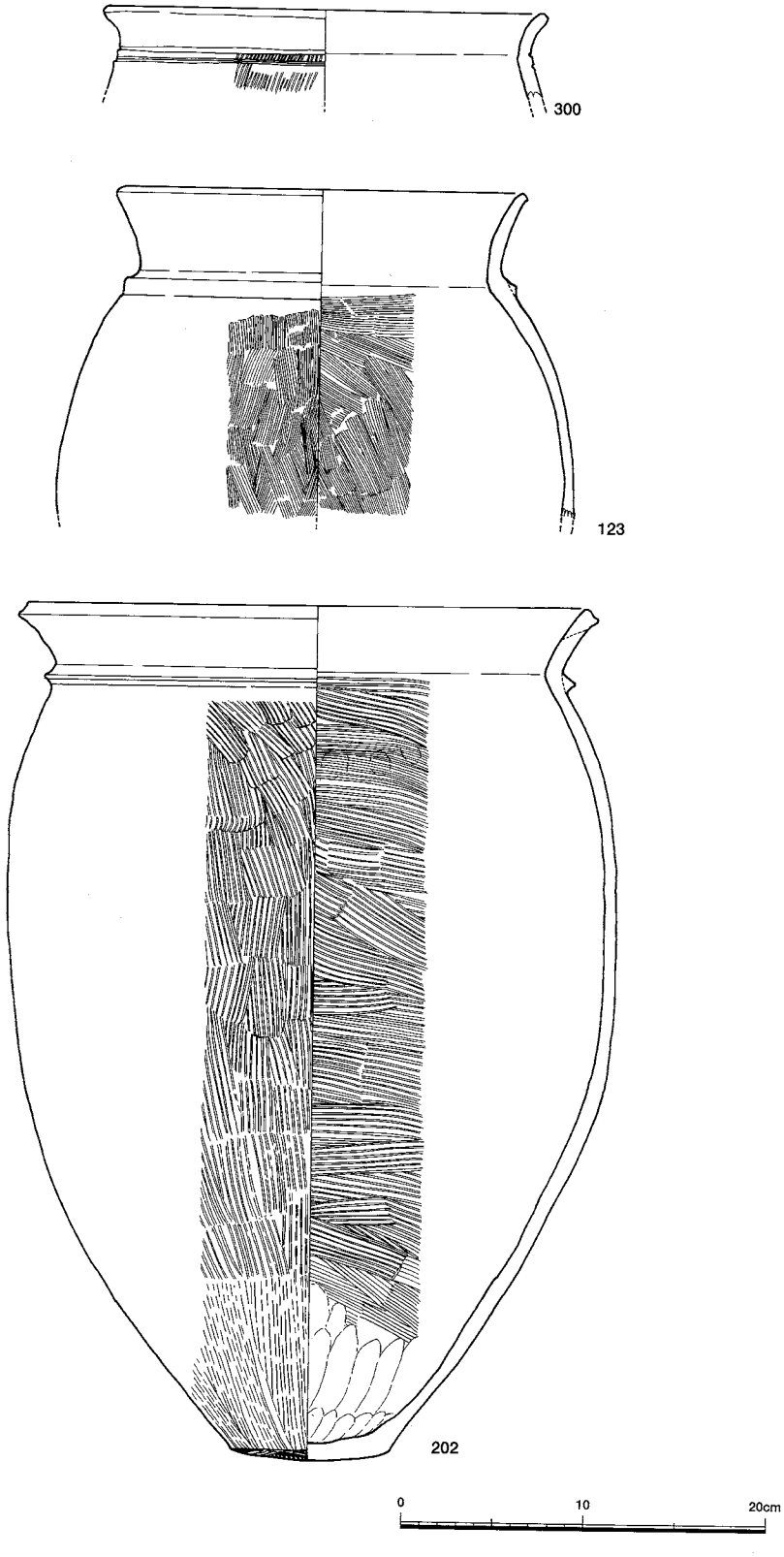


Fig.102　土器集積遺構SX107出土遺物実測図19（1/4）

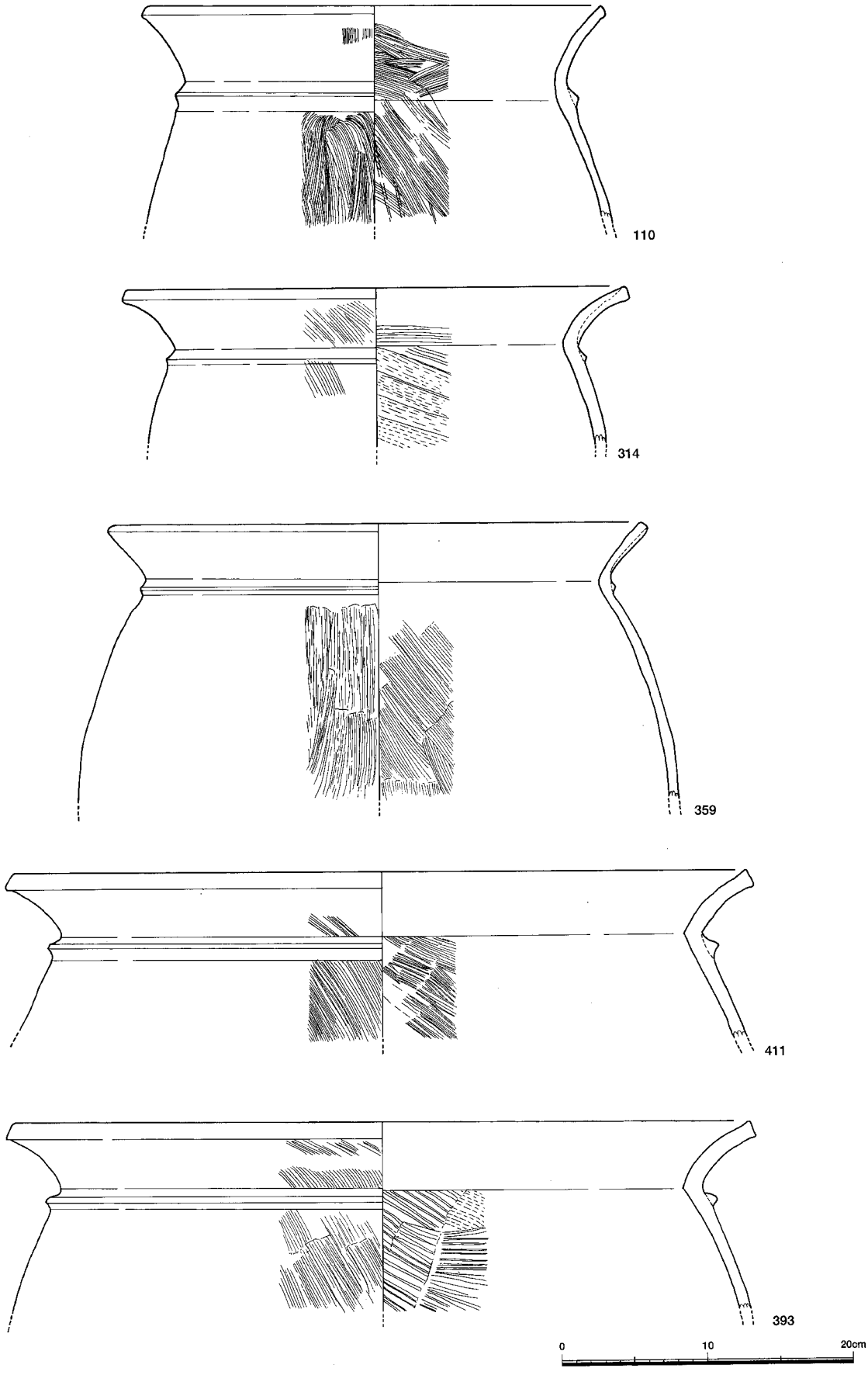


Fig.103　土器集積遺構SX107出土遺物実測図20（1/4）

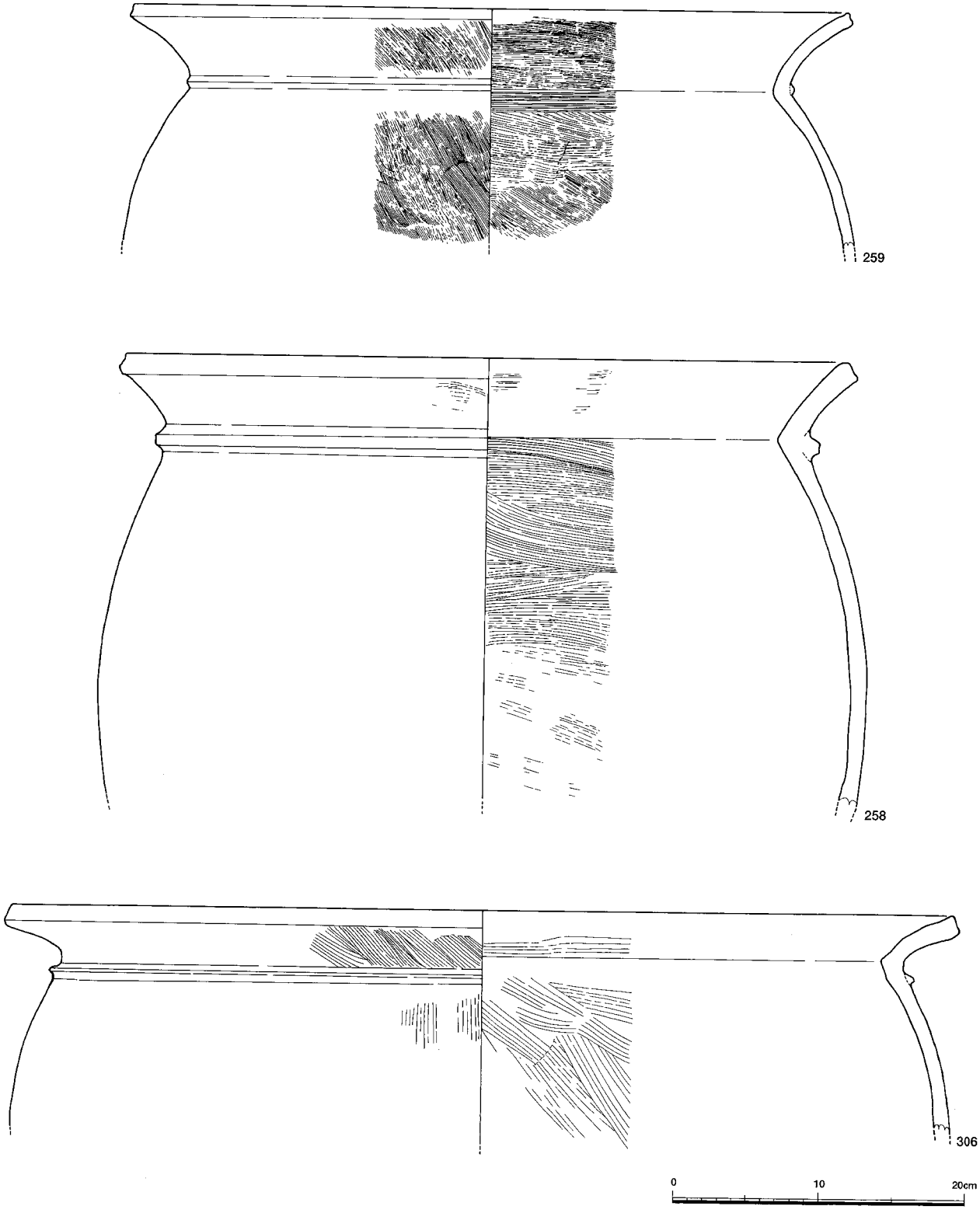


Fig.104　土器集積遺構SX107出土遺物実測図21（1/4）

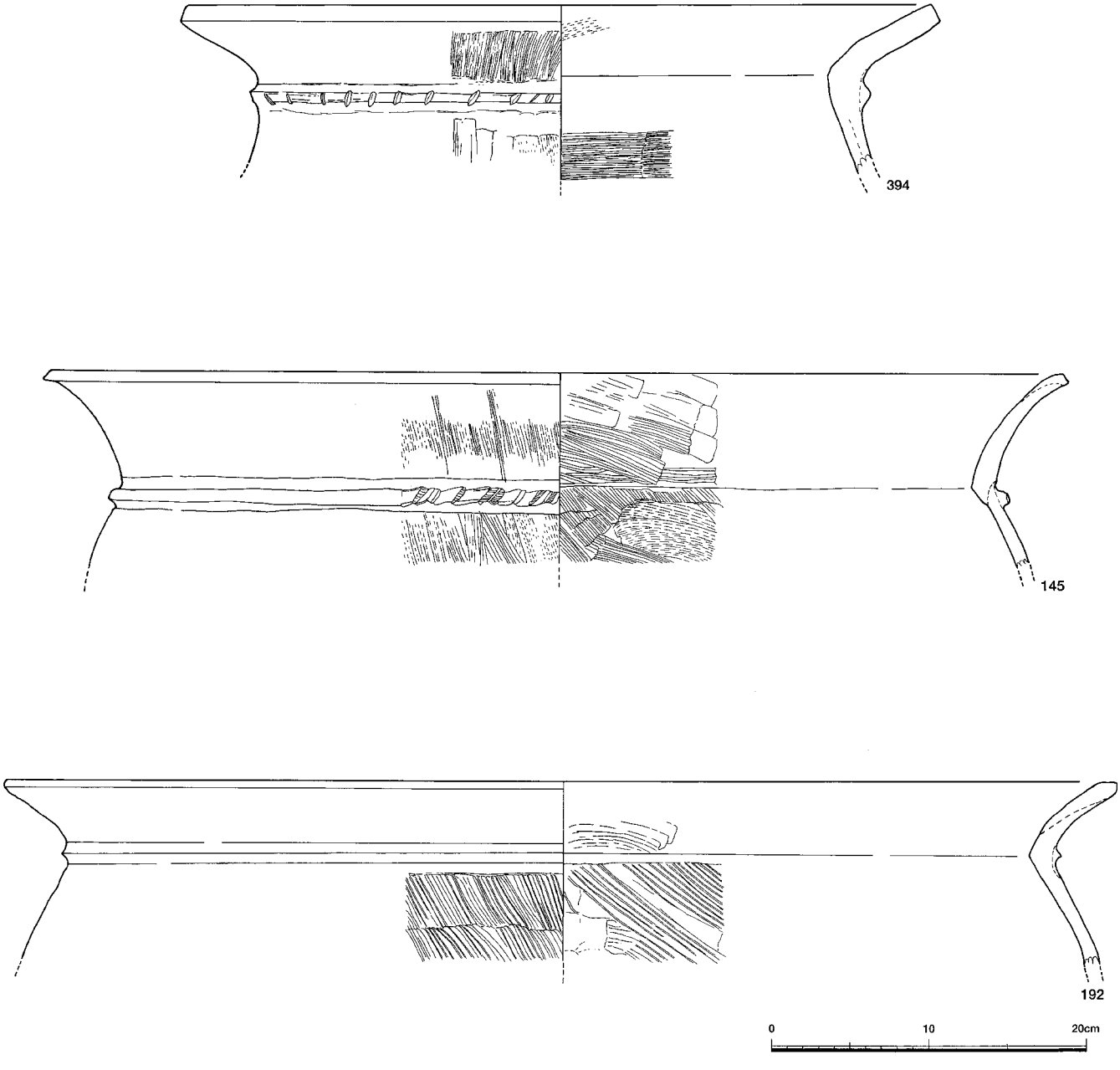


Fig.105　土器集積遺構SX107出土遺物実測図22（1/4）

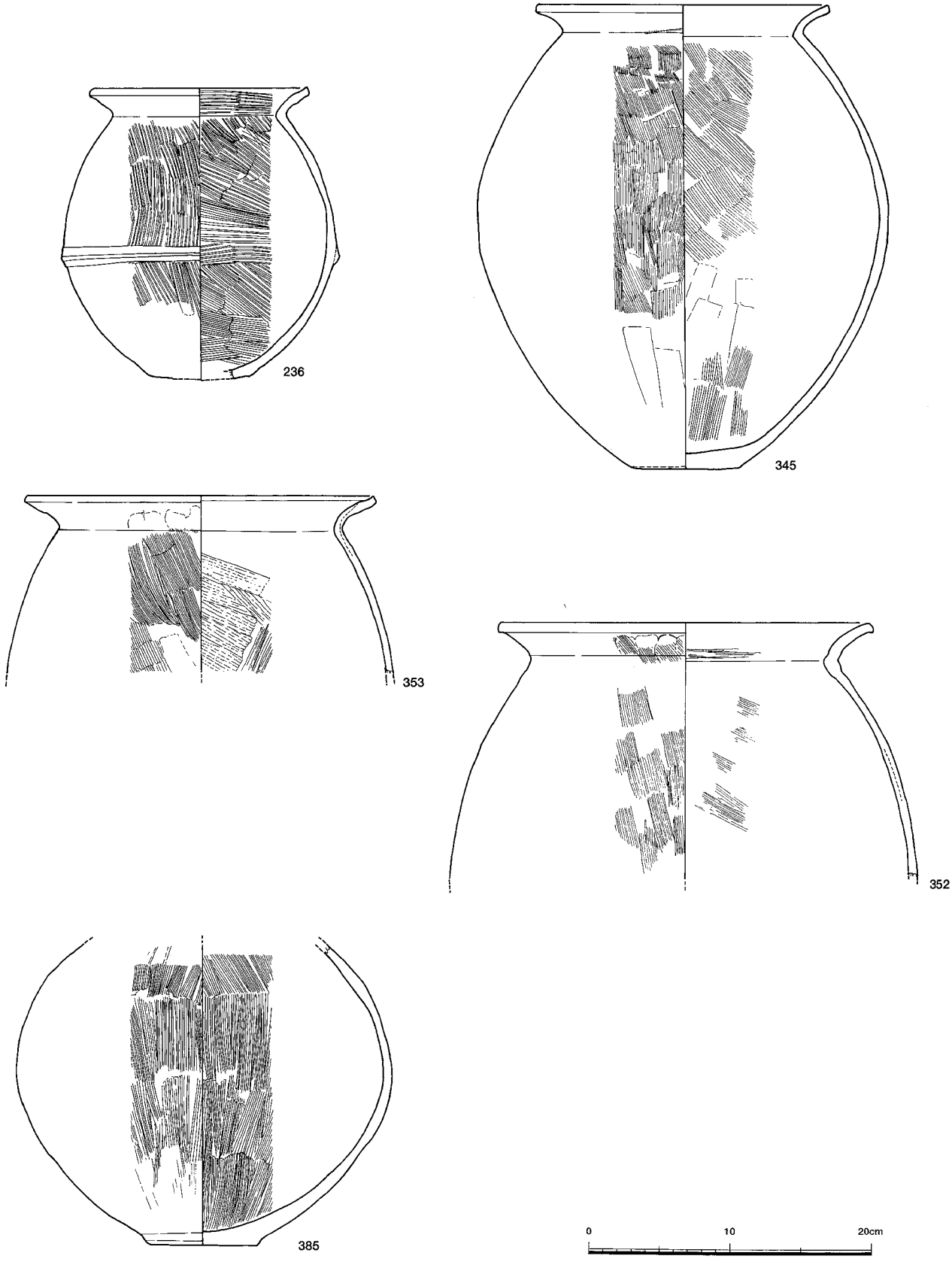


Fig.106　土器集積遺構SX107出土遺物実測図23（1/4）

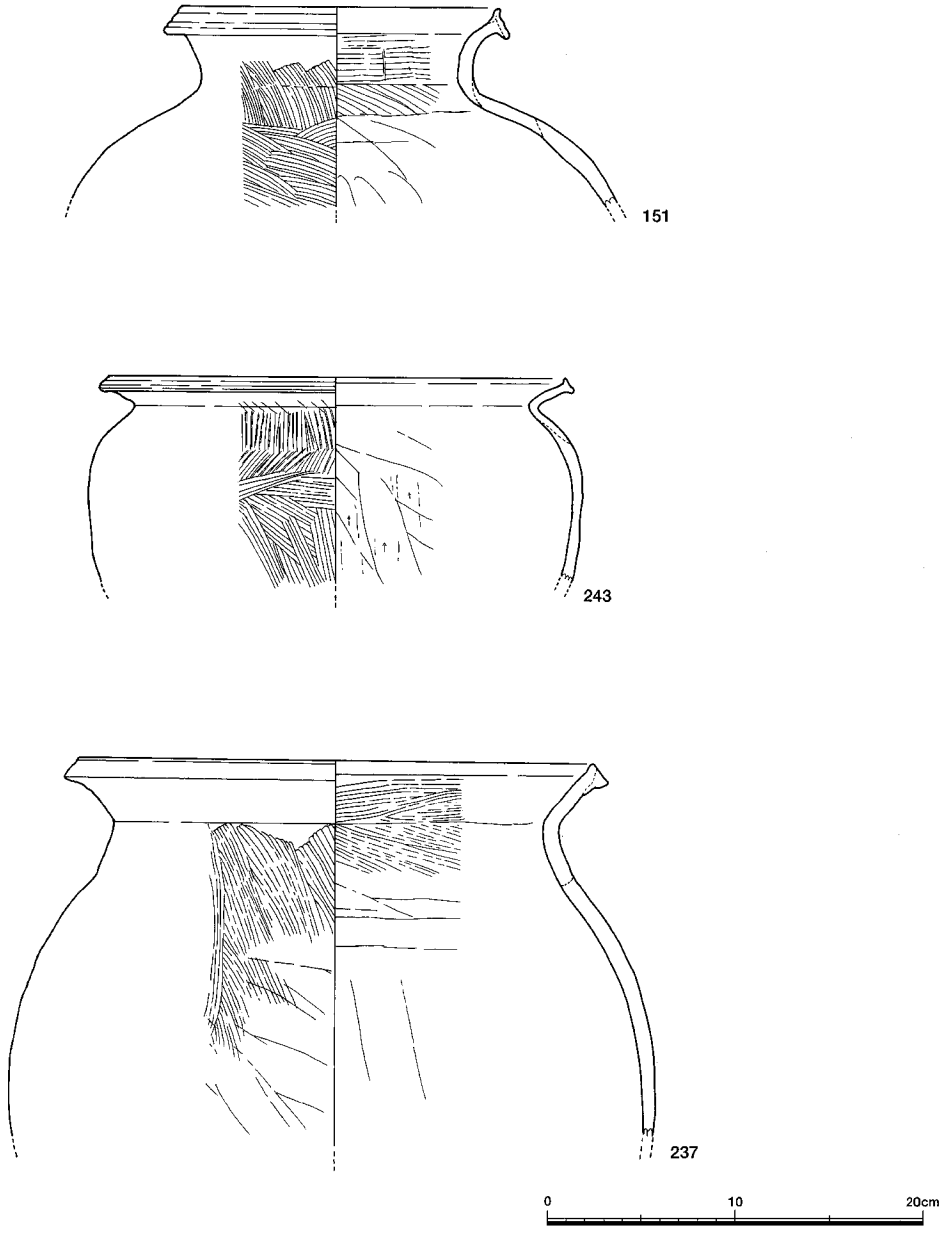


Fig.107　土器集積遺構SX107出土遺物実測図24（1/4）

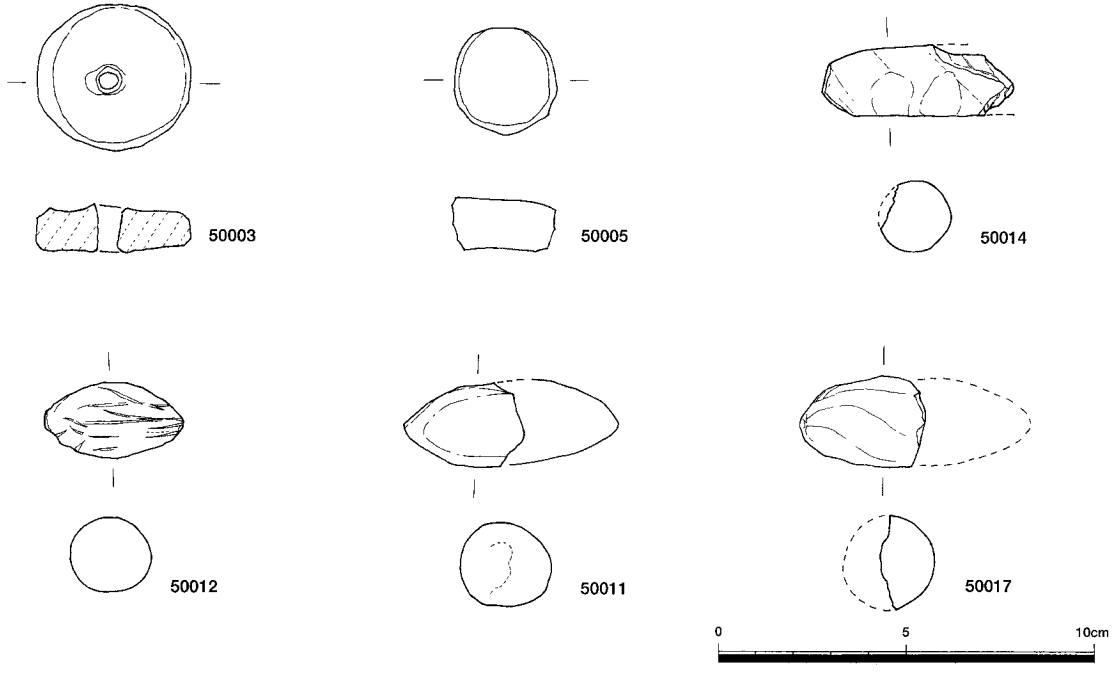


Fig.108　土器集積遺構SX107出土遺物実測図25（1/2）

329は中型の甕で、胴央が張り、胴長的器形である。口縁は短く、「く」の字状に外反する。口縁端部上縁は横ナデで上方に短く発達させている。頸部屈曲部は、内面に稜線を持つ。底部は小さく、平坦ではないため、座りは不安定で自立できない。器面は内外面ともハケ目整形の後に口縁部だけ横ナデ調整し、胴央以下の外面はナデて仕上げている。口径17.5cm、器高24.5cm、底径6.5cm、胴部最大径19.6cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡茶褐色を呈する。煤が口縁端部まで付着している。**387**も中型の甕で、胴央が張り、胴長的器形である。口縁は短く、「く」の字状に折れ曲がり、反りを持つ。頸部屈曲部は、内面に稜線を持つ。底部は僅かに丸味を呈し、座りは不安定である。器面は内外面ともハケ目整形の後に口縁部だけ横ナデ調整し、胴央以下の外面はナデて仕上げている。口径23.0cm、器高29.8cm、底径6.8cm、胴部最大径24.2cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈する。煤が口縁端部まで付着している。

166は甕で胴部下を欠く。口縁は僅かに外反し、端部は横ナデで丸く仕上げている。頸部屈曲部は丸味を呈する。口径20.1cm、器壁厚0.5cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、灰褐色を呈する。

212は小型の甕で、頸部の締まりは弱く、底部は平坦で狭小。頸部から底部に向かってすぼまる器形である。口縁は外反し、短い。器面整形はハケ目による。口径16.5cm、器高17.9cm、底径4.6cm、胴部最大径15.2cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。

180は小型の甕で、頸部の締まりは弱い。底部は平坦であるが狭小なため座りは不安定である。胴

部が僅かに張るものの頸部から底部に向かってすぼまる器形である。口縁は直線的で僅かに外傾し、短い。器面はハケ目整形の後に丁寧にナデ調整している。口径14.1cm、器高18.1cm、胴部最大径15.5cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、暗黒褐色を呈する。**112**は小型の甕で、胴央が僅かに張り、胴長的器形である。口縁は短く、「く」の字状に折れ曲がり、反りを持つ。頸部屈曲部は丸味を持ち、内面の稜線は弱い。底部は小さく、平坦ではないため、座りは不安定で自立できない。器面は内外面ともハケ目整形の後に、口縁部だけ横ナデ調整している。さらに胴央以下の外面をナデて仕上げている。口径16.8cm、器高20.0cm、胴部最大径17.1cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。煤が口縁端部まで付着している。

117は中型の甕で、胴部が僅かに張り、胴長的器形である。口縁は弱く外反し、直線的に短く立ち上がる。口縁端部は「コ」の字状の断面形を呈する。頸部屈曲部は、内面に弱い稜線を持つ。底部は小さく、僅かに丸味を持つために座りは不安定である。器面は内外面とも目の細かいハケ目整形の後に口縁部だけ横ナデ調整し、その他はナデて仕上げている。口径21.6cm、器高35.0cm、底径7.5cm、胴部最大径25.5cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡茶褐色を呈する。**111**は中型の甕で、胴部が僅かに張り、胴長的器形である。口縁は弱く外反し、直線的に立ち上がる。口縁端部は「コ」の字状の断面形を呈する。頸部屈曲部は、内面に丸味を持ち弱い稜線を持つ。器面は内外面とも目の細かいハケ目整形だけである。口径22.5cm、胴部最大径27.1cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、暗茶褐色を呈する。

364は中型の甕で、胴部が僅かに張り、卵形の器形である。口縁は「く」の字状に折れ曲がり、反りを持つ。頸部屈曲部は丸味を持ち、内面の稜線は弱い。底部は極めて狭小で、丸底に近い。このため座りは不安定で、自立できない。器面は内外面とも丁寧なハケ目整形の後に口縁端部だけ横ナデ調整している。口径21.5cm、器高26.0cm、底径3.5cm、胴部最大径21.8cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡茶褐色を呈する。煤が口縁端部まで付着している。**203**は中型の甕で、胴部が僅かに張り、卵形の器形である。口縁は「く」の字状に折れ曲がり、反りを持つ。頸部屈曲部は内面に弱い稜線を持つ。底部は極めて狭小で、丸底に近い。このため座りは不安定で、自立できない。器面は内外面とも丁寧なハケ目整形の後に口縁端部だけ横ナデ調整している。口径28.0cm、器高37.5cm、胴部最大径29.8cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

357は甑の底部で、胴央部以上を欠く。平坦な底部の中央に径2cmを測る孔を焼成前に穿けている。器面外面はヘラ削りして仕上げている。底径6.3cm、器壁厚0.6cm～0.7cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡橙色を呈する。**147**も甑の底部で、胴央部以上を欠く。丸味のある尖底で、中央に径1.2cmを測る孔を穿けている。器面は内外面ともハケ目整形である。器壁厚0.6～0.7cmを測る。胎土は1～2mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

340は鉢形土器で、胴部は球形を呈し、底部は平坦である。口縁部は「く」の字状に折れ曲がり、端部は「コ」の字状の断面形を呈する。頸部屈曲部は、内面に弱い稜線を持つ。頸部外面には狭小で断面形が三角形の低い凸帯が廻る。また、胴央部には断面形が「コ」の字状の凸帯が巡り、凸帯にはキザミ目が施されている。底部は僅かに丸味を持つために座りは不安定である。器面は内外面とも目の細かいハケ目整形の後に口縁部だけ横ナデ調整し、その他は粗いナデて仕上げている。口径39.9cm、器高29.4cm、底径9.8cm、胴部最大径36.9cmを測る。胎土は1mm～3mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**344**は鉢形土器の完形品である。胴部は頸部から底部に向かってすぼむ形状である。底部は平坦であるものの狭小で、自立するものの座りは極めて不安定である。口縁部は外反し、頸部屈曲部は内面に稜線を持つ。頸部外面には断面形が三角形の凸帯が廻る。器面は内外面とも目

の細かいハケ目整形の後に口縁部だけ横ナデ調整している。口径35.6cm、器高28.8cm、底径9.1cmを測る。胎土は1mm～3mmほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。

148・109・185は大型の甕形土器で、底部を欠く。頸部はやや締まり、胴部は張る。口縁は「く」の字状に外反し、口縁端部の上下の縁を横ナデで上下両方に短く発達させているものと断面形が「コ」の字状のものとがある。口縁端面にはハケ工具によるキザミ目が施されている。頸部には断面形が三角形もしくは「コ」の字状の凸帯が巡り、無紋、凸帯にキザミ目、凸帯裾にキザミ目を施しているものなどがある。胴部の内外面はハケ目整形し、口縁だけ横ナデ調整している例もある。

238は大型の甕形土器で、底部を欠く。頸部はやや締まり、胴部は張る。口縁は「く」の字状に外反し、口縁端部の上縁を削って平坦にしている。口縁端部にはハケ工具によるキザミ目が施されている。頸部には断面形が三角形の凸帯が巡る。胴部の内外面はハケ目整形し、口縁だけ横ナデ調整している。

202は中型の甕で、卵形の胴部である。口縁は「く」の字状に折れ曲がり、反りを持つ。頸部屈曲部は内面に弱い稜線を持つ。頸部には断面形が三角形の凸帯が巡る。底部は極めて狭小で、丸味を呈しているため座りは不安定で、自立できない。器面は内外面とも丁寧なハケ目整形の後に口縁端部だけ横ナデ調整している。口径30.5cm、器高41.9cm、胴部最大径33.4cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、暗橙灰色を呈する。

151は備前・瀬戸内系の甕で、胴部下を欠く。頸部は締まり、口縁部は短く外湾しながら立ち上がる。口縁端部は横ナデにより両縁を上下両方に短く発達させ、断面形が「T」の字状を呈している。頸部屈曲部は丸味を持つ。器面は外面をハケ目整形、内面はナデて仕上げている。口径16.7cm、器壁厚0.5～0.6cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

237も口縁下端部を下方に発達させた甕である。口縁は外反するものの弱く、頸部屈曲部は丸味を持つ。ハケ目整形の後にナデ調整している。口径27.1cm、器壁厚0.5～0.6cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を多く含み、橙灰色を呈する。

243は鉢形土器で、底部を欠く。口縁は「く」の字状に折れ曲がり、頸部屈曲部は内面に弱い稜線を持つ。口縁端部は横ナデにより両縁を上下両方に短く発達させ、断面形が「T」の字状を呈している。器面は内外面ともハケ目整形後にナデ調整して仕上げている。口径24.0cm、器壁厚0.4～0.5cmを測る。胎土は1mm～2mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

50003は土製の紡錘車で、円盤形を呈する。径3.8cm～4.1cm、厚さ0.8cm～1.0cmを測る。中心には径0.5cmの孔が貫通する。器面はナデている。胎土は1mmほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**50005**は土器を円盤状に加工したものである。僅かに反りを呈している。周縁は擦って整形している。径2.8cm、厚さ1.5cmを測る。胎土は1mmほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、灰褐色を呈する。

50011・50012・50017は土製でラグビーボールの形状を呈する。いわゆる、土製投弾である。**50012**は完形品で、全長3.6cm、径2.0cmを測る。胎土は僅かに0.5mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。**50014**は棒状を呈し、土製品の柄の部分であろう。

SX141

弥生土器甕・高坏・鉢が出土している。

黒色土（Fig. 108～112　PL. 103, 107）

50006は円盤状の土製品で、土器の胴部等を円形に加工したものである。反りを呈し、両面にはヘラ磨き痕が残る。周縁は擦って粗く整形している。以上のことから、土器を多角形に粗割した後に破面である側面を擦って作成したと考えられる。径4.3cm～4.6cm、厚さ0.8cm～0.9cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、灰褐色を呈する。**50007**は円盤状の土製品で、土器の胴部等を円形に加工したものである。反りを呈し、凸面にはヘラ磨き痕、凹面にはナデ痕跡が残る。周縁は擦って粗く整形している。以上のことから、土器を多角形に粗割した後に破面である側面を擦って作成したと考えられる。径5.4cm、厚さ0.6cm～0.7cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、褐色を呈する。**50008**は甕形土器の胴部を円盤状に加工したものである。わずかに反りを呈し、凸面にはハケ目痕が残り、凸面には煤が付着している。周縁は擦って整形している。以上のことから、土器を多角形に粗割した後に破面である側面を擦って作成したと考えられる。径4.2cm～4.6cm、厚さ0.6cm～0.7cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、黒褐色を呈する。

704は小型の椀状の鉢で、完形品である。底部は平坦で、口縁は内湾気味に立ち上がる。内面はハケ目整形、外面はヘラ磨きして仕上げている。口径11.4cm、器高5.8cm、底径3.5cmを測る。胎土は1㎜ほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡橙灰色を呈する。**703**は狭小な底部を持つ中型の鉢形土器である。内外面とも目の細かいハケ目整形の後、ナデ調整を施して粗いヘラ磨きしている。口縁端部を丸く仕上げ、口径18.2cm、底径4.7cm、器高6.7cmを測る。胎土は1㎜ほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡橙灰色を呈する。

719は小型の丸底壷である。口縁は緩く屈曲し、内湾気味に立ち上がる。内外面はヘラ磨きが施されている。口径11.0cm、器壁厚0.4cmを測る。胎土は0.5㎜以下の砂粒で、淡橙色を呈する。

754はジョッキ形の鉢形土器で、口縁端部を欠く。口縁は底部から直立する。内外面とも丁寧なヘラ磨きを施している。取っ手は粘土板を半円状に曲げて貼り付けている。底径10.2cm、器壁厚0.4cmを測る。胎土は1mmほどの暗褐色砂粒を多く含み、橙色を呈する。

753は器台で、底部と口縁部が外湾する鼓形である。ハケ目整形の後に口縁部と脚端部だけを横ナデ調整している。口径8.5cm、底径9.6cm、器高15.6cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

765は支脚で、中空の裁頭円錐形の器形である。上端面は斜面を呈し、中央部には径1.2cmの穿孔がある。ハケ目整形の後、内面はナデ調整している。底径11.2cm、器高8.2cm～10.0cmを測る。胎土は1㎜ほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡灰白色を呈する。

751は口縁部が外反する鉢形土器で、底部を欠く。口縁は「く」の字状に外反し、短い。体部は深く丸味を呈し、屈曲部が明瞭である。このため頸部内面には明瞭な稜線を呈する。口径25.0cm、器壁厚0.5cm～0.7cmを測る。内外面ともハケ目整形の後、内面はナデ調整、外面は底部にヘラ磨きを施している。胎土は1㎜～2㎜ほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡橙灰色を呈する。

848・849・853は口縁から底部に向かってすぼまる甕形土器で、いずれも底部を欠く。粘土紐の貼付けによる断面形が三角形の凸帯が口縁端部直下に巡り、凸帯にはキザミ目が施されている。**848**は器壁厚は0.5cm～0.6cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡茶褐色を呈する。**849**は器壁厚は0.6cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。**853**は器壁厚は0.4cm～0.5cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。

847も底部を欠く甕形土器で、口縁を外湾させている。口縁端部と頸部下にキザミ目を施した粘土紐の凸帯が巡る。外面はヘラ磨きを施し、内面はナデ調整している。器壁厚は0.6cmを測る。胎土は

1㎜ほどの砂粒を含み、暗茶灰色を呈する。外面には煤が口縁端部まで付着している。**855**は底部を欠く甕形土器で、口縁を外湾させている。口縁端部と頸部下にキザミ目を施した粘土紐の凸帯が巡る。器面整形はハケ目工具により、内面はナデ調整している。器壁厚は0.6cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡灰色を呈する。外面には煤が口縁端部まで付着している。

737・856は甕形土器で底部を欠く。口縁は、外側に断面形が三角形の凸帯を巡らしたように肥厚させ、上端は平面であるがやや傾斜する。口縁端部にはキザミ目が施されている。外面はハケ目整形、内面はナデ調整。器壁厚は0.7cm～0.8cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。

744は甕形土器で底部を欠く。口縁部は逆「L」字形状に短く折れ曲がり、上端は平坦である。端部は丸く仕上げている。口径23.5cm、器壁厚0.4cm～0.5cmを測る。外面の整形はハケ目、内面はナデ調整している。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。

705は中型の甕で、胴部の最も張る位置は頸部近くにあり、胴長的器形である。口縁は短く、「く」の字状に折れ曲がり、反りを持つ。頸部屈曲部は、内面に稜線を持つ。底部は僅かに丸味を呈し、座りは不安定である。器面は内外面ともハケ目整形の後に口縁部と内面だけ横ナデ調整している。口径23.8cm、器高29.5cm、底径6.5cm、胴部最大径25.8cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。

690・730・742は甕で、底部を欠く。口縁は「く」の字状に短く折れ曲がり、**690**は直線的で、**730・742**は反りを持つ。頸部屈曲部は内面に弱い稜線を持ち、外面には断面形が三角形の狭小な凸帯が巡る。器面は内外面とも丁寧なハケ目整形の後に口縁端部だけ横ナデ調整している。**690**は口径23.9cm、器壁厚1.0cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの暗茶褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡橙灰色を呈する。**730**は口径39.8cm、胴部最大径41.2cm、器壁厚0.5cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**742**は口径16.8cm、器壁厚0.5cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

734は短い口縁部がわずかに外反する甕形土器で、胴部は底部に向かってすぼまる器形を呈する。このため頸部屈曲部は丸味を呈し、口縁と胴部との境は不明瞭である。内外面ともハケ目整形の後、内面はナデ調整している。口径25.1cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。

731は甕で、底部を欠く。口縁は「く」の字状に短く折れ曲がり、反りを持つ。頸部屈曲部は内面に弱い稜線を持つ。器面は内外面とも丁寧なハケ目整形の後に口縁端部だけ横ナデ調整している。口径24.8cm、器壁厚0.4cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

743は短口の壷で胴部下半を欠く。口縁は「く」の字状に外反し、端部は内縁を横ナデで短く発達させている。頸部屈曲部の内面は丸味を呈している。外面頸部下にはハケ工具の小口の片方を用いてキザミ目を施している。胴部内面はヘラ削り、外面はハケ目整形の後にナデ調整している。口径14.6cm、器壁厚0.4cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

750は二重口縁を持つ壷形土器で、底部を欠く。胴部は球状を呈し、頸部は締まる。口縁は鋭角的に屈曲して直線的に強く内傾するため、口縁屈曲部は強い稜線を呈する。頸部には断面形が三角形の狭小な凸帯が巡る。器面整形は目の粗いハケ目で、口縁部だけ横ナデ調整している。口径21.9cm、器壁厚0.5cm～0.6cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。

752は尖った底の中央に径1.2cmの穿孔を持つ甑である。内面はナデて仕上げている1㎜～3㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰白色を呈する。

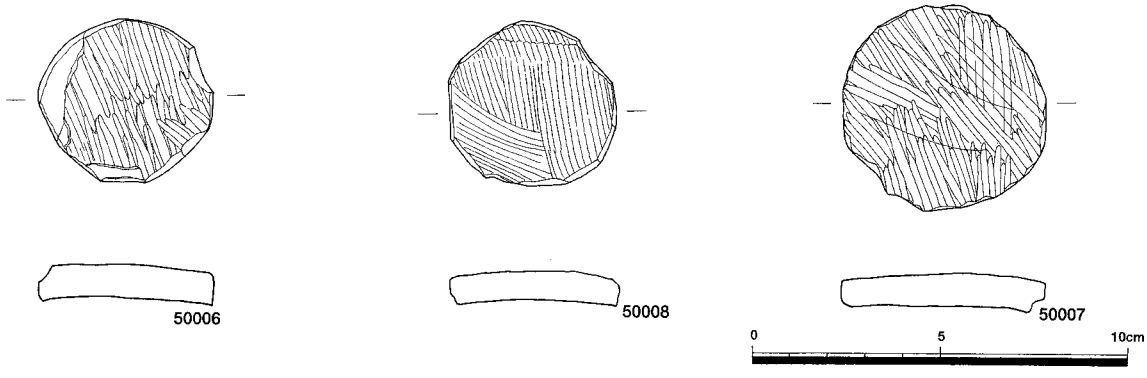


Fig.109　黒色土層出土遺物実測図１（1/2）

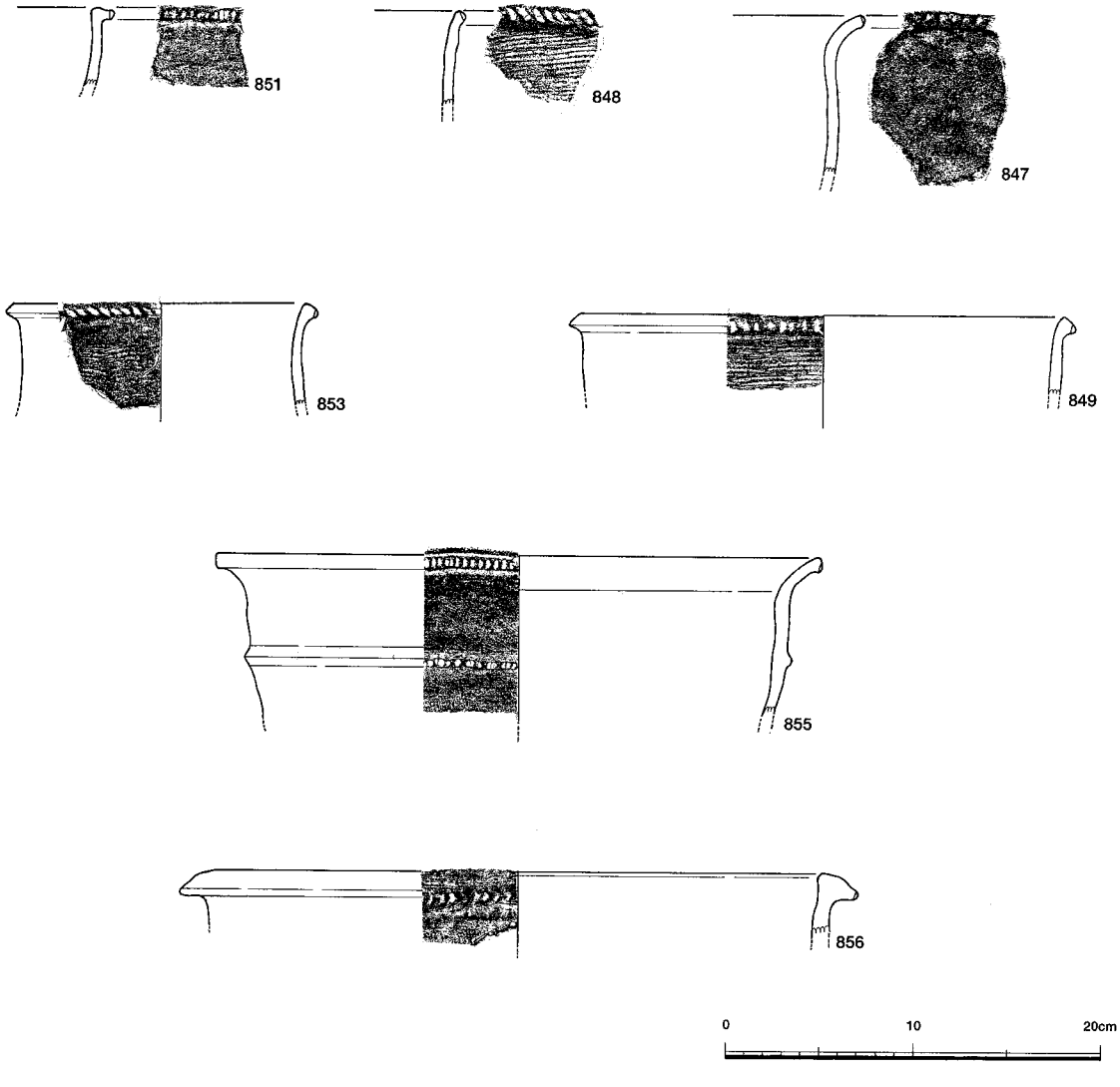


Fig.110　黒色土層出土遺物実測図２（1/4）

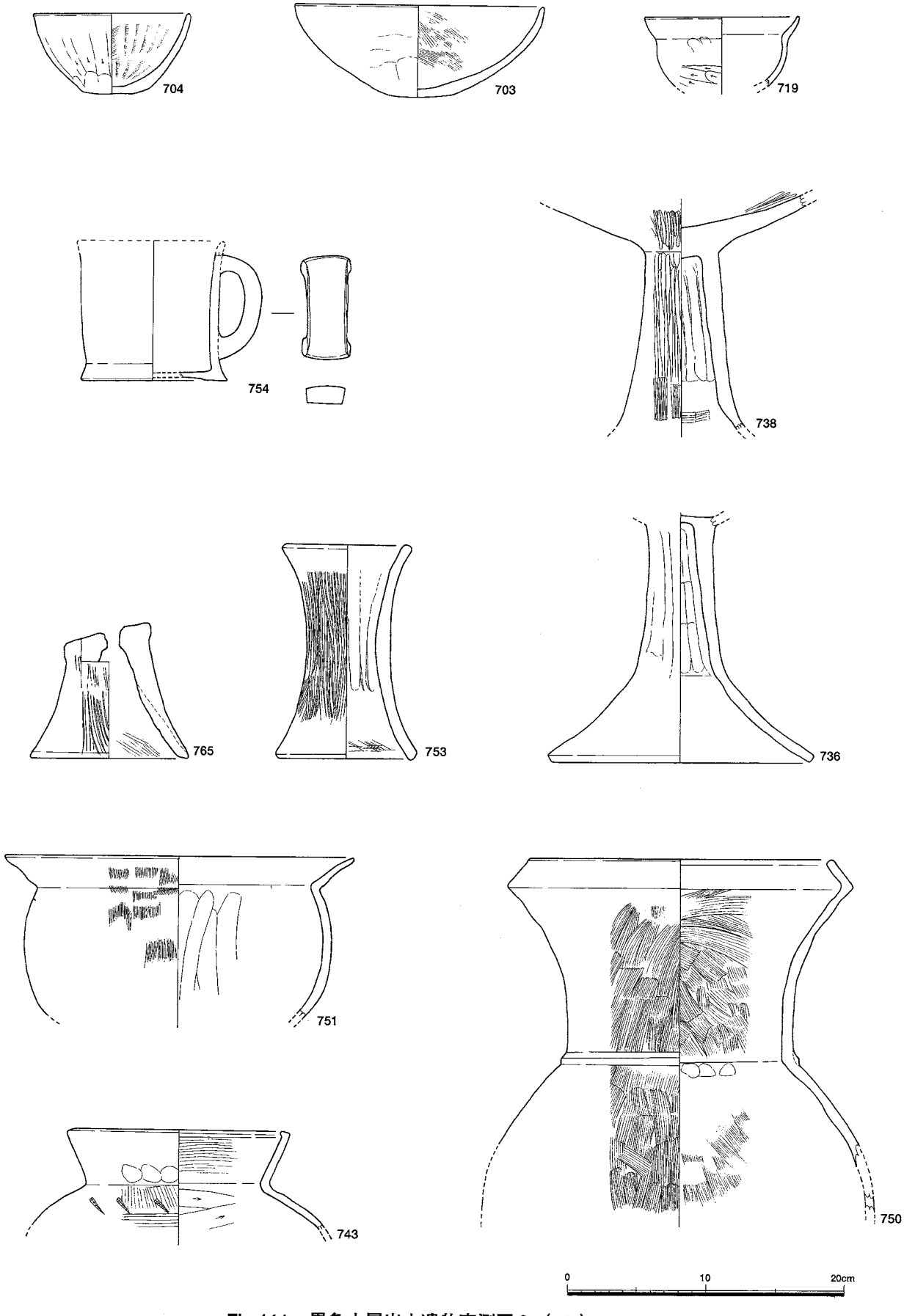


Fig.111　黒色土層出土遺物実測図 3 （1/4）

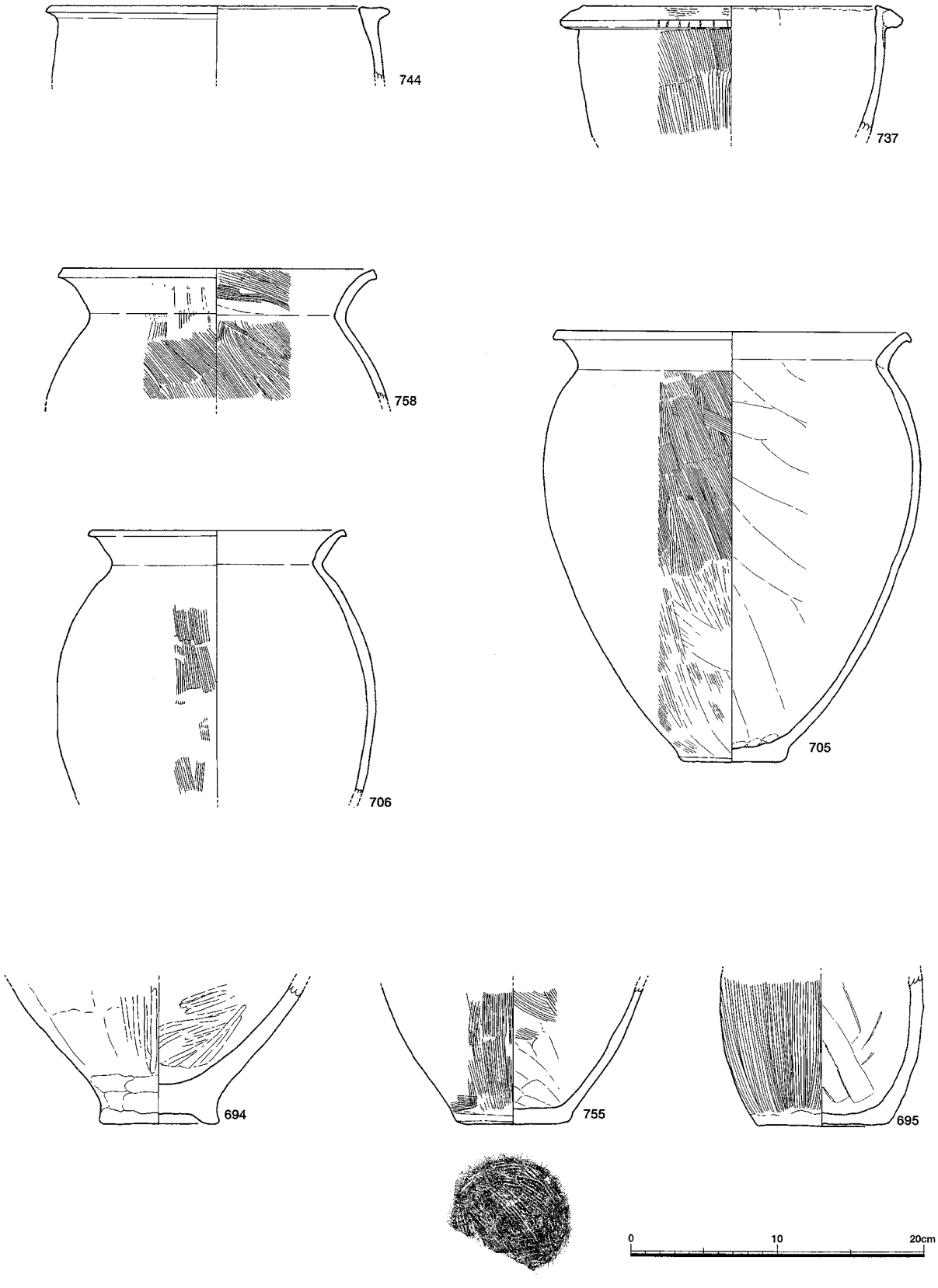


Fig.112　黒色土層出土遺物実測図４（1/4）

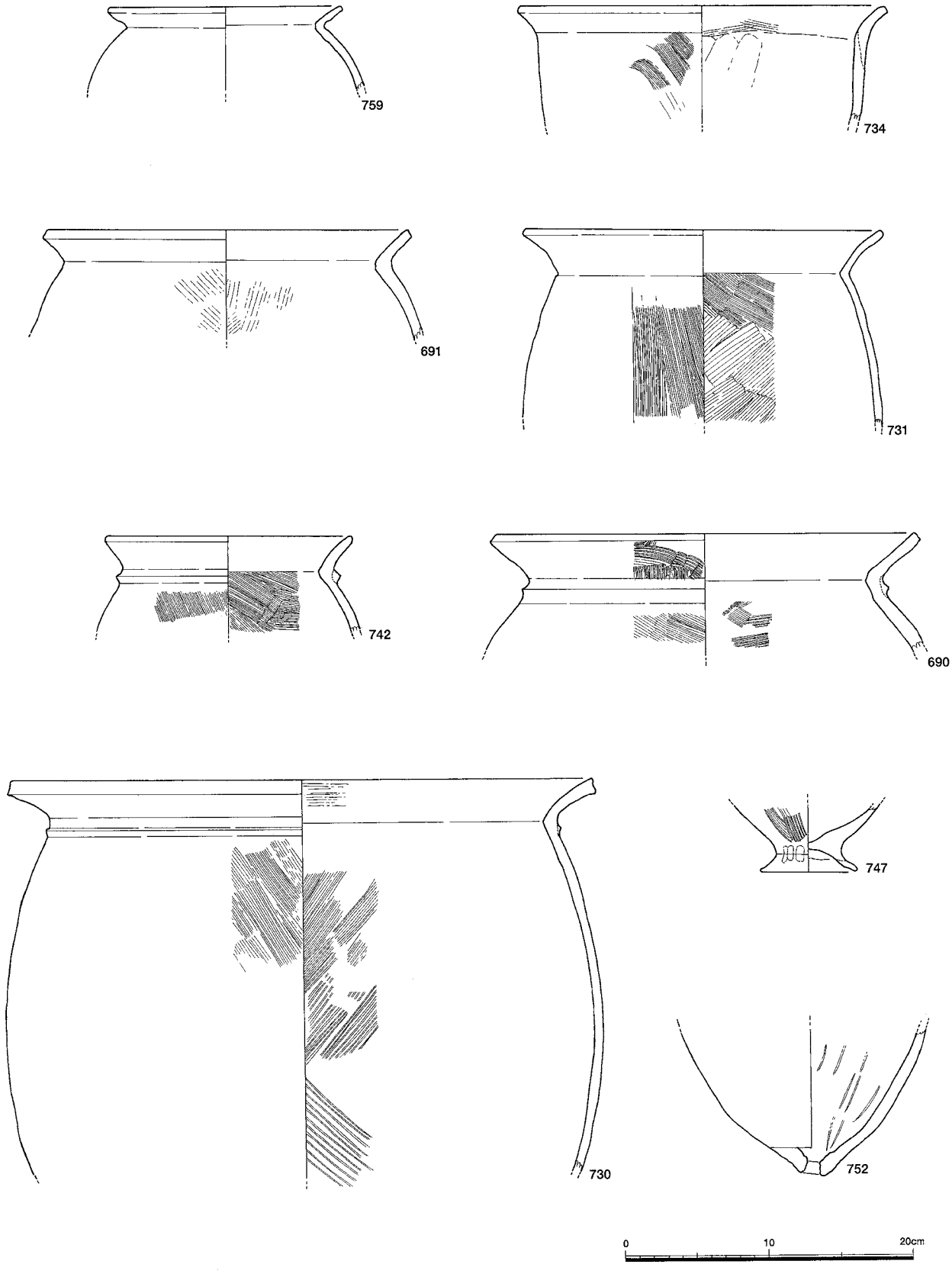


Fig.113　黒色土層出土遺物実測図５（1/4）

黒色粘質土（Fig. 114　PL. 104）

810は手捏による椀状の小型鉢形土器である。底部は丸底で、口縁はやや内湾気味に立ち上がる。端部は先細で丸く仕上げている。内外面ともナデ調整を施している。口径10.4cm、器高3.6cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。**809**は椀状の鉢形土器である。底部は狭小で丸底に近く、座りは不安定である。口縁はやや内湾気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。内外面ともハケ目整形の後、ナデ調整を施している。口径14.8cm、底径4.5cm、器高5.9cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。

801は器台で、筒部上位でくびれ、短い口縁が外反する。粗いハケ目整形の後、口縁部だけを横ナデ調整している。口径9.3cm、底径15.1cm、器高18.2cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。

823は鼓形の器台で、完形品である。若干、杯部の方が大きいものの、杯部と脚部は頸部を対称軸として天地対称形である。頸部外面の直上・下には断面形が三角形の凸帯が巡る。外面は横ナデ調整、内面はヘラ削り整形した後、さらに杯部にだけヘラ磨きを屈曲部から口縁端部まで施している。口径19.8cm、底径17.6cm、器高10.5cm～11.0cmを測る。胎土はわずかに0.5㎜ほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。

826は高坏で、脚部を欠く。杯部の屈曲は弱く緩やかに立ち上がり、口縁は長く発達する。器面は粗いハケ目整形の後、粗いヘラ磨きを放射状に施している。特に杯部内面は暗紋風に仕上げている。口径34.1cm、器壁厚0.5cm～0.6cmを測る。胎土はわずかに0.5㎜ほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。

811は高坏もしくは鉢などの脚台と思われ、手捏ねによる。脚部は指押さえで成形した後、外面は粗いヘラ磨きを施している。底部口径7.7cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙白色を呈する。

824は鉢等の脚台、もしくは蓋と思われる。外面は目の細かいハケ目整形の後、放射状に粗いヘラ磨きが暗紋風に施されている。内面は目の細かいハケ目を残す。口径20.4cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土はわずかに0.5㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

820は小型の甕で、球状を呈して丸底である。口縁は「く」の字状に外反し、端部は先細で丸く仕上げている。外面はハケ目調整し、内面はヘラ削りしている。口径13.9cm、器高16.6cm、器壁厚0.2cm～0.4cmを測る。胎土はわずかに0.5㎜ほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。煤が口縁端部まで付着している。

821も小型の甕で、底部を欠く。口縁は「く」の字状に外反し、直線的に立ち上がる。端部は丸味を呈する。内外面ともハケ目調整しているが、外面は目が細かく、内面は目が粗いハケ工具を用いている。口径16.6cm、器壁厚0.4cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。煤が口縁端部まで付着している。

808は大型の甕で、胴部下半を欠く。口縁は「く」の字状に屈曲し、短い。口縁端部は、断面形を「コ」の字状に横ナデで仕上げている。頸部外面には断面形が三角形の凸帯が巡る。頸部屈曲部内面には弱い稜線を呈する。内外面とも粗いハケ目整形が施されている。口径33.8cm、器壁厚0.5cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡橙色を呈する。

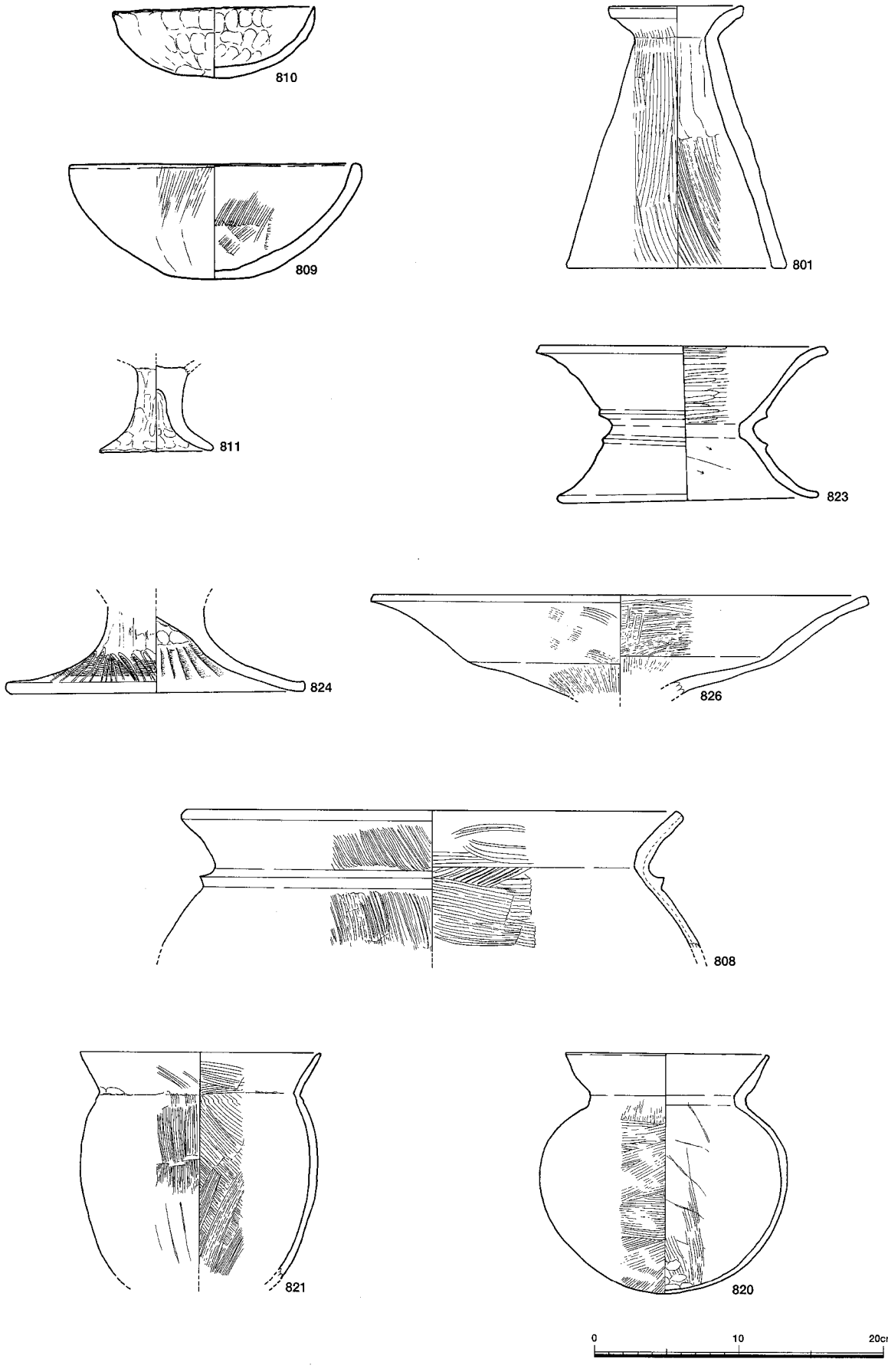


Fig.114　黒色粘質土層出土遺物実測図（1/4）

黒灰色粘質土（Fig. 115, 116　PL. 105）

795は手捏による、椀状を呈した丸底の小型鉢である。半球状の器形を呈する。器面全面に指頭圧痕が残り、このため整っているとは言えない。凹凸のある口縁で、端部は丸く仕上げている。ナデて仕上げている。口径7.5cm、器高4.0cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。**797**は手捏による、椀状を呈した平底の小型鉢である。口縁がやや外傾しながら立ち上がる。凹凸のある口縁で、端部は丸く仕上げている。器面全面に指頭圧痕が残りナデて仕上げている。底面は平坦ではなく、わずかに曲面を呈している。このため座りは不安定である。口径6.4cm、底径4.0cm、器高4.5cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**796**は手捏による、椀状を呈した平底の小型鉢である。口縁が外傾しながら立ち上がる。肥厚した口縁は凹凸があり、端部は丸く仕上げている。底部は狭小である。器面全面をナデて仕上げている。口径7.7cm、底径3.5cm、器高6.1cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

783は支脚で、中空の裁頭円錐形の器形である。上端近くで僅かにくびれる。上面は曲面を呈し、中央部には径2.3cmの穿孔がある。外面はタタキ板整形の後ナデ調整している。胎土は1㎜～2㎜ほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡橙灰色を呈する。

807は支脚で、脚端部を欠く。筒部上位でくびれ、短い口縁が外反する。上端部は平坦で、端部に鳥のくちばし状の突起が付く。ハケ目整形の後、上端部はナデて仕上げている。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。

806は支脚で、円筒状の器形を呈する。上部径5.4cm、底部径7.2cm、器高12.5cmを測る。器面は丁寧なヘラ磨きが施されている。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

772・773は器台で、筒部上位でくびれ、短い口縁が外反する。粗いハケ目整形している。**772**は口径11.3cm、底径11.9cm、器高16.4cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、橙色を呈する。**773**は口径11.0cm、底径11.8cm、器高15.9cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。

771は器台で、短太の円筒上位でくびれて口縁が外反する。目の細いハケ目整形後に口縁部だけナデ調整している。口径15.5cm、底径16.3cm、器高16.9cmを測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

790は直口の丸底壷である。口縁は直立し、端部は丸く仕上げている。胴部は球形を押圧した形である。外面はハケ目整形をしており、底部はヘラ磨きしている。口径10.1cm、器高13.2cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの黒褐色砂粒を多く含む特徴を持ち、淡橙灰色を呈する。

770は小型の壷で、胴部は球状を呈する。頸部は締まり、口縁は短く外反する。頸部屈曲部内面には弱い稜線がある。底部は平坦であるが僅かに曲面を呈する。目の細かいハケ目整形が施されている。口径13.1cm、底径8.1cm、器高12.7cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。

769・802は大型の甕で、胴部下半を欠く。口縁は「く」の字状に折れ曲がり、端部は断面形が「コ」の字状の面を呈する。頸部屈曲部は内面に弱い稜線を持つ。頸部には断面形が三角形の凸帯が巡る。器面は内外面とも丁寧なハケ目整形で、**769**はさらに横ナデ調整している。口径39.4cm、器壁厚0.9cm～1.0cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**802**は口径39.8cm、器壁厚0.9cm～1.0cmを測る。胎土は1㎜～2㎜ほどの砂粒を含み、橙灰色を呈する。

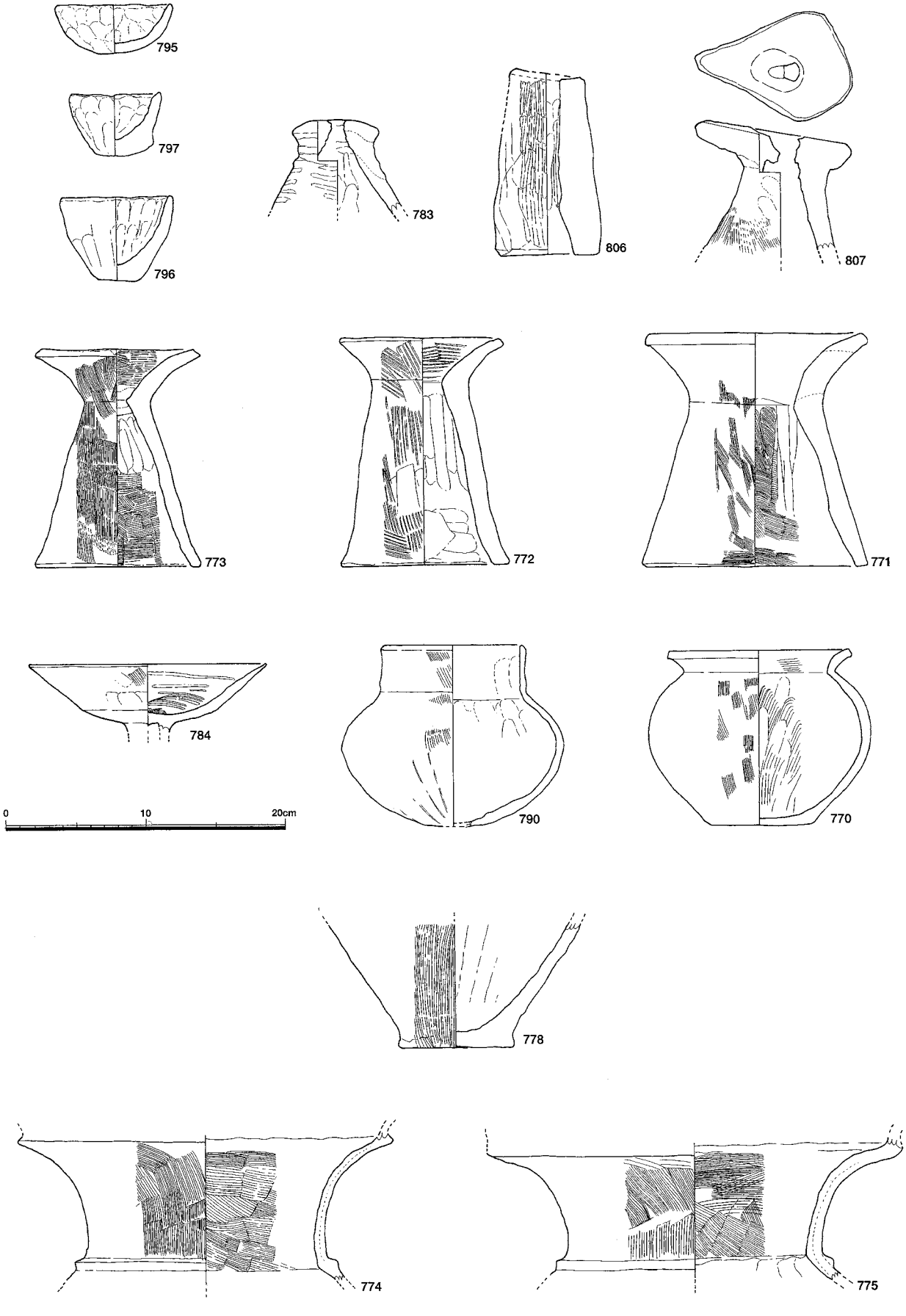


Fig.115 黒灰色粘質土層出土遺物実測図1 (1/4)

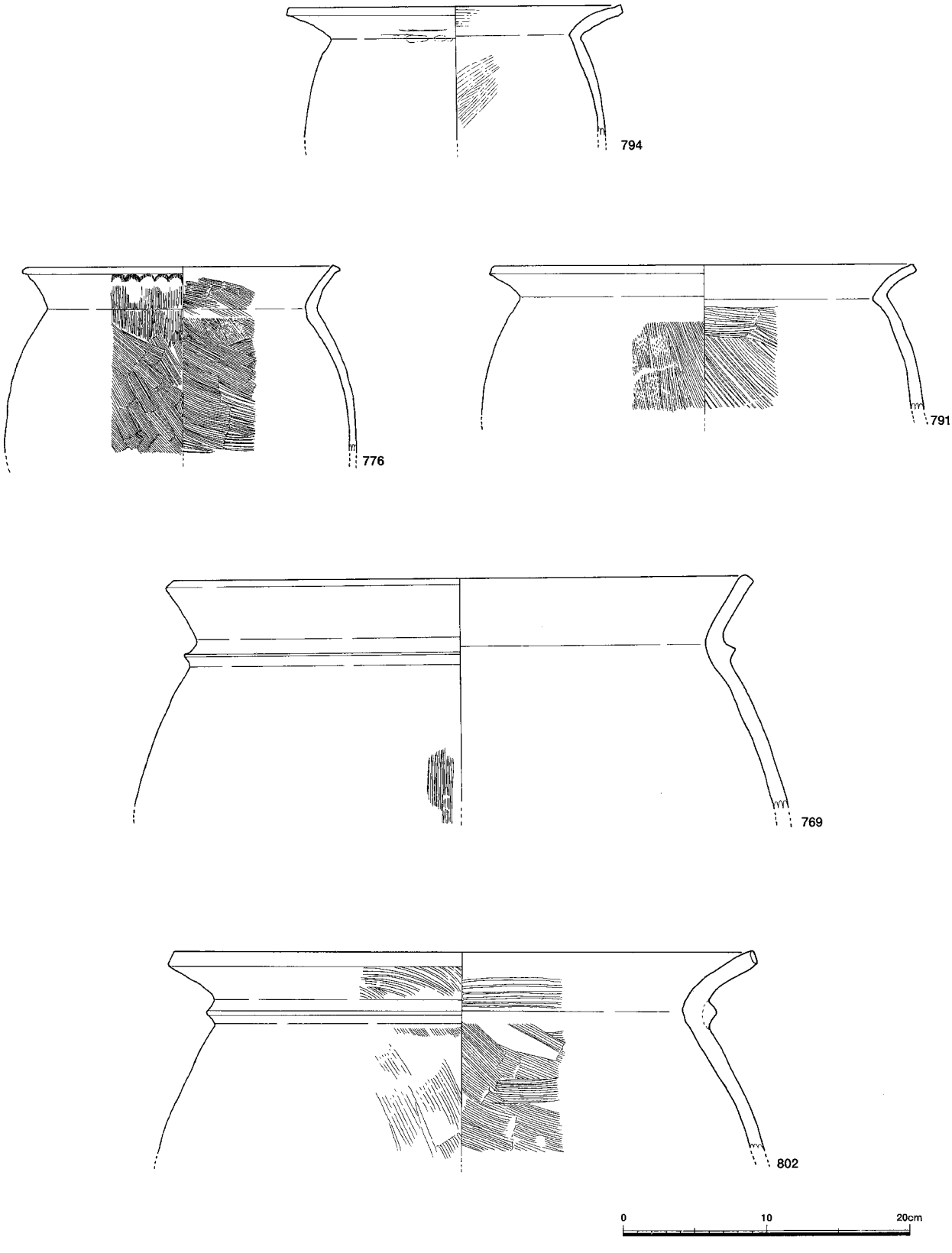


Fig.116　黒灰色粘質土層出土遺物実測図２（1/4）

（2）石器・石製品

1）第1遺構検出面

溝（SD）

SD18 滑石製の大型耳鍔付石鍋が出土している。壁厚は3.0cm～3.4cmを測る。

SD26 滑石製の大型耳鍔付石鍋が出土している。壁厚は2.4cm～2.6cmを測る。

SD42 滑石製の大型耳鍔付石鍋が出土している。壁厚は2.1cm～2.9cmを測る。

SD58 滑石製の大型耳鍔付石鍋が出土している。壁厚は3.5cmを測る。

SD64 滑石製の大型耳鍔付石鍋が出土している。壁厚は2.5cm～3.0cmを測る。方30cmの隅丸方形である。

土　坑（SK）

SK66 砥石が出土している。**70116**は手持ちの砥石破損品。

2）第2遺構検出面

河　川（SD）

SD81 石斧、黒曜石片が出土している。**70178**は凝灰岩製の打製扁平石斧で、基部を除く周縁に刃部を作り出している。断面は三角形を呈する。

水　田（SX）

SX85 扁平片刃石斧・石斧未製品・黒曜石破片が出土している。石斧未製品は凝灰岩製で、製作過程で折れたものである。

3）第3遺構検出面

土　坑（SK）

SK91 石包丁・黒曜石剥片が出土している。石包丁は身幅の狭いB型で破損品。

SK100（PL. 108） **70001**は滑石製円盤。臼玉未製品の可能性有り。周縁は割面、中央に径1.5mmの穿孔がある。

水　田（SX）

SX89 扁平片刃石斧の破損品が出土している。

4）第4遺構検出面

溝（SD）

SD103（Fig. 177　PL. 108） **70002**は石包丁の破損品で、刃は大きく外湾しないB型。

SD104（Fig. 177　PL. 108） **70003**は扁平石斧で、摩滅が激しい。

SD108 太型蛤刃石斧・石皿・黒曜石剥片が出土している。石斧は破損品。

SD112（Fig. 119　PL. 108） 石包丁・砥石・石鏃・太型蛤刃石斧・鳥形石製品が出土している。**70052**は滑石製鳥形と思われる欠損品。**70053**は粘板岩製の石包丁でB型。

SD114（Fig. 120　PL. 108） 石剣・柱状抉入片刃石斧・太型蛤刃石斧・扁平石斧・砥石・石皿・玉石・黒曜石剥片が出土している。**70054**は磨製石剣で、刃部と基部を欠損。**70180**は柱状抉入片刃石斧。**70107**は扁平磨製石斧の破損品。**70181**は擦り潰しと敲打具の両方の機能を石の両端に有する。**70179**は径4.8～5.8cm、厚さ3cmを測る円柱状の敲打具で、礫岩製。黒曜石剥片は大量に出土している。

玉石は鶏卵より小振りの石で、数多く出土しており、岩種も多い。投石用の可能性がある。

SD116（Fig. 121　PL. 108）　太型蛤刃石斧・石包丁・石斧・砥石・石皿・石製円盤・黒曜石剥片が出土している。**70055**は滑石製円盤、**70056**は砂岩製円盤である。**70055**は紡錘車制作過程における欠損品もしくは未製品。**70057**は粘板岩製で、刃部が大きく外湾するA型。**70188**は片面に半球状の凹みを持つ砂岩製の石皿。黒曜石剥片が大量に出土している。石斧は破損後に、敲打具もしくは削り具としての再利用品が多く出土し、凝灰岩製が多い。

SD117（Fig. 122　PL. 109）　石包丁が出土している。**70058**・**70059**は砂岩製で、刃部が大きく外湾するA型。

井　戸（SE）

SE136　太型蛤刃石斧・黒曜石剥片が出土している。石斧は凝灰岩製で、刃部が残る破損品。

土　坑（SK）

SK106　砥石・石包丁が出土している。

SK118　磨製石斧・黒曜石剥片が出土している。石斧は破損品後に、刃部を敲打具もしくは削り具としての再利用品。

SK119（Fig. 123　PL. 109）石包丁の未製品が出土している。**70060**は粗割段階における欠損。

SK121（Fig. 124　PL. 109）**70061**は砂岩製で、刃部が大きく外湾するA型。

SK123（Fig. 125　PL. 110）　石斧が出土している。**70062**は太型蛤刃石斧で、基部を欠損。刃先には使用痕が残る。破損後に再利用した可能性が有る。

SK124（Fig. 126　PL. 109）　石皿・擦り潰し石・丸石が出土している。**70063**は楕円形状を呈する丸石の欠損品。表面には淡暗赤褐色を呈する部分が残る。**70064**は上面が平坦で、他は割面。礫岩。周縁には加工の目印とした考えられる細い線が刻されている。**70065**はやや扁平な丸石の欠損品で、**70066**とセット関係にある擦り潰し石と考えられる。表面には淡暗赤褐色を呈する部分が残る。**70066**は砂岩の扁平な板石で、両面とも中央部に向かってくぼむ。石皿の欠損品。

SK126（Fig. 127　PL. 110）石包丁・扁平片刃石斧・太型蛤刃石斧・黒曜石剥片が出土している。**70070**～**70072**の石包丁は身幅が狭く、刃は直線的なＢ型。石斧はいずれも破損品。

SK131（Fig. 128　PL. 110）石皿が出土いている。**70073**は礫岩製石皿の欠損品。

土器集積（SX）

SX107（Fig. 129～136　PL. 111～113）　太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・黒曜石製石鏃・砥石・石包丁・管玉・臼玉・円盤・紡錘車・投弾丸石が出土している。**70014**は周縁を粗く擦って調整。中央に径１㎜の穿孔。**70011**～**70013**は滑石製紡錘車で、**70011**・**70013**は緑白色、**70012**は黒青色。**70015**は壁玉の管玉。滑石製臼玉は5個が出土。石鏃は縄文時代前期に属する形態が**70007**、弥生時代前期に属する形態は**70006**・**70008**～**70010**で、**70006**と**70008**はサヌカイト、他は黒曜石。**70027**・**70038**は砂岩製の石包丁で、刃部が大きく外湾するA型。**70021**～**70024**・**70026**・**70053**は身の幅が狭く、刃が直線的なＢ型である。**70039**は扁平片刃石斧の破損品。**70046**は柱状抉入片刃石斧に破損品であるが、敲打具として再利用の可能性が高い。**70024**・**70027**・**70028**・**70030**～**70033**は石斧破損後に、すり潰し、敲打具もしくは削り具としての再利用品。**70035**は両面に凹みを有し、中央部は肥厚。**70041**は砂岩製砥石の折損品。**70043**は直方体の形状を呈する粘板岩製の砥石。四面とも曲

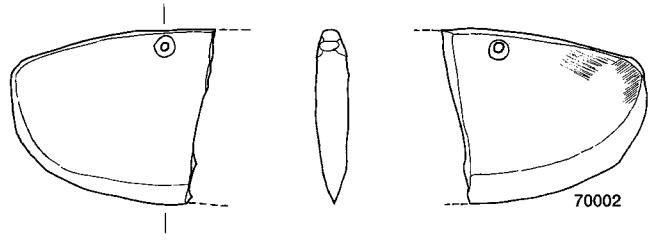


Fig.117　溝SD103出土石製品実測図（1/2）

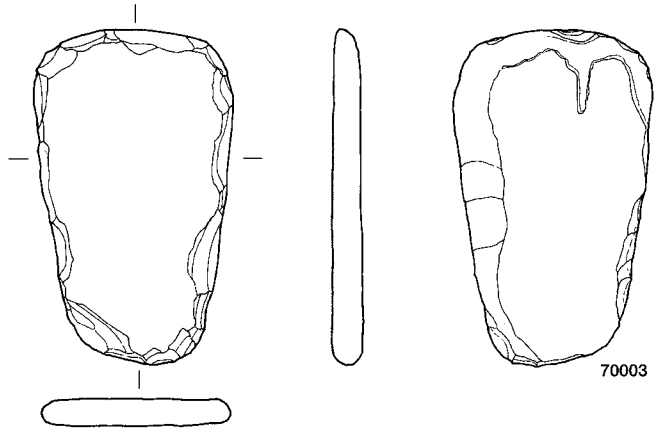


Fig.118　溝SD104出土石製品実測図（1/2）

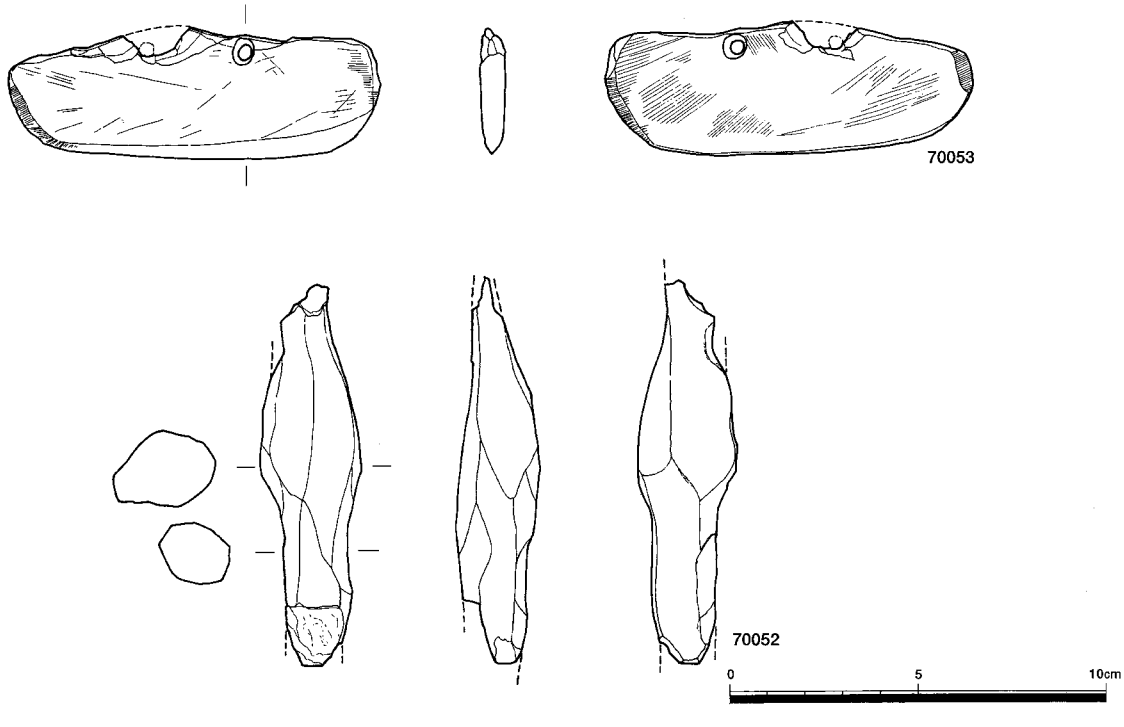


Fig.119　溝SD112出土石製品実測図（1/2）

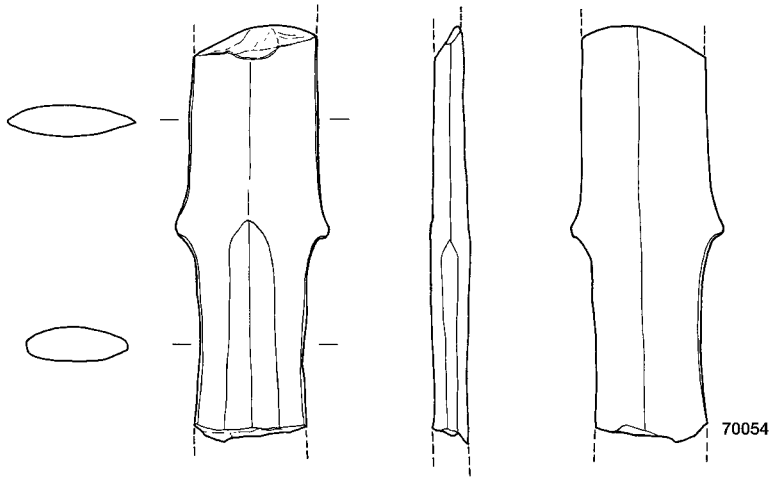


Fig.120　溝SD114出土石製品実測図（1/2）

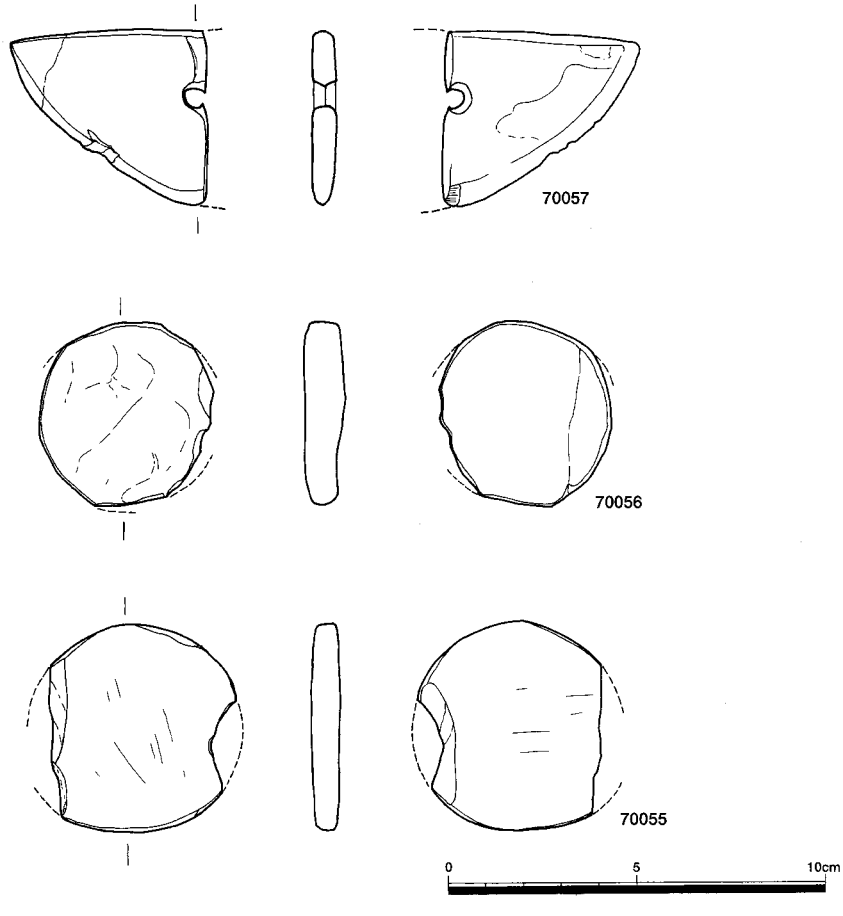


Fig.121　溝SD116出土石製品実測図（1/2）

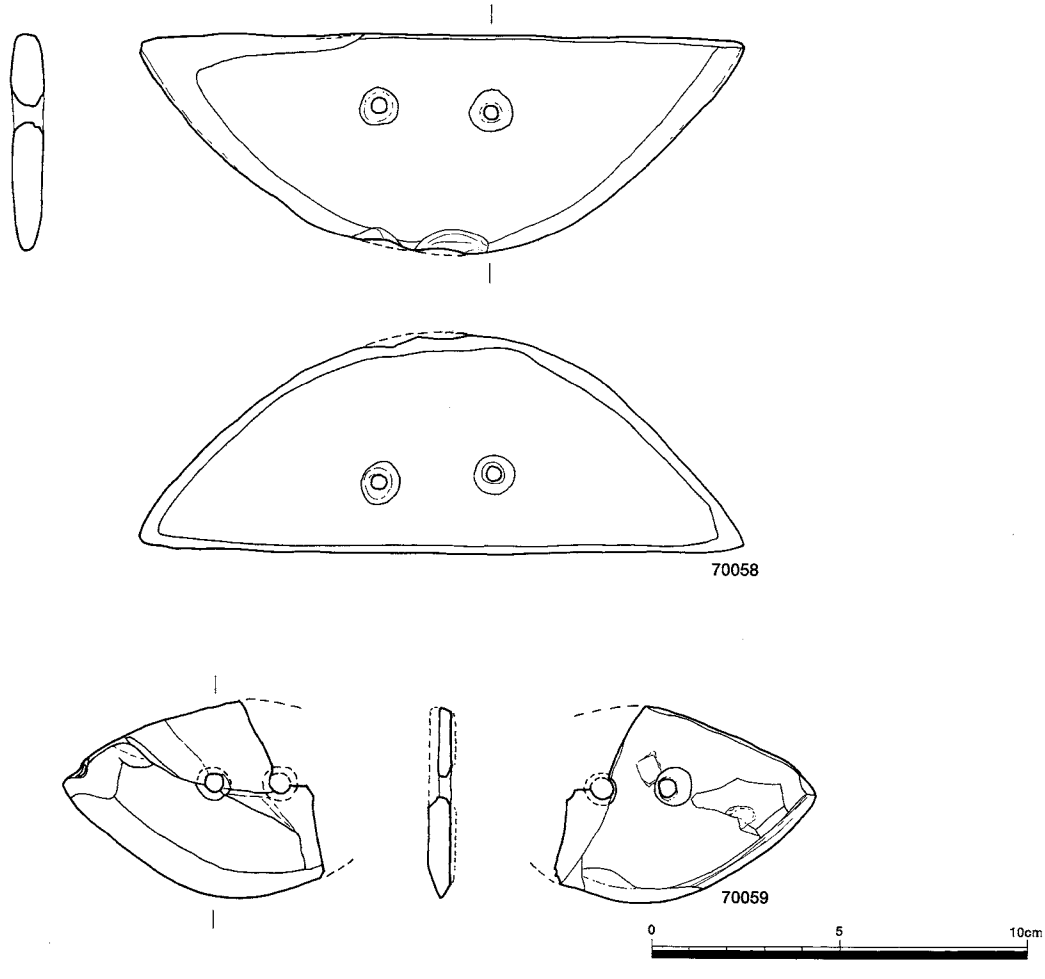


Fig.122　溝SD117出土石製品実測図（1/2）

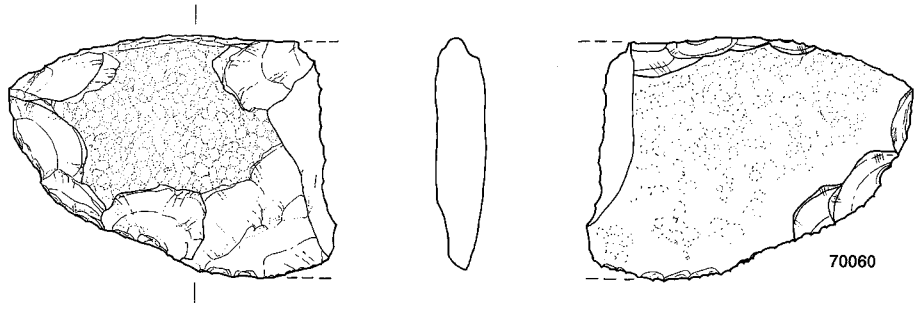


Fig.123　土坑SK119出土石製品実測図（1/2）

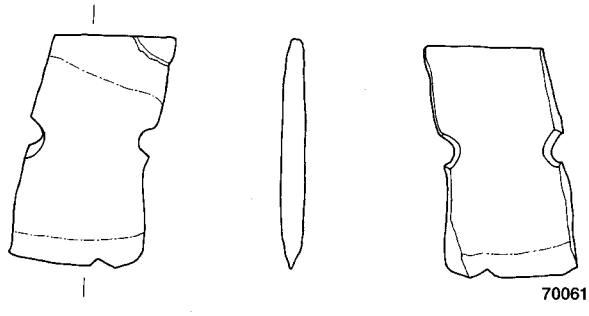


Fig.124　土坑SK121出土石製品実測図（1/2）

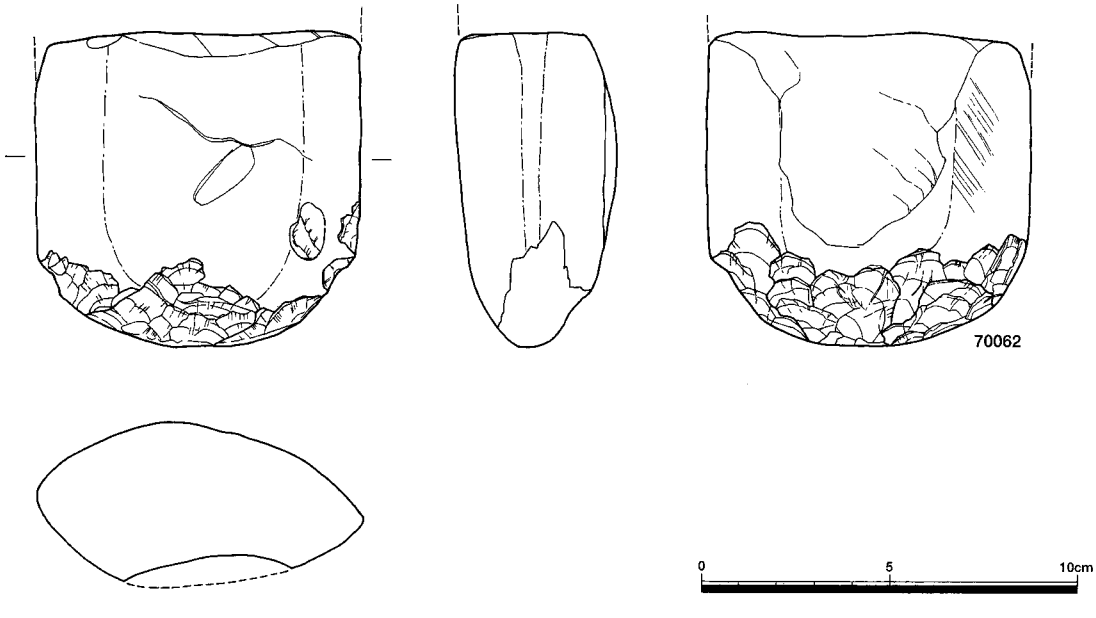


Fig.125　土坑SK123出土石製品実測図（1/2）

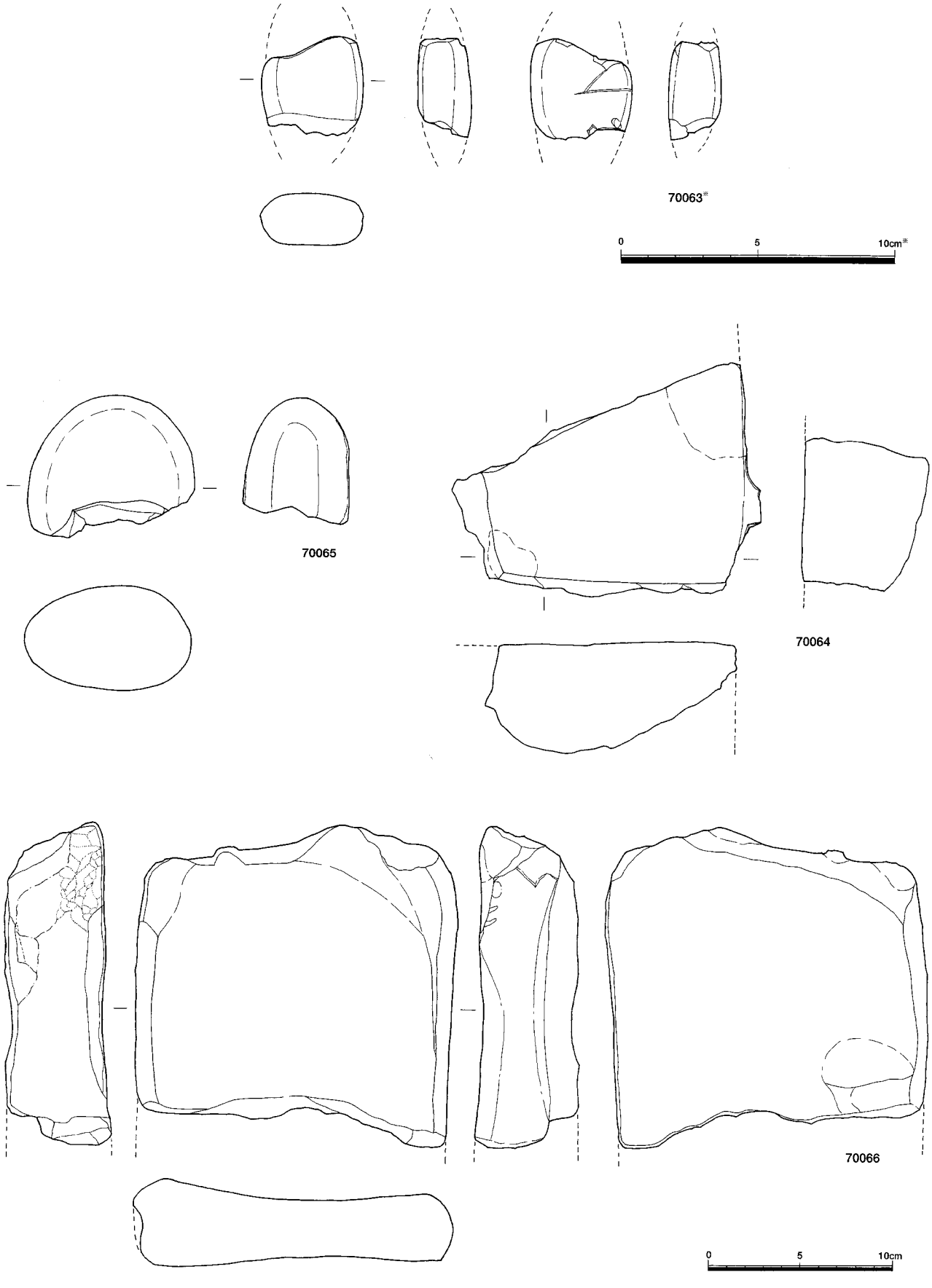


Fig.126　土坑SK124出土石製品実測図（1/2※・1/3）

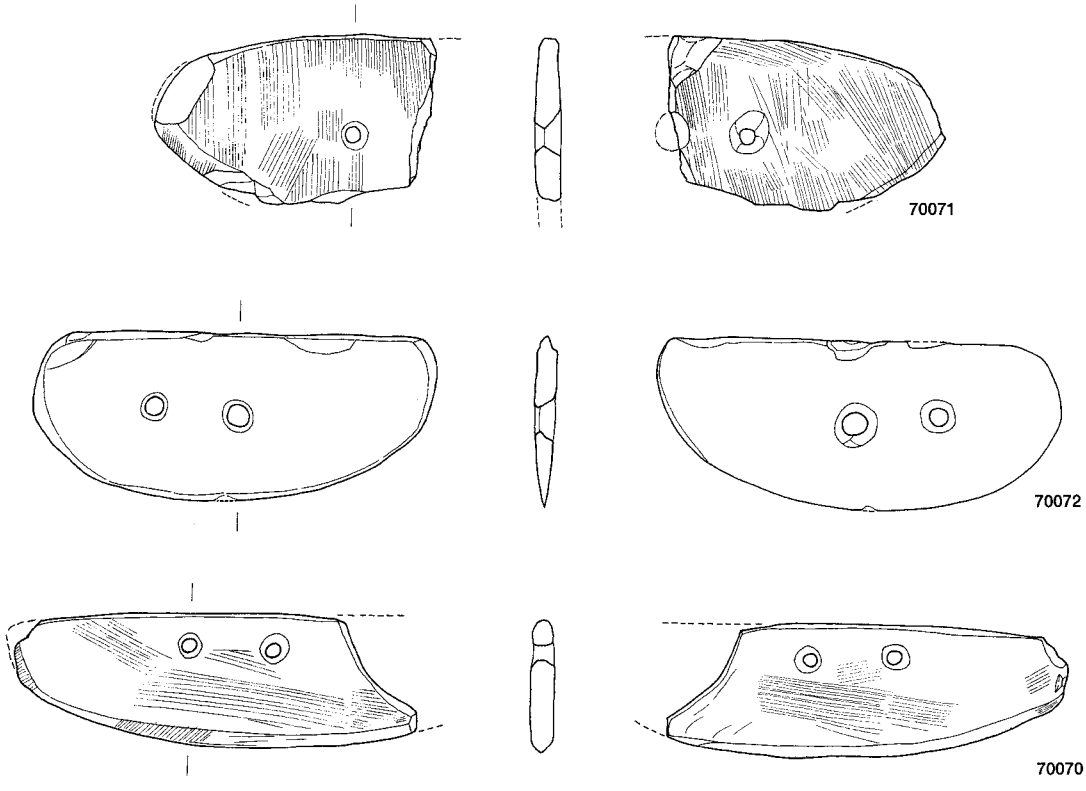


Fig.127　土坑SK126出土石製品実測図（1/2）

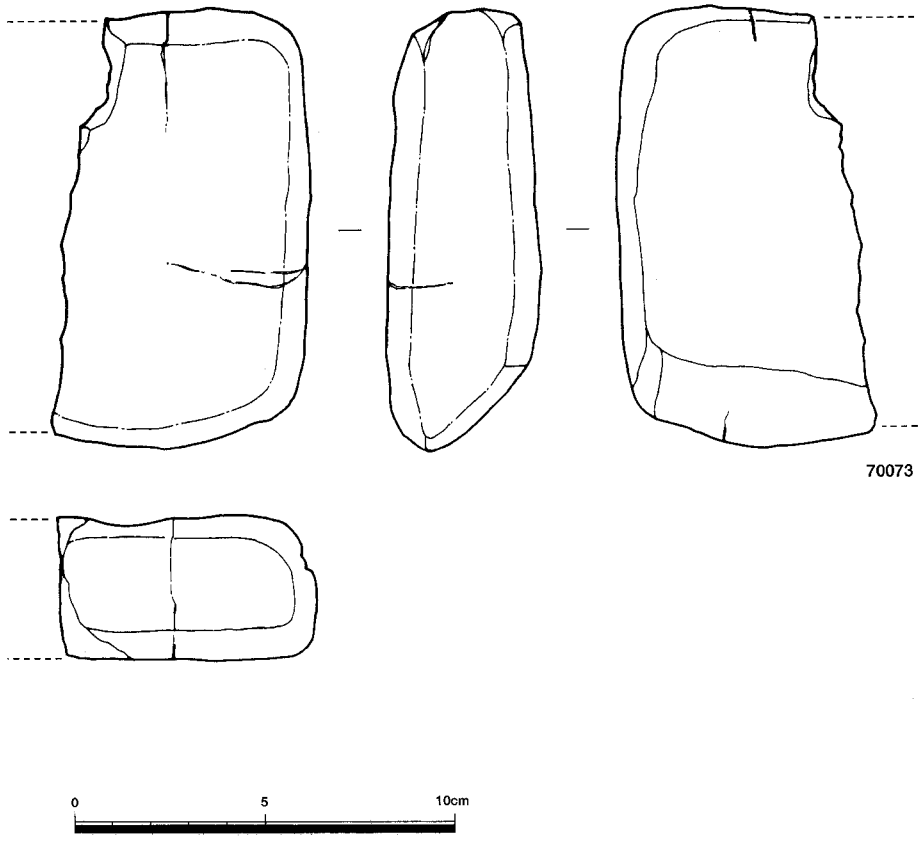


Fig.128　土坑SK131出土石製品実測図（1/2）

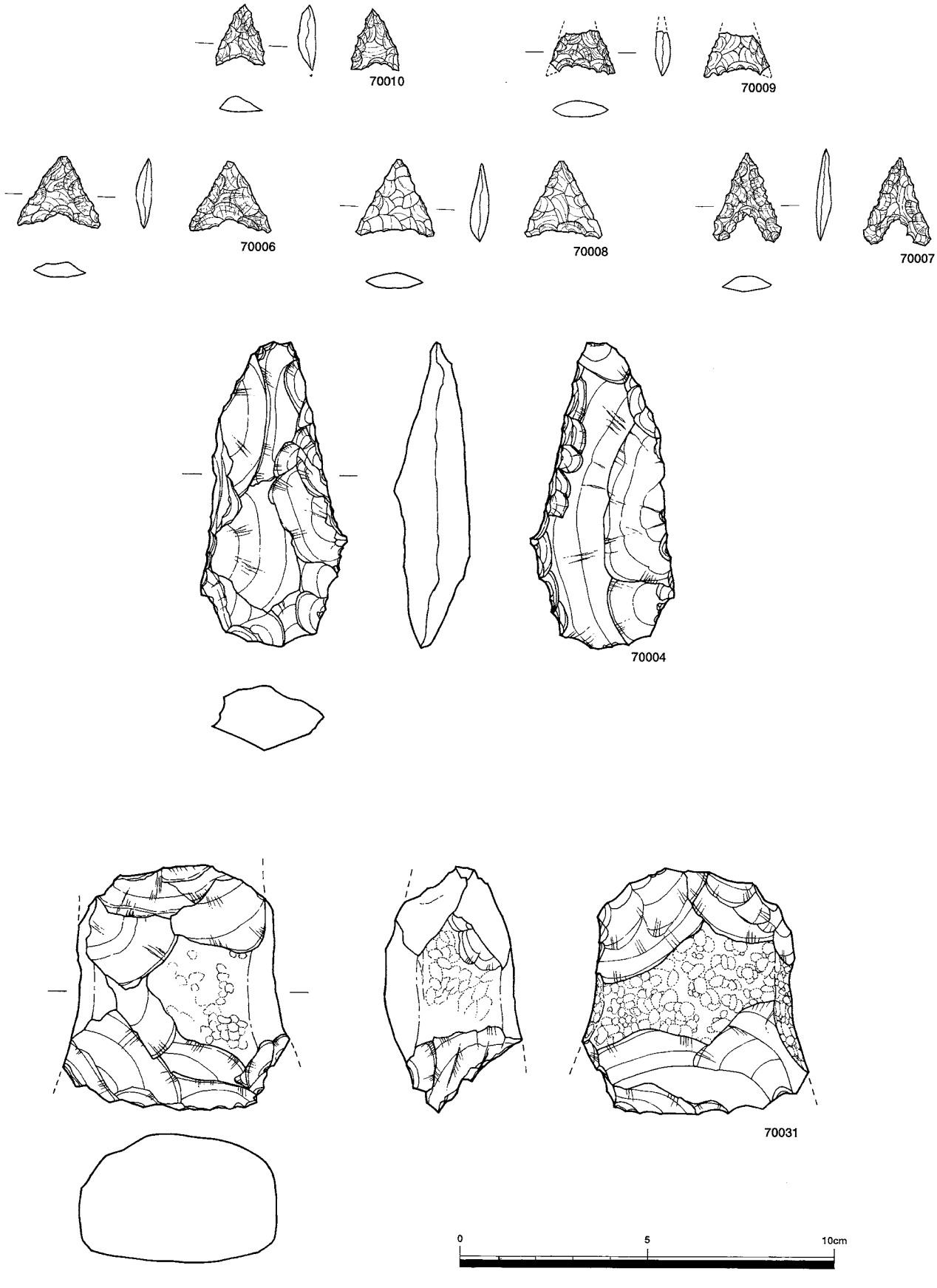


Fig.129　土器集積遺構SX107出土石製品実測図１（2/3）

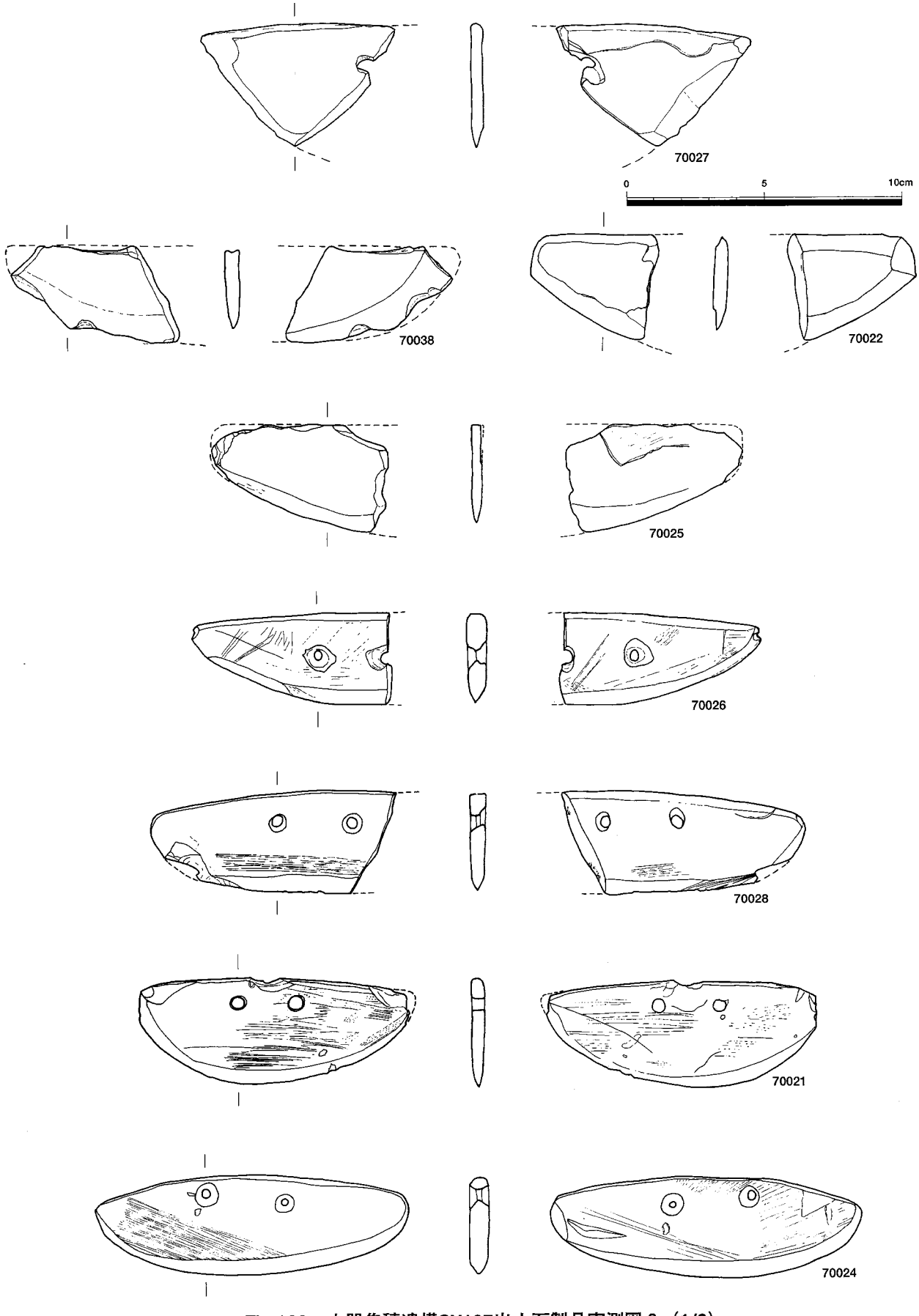


Fig.130　土器集積遺構SX107出土石製品実測図２（1/2）

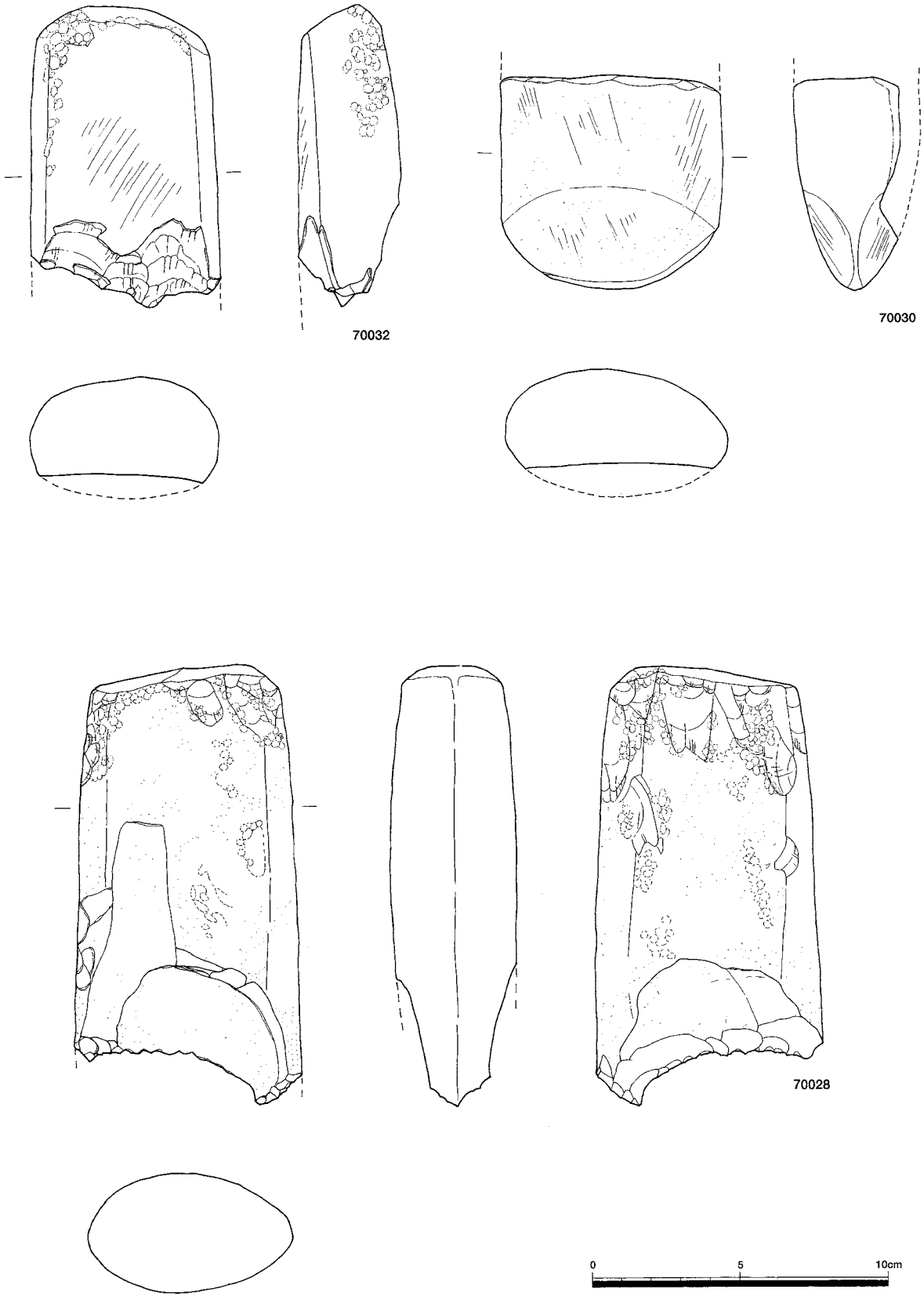


Fig.131　土器集積遺構SX107出土石製品実測図 3 （1/2）

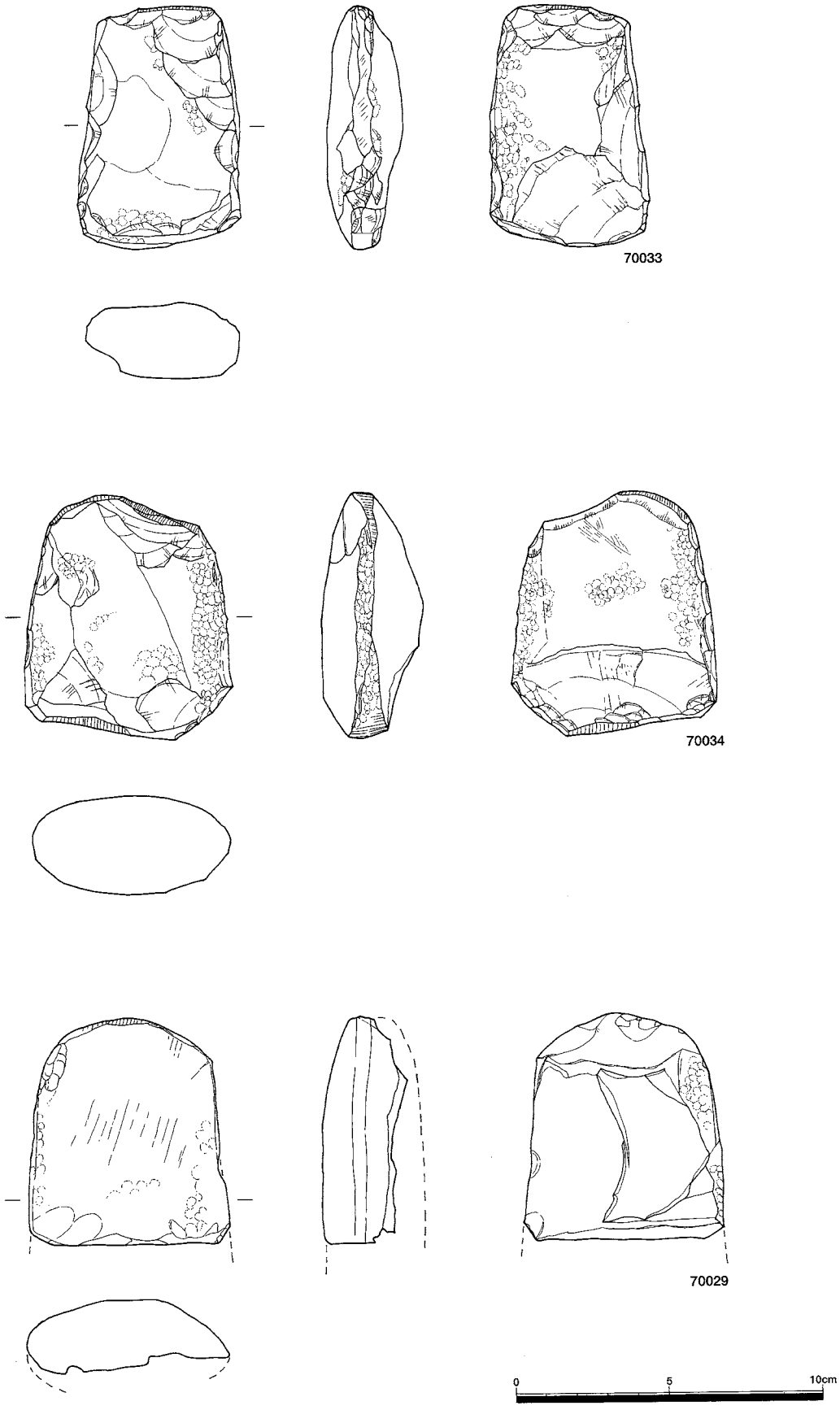


Fig.132　土器集積遺構SX107出土石製品実測図４（1/2）

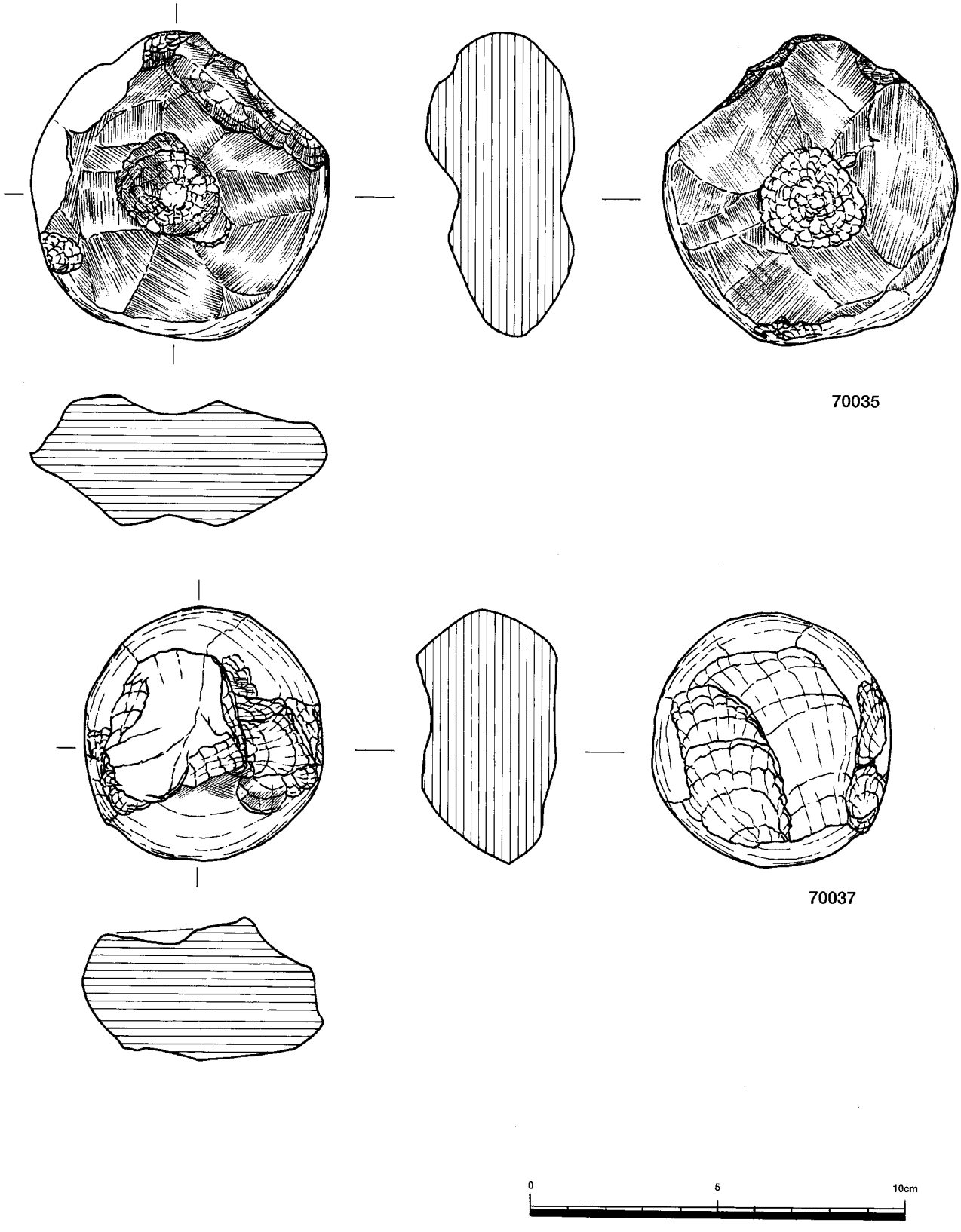


Fig.133　土器集積遺構SX107出土石製品実測図５（2/3）

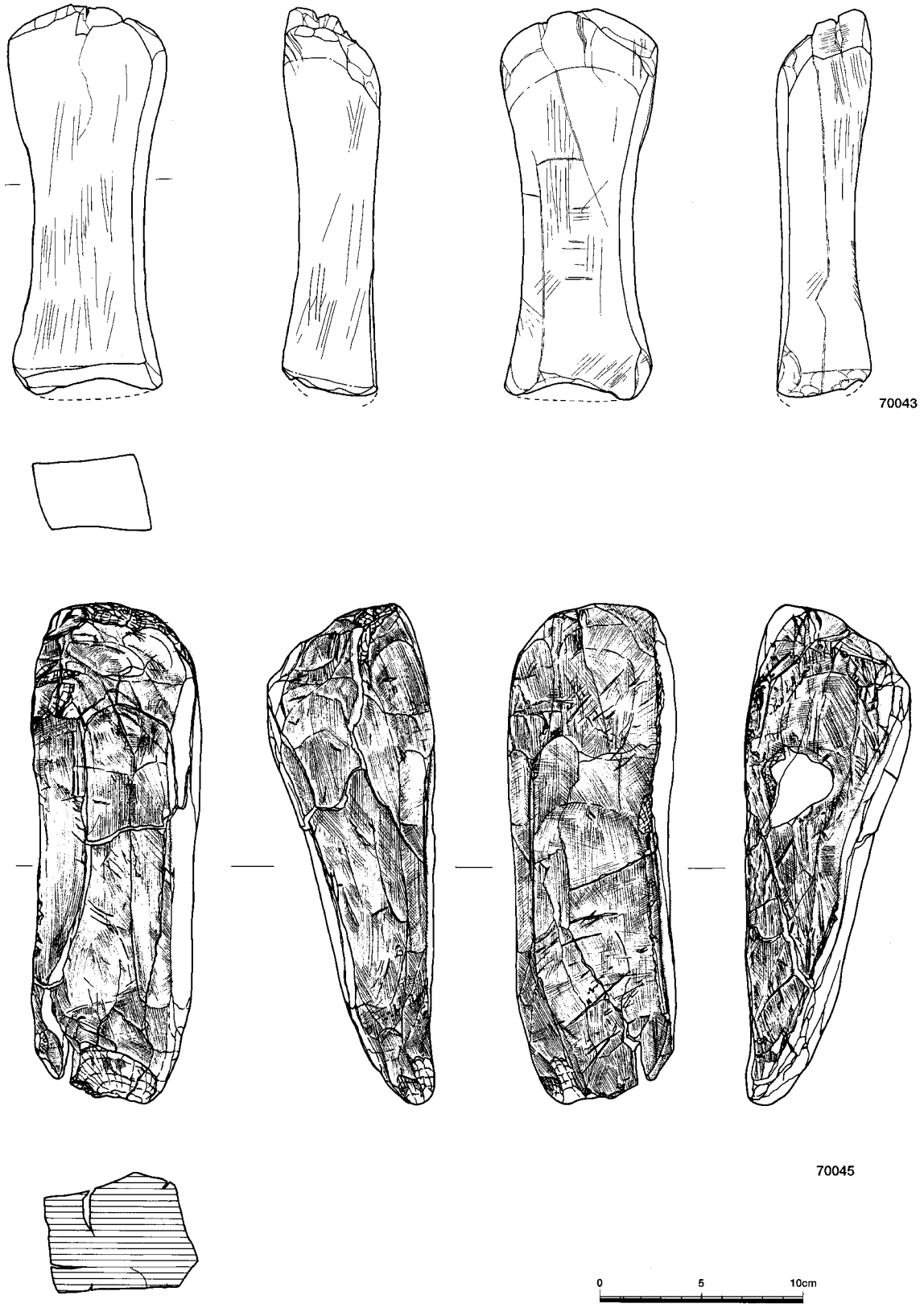


Fig.134　土器集積遺構SX107出土石製品実測図 6 （1/3）

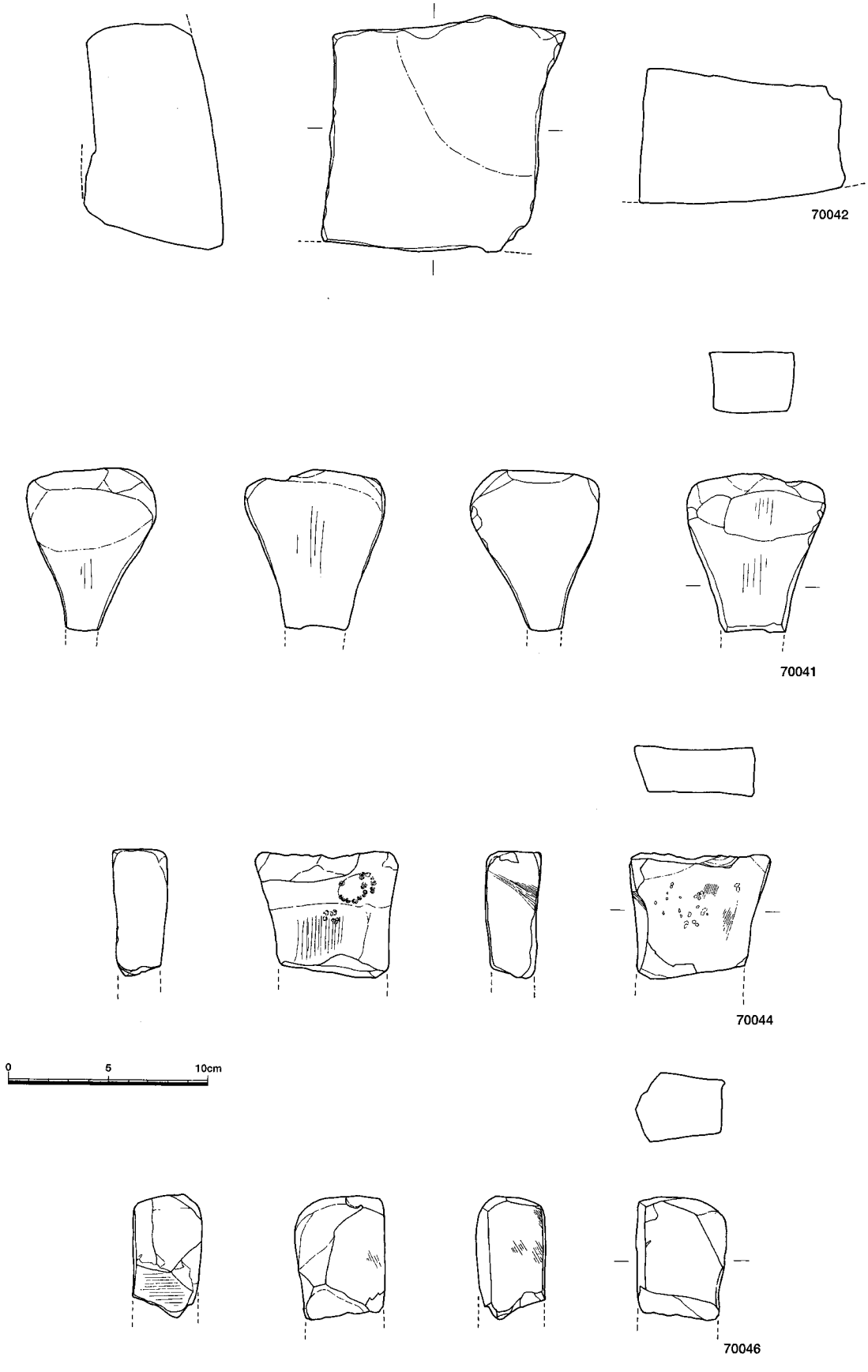


Fig.135　土器集積遺構SX107出土石製品実測図７（1/3）

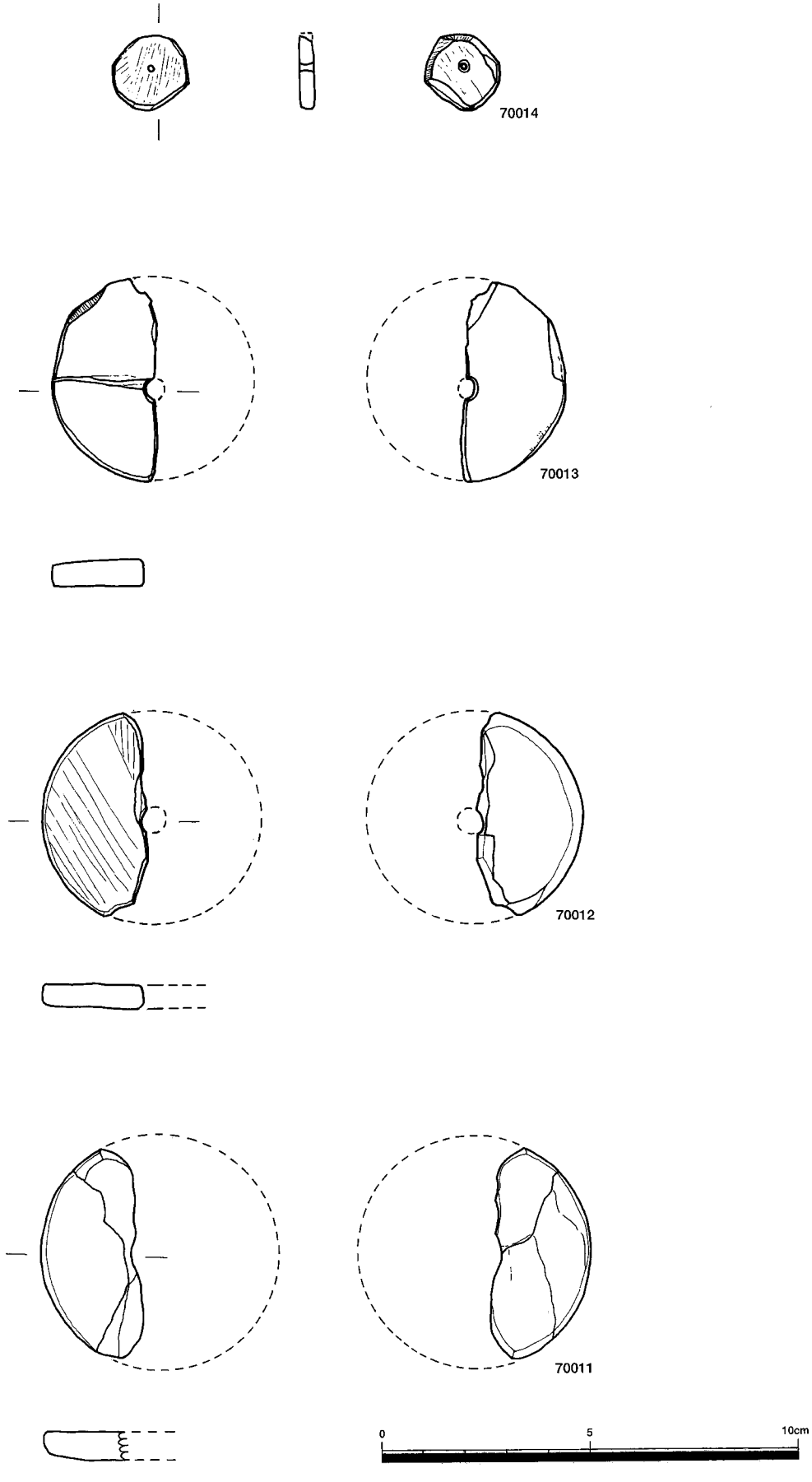


Fig.136　土器集積遺構SX107出土石製品実測図 8 （2/3）

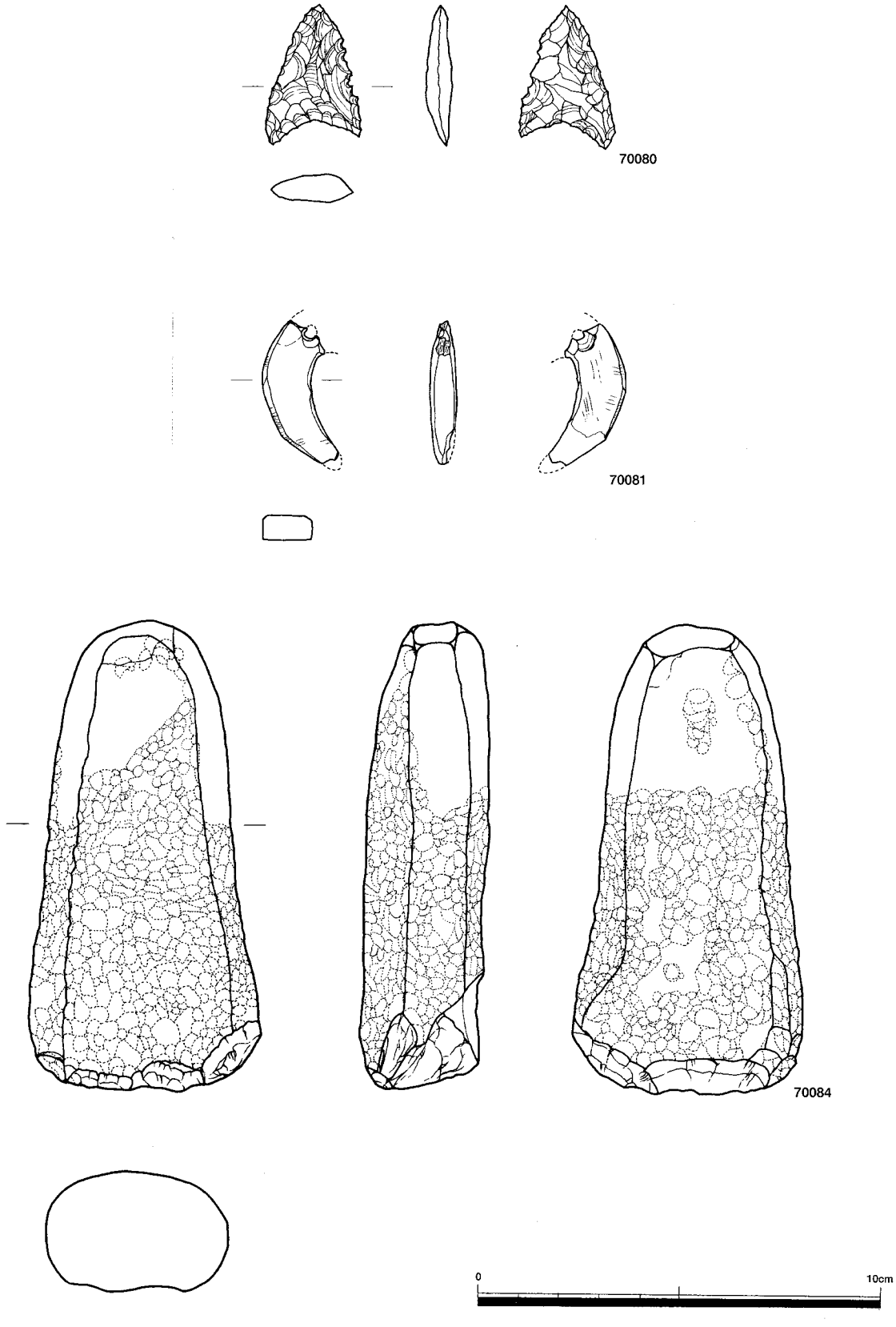


Fig.137　暗茶褐色砂質土出土石製品実測図（2/3）

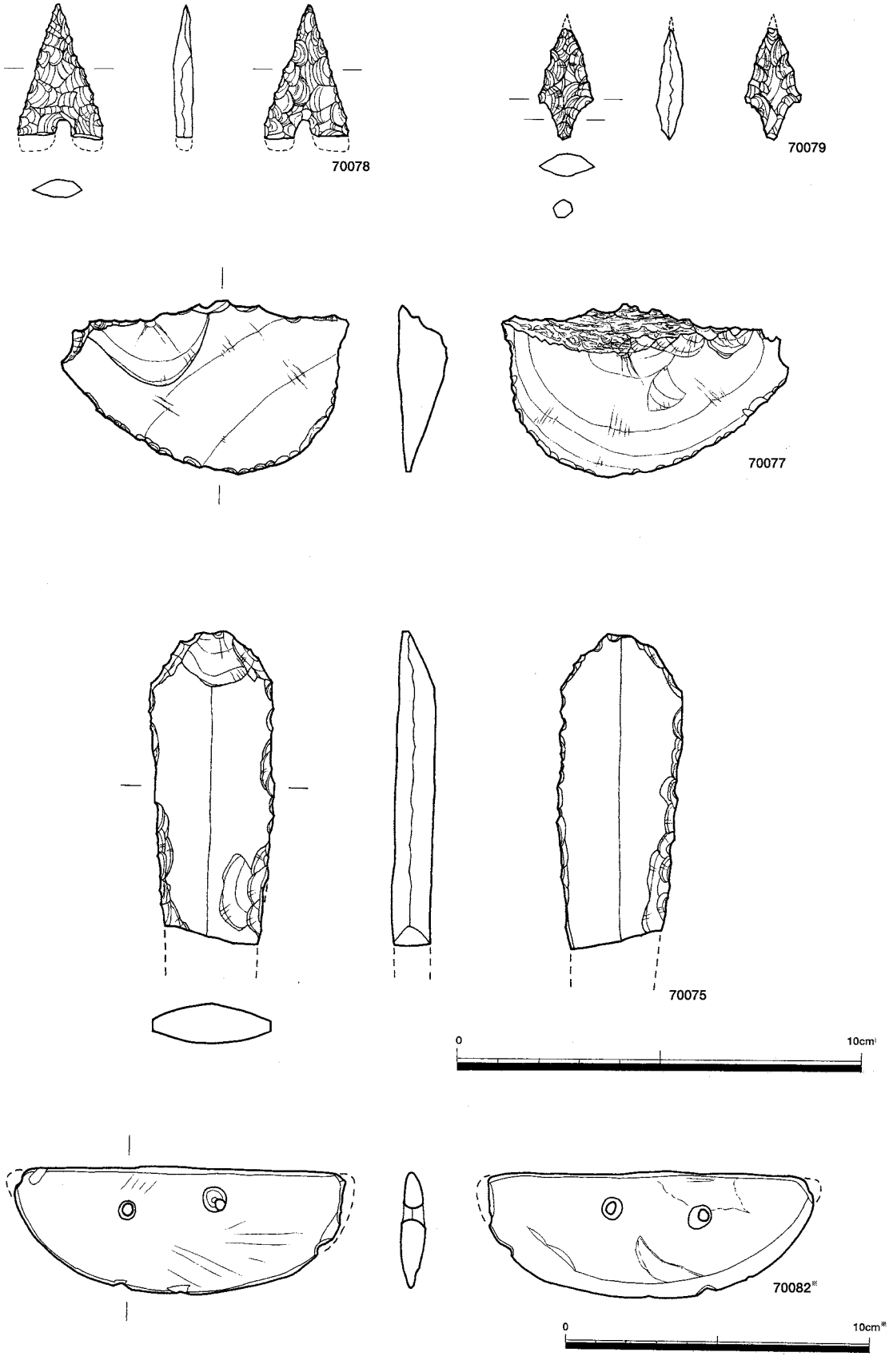


Fig.138　黒色土層・黒色粘質土層出土石製品実測図（2/3※・1/2）

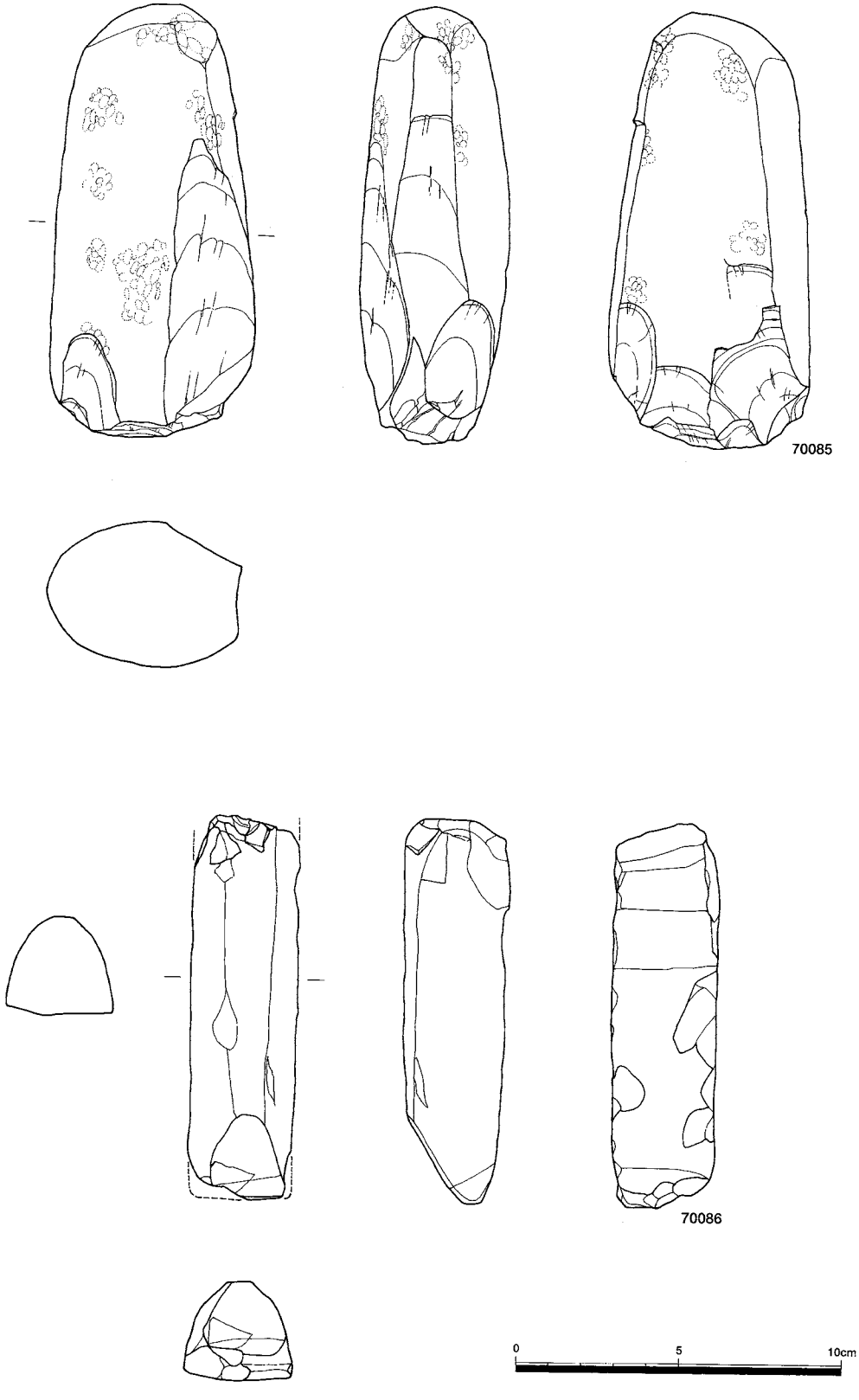


Fig.139　黒褐色粘質土層出土石製品実測図（1/2）

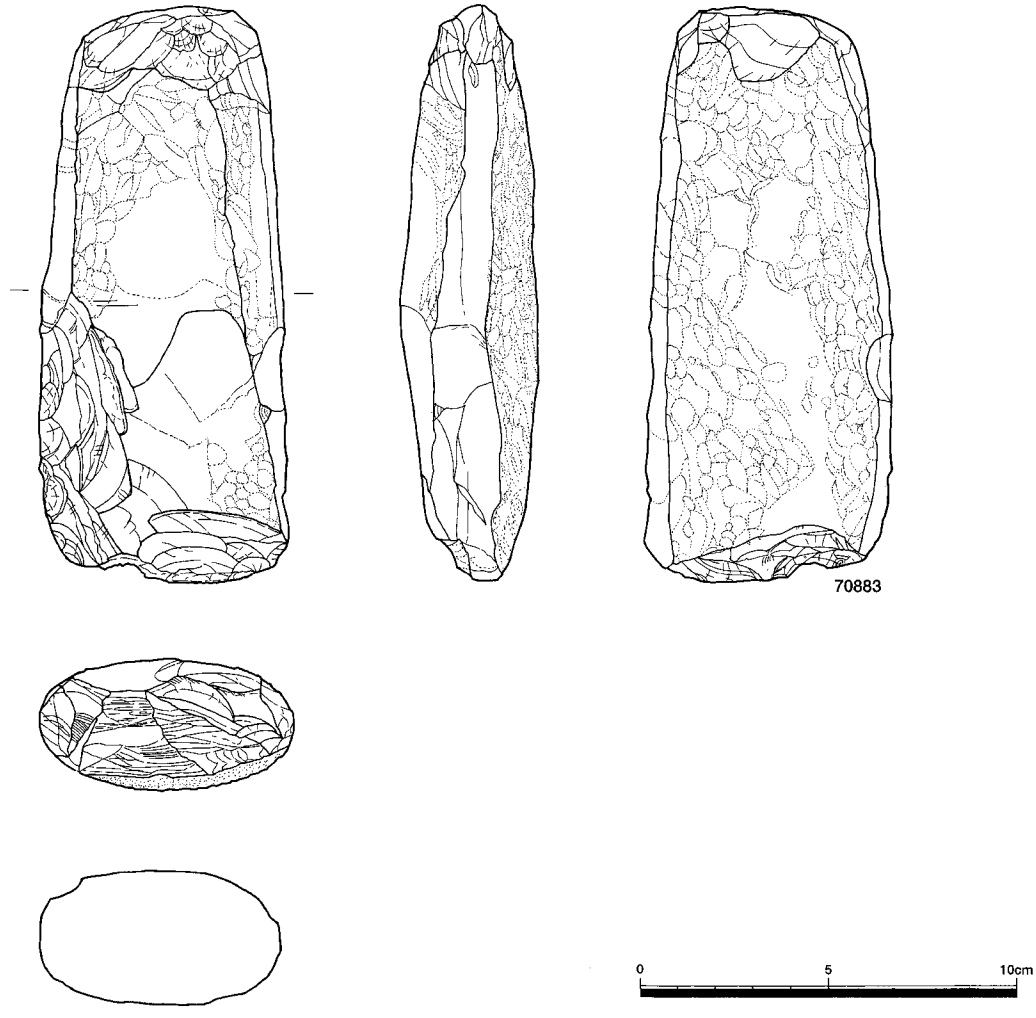


Fig.140　黒色粘質土層出土石製品実測図（1/2）

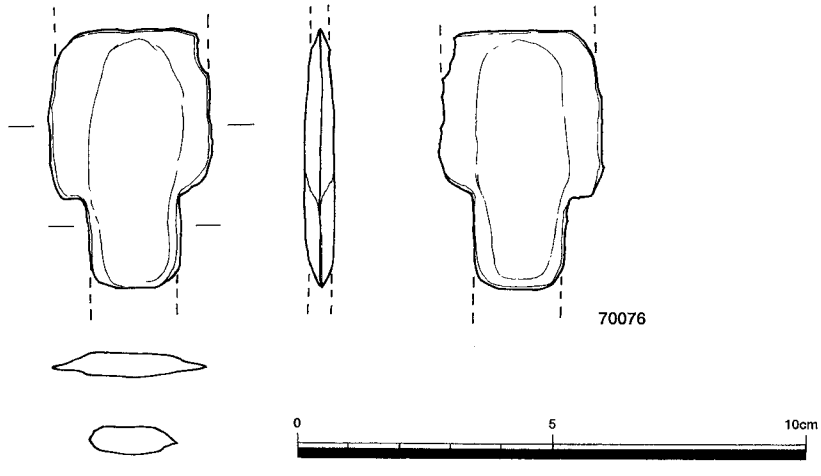


Fig.141　包含層出土石製品実測図（2/3）

面を呈して使用頻度の高さを知る。**70044**・**70047**は小型の砥石の破損品。**70045**は楔形の形状を呈する大型の砥石で、粘板岩製。**70005**は硅化木石製で、一端を擦り尖がらしている。穿孔具の可能性が高い。**70184**・**70185**は変岩石製の敲打具で、径5㎝前後を測る。黒曜石剥片が大量に出土している。

SX127 太型蛤刃石斧が出土している。

暗茶褐色砂質土（Fig. 137 PL. 114） **70081**は滑石製勾玉の欠損品。**70080**は大型の黒曜石製石鏃。

黒色土（Fig. 138 PL. 114） **70078**は黒曜石製の鍬形石鏃で端部を欠損。縄文時代早期の形態。**70079**は黒曜石製の有茎石鏃。弥生時代前期の形態。**70082**は粘板岩製で身が狭く、刃が直線的なB型。

黒色粘質土（Fig. 138, 140 PL. 114）**70075**は磨製石剣の剣先部分で、両刃部は欠損。**70033**は扁平片刃石斧で、刃部が荒く割れている。

黒褐色粘質土（Fig. 139 PL. 114） **70085**は刃部が荒く割れている。**70086**は柱状抉入片刃石斧。刃部には使用痕が残る。

包含層（Fig. 141）**70076**は磨製石剣で、刃先を欠損。

（3）金属製品

1）第1遺構検出面

小 穴

SP24

鉄鏃の茎部が出土している。**80004**は矢尻部を欠損する。茎部残長は9.7㎝を測る。断面形は方2.5㎜を測る四角形を呈する。表面には矢柄に挿入した木質が付着する。**80005**は鉄製の鑿である。全長11.8㎝を測り、頭部はややつぶれている。

包含層

80006は板状の鉄製品で、全長12.8㎝、幅2.6～3.3㎝、厚さ1.0㎝を測る。隅は丸味を持ち、片方にややすぼまる。鍛造品と思われる。**80007**は鉄製板状の破損品である。鍛造品である。

2）第4遺構検出面

土器集積

SX107（Fig. 142 PL. 115）

80002は鉄製の鍛造品で、中央部がやや狭い隅丸長方形の平面形を呈し、羽根のような形状である。片方の中央縁が張り出している。厚み0.55㎝を測る。用途は不明。

黒灰色土（Fig. 143 PL. 115）

鉄鏃の茎部が出土している。**80003**は刃部を欠損する。茎部全長は14.8㎝を測る。断面形は4㎜×3㎜の長方形を呈する。矢柄挿入部分は先細を呈し、長さは5.5㎝を測る。矢先は欠失して形状は不明である。

包含層（Fig. 144 PL. 115）

80001は木製鍬もしくは鋤の先端に装着する刃先で、破損している。残存する刃部幅は3.2㎝を測る。断面形はV字形を呈し、厚みは3㎜を測る。鍛造品である。

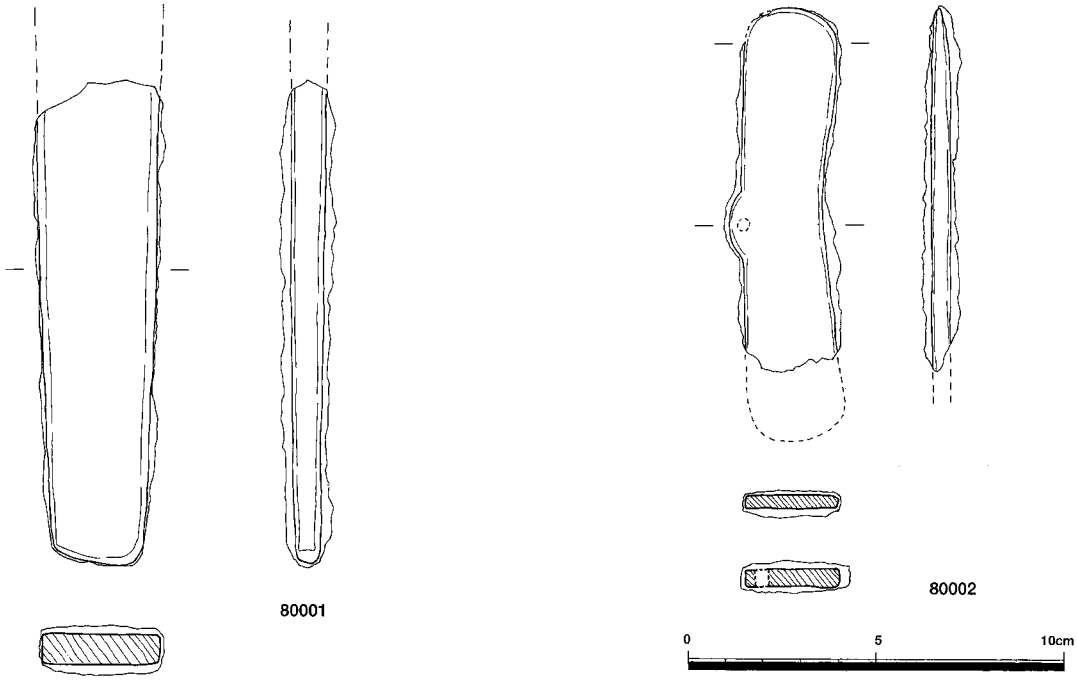


Fig.142　土器集積遺構SX107出土金属製品実測図（1/2）

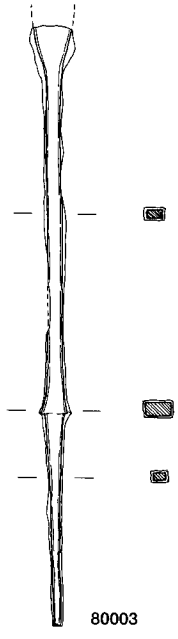


Fig.143　黒灰色土層出土金属製品実測図（1/2）

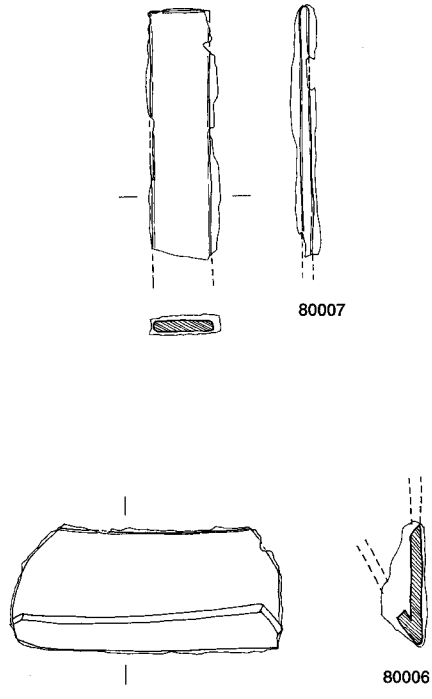


Fig.144　包含層出土金属製品実測図（1/2）

（4）木製品・建築部材

1）第1遺構検出面

井　戸（SE）

SE68

井戸の井筒材として、底板を取り除いた曲物を転用している。

SE80

井戸の井筒材として、底板を取り除いた曲物を転用している。

SE84（PL. 116）

30001・**30002**は井戸枠材である。

2）第2遺構検出面

河　川（SD）

SD81（Fig. 145　PL. 116）

加工木製品が出土している。**30103**は割材を用い、芯を刳り抜き、丁寧な削り加工で小型の箱に仕上げている。黒漆が部分的にみられることから漆塗布の箱形容器だったと思われるが、破損後、穿孔が施され、目釘が残っており、あか取りとして使用されたか。器長17.8cm、幅約12.1cm、最大厚3.7cmを測る。**30104**は柾目取り材を用いた有孔板材で、遺存長8.9cm、幅4.4cm、最大厚0.7cmを測る。

SX85（Fig. 145　PL. 116）

曲物底板・容器が出土している。**30105**はスギの板目取り材を用いた曲物で、底板と桜皮で留めた一段目が遺存しており、底板径19cm、同最大厚0.8cmを測る。**30106**は割材を用いた長さ29.7cm、径1.3cmを測る棒状木製品で両端は面取り加工を施している。

3）第3遺構検出面

河　川（SD）

SD102（Fig. 146　PL. 34, 116）

曲物桶の底板、鋤が出土している。**30108**はスギの板目取り材を用いた曲物の底板で、側縁の3箇所に側板固定用の穿孔がみられ、長軸遺存長49.85cm、幅5.7cm、底最大厚0.7cmを測る。**30109**はスギの割材を用い、長さ3cm、幅2.4cm、厚さ2cmの枘を造り出している組合せ部材で端部は火を受け炭化している。遺存長14.8cm、幅3.5cm、最大厚5.6cmを測る。**30110**はカシの柾目取り材を用いた一木造り平鋤で、抄い部は痛みが激しいため着装痕跡は明瞭ではないが鉄刃を着装したと考えられる。遺存長47.2cm、幅16.6cm、最大厚3.65cmを測る。

4）第4遺構検出面

溝（SD）

SD103（Fig. 147　PL. 41, 117）

杓文字・机の脚・槽・広鍬・鍬・鋤等の農具・什器・家具などが出土した。農具は、直柄平鍬・二又鍬と鋤があり、いずれもカシの柾目取り材を用いている。鍬類は方形着柄孔を持ち、**30112**は平鍬で器長28.6cm、遺存幅14cm、最大厚2.8cm、**30115**は二又鍬で、遺存長24.1cm、幅8.3cm、最大厚1.9cmを測る。**30113**は平鋤の抄い部で肩に足掛かり用の造り出しを持っているが、柄部や抄い部の半分は欠失しており、破損後他の道具として転用したか。抄い部長33.9cm、幅11.6cm、最大厚2.2cmを測る。

30111はカシの柾目取り材を用いた杓文字状木製品で、柄の中ほどに縄縛痕がみられ器長57.7cm、幅10.7cm、最大厚1.6cmを測る。**30114**はスギの柾目取り材を用いた机の脚で遺存長23.2cm、幅7.5cm、最大厚0.9cmを測る。**30116**はスギの割材を用い、芯を刳り抜き箱型に成形した槽で、片端に縄掛かりの穿孔を造り出している。遺存長26.1cm、幅14.9cm、器高6.5cmを測る。**30117**はカシの芯持ち材を用いた棒状木製品で遺存長59.2cm、径5.3～5.9cmを測る。

SD104（Fig. 148～158　PL. 43～45, 118～124）

机の脚・槽、二又鍬・二又鍬未製品・杵・掛矢・平鍬・エブリ・泥避け、建築材扉・梯子・柱、板状木製品等の農具・家具・建築材などが出土した。農具は直柄二又鍬・三又鍬・反柄二又鍬・泥除け・鋤類・エブリ・竪杵がある。鍬類・鋤類・エブリはいずれもカシの柾目取り材を用いている。**30118**～**30120**・**30122**～**30126**・**30202**の直柄二又鍬と**30121**・**30127**・**30129**の直柄三又鍬は方形着柄孔を持ち、**30128**は反柄二又鍬である。**30122**は表面に削り加工痕が残り、刃部長32.2cm、右刃最大幅6.5cm、左刃最大幅5.5cm、器長52.7cm、最大幅16cm、最大厚1.7cmを測る。**30123**は器長39.5cm、遺存幅11cmを測る。**30202**は刃部片で内側縁に切り込みがあり転用したか。**30128**は突起部下の外側両端に縄縛痕が、頭端部内側に段があり反柄を着装したと考えられる。刃部長約34cm、遺存器長58.9cm、幅10.4cm、最大厚1.5cmを測る。**30127**は刃部長40cm前後、遺存長51.3cm、幅5.6cmを、**30124**は遺存長52cm、幅5.6cm、最大厚2.3cmを測る。**30129**の刃部の横断面形は中央刃が六角形、右側刃が五角形で遺存長26.6cm、幅8.7cm、最大厚1.5cmを測る。**30003**は直柄二又鍬の未製品。**30134**はカシの柾目取り材を用いた泥除けで、楕円形の着柄孔を持ち、頭部と右下端に紐掛かりの穿孔がみられる。器長約17cm、幅26.6cm、最大厚0.9cmを測る。**30203**はカシの板目取り材を用い方形着柄孔を持っている。泥除けか。遺存長9.9cm、幅12.6cm、最大厚1.25cmを測る。**30131**～**30133**・**30149**は一木造り平鋤、**30130**は逆三角形の握部を造り出した鋤柄である。**30149**は抄い部肩に足掛かりの造り出しを持ち、遺存長44.1cm、幅7.6cm、最大厚1.7cmを測る。**30131**～**30133**は、遺存長49.7cm・60.6cm・30.1cm、最大厚3.2cm・2.3cm・2.5cm、抄い部遺存幅10cm・15.6cm・10.3cmを、**30130**は遺存長21.4cm、幅9.1cm、最大厚2.7cmを測る。**30136**は木取りからエブリと考えられ、円形の着柄孔は円錐台の隆起部を持ち、遺存長14.8cm、幅29.3cm、最大厚3.7cmを測る。**30005**は柾目取り材を加工したもので、半分を欠損するが、方70cmを測る隅丸方形の形状と考えられる。

30137は割材を、**30138**は芯持ち材を用いた竪杵で、いずれも搗部端は凸レンズ状をなし、**30137**は痛みが激しく、横断面形は楕円形をなし、器長85.6cm、搗部最大径4.6cm×7.9cm、握部最小径2.7×3.3cmを測る。**30138**は遺存長36.2cm、最大径7.9cm×9.2cmを測る。**30007**は芯持ち材を用いた竪杵で、いずれも搗部端は平坦で周縁部を面取りする。搗部には樹皮が残存する。握部はくびれて屈曲を呈する。器長86.1cm、搗部最大径7.4cm×8.2cm、握部最小径3.1cm×3.5cmを測る。**30009**は芯持ち材を用いた横槌の形状で、敲打部中央には使用欠損部がある。したがって、杭などを打ち込むために使用した掛矢としたい。器長57.8cm、敲打部最大径9.4cm×10.2cm、握部最小径3.8cm×4.2cmを測る。

30004はスギの割材を用い、芯を刳り抜いた槽で、遺存長109cm、遺存幅21.5cmを測る。

30141～**30143**・**30145**はカシの柾目取り材を用いた組合せ部材板で、**30141**・**30142**は対になり、板中央の相対する位置に中心間５cm間隔で横長の、相対する側縁近くに縦長の長方形孔があり、横長の方は別材が遺存しているところもある。この４点は２枚一組の一個体と考えられ、大足の枠か橇と考えられる。**30141**は遺存長34.4cm、幅6.3cm、最大厚1.3cmを、他も幅6.1cm～6.5cm、最大厚0.9cm～1.3cmを測る。

30144はスギの板目取り材を用いている。木取りは異なるが、形状から机の脚と考えられ、遺存長

24cm、幅6.4cm、最大厚1.1cmを測る。

30139・30140はスギの板目取り材を用いた組合せ部材の有孔板材で、**30139**は板中央に3cm間隔で円孔を持ち、遺存長14.9cm、幅3.1cm、最大厚1cmを測り、**30140**は板中央に2.5cm間隔を単位とする円孔を3cm間隔で配置し、遺存長15cm、幅2.6cm、最大厚0.7cmを測る。**30151・30152**は同一個体で板目取り材を用いた組合せ部材の有孔板材で、平面形は長楕円形を呈し両端近くに方形孔を穿っている。器長69.9cm、幅11.9cm、最大厚3.2cmを測る。**30135**はクスノキ？の柾目取り材を用いた組合せ部材の台部と考えられる有孔板材で、平面形は半月形を呈し、両端近くに長方形孔を穿ち、裏面中央にも穿孔を試みている。横断面形は台形を呈し縁辺には削り加工痕が明瞭に残っており、器長40.9cm、幅17.9cm、最大厚4.3cmを測る。**30148**はカシの柾目取り材を用いた板材で、上端から10cmの右側縁にコの字状の切り込みがあり、他端は焼失し炭化しており、遺存長56.1cm、幅6.5cm、最大厚1.5cmを測る。**30150**はシイの柾目取り材を用いた板材で、上端はL字状に面取りしているが欠損しており形状はわからなく、他端も焼失している。遺存長24cm・幅8.6cm、最大厚1.4cmを測る。**30154**は芯持ち材を用いた加工材で横断面形三角形に成形しているが、容器等の未製品か、削り屑と考えられ、器長26.9cm、幅15cm、最大厚12cmを測る。

30146はクヌギの柾目取り材を用いた扉で、遺存長81.3cm・幅18.5cm・最大厚3.8cmを測る。**30147**は割材を用いた梯子で、上から2段遺存し、足掛かり間隔は34cm弱で、遺存長73cm、幅17.1cm、最大厚6.9cmを測る。**30012**は芯持ち丸太を用い、頭端部を面取する杭で、上端部近くにV字形の切り込みを入れている。器長101cm、最大径4.6cmを測る。垂木材の転用の可能性が考えられる。**30153**は芯持ち丸太を用い、枝を落とし、上端部からL字状の切り込みを入れた杭で、部分的に表皮が残り器長40.1cm、最大径6.2cmを測る。**30011**は割材を板状に削り出し、他端部もしくは途中に切り込みを入れた杭である。遺存長139.5cm、最大幅8.5cm、最大厚6.0cmを測る。**30014・30016**は樹皮を取り除き、面取した芯持ち材である。端部もしくは中央に他の部材と組み合わせる仕口がある。**30014**は残存長150.5cm、最大径5.0cm、仕口幅4.0cmを測る。垂木の可能性がある。**30016**は残存長103.2cm、最大径7.2cm、仕口幅2.0cm×4.8cmを測る。**30006**は芯持ち丸太を削り出したもので、両端には曲面の抉りがある。方7.5cmの枘穴が4ヶ所にあり、その間隔は32.5cmを測り、均等である。この穴は竪木舞の穴と考えられる。断面形は楕円形を呈し、全長172.5cm、最大幅8.0cm、最大厚5.5cmを測る。**30010**は芯持ち材で、丸太を断面形が小判型に削りだしたものである。遺存長259.5cm、最大幅9.5cm、最大厚7.0cmを測る。**30008**は二股に枝分かれしている部分を利用した竪穴住居の柱と考えられる。芯持ち材で、枝分かれ部分に横架材が組み込むように仕口がある。頂部は野球バットのグリップエンドのような形状で、切り込みが巡る。遺存長175.5cm、最大径10.5cm、仕口幅7.5cmを測る。

SD105（Fig. 159　PL. 125）

カシの柾目取り材を用いた鍬類4点が出土した。**30158**は乾燥により圧縮変形ぎみで遺存状態が悪いが方形着柄孔を持つ直柄平鍬で、遺存長24.9cm、幅11.1cm、最大厚1.2cmを測る。**30155・30157**は方形着柄孔を持つ直柄二又鍬で、刃部横断面形は五角形をなし、**30155**は刃部長24.5cm、器長48.5cm、遺存幅11.8cm、最大厚2cmを、**30157**は遺存長28.5cm、幅5.7cm、最大厚1.2cmを測る。**30156**は反柄二又鍬で遺存長44.7cm、幅11cm、最大厚1.5cmを測る。**30017**は頂部に四角い抉りの仕口を有する芯持ち材で、他端部は削り尖らしている。柱の転用の可能性が高い。全長69.6cm、最大径7.4cm、仕口幅8.4cmを測る。

SD108（Fig. 160～166　PL. 47～53, 55, 56, 126～129）　竹製編物笊、槽・円筒容器、二又鍬・三又鍬・杵・横槌・平鍬・鋤・泥避け、ネズミ返し横架材・高床建物柱等の農具、工具、容器類、建築

材が出土した。農具は直柄鍬類と鋤があり、鍬類の**30164**がクヌギの板目取り材を用いている他はカシの柾目取り材を用いている。**30164**は楕円形台の隆起部に着柄円孔を内側に持つ内反の幅狭の諸手鍬で、痛みが激しく、遺存長33.2cm、幅12.9cm、最大厚4.5cmを測る。他の鍬類は方形着柄孔を持ち、**30163**は平鍬、**30159**～**30161**は二又鍬、**30162**は三又鍬である。**30163**は丸みを持つ刃は痛みがあり、器長32cm、遺存幅10.3cm、最大厚1.6cmを測る。二又鍬の刃横断面形は五角形を呈し、**30160**は刃部長35.6cm、器長55.6cm、遺存幅7.5cm、最大厚1.9cmを、**30159**・**30161**は遺存長32.4cm・40.6cm、遺存幅7.7cm、最大厚1.5cm・1.95cmを測る。**30162**の中央刃は六角形を呈し、器長36.5cm、遺存幅10.9cm、最大厚1.8cmを測る。**30165**は三角形の握部を持つ鋤柄で、遺存長30.6cm、幅9.7cm、最大厚2.7cmを測る。

30166は芯持ち材を用いた横槌で、敲打部（搗部）・握部とも丁寧に仕上げ削り痕はなく、搗端部は凸レンズ状をなしており、搗部長17.7cm、器長28.9cm、最大径4.7cm×6.6cmを測る。

30167は芯持ち丸太の芯を刳り抜いたボール形の鉢で器面は削り痕がわからないほど丁寧に仕上げており、口径21.7cm、器高6.8cm、最大厚1.3cmを測る。**30168**は柾目取り材を用いた平面形長方形の盤で、遺存長35.1cm、幅７cm、器高７cm、底最小厚0.9cmを測る。**30169**はスギの芯材の柾目取り材を用いた箱形の槽で、両小口に縄掛かりの穿孔を持ち、器長48.2cm、遺存幅15.4cm、底最小厚0.7cmを測る。

30170はスギのナナメ取り材を用いた有孔板材で、中央に円孔を穿ち、一側縁を粗い削り加工でV字状に仕上げ、表裏とも刃物傷があり意図した線刻か。器長24cm、幅30.4cm、最大厚２cmを測る。箏の小口板か。**30173**はカシの柾目取り材を用いた有孔板材で、遺存長34.9cm、幅８cm、最大厚1.9cmを測る。

30018・**30019**・**30022**は樹皮をそのまま残し、片方の端部には野球のバットのグリップエンドのような形状に切り込みを巡らしてくびれを持ち、他方にも樹皮を取り除いて細く削り込む。**30018**は遺存長96.4cm、最大径3.6cmを測る。**30019**は遺存長109.6cm、最大径3.8cmを測る。**30022**は遺存長99.2cm、最大径3.8cmを測る。

30171は表皮の残る芯持ち丸太を用い頭部に粗い面取り加工を加え、頭部下８cmに組合せのコの字状の仕口をいれている。建築部材か杭で、遺存長30.8cm、径5.8cm×6.6cmを測る。**30172**は芯持ち丸太の表皮を除去し、頭端部から12cmのＬ字状をなす切り込みを入れた建築部材で、遺存長86.8cm、径3.3cm×4.9cmを測る。垂木の可能性がある。**30174**はスギの芯持ち丸太を用い、頭端部は丁寧な面取り加工を加え、頭端から約８cmに５cm×3.6cmの枘孔を穿った建築部材で、遺存長102.8cm、幅7.7cm、最大厚６cmを測る。**30175**は表皮の残る芯持ち丸太を用い、先端に三面の面取り加工を加え仕上げている杭で、遺存長88.6cm、径９cm×9.5cmを測る。

30020は横架材の端部にネズミ返しを造り出した一木造りで、樹種はチシャノキ属である。他端部は欠損するが、同様な造りであろう。木面には削り痕跡が明瞭に残る。横架材部は、遺存長269.4cm、最大径15.6cmを測り、端部に柱を差し込む10.8cm×11.6cm、深さ9.8cmの枘穴を設けている。断面形は円形で、中央部を太くし、端部に向かってややすぼまる形状である。ネズミ返し部は41.9cm×49.0cmの隅丸方形の平面形を呈し、厚3.2cm～4.2cmを測る。横架材の最大径を呈する位置で折り返すと全長38.0cmが復元される。また、原木は径が50cm以上である。

30023は梁もしくは桁材で、芯持ち丸太の頭部に断面形が6.0cm×4.0cmで方形、長さ15.2cmを測る造り出しを持つ。遺存長206.5cm、最大径11.0cmを測る。中央部の２ヶ所に方形～長方形で4.0cm×6.0cm、深さ2.1cmの枘孔を設けている。他端部は削り尖らしているが、横架材を転用したものと考えられる。

30021は高床式建物の柱で、芯持ち材である。端部に向かってすぼむ。丸太を円柱状に削り、柱頭には断面形が7.5cm×10.5cmを測る長方形の造り出しを持つ。さらに造り出し中央に5.2cm×14.2cm×7.5cmの角孔が穿ってある。遺存長247.2cm、最大径15.5cm、床下全長201.5cmを測る。

30024は二股に枝分かれしている部分を利用した竪穴住居の柱と考えられる。芯持ち材で、枝分かれ部分に横架材を受けるようにL字状の仕口がある。全長277.2cm、最大径11.5cmを測る。

30025は丸太材である。遺存長356.2cm、最大径13.0cmを測る。

SD112（Fig. 167～170　PL. 58, 130～132）

机、楯、二又鍬・砧・石斧の柄・容器・鋤未製品、建築材の柱等の農具、工具、容器類、武具等が出土した。**30176**はカシの柾目取り材を用いた方形着柄孔を持つ直柄二又鍬で、遺存長31.7cm、幅7.4cm、最大厚1.35cmを測る。**30184**はカシの板目取り材を用いた鍬類着装組合せ具で、器長21.4cm、幅3.3cm、最大厚2.8cmを測る。**30027**は一木造り平鋤の未製品。

工具は斧柄と槌があり、**30180**は芯持ち材を用いた槌で、26cmの搗部、16cmの握部の表面および搗端部には粗い削り加工痕が明瞭に残り、搗部径は7.8cmを測る。

30179はスギの板目取り材を用いた平面形楕円を呈する板材で、中央に孔が穿かれており、桶状容器の蓋か。遺存長32.3cm、幅6.9cm、最大厚0.7cmを測る。**30187**は芯持ち丸木を用い芯を刳り抜いた容器の脚台で、器表には縦方向の丁寧な削り加工痕が残り、底径8.7cm、遺存器高4.7cm、最小厚1cmを測る。**30188**は半裁材を用い芯を刳り抜き、深さ5.7cmの箱形をなす鉢で、口縁は屈曲して内傾し、口縁端はコの字状をなし16.7cm×25.2cmを測り、器表は削り加工痕が残らないように丁寧に仕上げている。器長28cm、幅17.8cm、器高7.7cm、底最小厚0.6cmを測る。**30177**・**30178**はスギのナナメ取り材を用いた有孔板材で、紐結びの組合せ式箱か。器長33.2cm、幅8.9cm×8.9cm、最大厚1cmを測る。

武器・武具は棍棒と盾がある。**30181**は表皮残りの芯持ち材を用い、縦方向の粗い削り加工で握部を造り出し、ほぼ中央にコの字状の切り込みを入れ、その先は細かい削り加工を、裏面は削り加工で平坦に仕上げており、器長50cm弱、径2.1cm×2.3cmを測る。

30183は割材を用いた棒製品で、片方端部は面取り加工を加え、その端部から5.5cmに3.5cm間隔で縄縛用の切り込みを巡らし、遺存長32cm、径3.1cm×3.3cmを測る。紡織機の引き手か。**30186**はシイの板目取り材を用いた角材で、遺存長74cm、幅3.1cm、最大厚1.9cmを測る。**30185**はスギの板目取り材を用いた有孔板材で、遺存長18.1cm、幅7.4cm、最大厚2cmを測る。**30182**はシイの芯持ち材を用いた杭で頭部下に縄縛用の削り加工を入れ、遺存長13.5cm、径1.8cm×2cmを測る。

30209はモミ属の楯で、10数点の破片である。厚さ0.65cm～0.8cmを測る板に1.2cm～1.5cm間隔で碁盤の目状に1mmほどの穿孔が並ぶ。装飾の櫻樹皮を取り付けるためのものであろう。**30208**は櫻樹皮で、丸まって出土している。

30028は二股に枝分かれしている部分を利用した竪穴住居建物の柱である。樹皮を残す丸太の芯持ち材で、枝分かれ部分に横架材を受けるようにL字状の仕口がある。全長226.5cm、最大径8.5cmを測る。柱頂部は鋭く切り落としている。

SD114（Fig. 171　PL. 60, 133）

盤・円盤形・高坏、エブリ等が出土している。**30191**はカシの柾目取り材を用い、円錐台の着柄隆起部に円形着柄孔を持つエブリで、器長14.9cm、遺存幅35.4cm、最大厚3.8cmを測る。**30192**は板目取り材を用い箱形に成形した盤で、器長48.65cm、幅17cm、器高2.6cm、底厚1cm前後を測る。

SD116（Fig. 172　PL. 133）

三又鍬、建築部材が出土している。**30193**は板目取り材を用いた組合せ部材の角材で、片端は組合

せのため薄く仕上げ、数カ所に縄縛痕がみられ、遺存長48.65cm、幅2.4cm、最大厚1.8cmを測る。**30194**・**30195**はカシの柾目取り材を用いた三又鍬の刃部で、**30194**は側刃、**30195**は中央刃である。遺存長22.9cm・19.2cm、遺存幅3.1cm・2.1cm、遺存最大厚1.2cm・1.6cmを測る。

井　戸（SE）

SE120（Fig. 173　PL. 61, 134）

30197・**30198**はクスノキ？の芯刳り抜き材を用いた井戸枠で、それぞれ36.4cm・35.9cmの高さ遺存し、最大厚3.3cm・2.7cmを測る。

土　坑（SK）

SK113（Fig. 174　PL. 133）

泥除け等の農具が出土している。**30189**はカシの柾目取り材を用いた泥除け未製品で、器長20.9cm、幅20.6cm、最大厚３cmを測る。**30190**は板目取り材を用いた組合せ部材の板材で、円形小孔やコの字状の切り込みがみられ遺存長47.3cm、幅9cm、最大厚1.7cmを測る。

SK119（Fig. 175）

二又鍬が出土している。**30196**はカシの柾目取り材を用いた方形着柄孔を持つ直柄二又鍬で、遺存長22.5cm、幅7.2cm、最大厚1.3cmを測る。

SK126（Fig. 175　PL. 134）

二又鍬、円盤形木製品が出土している。**30199**はカシの柾目取り材を用いた方形着柄孔を持つ直柄平鍬で、遺存長37.9cm、幅6.6cm、最大厚1.4cmを測る。**30200**は板目取り材を用いた容器の蓋で、紐掛かり小孔２個が縁辺にみられ、円形・楕円形か半円形を呈すると考えられる。径15.6cm（楕円形・半円形の場合の短軸、長軸遺存長10.6cm）、最大厚0.6cmを測る。

SK127（Fig. 134）

30031は板状木製品である。

SK142（Fig. 175）

鍬が出土している。**30201**はカシの柾目取り材を用いた方形着柄孔を持つ直柄鍬で、遺存長10.9cm、幅5.1cm、最大厚1.3cmを測る。

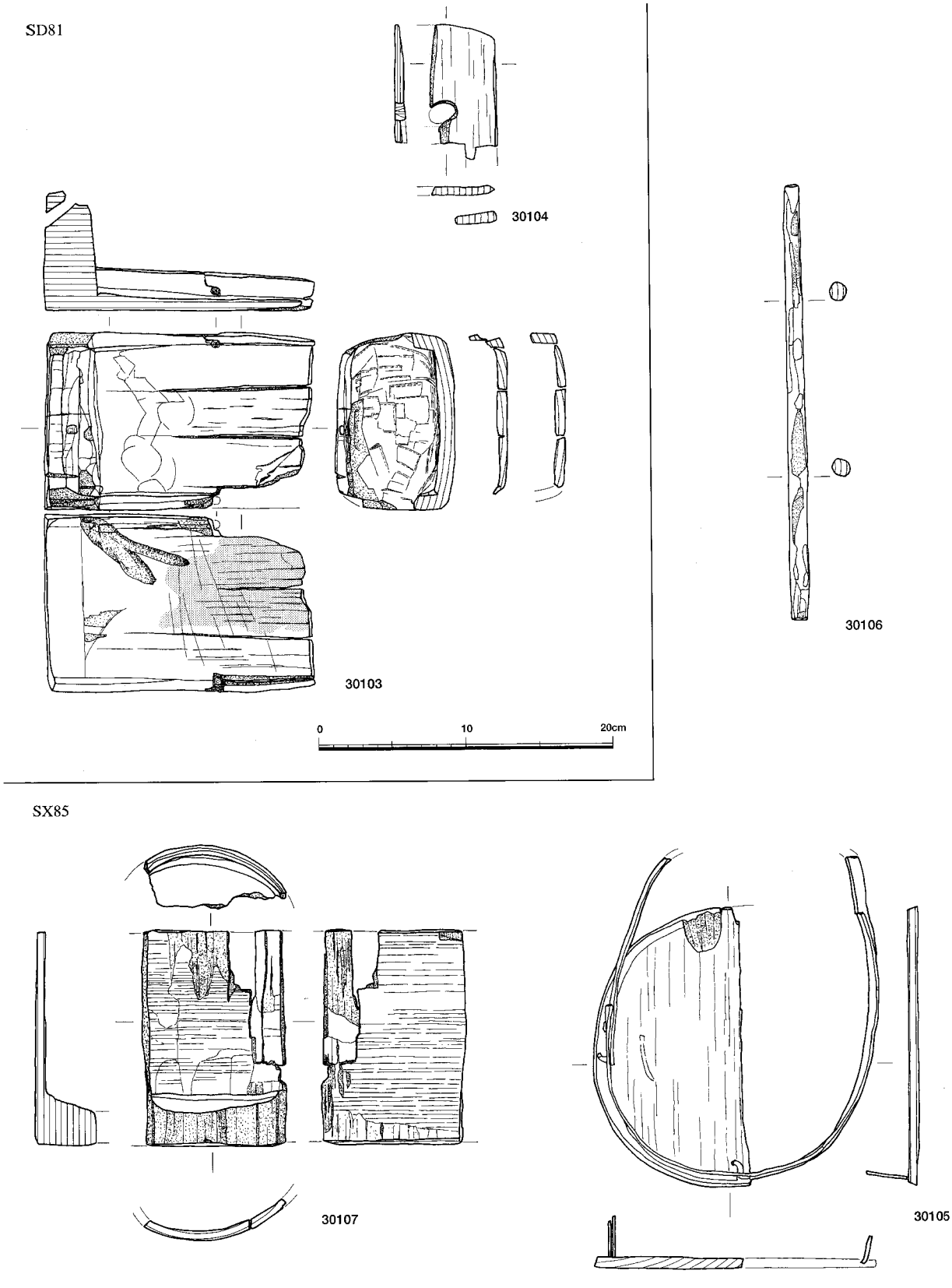


Fig.145　溝SD81,水田SX85出土木製品実測図（1/4）

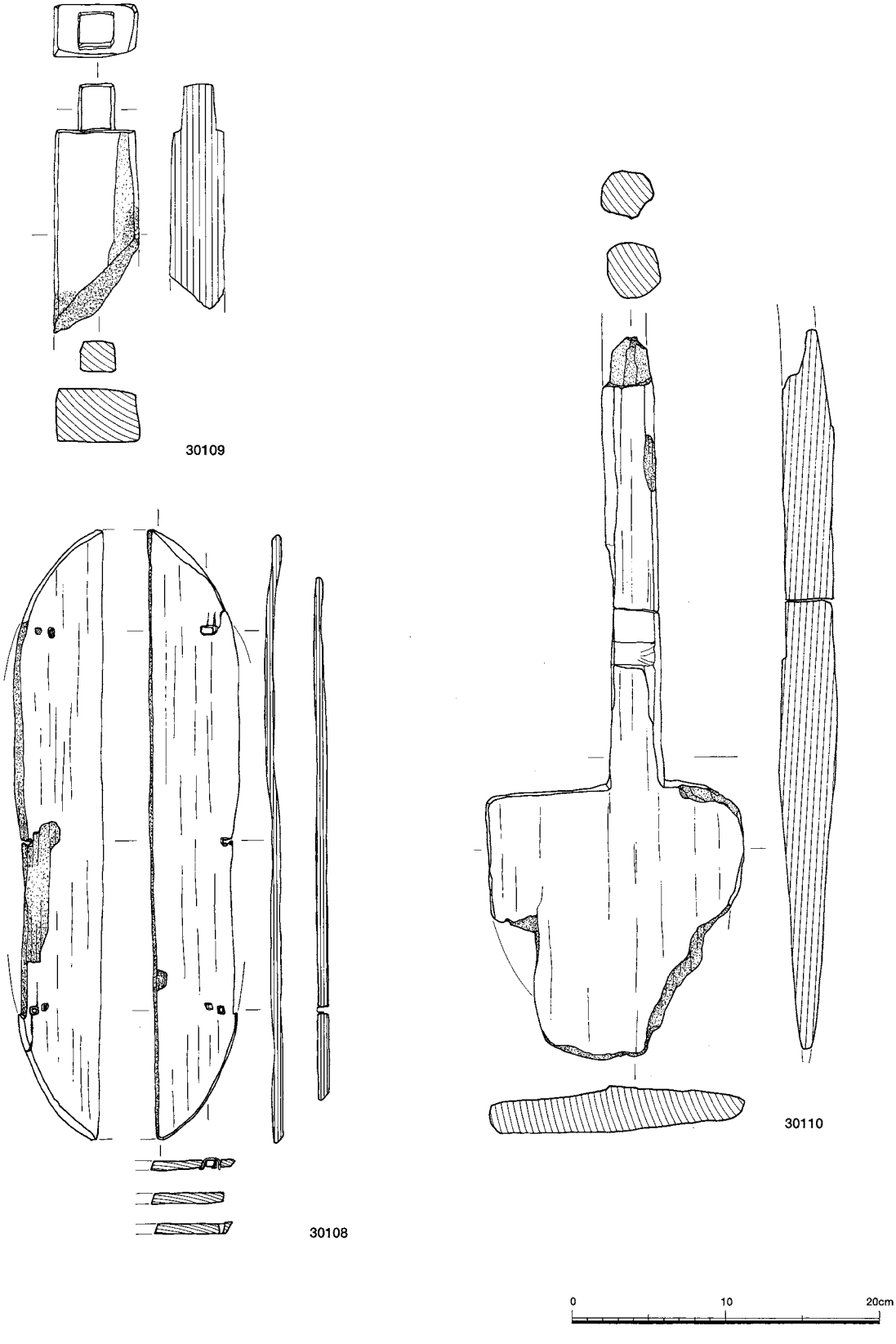


Fig.146　溝SD102出土木製品実測図（1/4）

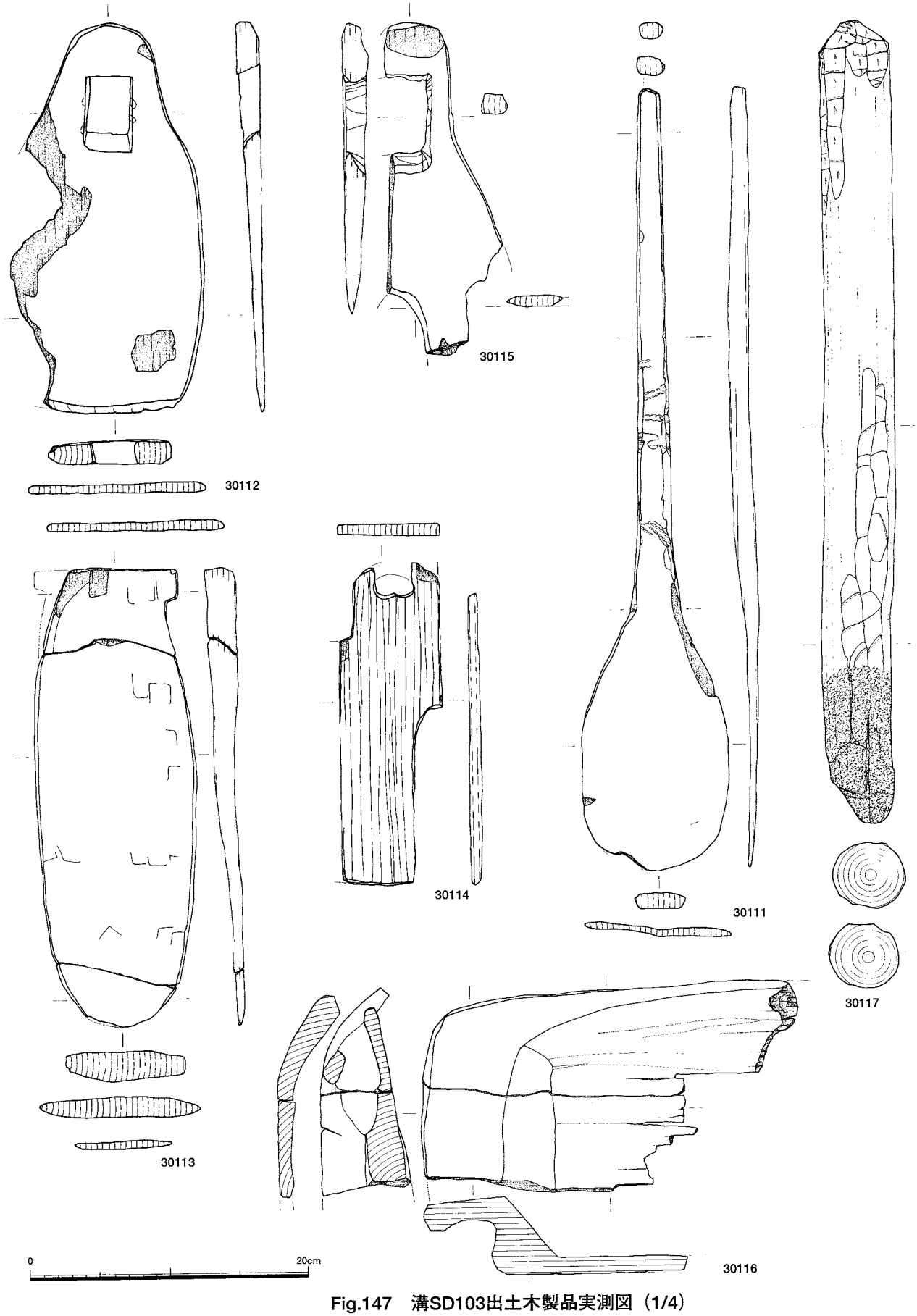


Fig.147　溝SD103出土木製品実測図（1/4）

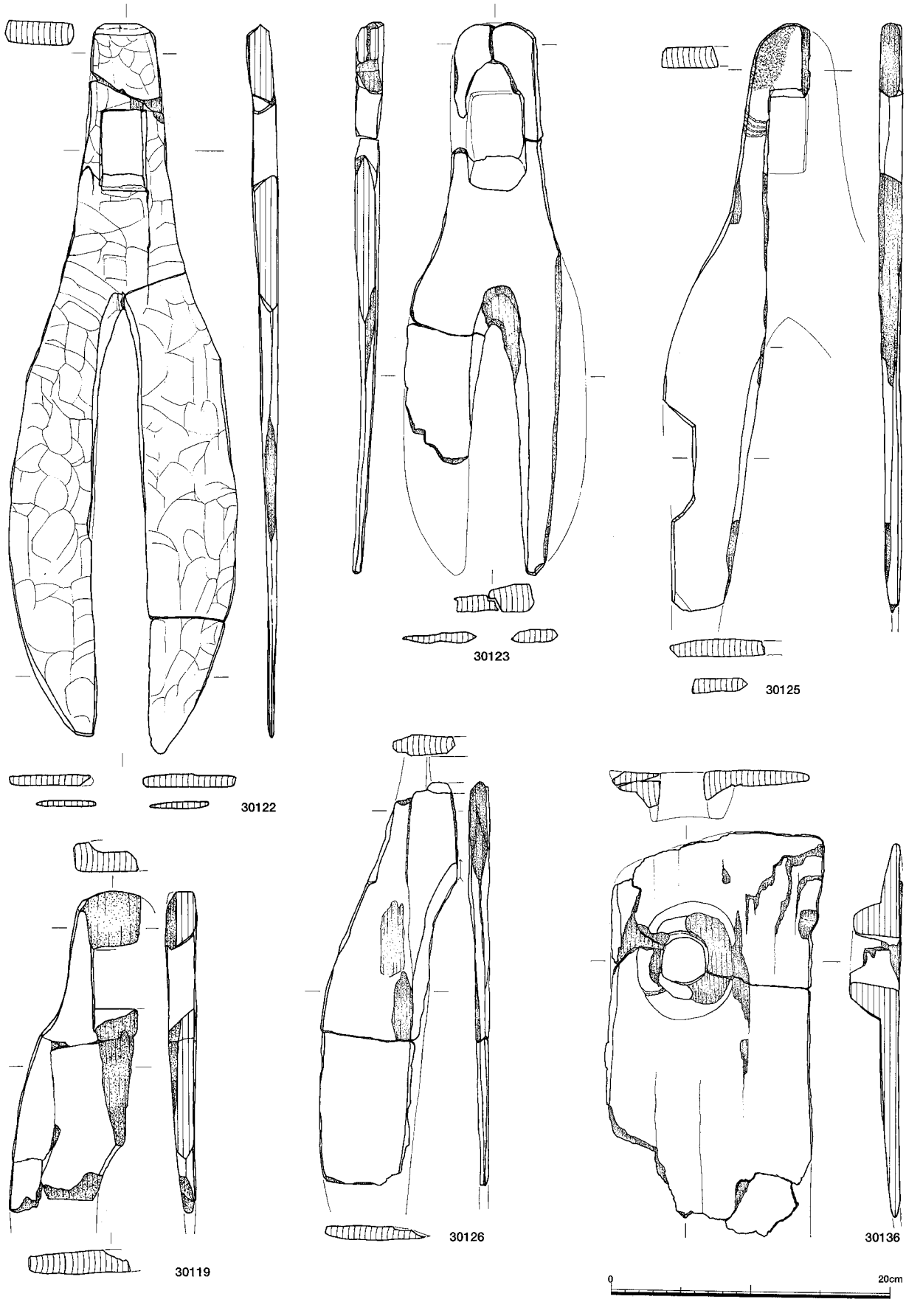


Fig.148　溝SD104出土木製品実測図（1/4）

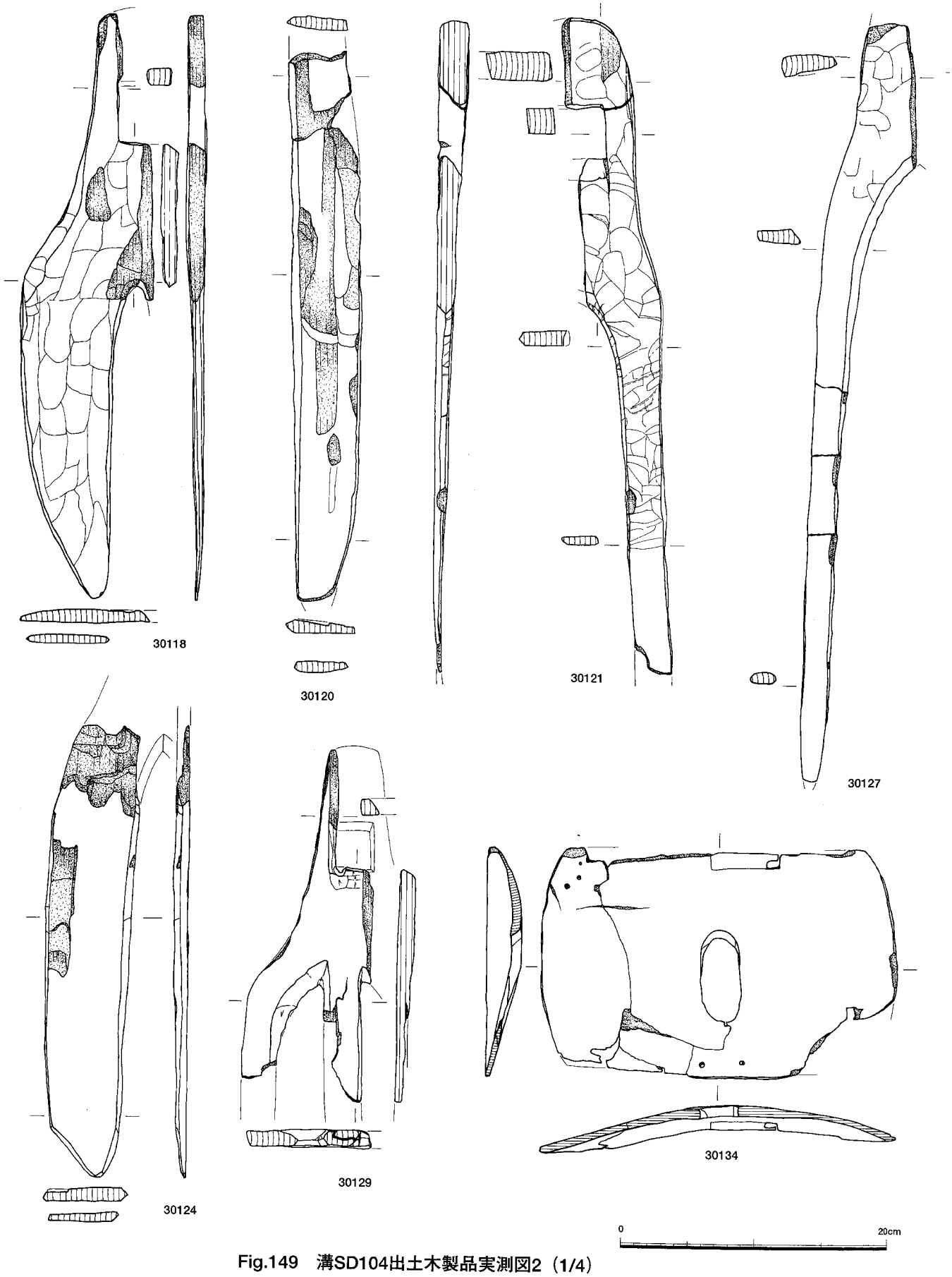


Fig.149 溝SD104出土木製品実測図2（1/4）

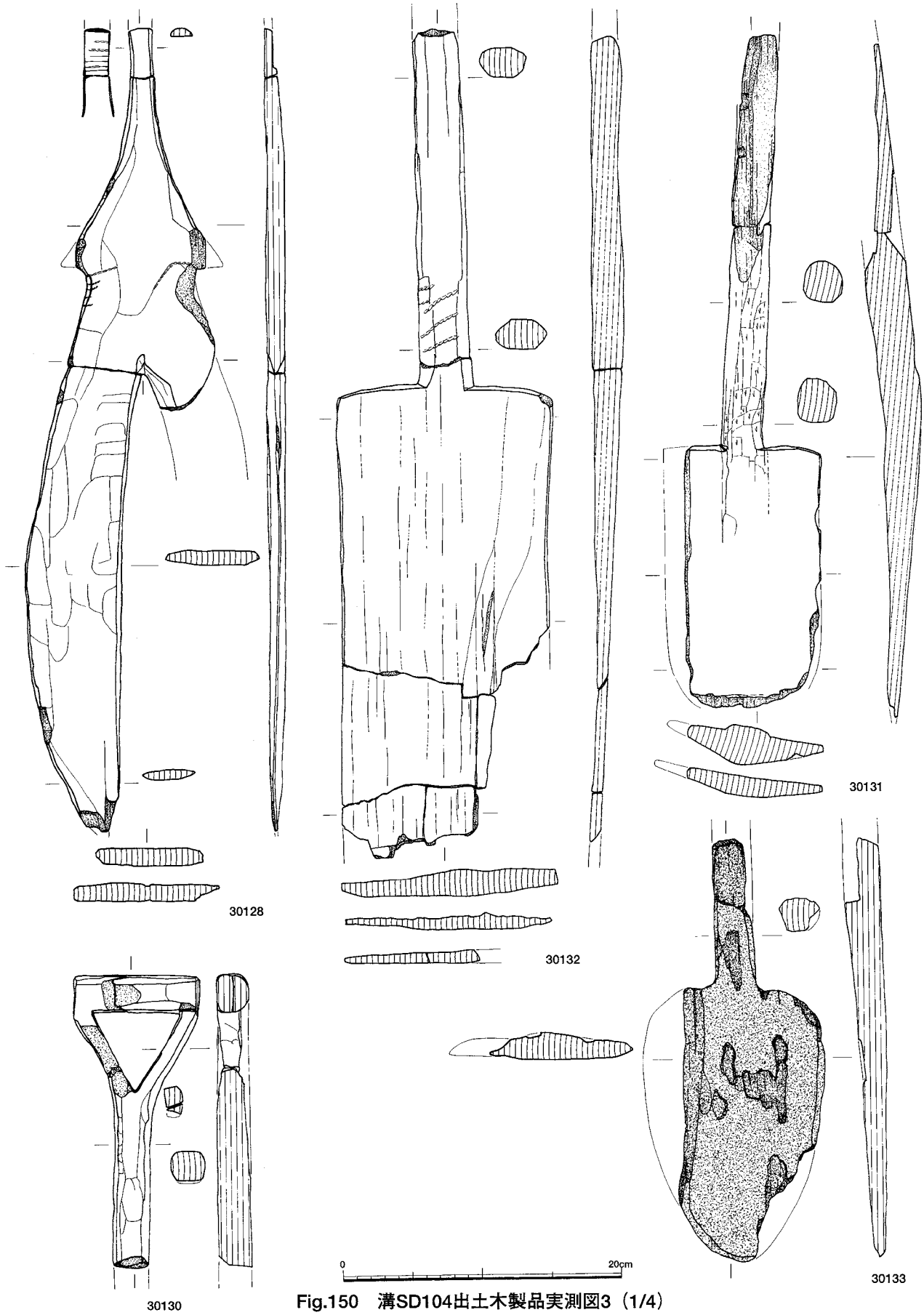


Fig.150　溝SD104出土木製品実測図3（1/4）

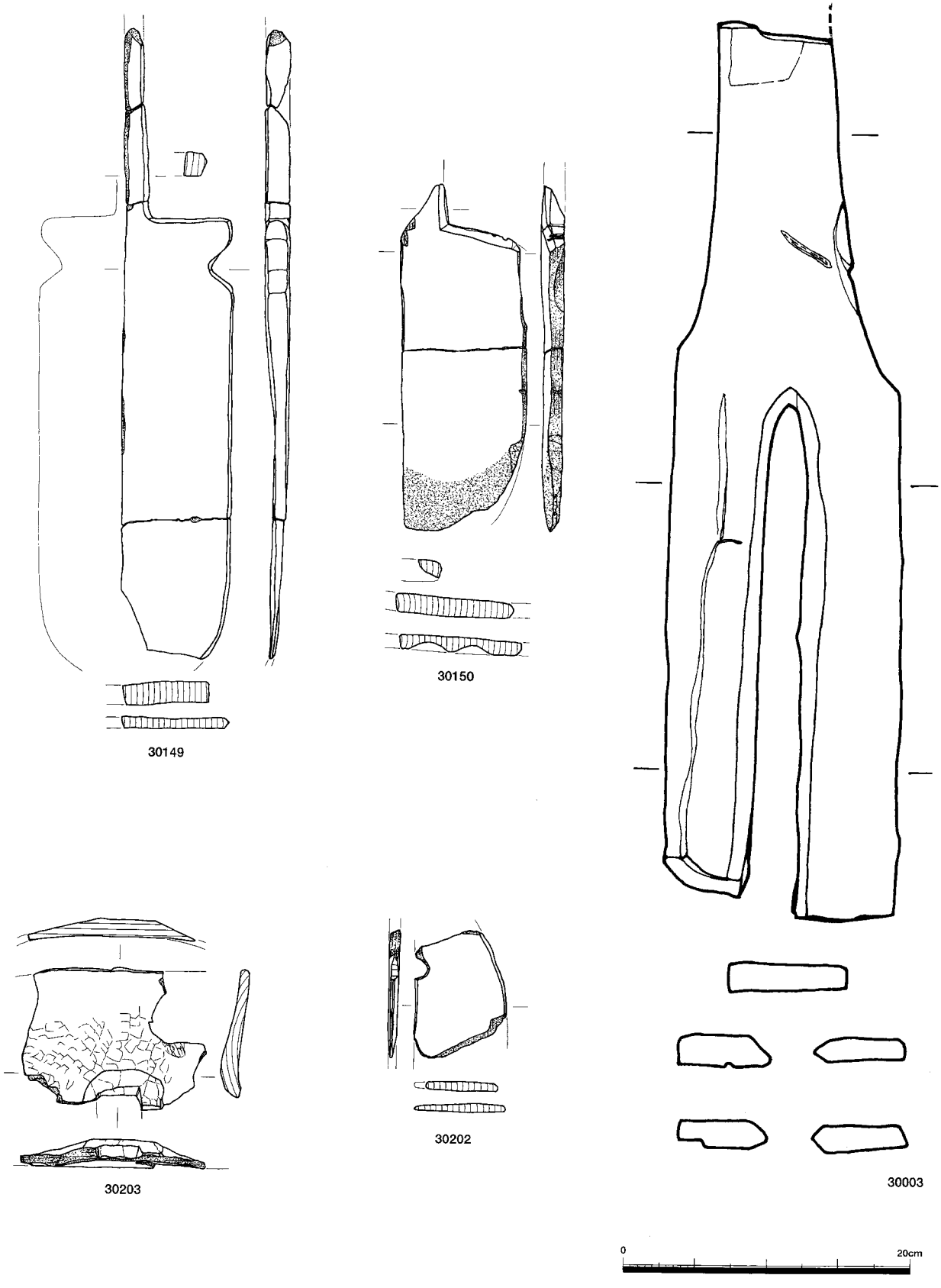


Fig.151　構SD104出土木製品実測図4（1/4）

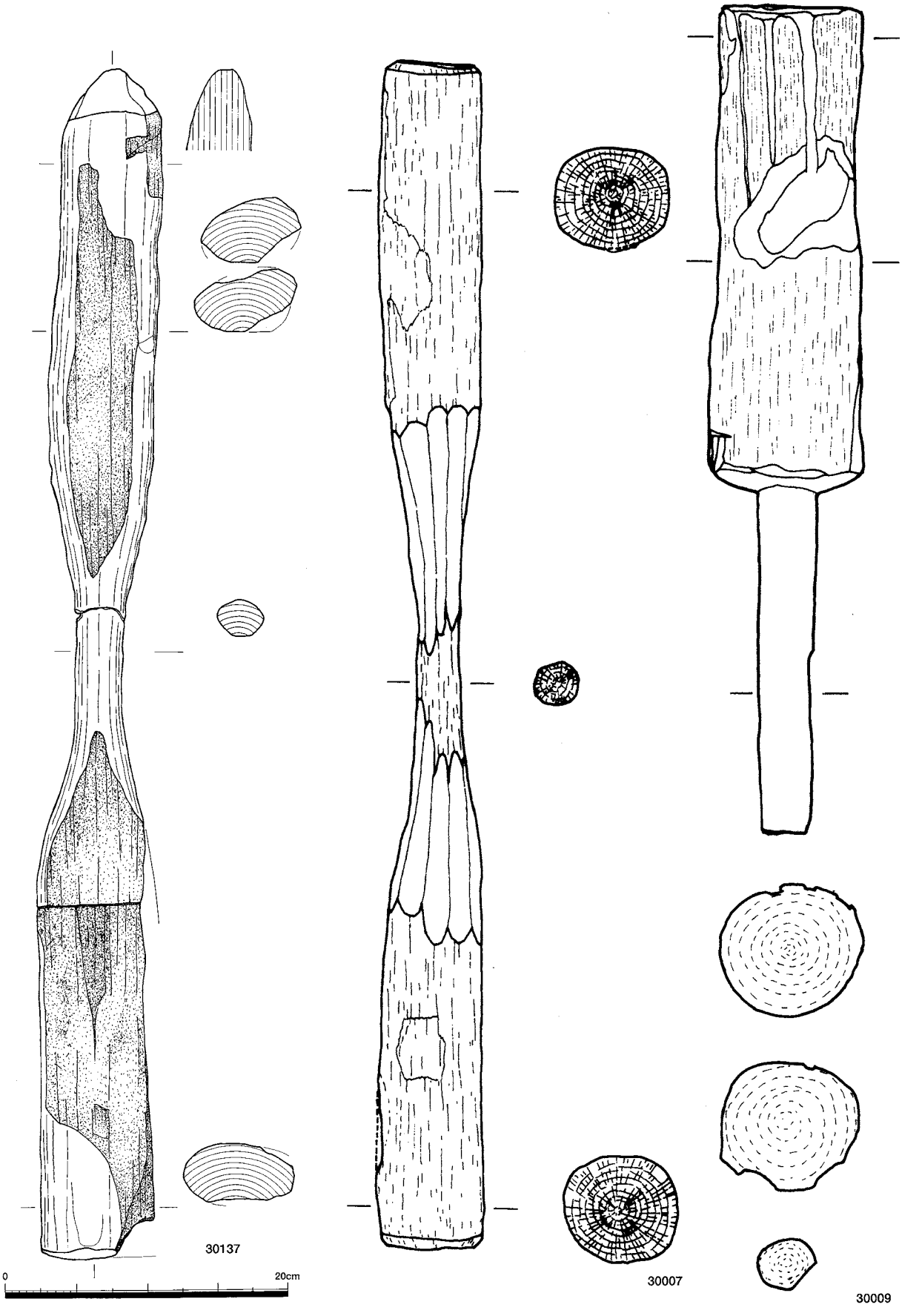
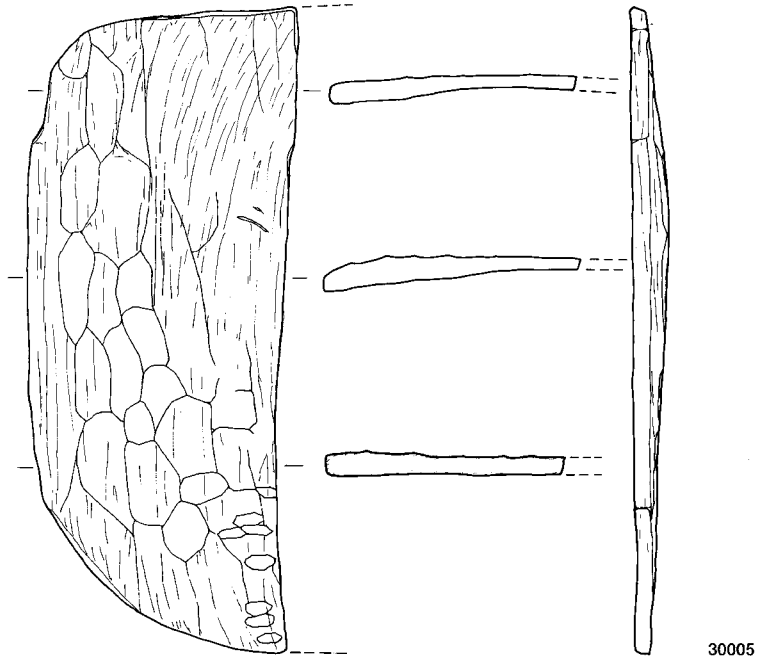


Fig.152　溝SD104出土木製品実測図5（1/4）



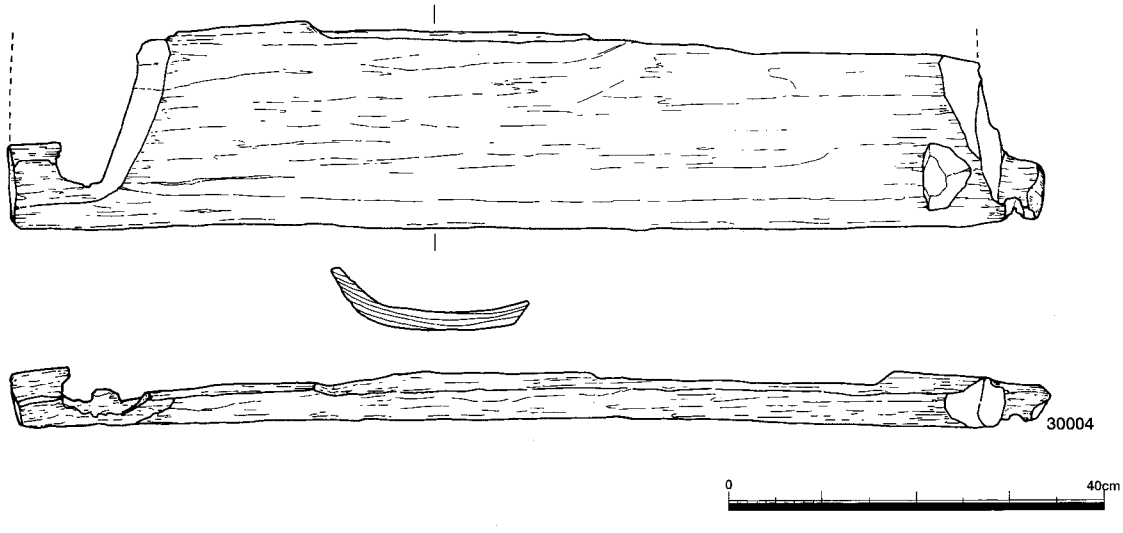


Fig.153　溝SD104出土木製品実測図6（1/8）

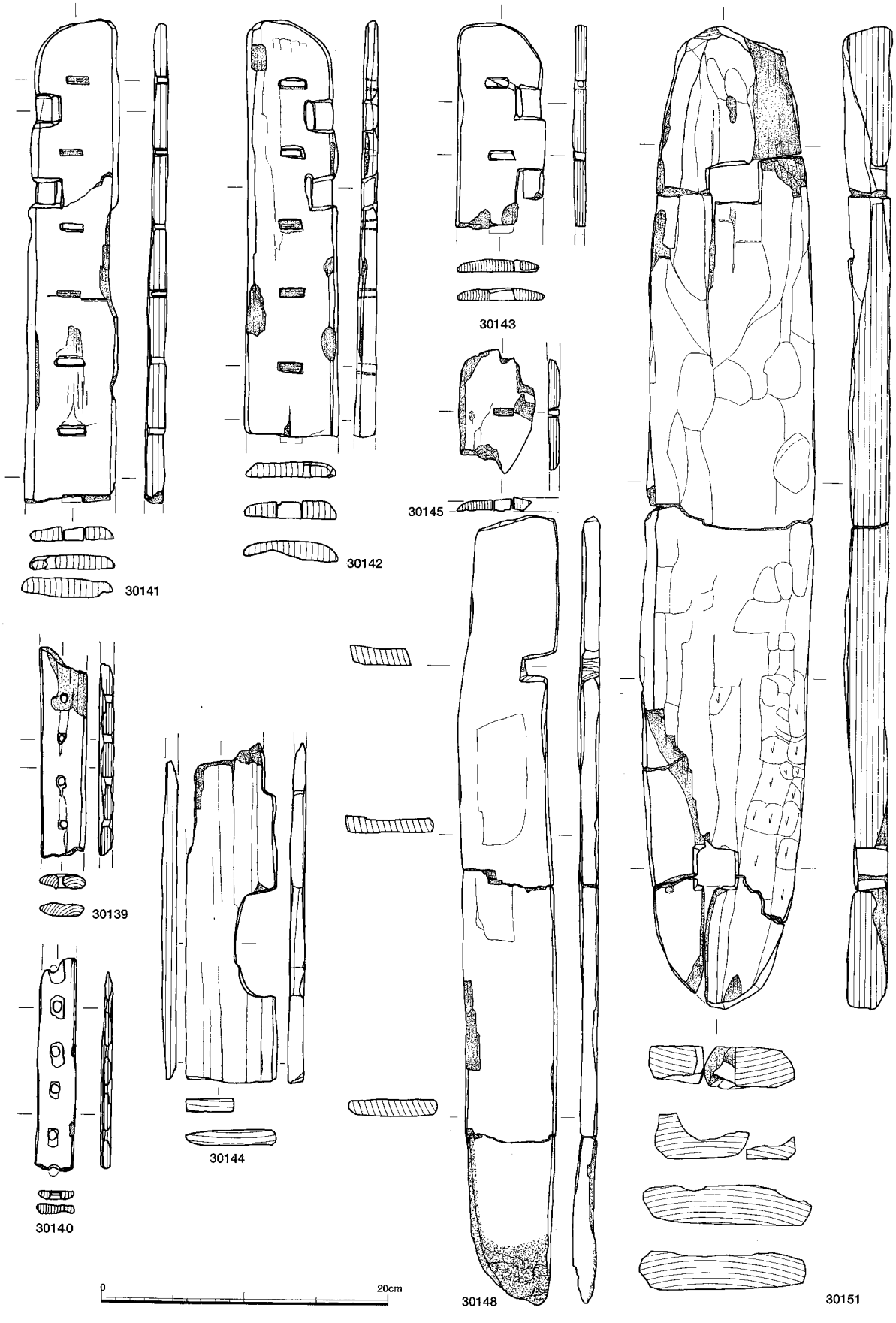


Fig.154　溝SD104出土木製品実測図7（1/4）

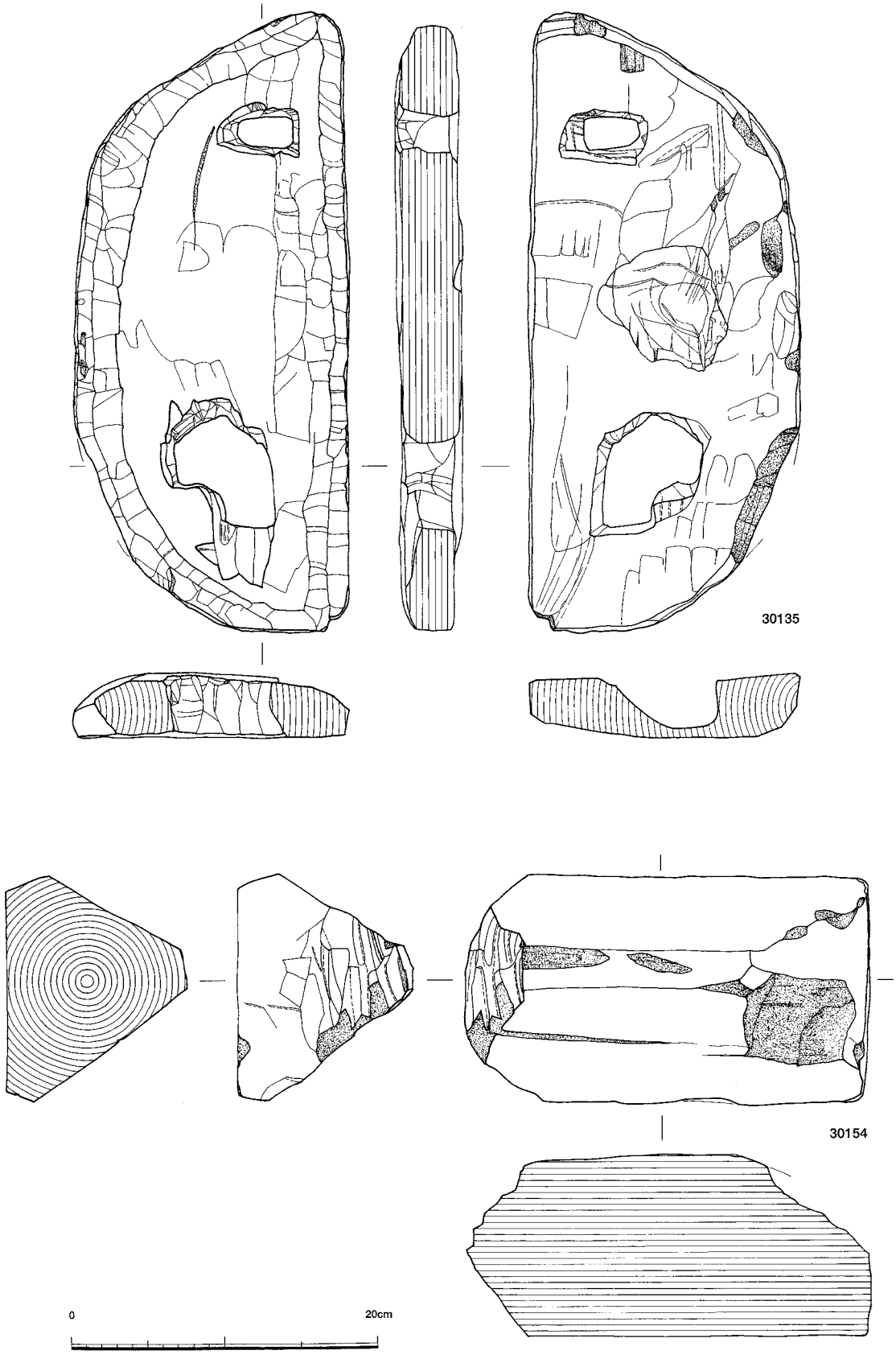


Fig.155　溝SD104出土木製品実測図8（1/4）

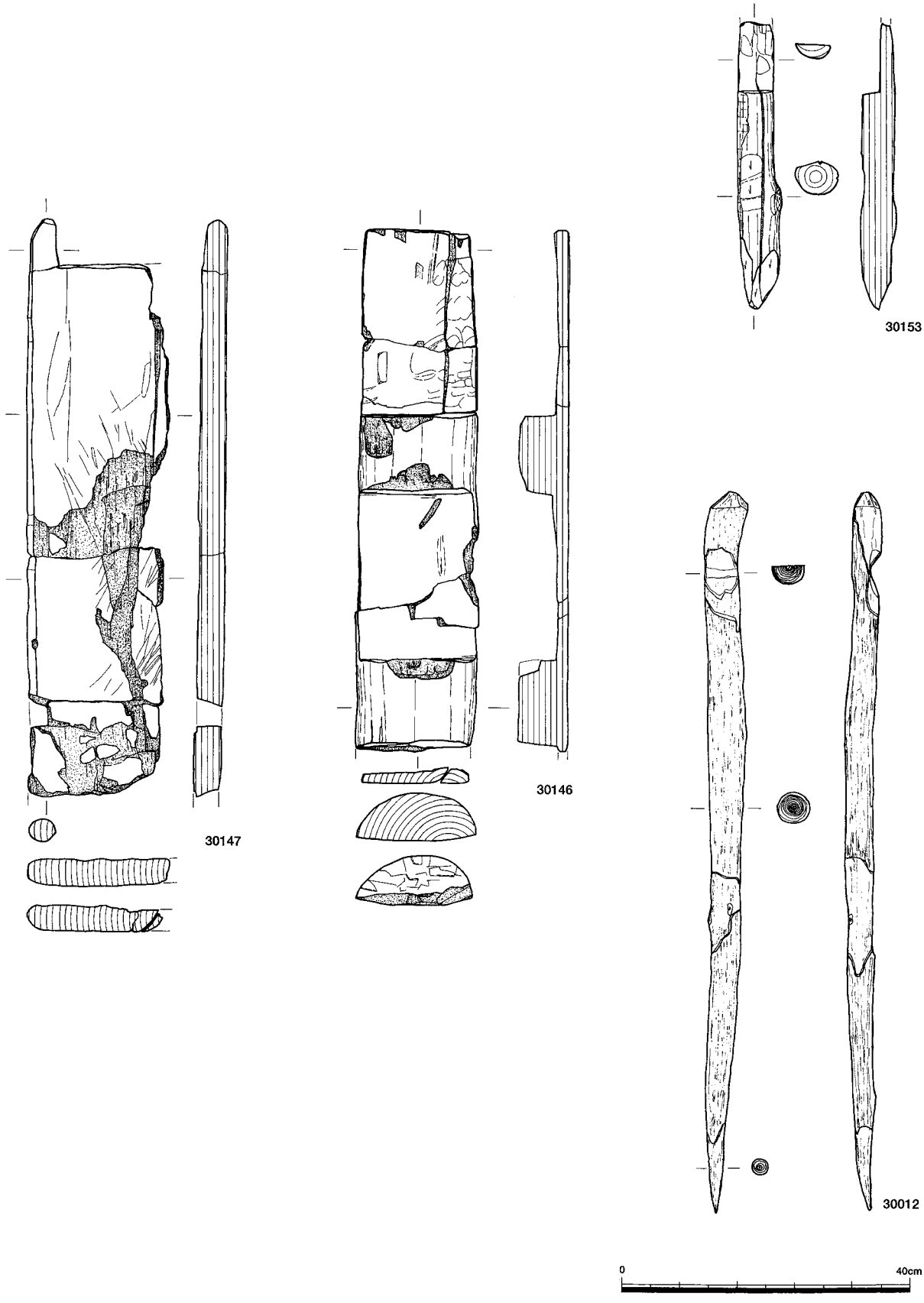


Fig.156　溝SD104出土木製品実測図9（1/8）

Fig.157　溝SD104出土建築部材実測図1（1/10）

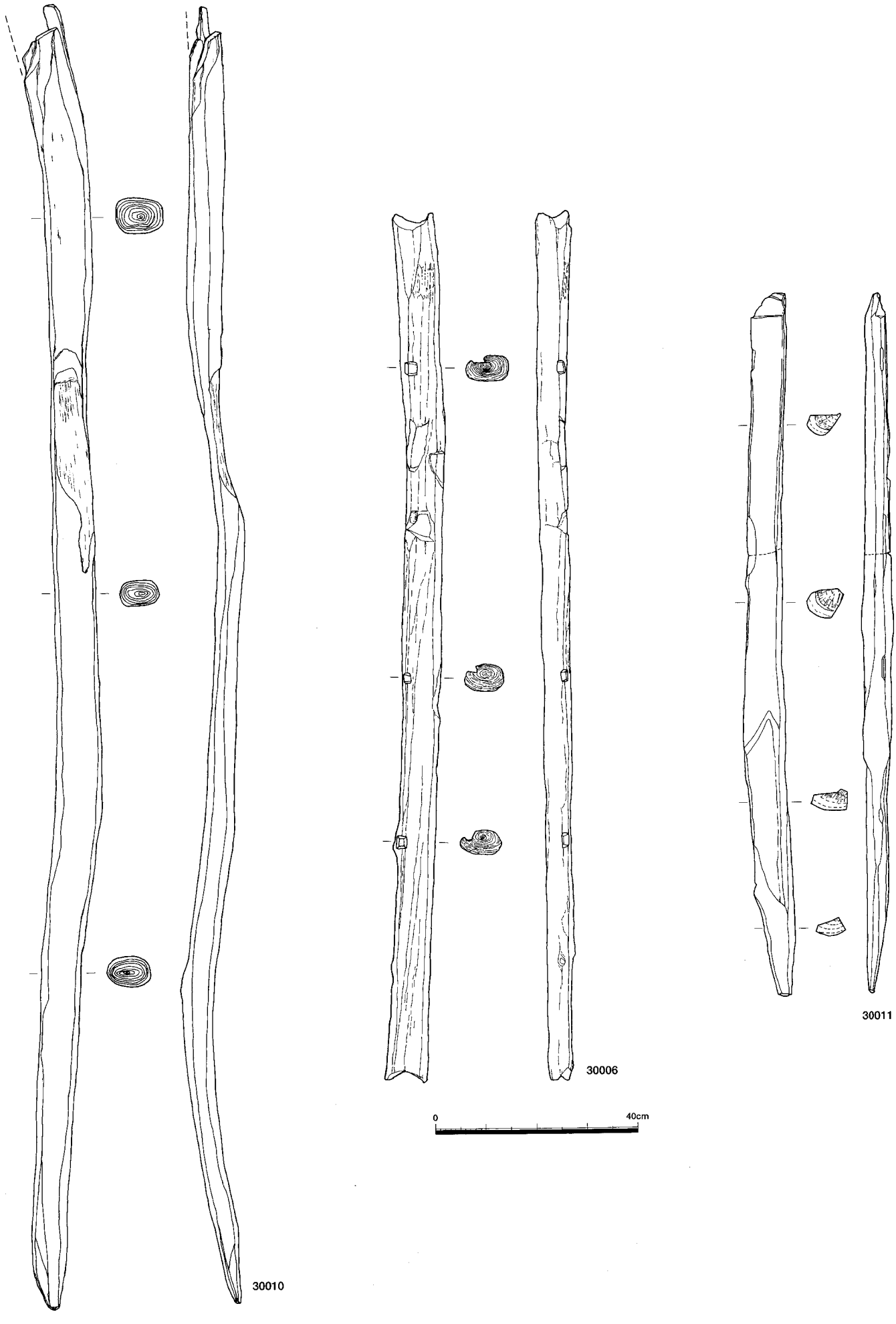


Fig.158　溝SD104出土建築部材実測図2（1/10）

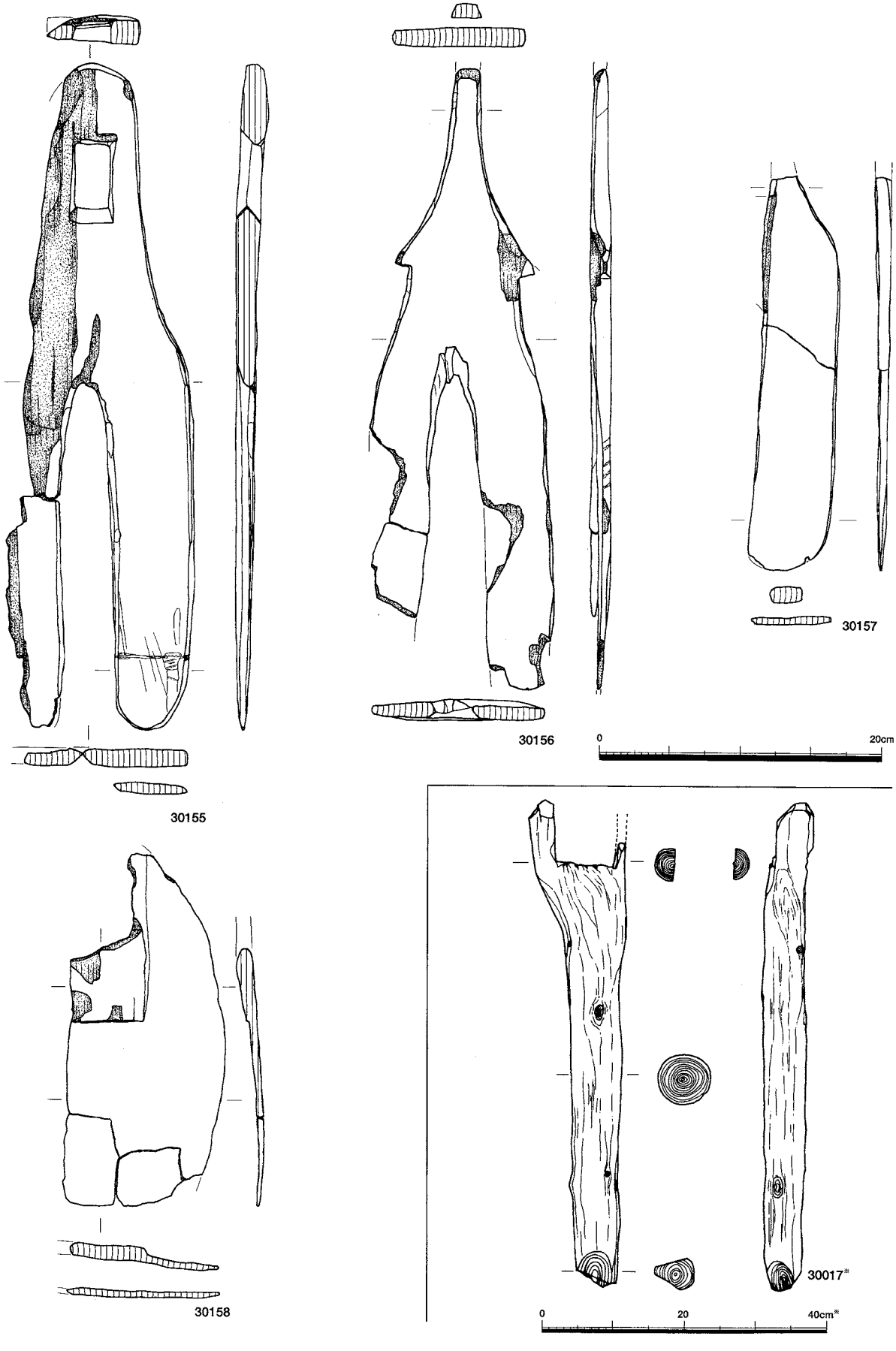


Fig.159 溝SD105出土木製品・建築部材実測図（1/4・1/8※）

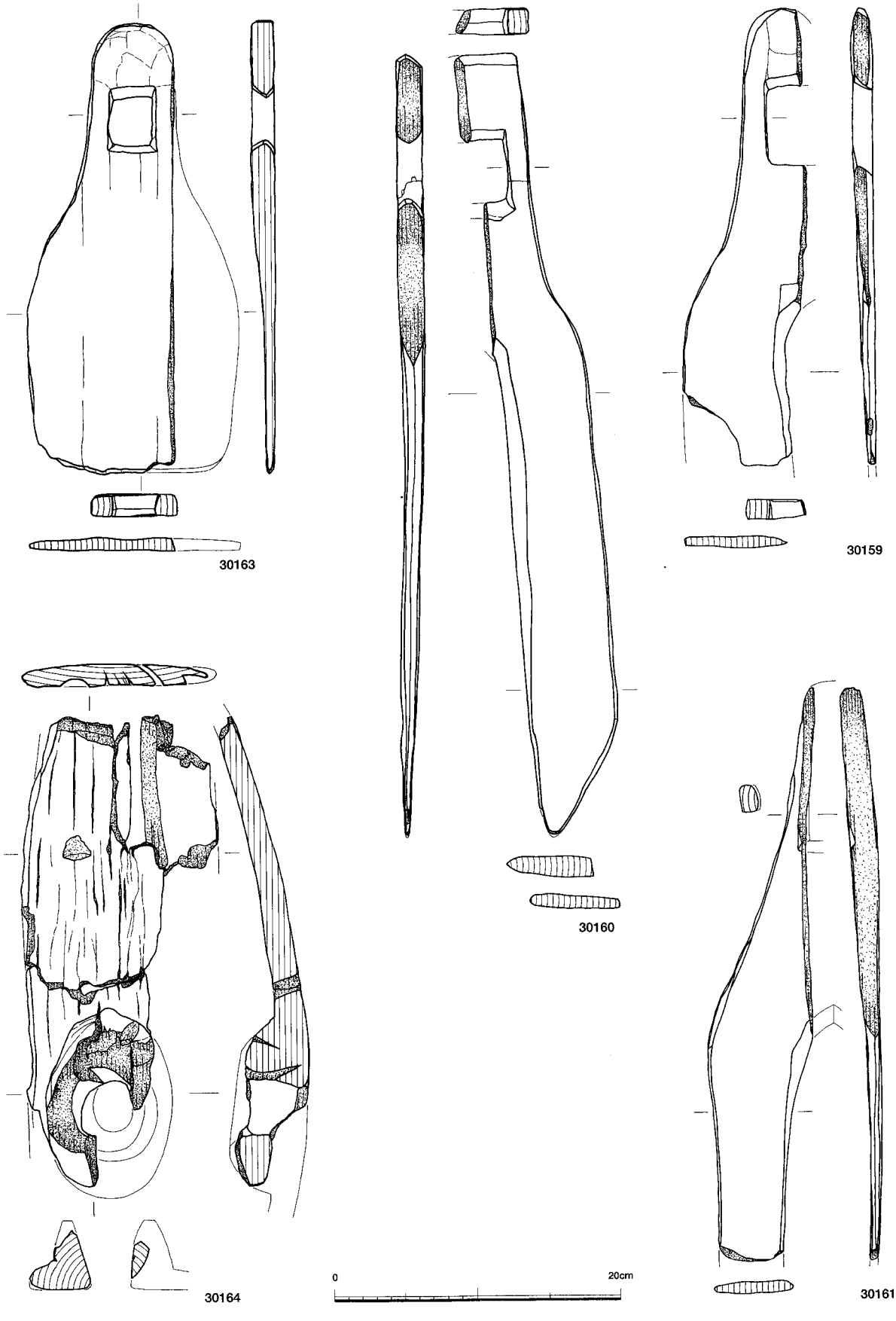


Fig.160　溝SD108出土木製品実測図1（1/4）

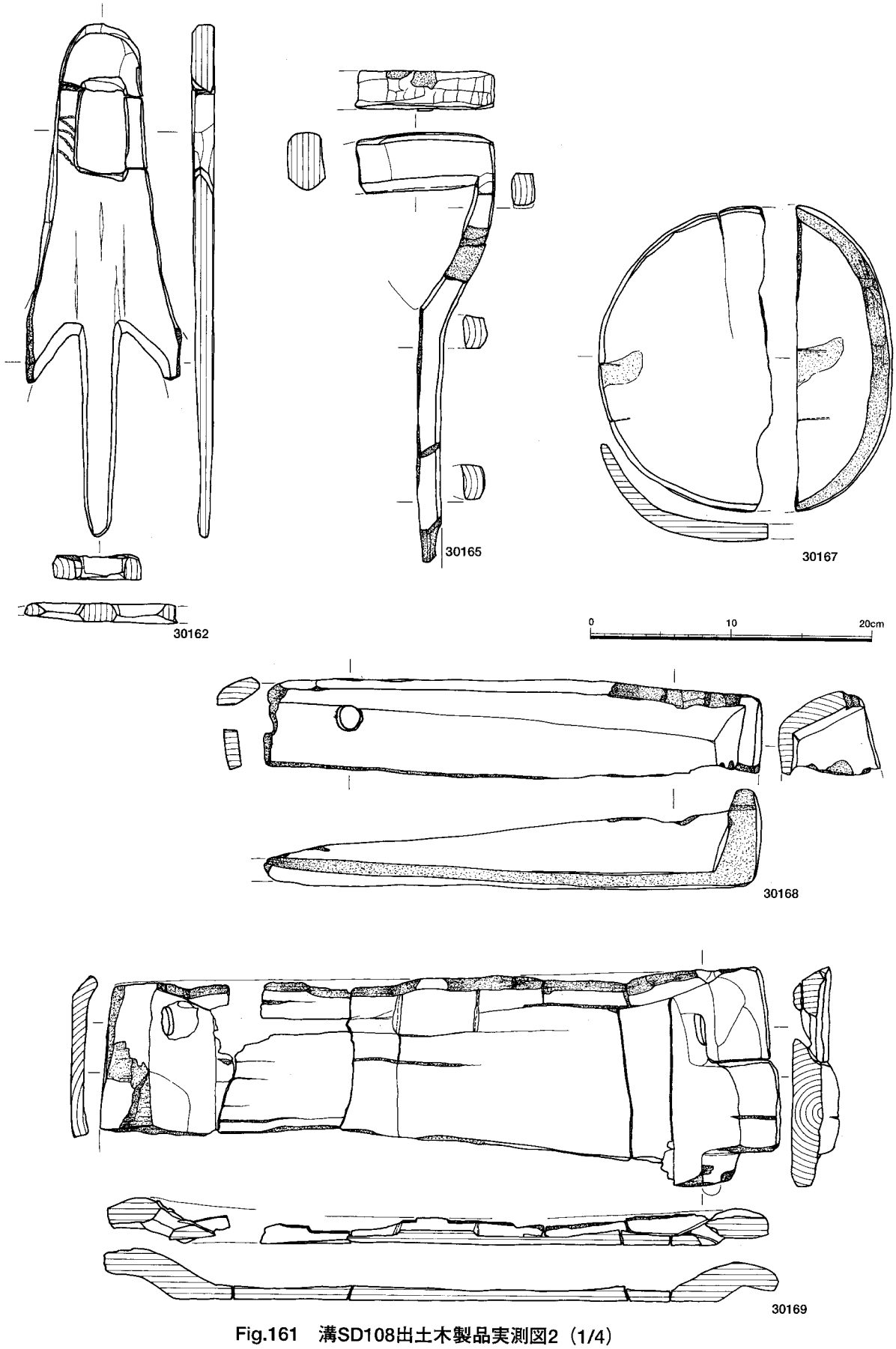


Fig.161　溝SD108出土木製品実測図2（1/4）

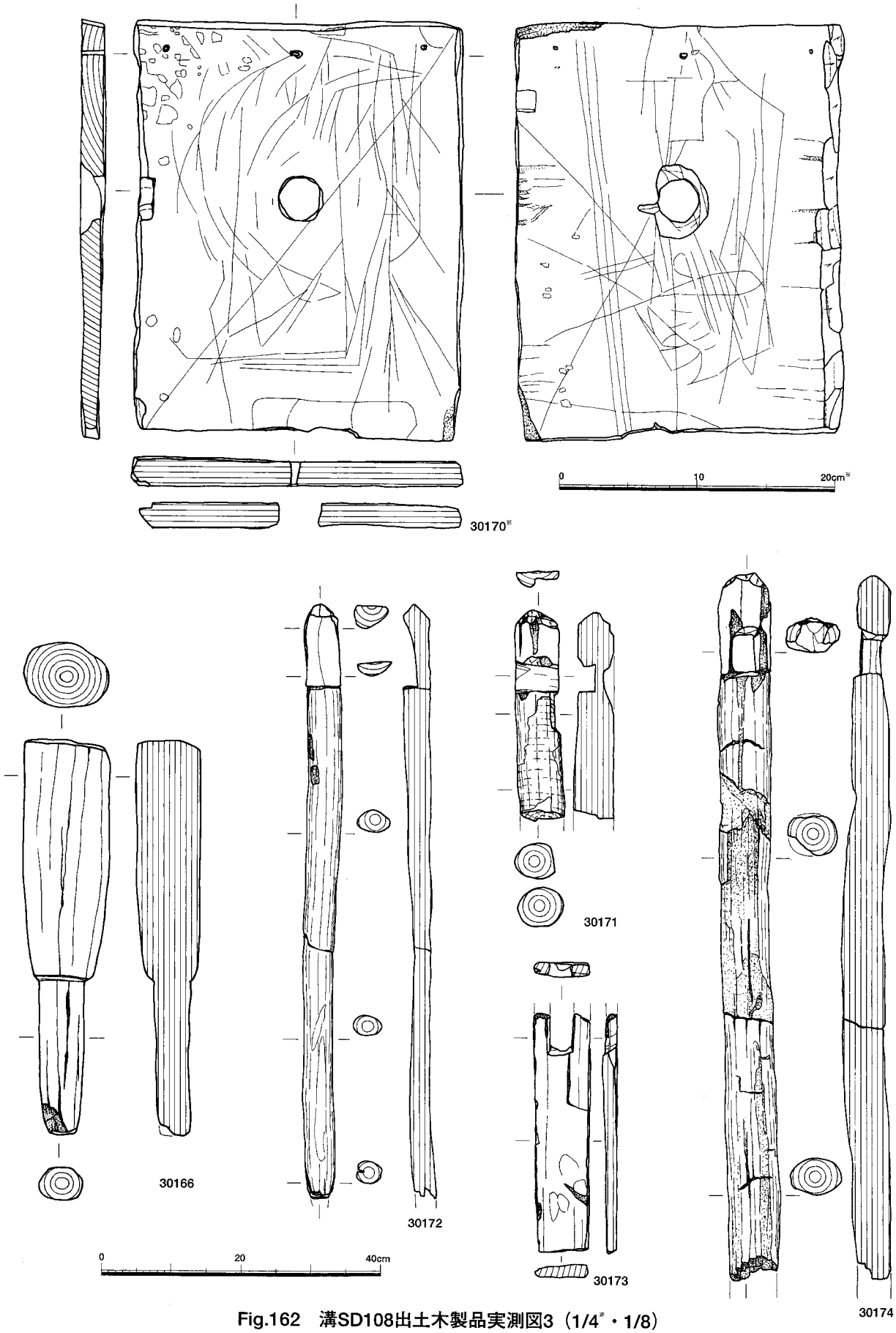


Fig.162　溝SD108出土木製品実測図3（1/4※・1/8）

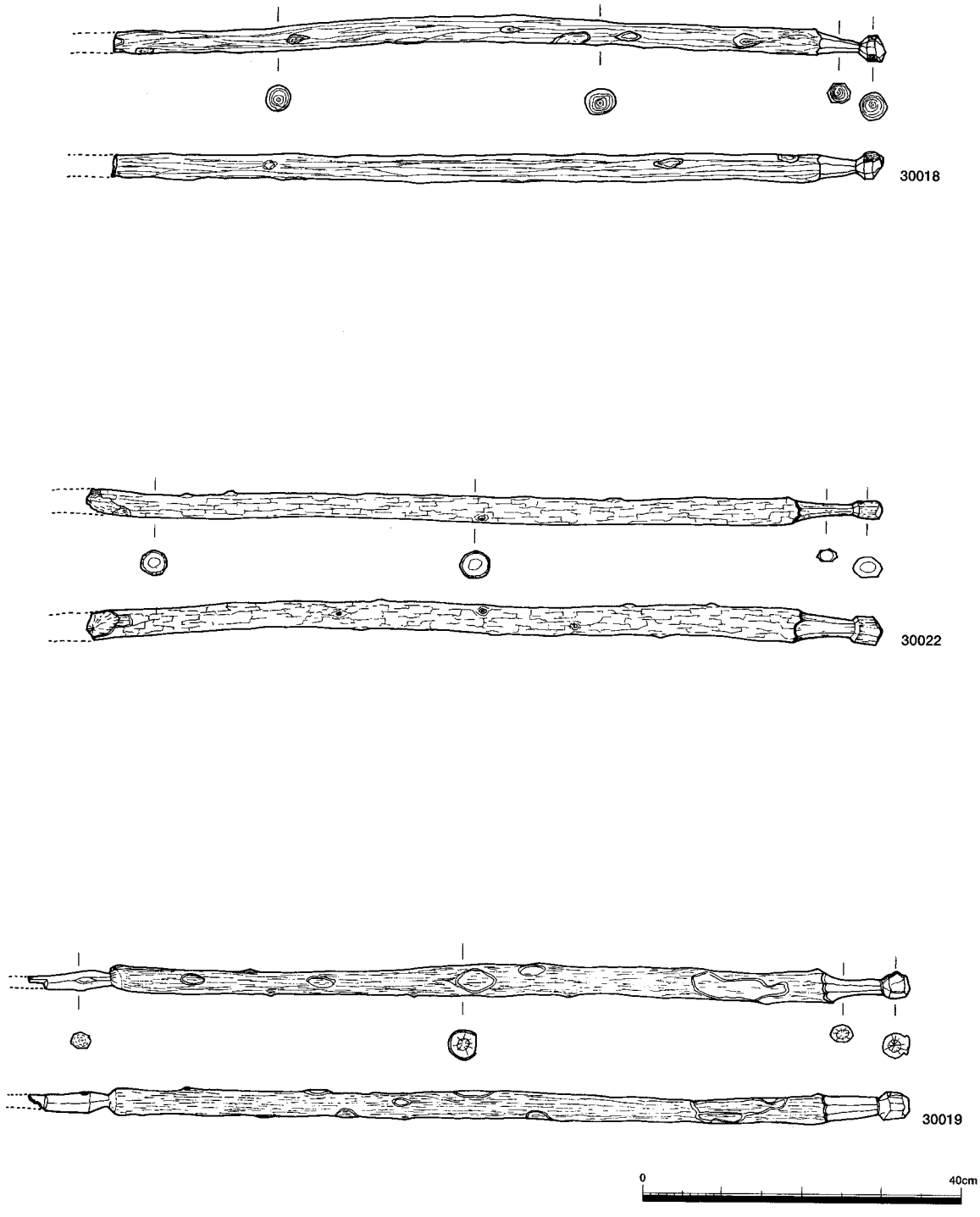


Fig.163 溝SD108出土木製品実測図4（1/8）

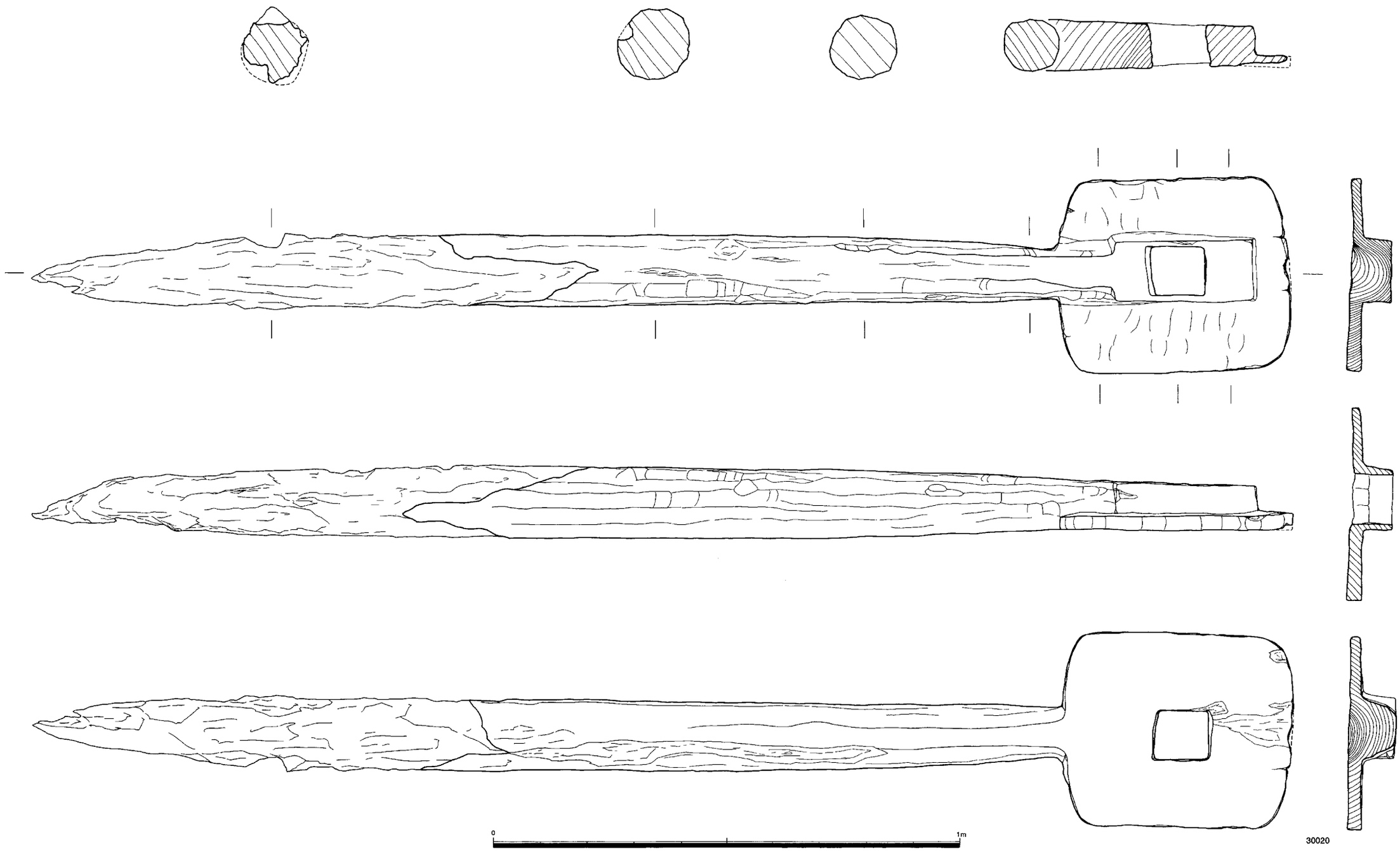


Fig.164　溝108出土建築部材実測図1（1/10）

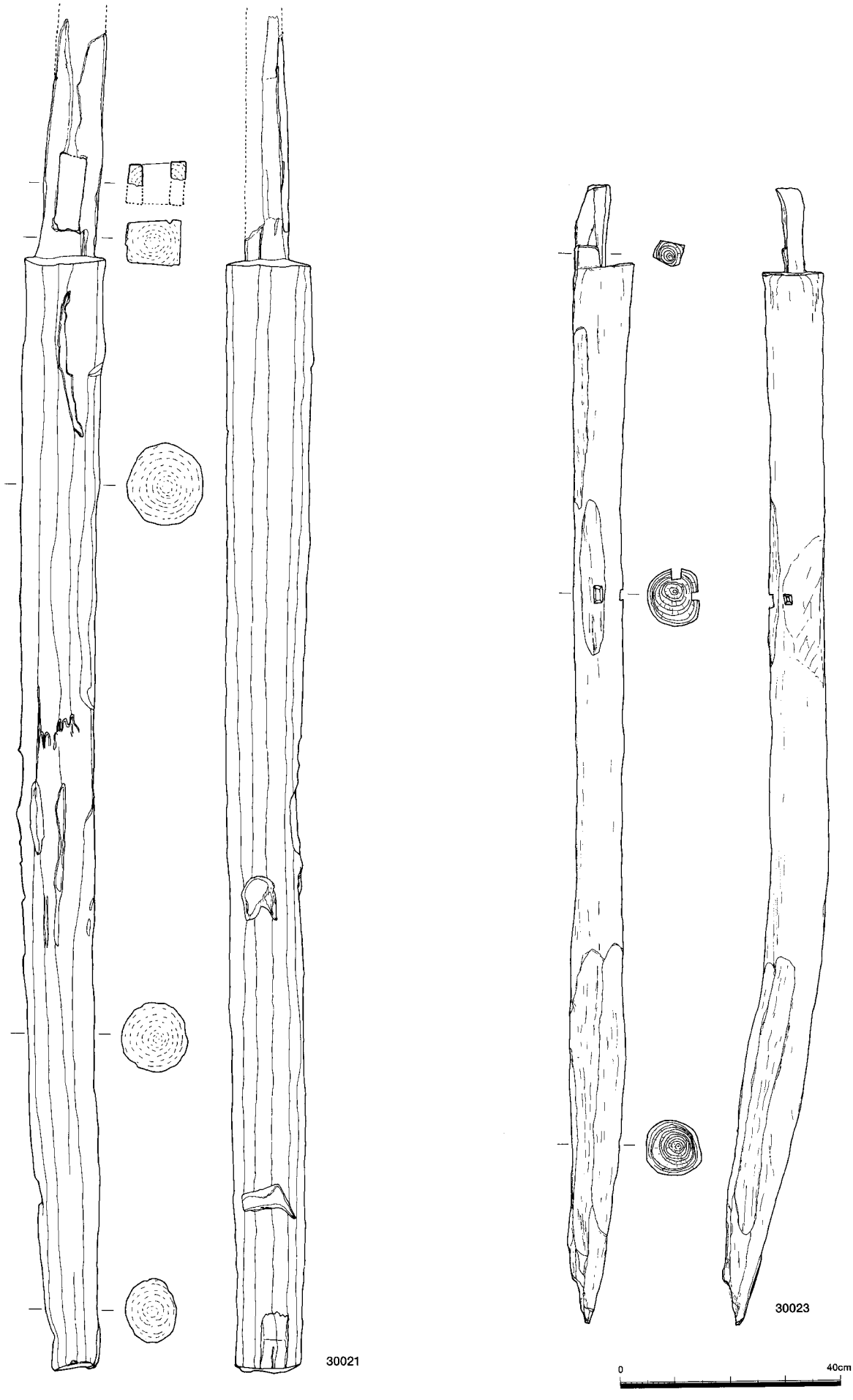


Fig.165　溝SD108出土建築部材実測図2（1/10）

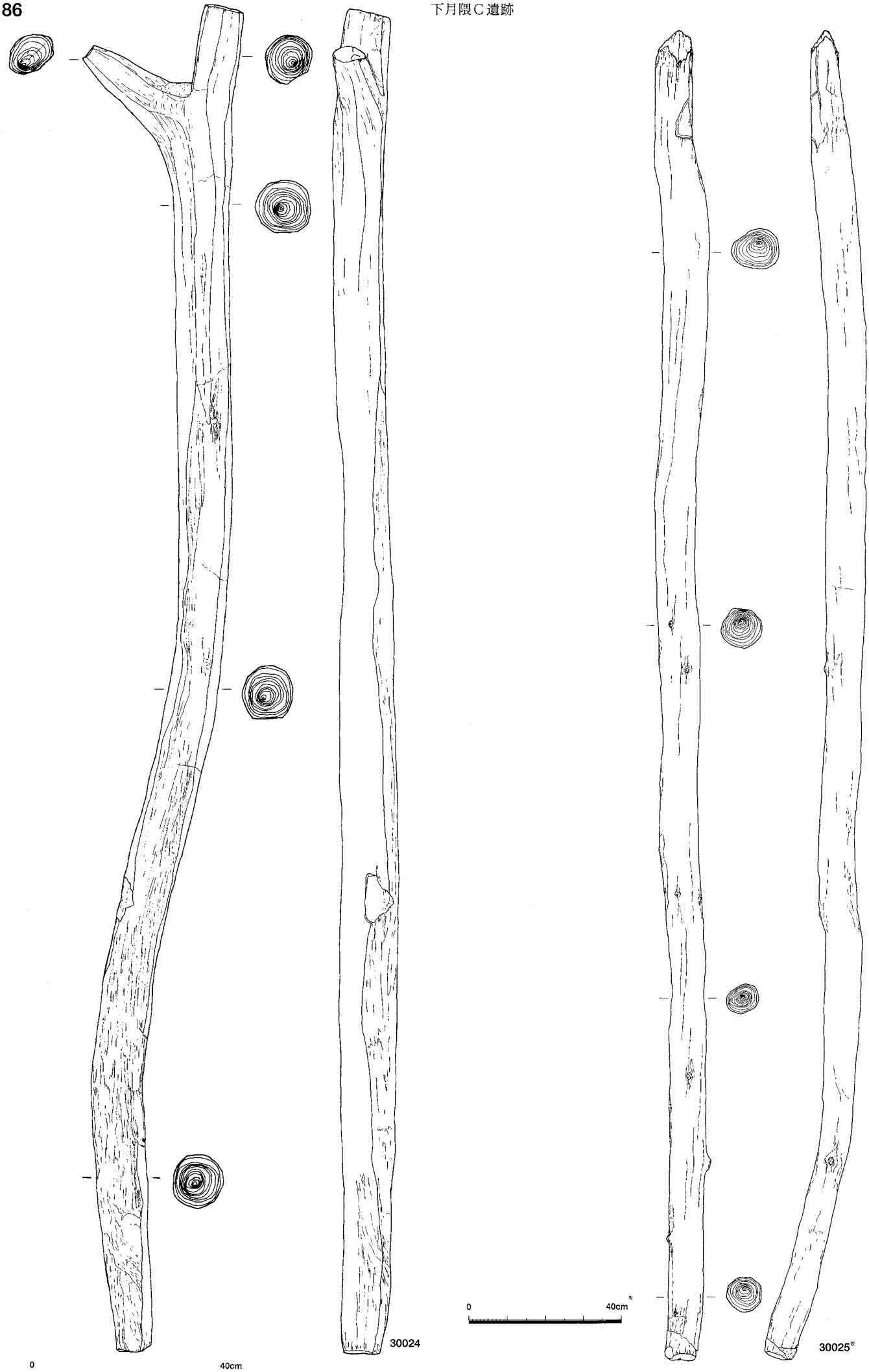


Fig.166　溝SD108出土建築部材実測図3（1/10・1/13※）

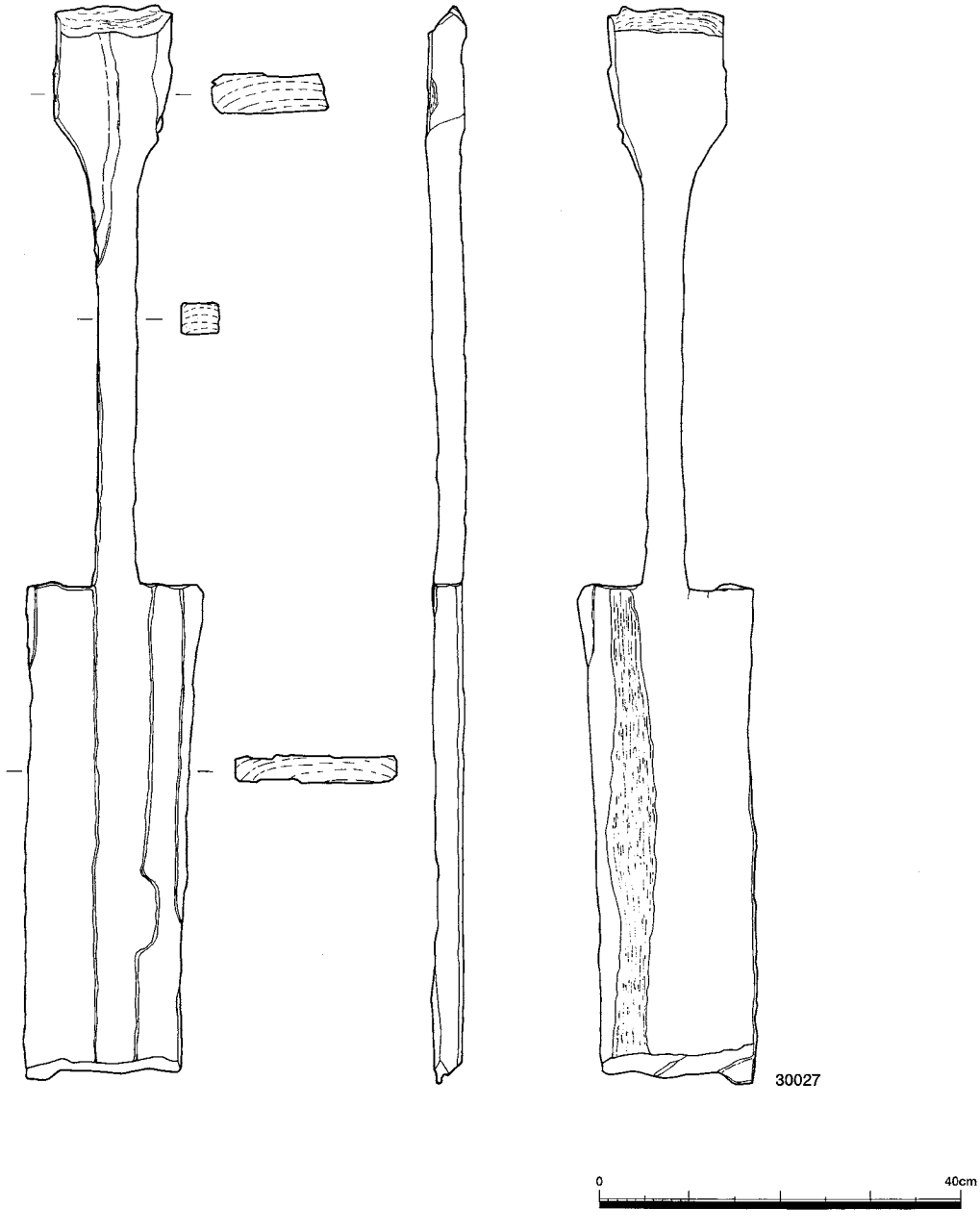


Fig.167　溝SD112出土木製品実測図1（1/8）

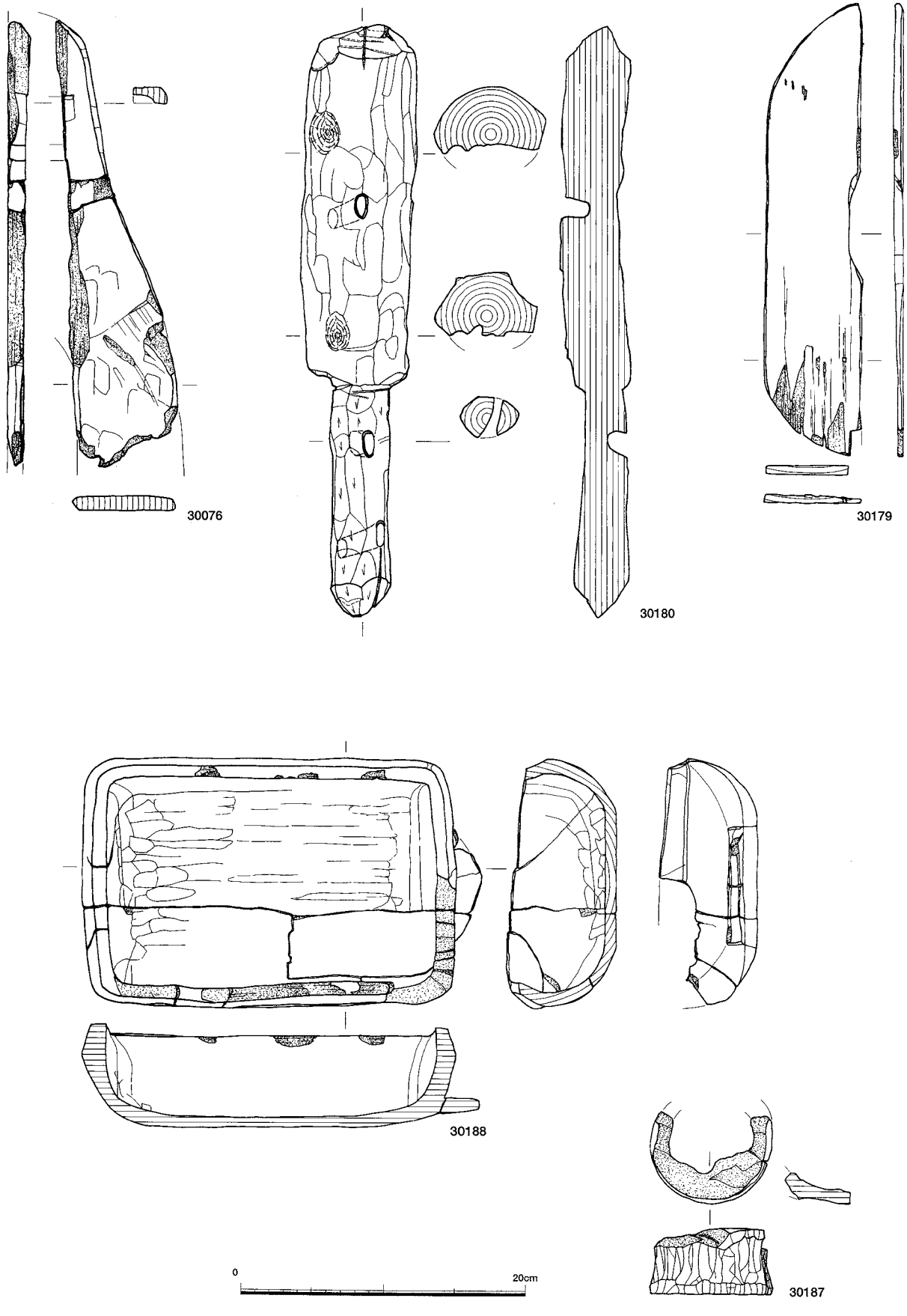


Fig.168　構SD112出土木製品実測図2（1/4）

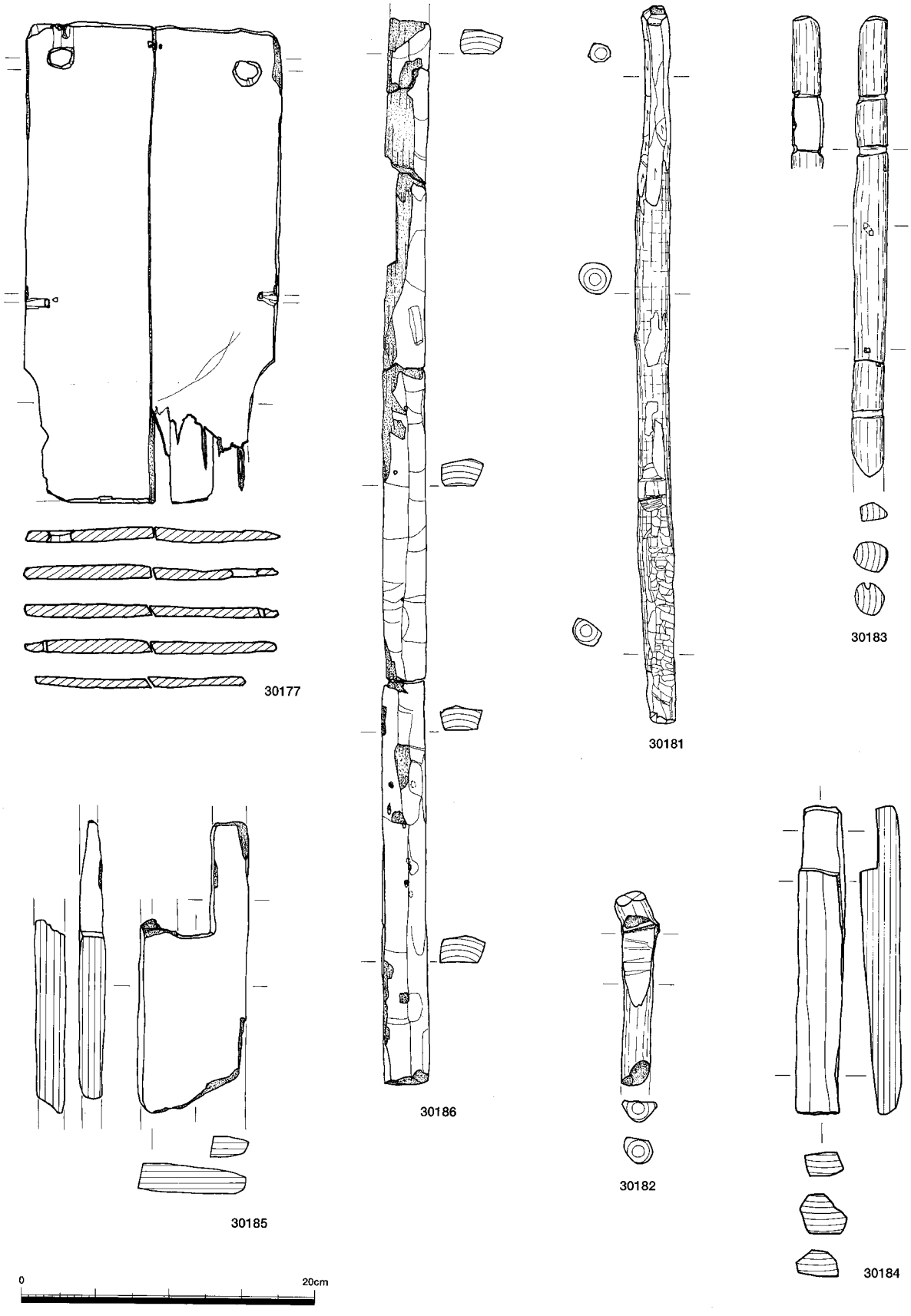


Fig.169　構SD112出土木製品実測図３（1/4）

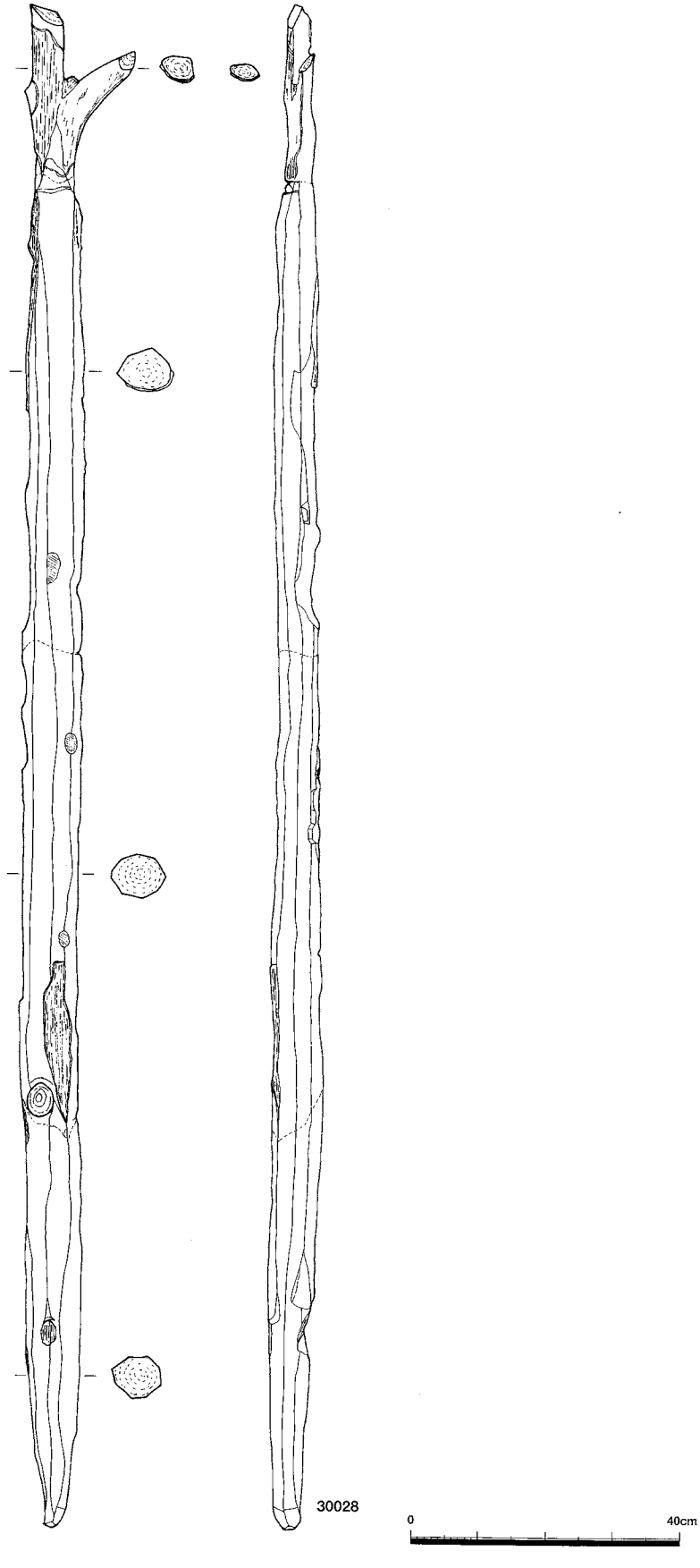


Fig.170　溝SD112出土建築部材実測図（1/10）

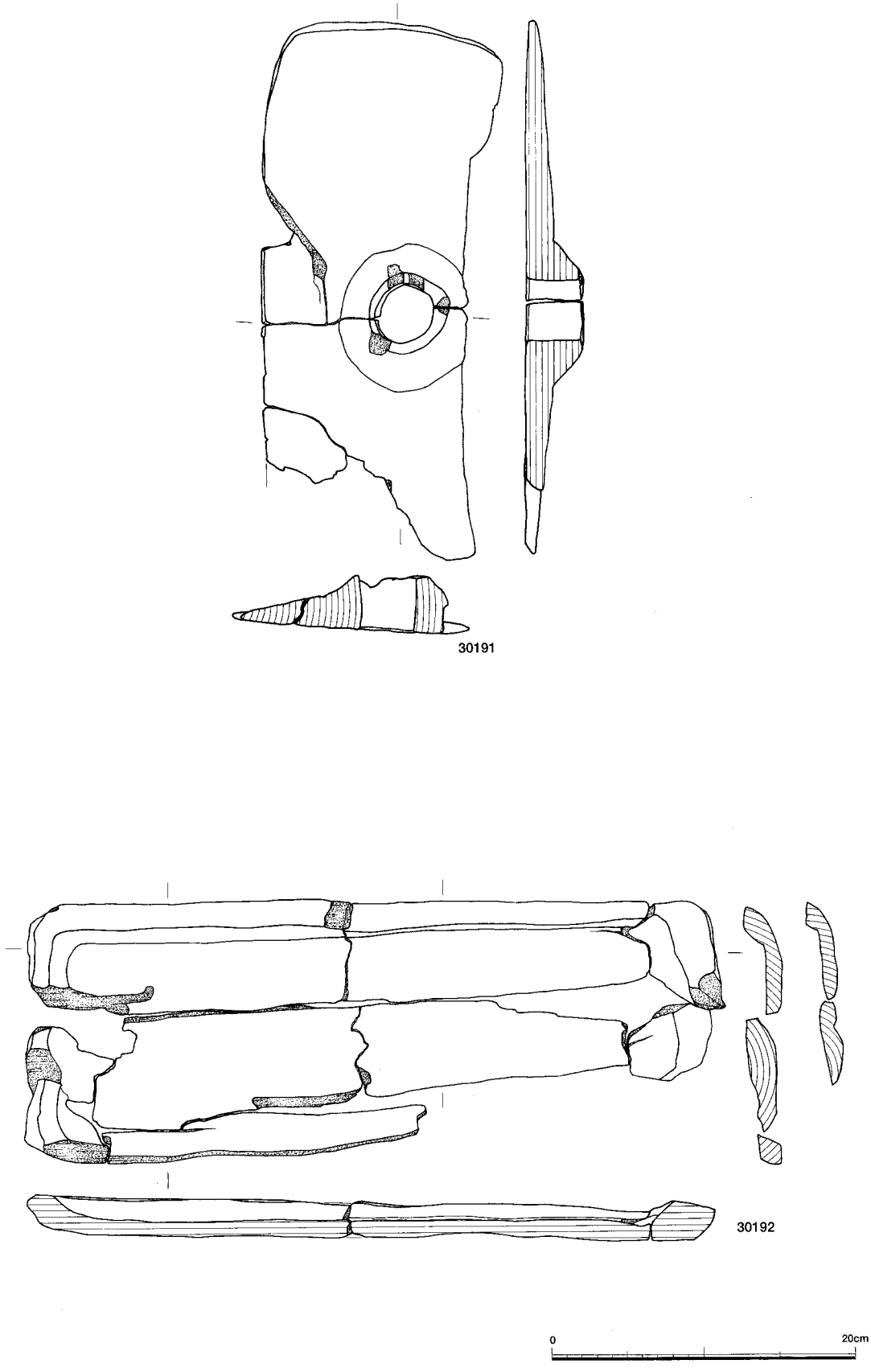


Fig.171　溝SD114出土木製品実測図（1/4）

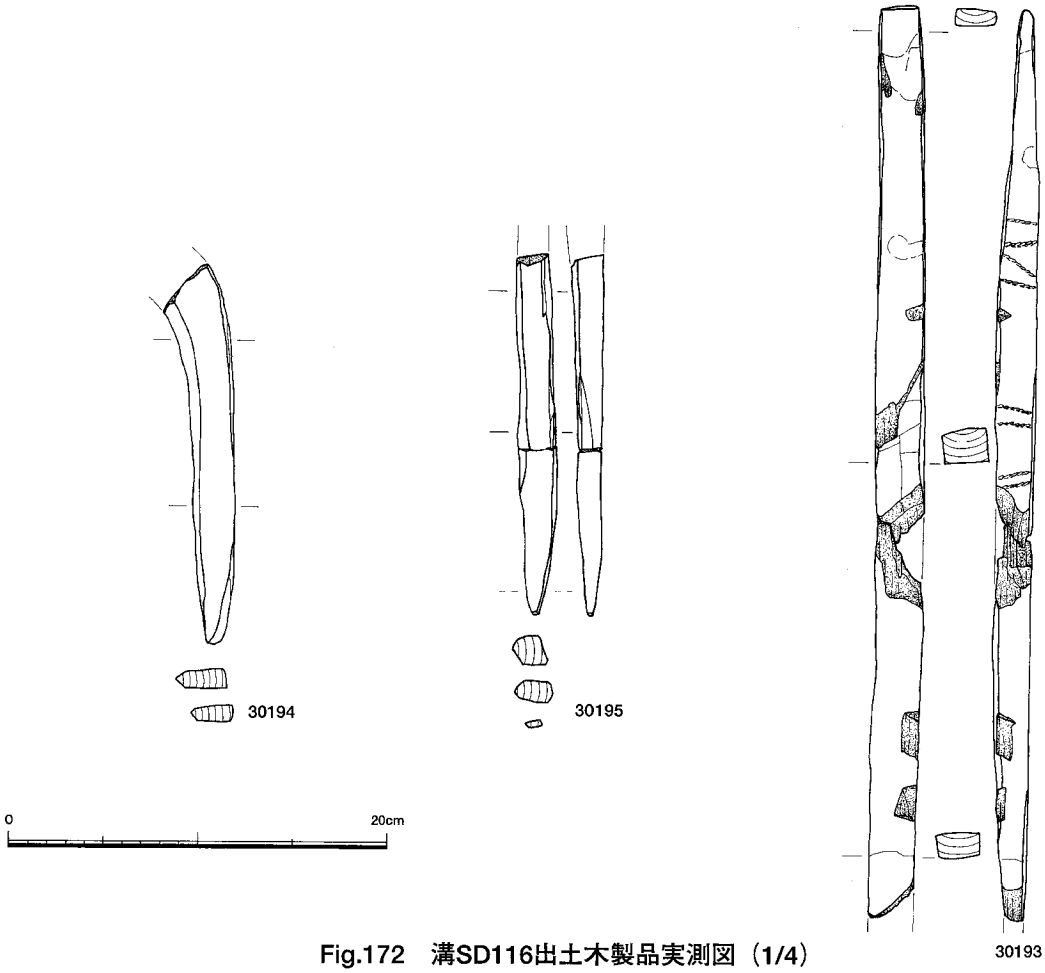


Fig.172　溝SD116出土木製品実測図（1/4）

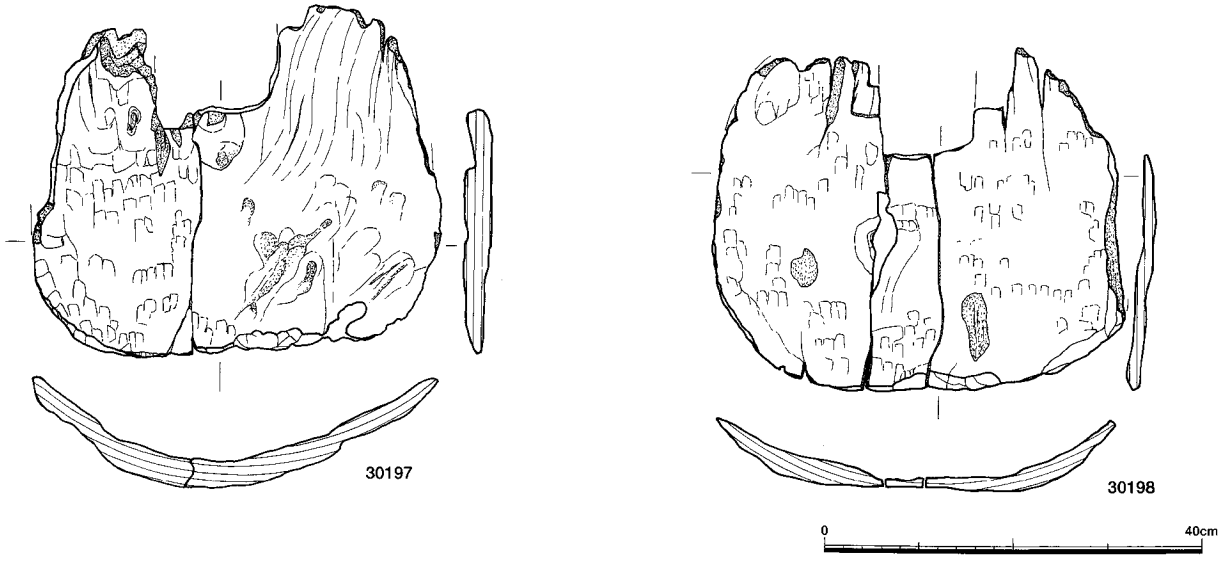


Fig.173　井戸SE120出土部材実測図（1/8）

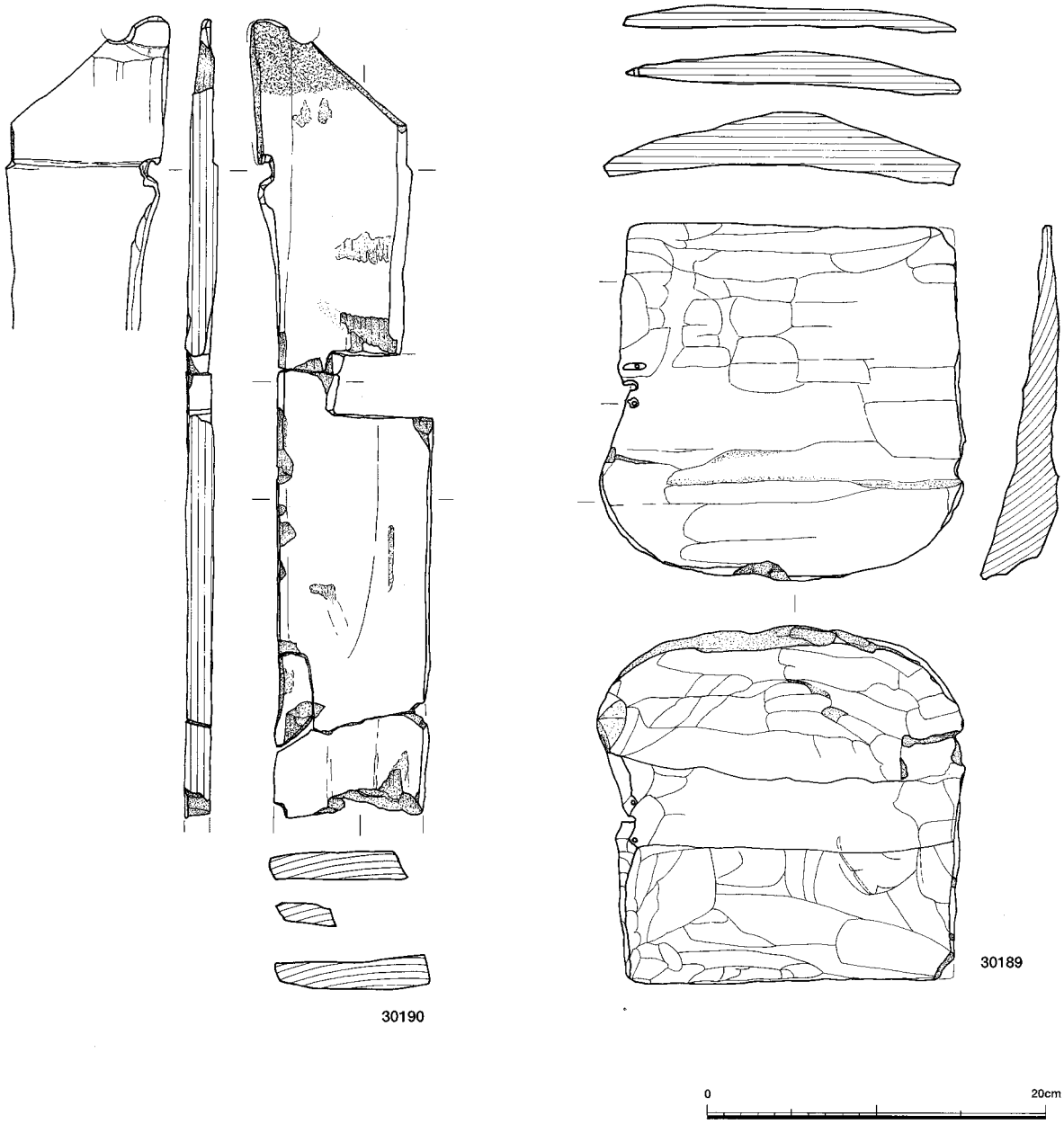


Fig.174　土坑SK113出土木製品実測図（1/4）

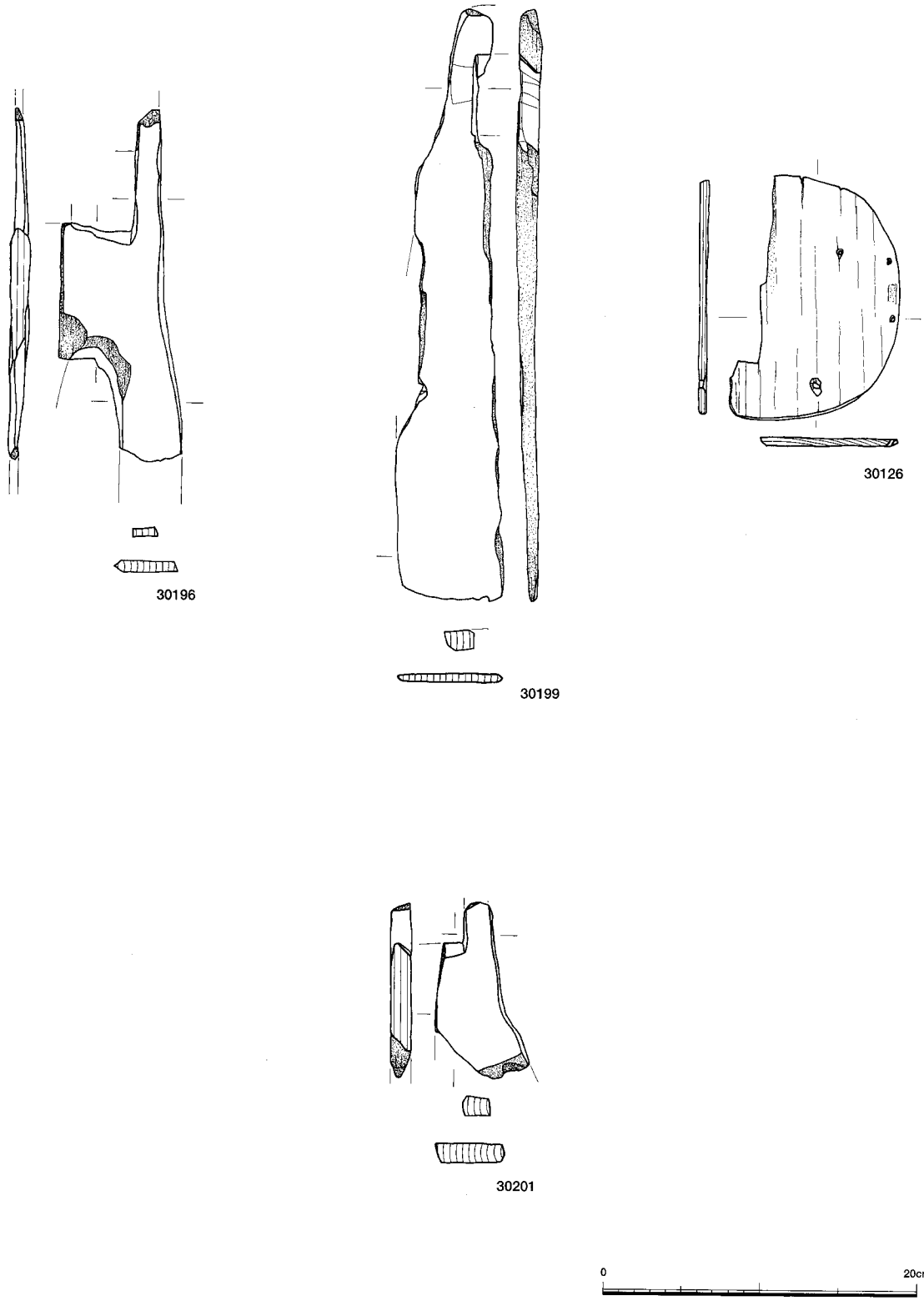


Fig.175　土坑SK119，126，142出土木製品実測図（1/4）

第Ⅴ章　自然化学分析

1．樹 種 同 定

2．土 壌 分 析（花粉・植物珪酸体・種実）

3．放射性炭素年代測定

1．樹　種　同　定

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織をもつ。そのため、解剖学的に概ね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

2．試　　料

試料は、下月隈C遺跡第4次調査において出土した木材210点である。

3．方　　法

カミソリを用いて、試料の新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4．結　　果

結果は表1、2に示し、以下に同定根拠となった特徴を記す。

カ　ヤ　*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.　イチイ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横 断 面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し2本対になる傾向を示す。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には2本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質より、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬、弾性強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

マキ属　*Podocarpus*　マキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横 断 面：早材から晩材への移行はゆるやかで、年輪界がやや不明瞭である。年輪の中に樹脂細胞が散在する。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に1～2個存在する。樹脂細胞が散在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～20細胞高である。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりマキ属に同定される。マキ属には、イヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、琉球に分布する。常緑高木で、通常高さ20m、径50cm～80cmである。材は、耐朽性が強

く、耐水性も高い。建築、器具、桶、箱、水槽などに用いられる。

モミ属 Abies マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横 断 面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で１分野に１～４個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に５種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの４種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横 断 面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径２mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

横 断 面：小型で丸い、放射方向にややのびた道管が、単独あるいは２～３個放射方向に複合し、散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

横 断 面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径２mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

スダジイ　*Castanopsis sieboldii* Hatusima　ブナ科

横 断 面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりスダジイに同定される。スダジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* Schottky　ブナ科

横 断 面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科

横 断 面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

マテバシイ　*Lithocarpus edulis* Nakai　ブナ科

横 断 面：中型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりマテバシイに同定される。マテバシイは、現在では、本州、四国、九州、琉球の暖帯～亜熱帯に広く見られるが、古くから植栽されていたため自然分布の範囲が不明瞭である。元来の自生地は九州および琉球と推定される。常緑高木で、高さ15m、径60cmに達する。

コナラ属コナラ節　*Quercus sect.* Prinus　ブナ科

横 断 面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節 *Quercus sect.* Aegilops　ブナ科

横 断 面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch.　ニレ科

横 断 面：中型から小型で厚壁の放射方向にのびた道管が、年輪界にむけて径を減少しながら、単独あるいは2～3個放射方向に複合して、まばらに散在する散孔材である。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では、数細胞幅で帯状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～4細胞幅である。多列部は平伏細胞からなり、単列部は直立細胞からなる。

以上の形質よりムクノキに同定される。ムクノキは本州（関東以西）、四国、九州、琉球に分布する。落葉高木で、通常高さ15m～20m、径50cm～60cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径1.5mに達する。材はやや堅く密で強靱である。建築、器具、楽器、下駄、船、薪炭などに用いられる。

ニレ属 Ulmus　ニレ科

横 断 面：年輪のはじめに中型から大型の道管が1～3列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して花束状、接線状、斜線状に比較的規則的に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1～5細胞幅ぐらいである。

以上の形質よりニレ属に同定される。ニレ属にはハルニレ、オヒョウなどがあり、北海道、本州、四国、九州、琉球に分布する落葉の高木である。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

ヤマグワ *Morus australis* Poiret クワ科

横 断 面：年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が、単独あるいは２～３個複合して配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の１～３細胞ぐらいは直立細胞である。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で、１～６細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりヤマグワに同定される。ヤマグワは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ10m～15m、径30cm～40cmである。材は堅硬、靭性に富み、建築などに用いられる。

クスノキ *Cinnamomum camphora* Presl クスノキ科

横 断 面：中型から大型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの軸方向柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりクスノキに同定される。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、琉球に分布する。常緑の高木で、通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径５mに達するものもある。材は堅硬で耐朽性が強く、保存性が高く芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

ヤブニッケイ *Cinnamomum japonicum* Sieb. クスノキ科

横 断 面：小型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの軸方向柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔および数の少ない階段穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりヤブニッケイに同定される。ヤブニッケイは、関東以西の本州、四国、九州、琉球に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径１mに達する。材は強さ中庸で、家具、器具、薪炭などに用いられる。

タブノキ *Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc. クスノキ科

横 断 面：やや小型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの軸方向柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔または少数ではあるが、数の少ない階段穿孔が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりタブノキに同定される。タブノキは、本州（暖地）、四国、九州、琉球に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径１mに達する。材は耐朽性、保存性ともに中庸で、建築、家具、土木、器具、楽器、船、彫刻、薪炭などに用いられる。

シロダモ *Neolitsea sericea* Koids. クスノキ科

横 断 面：小型でやや薄壁のいくぶん角張った道管が、単独あるいは２個放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔、及び階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本以内である。放射組織はほとんどが平伏細胞で、上下の縁辺部の１～２細胞が直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部の１～２細胞が直立細胞からなる異性放射組織型で、１～２細胞幅である。

以上の形質よりシロダモに同定される。シロダモは本州、四国、九州、琉球に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径50cmに達する。材はやや軟らかく、建築、器具、薪炭などに用いられる。

クスノキ科 Lauraceae

横 断 面：中型から小型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～３細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は道管径以外の点が不明瞭な為、クスノキ科の同定にとどまる。なお、本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

サクラ属 Prunus バラ科

横 断 面：小型で丸い道管が、単独あるいは２～３個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は、同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～４細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

アワブキ属 *Meliosma* アワブキ科

横 断 面：小型の道管が、単独ないしその複合部に1～2個の軸方向柔細胞をはさんで、放射方向にむかって2～4個複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりアワブキ属に同定される。アワブキ属は本州、四国、九州に分布する。落葉または常緑の小高木から高木である。

ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科

横 断 面：小型でやや角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性で、直立細胞には、ダルマ状に膨れているものが存在する。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の形質よりヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5～10m、径20～30cmである。材は強靭で、耐朽性強く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科

横 断 面：小型の道管が、単独ないし2個複合して均等に分布する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く80を越えるものがある。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、琉球に分布する。常緑高木で、通常高さ8m～10m、径20cm～30cmである。材は強靭、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科

横 断 面：小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く70を越えるものがある。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅で、多列部と比べて単列部が長い。

以上の形質よりヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、琉球に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。材は強さ中庸で、器具などに用いられる。

カキノキ属 Diospyros カキノキ科

横 断 面：中型から大型で厚壁の道管が、単独および２～３個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。軸方向柔細胞は周囲状および接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。いずれの放射組織も高さがほぼ同じで、層階状に配列する傾向を示す。

以上の形質よりカキノキ属に同定される。カキノキ属には、トキワガキ、ヤマガキなどがあり、本州（西部）、四国、九州に分布する。落葉の高木ないし小高木である。材は、建築、器具などに用いられる。

チシャノキ属 Ehretia ムラサキ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、１～３列配列する環孔材である。孔圏部外の道管は単独または２～３個複合して散在し、年輪界付近の小道管は群状に複合する。軸方向柔細胞が１列幅で、接線状に規則的に配列する傾向を示す。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、１～７細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりチシャノキ属に同定される。チシャノキ属には、チシャノキ、マルバチシャノキがあり本州（千葉県以西）、四国、九州、琉球に分布する。落葉の高木ないし小高木である。

環 孔 材 ring-popous wood

横 断 面：年輪のはじめに大型の道管が配列する。晩材部では小型で厚壁の道管が単独あるいは放射方向に２～３個複合してまばらに散在する。道管の径は早材から晩材にかけて徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～３細胞幅である。

以上の形質より環孔材に同定される。

散 孔 材 diffuse-porous wood

横 断 面：小型の道管が散在する。

放射断面：道管が存在する。

接線断面：放射組織が存在することがかろうじて確認できた。

以上の形質より散孔材に同定される。なお本試料は変形が激しく、保存状態が悪い為、広範囲の観察が出来なかったので、散孔材の同定にとどまる。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.

表1　下月隈C遺跡第4次調査における樹種同定結果

遺　構	結　果(和名／学名)		点　数
SD　81	スギ	Cryptomeria japonica D.Don	1
SE　83	モミ属	Abies	1
SD102	サカキ	Cleyera japonica Thunb	4
	マキ属	Podocarpus	1
	スダジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima	1
	ヒサカキ属	Eurya	1
SD103	スギ	Cryptomeria japonica D.Don	1
SD104	スダジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima	15
	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	13
	スギ	Cryptomeria japonica D.Don	5
	クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	4
	クスノキ科	Lauraceae	3
	コナラ属クヌギ節	Quercus sect. Aegilops	3
	サカキ	Cleyera japonica Thunb.	3
	アワブキ属	Meliosma	2
	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	1
	ムクノキ	Aphananthe aspera Planch.	1
	ニレ属	Ulmus	1
	タブノキ	Machilus thunbergii Sieb.et Zucc	1
	ヤブツバキ	Camellia japonica Linn.	1
	ヒサカキ属	Eurya	1
	環孔材	ring-popous wood	1
	散孔材	diffuse-porous wood	1
	カヤ	Torreya nucifera Sieb.et Zucc.	1
	マキ属	Podocarpus	1
SD105	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky	7
	アワブキ属	Meliosma	5
	ヒサカキ属	Eurya	4
	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	3
	スギ	Cryptomeria japonica D.Don	1
	ヤナギ属	Salix	1
	スダジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima	1
	タブノキ	Machilus thunbergii Sieb.et Zucc.	1
	サクラ属	Prunus	1
	ヤブツバキ	Camellia japonica Linn.	1
	カキノキ属	Diospyros	1
	散孔材	diffuse-porous wood	1
SD106	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	1

表２　下月隈C遺跡第４次調査における樹種同定結果

遺　構	結　果(和名／学名)		点　数
SD108	コナラ属クヌギ節	Quercus sect. Aegilops	33
	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	23
	スダジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima	16
	サカキ	Cleyera japonica Thunb.	15
	アワブキ属	Meliosma	8
	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky	8
	シロダモ	Neolitsea sericea Koids.	3
	タブノキ	Machilus thunbergii Sieb.et Zucc.	3
	ヒサカキ属	Eurya	3
	マテバシイ	Pasania edalis Makino	3
	ヤブツバキ	Camellia japonica Linn.	3
	カヤ	Torreya nucifera Sieb. et Zucc.	2
	ヤマグワ	Morus australis Poiret	2
	ヤナギ属	Salix	2
	環孔材	ring-popous wood	2
	マキ属	Podocarpus	1
	コナラ属コナラ節	Quercus sect.Prinus	1
	スギ	Cryptomeria japonica D.Don	1
	サクラ属	Prunus	1
	チシャノキ属	Ehretia	1
SX111	スギ	Cryptomeria japonica D.Don	1
	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	1
SD112	シロダモ	Neolitsea sericea Koids.	2
	ムクノキ	Aphananthe aspera Planch.	2
	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky	1
	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	1
	コナラ属クヌギ節	Quercus sect. Aegilops	1
	モミ属	Abies	1
SD113	コナラ属クヌギ節	Quercus sect. Aegilops	1
SD114	クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	4
	スダジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima	4
	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen.Cyclobalanopsis	3
	コナラ属クヌギ節	Quercus sect. Aegilops	2
	カヤ	Torreya nucifera Sieb.et Zucc.	2
	ムクノキ	Aphananthe aspera Planch.	2
	サカキ	Cleyera japonica Thunb.	1
	タブノキ	Machilus thunbergii Sieb.et Zucc.	1
SD116	コナラ属クヌギ節	Quercus sect. Aegilops	14
	ムクノキ	Aphananthe aspera Planch.	2
	スダジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima	1
SD119	クリ	Castanea crenata Sieb.et Zucc.	1
SE120	スダジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima	14
	マテバシイ	Pasania edalis Makino	3
	アワブキ属	Meliosma	1
	サカキ	Cleyera japonica Thunb.	1

2．土壌分析（花粉・植物珪酸体・種実）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

福岡平野の地形・地質については、下山（1998）に詳しく述べられている。これによると、福岡平野は、海岸付近の砂丘および浜堤、それに続く低地、各河川に沿った沖積段丘（日佐面）を含む河成平野、沖積地背後の平坦面を形成する洪積台地（低位段丘面の桧原面・大坪面、中位段丘面の須玖面、高位段丘面の春日面）に区分できるとされている（下山，1998）。下月隈C遺跡は、福岡県福岡市博多区に所在し、下山（1998）の地形分類にしたがうと御笠川沿いの河成平野に位置することになる。遺跡調査区内でも、旧河道、後背湿地、微高地など複雑な地形となっている。

これまでの調査によると、縄文時代末～弥生時代前期の河川跡や土器・石器などの遺物、弥生時代の集落跡・河川跡・水田跡、古墳時代後期の水田跡、奈良時代の河川跡や水田跡、鎌倉時代の村落跡などが確認されている。特に弥生時代の集落跡は、近接する雀居遺跡の調査成果を合わせると、御笠川左岸の丘陵に展開する比恵、那珂遺跡群や板付遺跡にも匹敵する大集落になる可能性があることが明らかにされつつある。そこで、今回は縄文時代末～弥生時代初頭頃にかけて本遺跡で生活していた人々を取り巻く古環境に関する情報を得る目的で、花粉分析・植物珪酸体分析・種実遺体分析を実施する。

1．試　料

分析試料は、水田跡（SX98）から採取された1点（試料番号1）、溝跡（SD106）から採取された3点（試料番号2～4）、井戸跡（SE120）から採取された1点（試料番号5）、土坑（SK137）から採取された3点（試料番号6～8）の合計8点である。これら全8試料を分割し、花粉分析・植物珪酸体分析・種実遺体分析を実施する。各試料の時代は、いずれも縄文時代晩期～弥生時代初頭とされている。試料の詳細を表1に示す。

表1　分析試料の一覧

試料採取地点	性格等	面	試料番号	土色		土質
SX98	水田跡	第3面	1	10YR3/2	黒褐	礫混じり砂質シルト（炭化材混じる）
SD106	溜り	第4面	2	N2/0	黒	礫混じり粘土質シルト
			3	10YR3/1	黒褐	礫混じりシルト質砂
			4	2.5Y3/1	黒褐	礫混じり粘土質シルト
SE120　U-6区	井戸跡	第4面	5	10YR2/1	黒	礫混じりシルト
SK137　T・U-5区	土坑	第4面	6	10YR3/1	黒褐	礫混じりシルト
			7	10YR2/1	黒	礫混じり粘土質シルト
			8	10YR2/1	黒	礫混じり砂質シルト

2．花粉分析

（1）分析方法

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、セルロースの分解を目的とするアセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理の順に、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全体を走査し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

分析結果は、同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位分布図で示す。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフォン（－）で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

（2）結　果

結果を表２・図１に示す。各試料とも、花粉化石が良好に検出される。検出される木本花粉化石群集は各試料とも類似している。すなわち、木本花粉ではアカガシ亜属が多産し、クリ属－シイノキ属、マツ属、コナラ亜属などが伴っている。

草本花粉では、イネ科が多産し、カヤツリグサ科などが伴い、試料番号５でギシギシ属、試料番号７でアブラナ科、試料番号６・８でヨモギ属などが多く産出している。

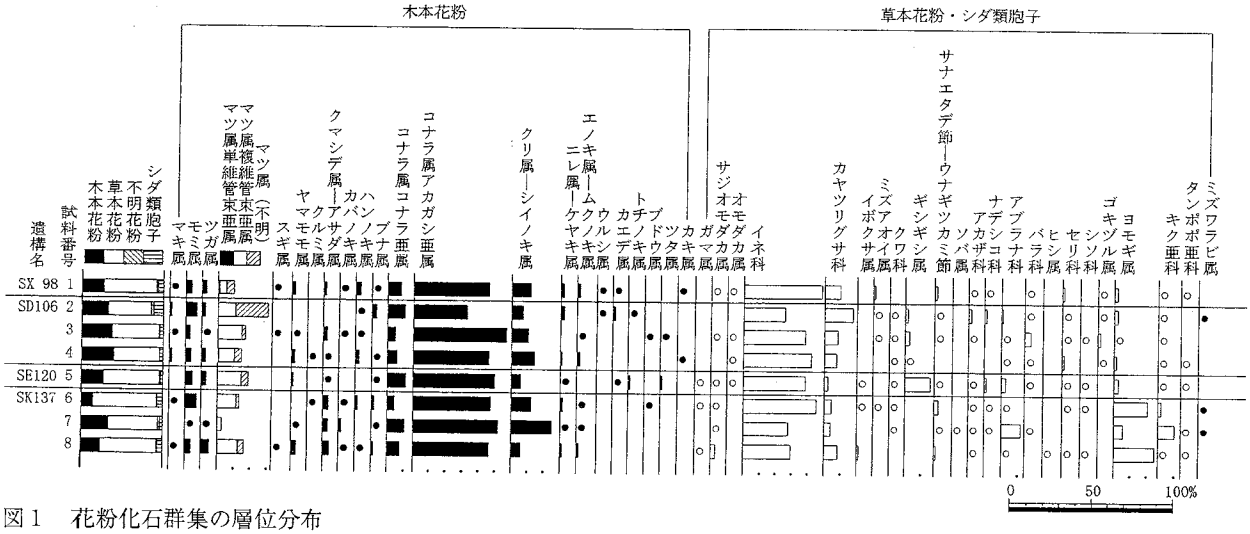


図１　花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満の試料について検出した種類を示す。

表2　花粉分析結果

種　類	SX98 第3面	SD106 第4面	SD106 第4面	SD106 第4面	SE120 第4面	SK137 第4面	SK137 第4面	SK137 第4面
試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8
木本花粉								
マキ属	1	2	1	4	-	2	-	2
モミ属	8	9	7	9	7	16	2	8
ツガ属	6	3	2	7	5	-	1	11
マツ属単維管束亜属	2	-	-	2	-	-	-	1
マツ属複維管束亜属	9	14	37	24	23	25	6	25
マツ属(不明)	10	26	6	11	7	1	-	8
コウヤマキ属	-	-	1	-	-	-	-	-
スギ属	2	-	2	-	-	-	-	1
ヤナギ属	-	-	-	-	1	2	-	-
ヤマモモ属	5	-	2	6	2	-	1	7
クルミ属	-	-	-	1	-	2	-	-
クマシデ属-アサダ属	4	-	7	1	1	8	7	9
カバノキ属	1	-	2	-	-	2	4	1
ハンノキ属	7	1	1	6	-	4	-	1
ブナ属	2	4	-	2	1	4	2	3
コナラ属コナラ亜属	17	14	12	15	18	10	23	16
コナラ属アカガシ亜属	100	43	145	120	80	104	110	97
クリ属-シイノキ属	25	9	26	37	9	27	53	12
ニレ属-ケヤキ属	4	3	-	3	1	4	2	3
エノキ属-ムクノキ属	4	-	2	5	-	1	1	3
アカメガシワ属	1	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	1	1	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	2	-	-	-	-	1	-	-
カエデ属	1	2	-	-	1	-	-	-
トチノキ属	-	1	-	-	2	-	-	-
ブドウ属	-	-	1	-	-	2	-	-
ツタ属	-	-	1	-	2	-	-	-
ノブドウ属	1	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	-	-	-	1	-	-	-	-
ツツジ科	1	-	-	3	-	1	-	-
カキ属	1	-	-	1	-	-	-	-
ハイノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉								
ガマ属	-	-	-	-	1	3	-	1
サジオモダカ属	1	-	1	-	1	8	1	25
オモダカ属	5	-	2	4	2	-	-	-
イネ科	388	101	260	273	223	681	170	259
カヤツリグサ科	75	68	55	48	14	67	24	72
イボクサ属	-	-	-	-	5	1	-	12
ミズアオイ属	9	1	2	-	-	1	-	-
クワ科	-	1	5	2	2	4	1	-
ギシギシ属	-	7	19	2	90	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	12	2	1	-	4	37	2	9
タデ属	-	-	-	-	-	1	-	-
ソバ属	-	-	-	-	-	-	1	-
アカザ科	2	7	3	-	3	2	2	1
ナデシコ科	2	5	-	-	8	3	2	-
キンポウゲ属	-	-	-	-	1	-	2	-
アブラナ科	-	4	1	1	15	13	72	3
バラ科	1	3	24	1	3	-	2	-
マメ科	-	-	-	-	-	1	-	2
ツリフネソウ属	-	-	-	-	-	-	1	-
アオイ科	-	-	-	-	-	2	-	-
キカシグサ属	-	-	1	1	-	-	-	-
ヒシ属	-	-	-	-	-	-	-	1
アカバナ属	-	-	-	-	-	-	2	-
セリ科	9	2	3	8	4	2	-	1
ヒルガオ属	-	-	-	-	3	-	-	-
シソ科	-	-	1	-	1	14	-	3
オオバコ属	1	-	-	1	-	-	-	-
ゴキヅル属	1	1	10	5	-	-	-	-
ヨモギ属	17	9	5	10	16	312	34	218
オナモミ属	-	-	-	-	2	-	-	-
キク亜科	5	1	1	5	2	28	61	7
タンポポ亜科	1	-	-	1	5	-	1	1
不明花粉	12	13	8	5	8	16	15	12
シダ類胞子								
ヒカゲノカズラ属	8	4	2	3	1	7	1	2
イノモトソウ属	-	2	3	2	2	6	1	1
ミズワラビ属	-	1	-	-	-	1	1	-
他のシダ類胞子	49	41	25	22	13	90	18	52
合　計								
木本花粉	216	132	255	258	160	219	212	208
草本花粉	529	212	394	362	405	1180	378	615
不明花粉	12	13	5	0	8	16	15	12
シダ類胞子	57	48	30	27	16	104	21	55
総計(不明を除く)	802	392	679	647	581	1503	611	878

3．植物珪酸体分析

（1）分析方法

湿重5ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250KHz，1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から稲作について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片などの分布図を作成する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

（2）結　果

結果を表3、図2に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。植物珪酸体群集は、各試料を通じて類似している。すなわち、タケ亜科が最も高率に出現し、イネ属、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。この内、イネ属は、稲籾に形成される穎珪酸体、葉部に形成される短細胞列や機動細胞列といった珪化組織片もわずかに認められる。この他、樹木起源珪酸体第Ⅲグループや第Ⅳグループ（近藤・ピアスン，1981）が検出される。第Ⅲグループは「Y」あるいは「く」の字状の形態、第Ⅳグループは網目模様の付いた紡錘形を呈する。

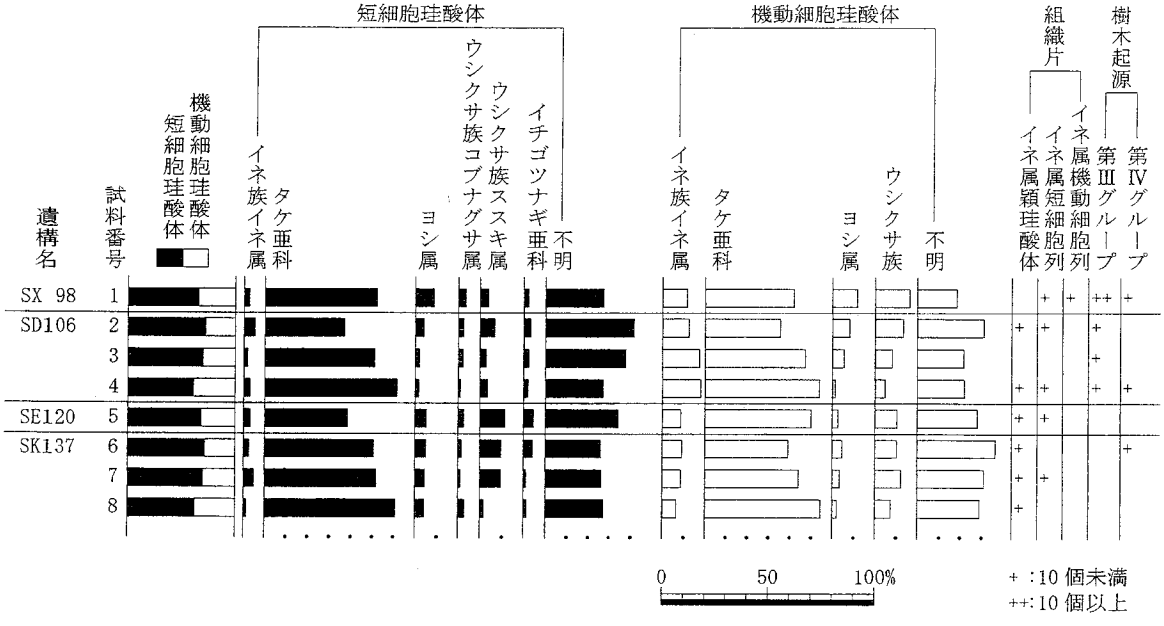


図2　植物珪酸体群集および珪化組織片などの産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で産出した。なお、珪化組織片および樹木起源珪酸体の産状を検出個数により＋の記号で示す。

表3　植物珪酸体分析結果

種　類	SX98 第3面	SD106 第4面	SD106 第4面	SD106 第4面	SE120 第4面	SK137 第4面	SK137 第4面	SK137 第4面
試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8
イネ科葉部短細胞珪酸体								
イネ族イネ属	6	15	5	7	8	7	13	3
タケ亜科	126	106	129	143	94	137	136	134
ヨシ属	21	12	5	4	13	14	12	10
ウシクサ族コブナグサ属	8	7	5	2	6	4	3	6
ウシクサ族ススキ属	9	19	7	8	28	26	25	4
イチゴツナギ亜科	5	9	6	5	11	11	3	3
不明キビ型	36	80	50	32	57	42	46	36
不明ヒゲシバ型	24	23	29	18	17	17	15	15
不明ダンチク型	6	16	16	13	10	11	8	9
イネ科葉身機動細胞珪酸体								
イネ族イネ属	15	14	19	27	10	10	10	9
タケ亜科	54	40	52	81	57	42	50	73
ヨシ属	15	9	6	2	3	5	4	3
ウシクサ族	21	15	9	7	12	11	14	10
不明	24	35	24	33	32	39	35	39
合　計								
イネ科葉部短細胞珪酸体	241	287	252	232	244	269	261	220
イネ科葉身機動細胞珪酸体	129	113	110	150	114	107	113	134
総　計	370	400	362	382	358	376	374	354
組　織　片								
イネ属穎珪酸体	-	10	-	2	7	2	5	3
イネ属短細胞列	2	3	-	2	2	-	2	-
イネ属機動細胞列	2	-	-	-	-	-	-	-
樹木起源								
第Ⅲグループ	11	2	3	2	-	-	-	-
第Ⅳグループ	5	-	-	1	-	1	-	-

4．種実遺体分析

（1）分析方法

土壌試料は、試料を約300ｇ秤量し、数％の水酸化ナトリウム水溶液に浸して放置したあと、0.5㎜の篩を通して水洗し残渣を集める。残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体を抽出・同定する。検出された試料は、種類毎に瓶にいれ、ホウ酸・ホウ砂水溶液中に保存する。

（2）結　果

結果を表４に示す。検出された種類はほとんどが草本類である。数種検出される木本類も藤本や低木であり、高木になる種類は含まれない。草本類は水生植物が比較的多くみられるのが特徴である。以下に検出された種類の形態的特徴を記す。

表４　種実遺体分析結果

種類名	SX98 第3面	SD106 第4面	SD106 第4面	SD106 第4面	SE120 第4面	SK137 第4面	SK137 第4面	SK137 第4面
試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8
木本類								
マタタビ属	-	-	-	破1	-	-	-	-
キイチゴ属	1	-	1	-	-	1	-	-
ヒサカキ	1	-	-	-	-	-	-	-
タラノキ	-	-	1	2	-	-	-	-
草本類								
イバラモ属	-	-	2	-	1	-	-	-
ヘラオモダカ	1	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	-	-	2	-	-	-	-	-
オモダカ科	-	1	1	2	-	4	1	-
スブタ	-	-	1	-	-	-	-	-
エノコログサ属	6	-	-	-	-	-	-	-
スゲ属	3	-	-	-	-	-	1	-
ホタルイ属	5	-	17	5+	-	1	-	-
カヤツリグサ科	1	2+	4	11	2	9	14	4
イボクサ	1	-	1	1	-	-	-	-
ミズアオイ属	1	-	1	-	-	-	-	-
カナムグラ	-	破1	3	3+	-	-	-	-
ギシギシ属	-	-	1	-	-	-	-	-
タデ属（サナエタデ？）	-	-	-	2	-	-	-	-
タデ属	2	2	2+	-	-	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	1	2+	2	4+	3	-	-	-
ナデシコ科	8	5	10	9	1	-	-	-
トウゴクサバノオ	-	1	4	2	-	-	-	-
キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属	-	-	1	-	-	-	-	-
カタバミ属	3	-	3	2	2	-	-	-
エノキグサ	-	-	-	1	-	-	-	-
オトギリソウ属	-	-	-	-	-	1	-	-
セリ科	1	1	1	1	1	-	-	-
チドメグサ属	18	-	3	1	-	-	-	-
ヤブジラミ	-	-	-	1+	-	-	-	-
メハジキ属	-	4	1	7	-	1	-	-
イヌコウジュ属	2	-	7	-	2	-	-	-
ナス科	4	-	-	-	-	1	-	-
メロン類	1	-	-	-	-	-	-	-
メナモミ属	2	-	-	-	-	-	-	-
不明A	-	-	-	2	-	-	-	-
不明種実	3	-	6+	8	5	2	2+	-
不明植物片	破	-	-	-	-	-	-	-
葉	破	-	-	-	-	-	-	-
材	-	-	破	破	-	-	-	-
炭化材	破	破	破	破	破	破	破	破
不明炭化物	-	破	-	破	破	破	破	-
不明炭化物（穀物？）	-	-	-	-	-	-	-	破
昆虫	破	-	破	破	破	破	破	破
菌核	2	5	-	1	-	-	-	-
土器	-	破	破	-	-	-	-	-
秤量（g）	200.32	301.01	292.74	305.42	298.38	308.08	296.55	250.7

・**マタタビ属**（Actinidia）　マタタビ科
種子の破片が検出された。黒色で大きさは１㎜程度。表面は硬質で光沢があり、丸いへこみが不規則に配列しているように見える。網目は基部の付近では細かく縦長になる。

・**キイチゴ属**（Rubus）　バラ科
核（内果皮）が検出された。淡黄褐色、半円形～三日月形。長さ1.5㎜、幅１㎜程度。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

・**ヒサカキ**（Eurya japonica Thunberg）　ツバキ科ヒサカキ属
種子が検出された。黒色で大きさは1.5㎜程度。不定形で側面に「へそ」があり、「へそ」中心に同心円状に丸い小孔が配列する。表面はやや堅くてやや光沢がある。

・**タラノキ**（Aralia elata (Miq.) Seemann）　ウコギ科タラノキ属
種子が検出された。茶褐色、半月形でやや偏平。長さ2.5㎜、幅1.5㎜程度。腹面はほぼ直線状で、片端に突起が見られる。背面には数本の浅い溝が走る。表面はざらつく。

・**イバラモ属**（Najas）　イバラモ科
種子が検出された。淡～茶褐色、針状長楕円体。長さ２㎜程度。両端は細まり尖る。種皮は薄く透き通り、表面には縦長の網目模様が配列する。

・**ヘラオモダカ**（Alisma canaliculatum A. Br. et Bouche）　オモダカ科サジオモダカ属
果実が検出された。淡褐色ないし黄褐色。長さ２㎜、幅1.5㎜程度。背部に深い縦溝が１本走る。果皮はスポンジ状で柔らかく、中の種子が透けてみえる。中の種子は茶褐色、倒Ｕ字状に曲がった円柱状で偏平。大きさ１㎜程度。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には微細な網目があり縦筋が目立つ。

・**オモダカ属**（Sagittaria）　オモダカ科
果実が検出された。淡黄褐色、倒卵形で偏平。大きさ３㎜程度。果皮は薄く翼状。翼の外形は欠損しているため判別不可能であった。表面は微細な網目が縦方向に並ぶ。果皮は透き通るため、中の種子が透けてみられる。中の種子は茶褐色、倒Ｕ字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には微細な網目があり縦筋が目立つ。

・**オモダカ科**（Alismataceae）
種子が検出された。茶褐色、倒Ｕ字状に曲がった円柱状で偏平。大きさ１㎜程度。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には微細な網目があり縦筋が目立つ。

・**スブタ**（Blyxa echinosperma (Clarke) Hooker）　トチカガミ科スブタ属
種子が検出された。楕円形で大きさは１㎜程度。表面薄くて柔らかく、微細な突起がある。両端に刺状の突起がある。

・**エノコログサ属**（Setaria）　イネ科
穎が検出された。淡～茶褐色、半偏球形で長さ2.5-3㎜、幅2㎜程度。表面には横方向に長い細胞が密に配列する。果皮は柔らかくて弾力があり、薄い。

・**スゲ属（Carex）**　カヤツリグサ科
果実が検出された。異なる複数の種類を含む。淡褐色、倒卵形や涙形で偏平。大きさ1㎜程度。果皮は薄く柔らかく、表面には微細な網目模様がありざらつく。

・**ホタルイ属（Schoenoplectus）**　カヤツリグサ科
果実が検出された。黒褐色、片凸レンズ状の広倒卵形。長さ2㎜、幅1.5㎜程度。背面はやや高く稜がある。先端部は尖り、基部から伸びる逆刺のある髭状の腕が残る個体もみられた。表面は光沢があり、不規則な波状の横皺状模様が発達する。

・**カヤツリグサ科**（Cyperaceae）
果実が検出された。異なる複数の種類を一括した。茶～黒褐色、卵形体や、狭倒卵形状のやや明瞭～明瞭な三稜形。先端部は尖り、基部は切形。長さ1.2㎜程度。果皮は硬く、表面にはごく微小な疣状突起が密布する。

・**イボクサ**（Aneilema Keisak Hassk.）　ツユクサ科イボクサ属
種子が検出された。赤みがかった灰褐色で半横長楕円形。大きさは3㎜程度。背面は丸みがあり、腹面は平らである。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面は円形の小孔が多数存在する。

・**ミズアオイ属**（Monochoria）　ミズアオイ科
種子が検出された。淡褐色、楕円体。長さ1㎜、径0.5㎜程度。種皮は薄く透き通り、柔らかい。表面には縦に10本程度の隆起があり、隆起の間には横方向の密な隆線が配列する。

・**カナムグラ**（Humulus japonicus Sieb. et Zucc.）　クワ科カラハナソウ属
果実と種子が検出された。果実は灰褐色、種子は灰～黒褐色で両凸レンズ状の円形。縁は稜を成す。径4-5㎜、厚さ1㎜程度。果実は基部が突出、表面には鱗片状の伏毛が分布し12本程度の縦筋が配列する。種子は基部に淡黄褐色でハート形の臍点をもつ。種皮は薄く硬く、表面はざらつく。

・**ギシギシ属**（Rumex）　タデ科
果実が検出された。暗褐色、広楕円状三稜形。長さ2.5㎜、幅1.5㎜程度。三稜は鋭く明瞭で、両端は急に尖る。果実をとりまく内花被片が発達しており、心円形で網目模様をなす。径5㎜程度で縁に歯牙があり、中肋は瘤状に膨れる。

・**タデ属**（サナエタデ近似種）（Polygonum cf. lapathifolium L.）　タデ科タデ属
果実が検出された。黒褐色、円形で偏平な二面体。長さ1.7㎜程度。両面中央はやや凹む。先端部は尖る。果実表面には光沢がある。

・**タデ属**（Polygonum）　タデ科タデ属
果実が検出された。黒色、丸みのある菱形で三稜形。長さ２-３㎜、幅1.5㎜程度。表面は光沢が強く、微細な網目模様がある。

・**アカザ科ーヒユ科**（Chenopodiaceae－Amarantaceae）
未炭化の種子が検出された。黒色、円盤状でやや偏平。径１㎜程度。一端が凹み、臍がある。種皮表面は光沢が強く、微細な網目模様がみられる。

・**ナデシコ科**（Caryophyllaceae）
種子が検出された。茶褐色、腎臓状円形でやや偏平。径１㎜程度。一端が凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように突起が同心円状に並ぶが、突起が瘤状のものと円錐状の２種類以上がみられた。

・**トウゴクサバノオ**（Isopyrum trachyspermum Maxim.）　キンポウゲ科シロカネソウ属
果実が検出された。淡黄褐色、球形。径１㎜程度。果皮は薄く、表面は小突起が密布する。

・**キジムシロ属ーヘビイチゴ属ーオランダイチゴ属**（Potentilla－Duchesnea－Fragaria）　バラ科
核（内果皮）が検出された。淡黄～淡灰褐色、腎形でやや偏平。長さ１㎜、幅0.7㎜程度。内果皮は厚く硬く、表面は微細～やや大きい網目模様がありざらつく。

・**カタバミ属**（Oxalis）　カタバミ科
種子が検出された。黒灰色、卵形で偏平。長さ1.6㎜、幅1.2㎜程度。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には４～７列の深い波状の横溝が並び、わらじ状にみえる。

・**エノキグサ**（Acalypha australis L.）　トウダイグサ科エノキグサ属
種子が検出された。黒色、倒卵形で長さ1.5㎜、径１㎜程度。基部は尖り、Ｙ字状の筋がある。種皮は薄く硬く、表面は細かな窪みが配列しざらつく。

・**オトギリソウ属**（Hypericum）　オトギリソウ科
種子が検出された。長楕円形で大きさは１㎜程度。種皮は黒色で薄く、柔らかい。表面は亀甲状の模様がある。

・**セリ科**（Umbelliferae）
果実が検出された。半球状で淡褐色。大きさは２㎜程度。球面側では数本の縦方向に大きく裂けた溝があり、内部が露出している。果実が分離した面では、中央に縦軸方向に延びた紡錘形のくぼみがあり、内部が露出している。

・**チドメグサ属**（Hydrocotyle）　セリ科
果実が検出され、褐色で大きさは１㎜程度。果実（分果）は扁平な球形であるが、検出されたものは全て２つに分離して半月形である。表面には円周に沿って１～２本の筋がある。

・**ヤブジラミ**（Torilis japonica (Houtt.) DC.）　セリ科ヤブジラミ属
果実が検出された。長楕円形で大きさは3㎜程度。灰白色で表面は薄くて堅い。全体に上に曲がった棘が密に分布する。

・**メハジキ属**（Leonurus）　シソ科
果実が検出された。大きさは2㎜程度。灰褐色、くさび形で大きさは2㎜程度。3稜があり、先端部はとがる。表面はやや堅く、ざらつく。

・**イヌコウジュ属**（Mosla）　シソ科
果実が検出された。褐色。大きさは1㎜程度。いびつな球形で、先端に「へそ」が見られる。表面全体には、荒い亀甲状の網目模様がある。

・**ナス科**（Solanaceae）
種子が検出された。大きさは3㎜程度。楕円形で扁平。側面の一端に「へそ」がある。「へそ」を中心に同心円上の網目模様が存在する。

・**メロン類**（Cucumis melo L.）　ウリ科キュウリ属
種子が検出された。大きさは7㎜程度。側面観は楕円形、上面観はやや偏平な楕円形。表面は比較的平滑。

・**メナモミ属**（Siegesbeckia）　キク科
果実が検出された。黒色。大きさは2.5㎜程度。惰円錐形で先端部が曲がる。基部にはおおきな楕円形の「へそ」が存在する。縦軸方向に平行に多数の溝がみられる。

5．考　察

（1）遺跡周辺の古植生

木本花粉の産状に注目すると、アカガシ亜属が最も高率に出現する。アカガシ亜属は、暖温帯常緑広葉樹林の主要構成要素である。したがって、当時、後背地などは、アカガシ亜属を中心とする暖温帯常緑広葉樹林が成立していたと考えられる。植物珪酸体分析において検出される樹木起源の珪酸体も、これら常緑広葉樹に由来すると推定される。この他にも、針葉樹のマツ属、広葉樹のヤマモモ属・クマシデ属－アサダ属・コナラ亜属・クリ属－シイノキ属などの種類が、森林構成種として存在していたと思われる。周辺地域で行われた花粉分析結果においても、暖温帯常緑広葉樹林の構成要素が多産する群集組成が得られている（例えば、畑中，1977,1989；中村・畑中，1976；野井，1991など）。また、Hatanaka（1985）は、九州地方各地の花粉分析結果をまとめ、このような暖温帯林が約8000年前以降であると述べている。

ただし、総数に対して木本花粉の出現率が低率であり、ブドウ属・ツタ属など林縁部に生育する種類が検出されている。このような傾向は、種実遺体の産状でも読みとれる。すなわち、開けた場所に生育する草本類が圧倒的に多く、検出される木本類をみるとツル性植物のマタタビ属や低木類のタラノキ・ヒサカキなどであり、林縁や疎林地など明るい林地に生育するものばかりである。このような点から考えて、遺跡付近までは森林が迫っていたわけでなく、むしろ開けた草地のような状態であったと考えられる。また、後背の山地・段丘斜面部、あるいは自然堤防・微高地上などには、タケ・ササ類なども分布していたと考えられる。

このような場所には、主にエノコログサ属・ススキ属などのイネ科を中心として、スゲ属・ホタルイ属などのカヤツリグサ科、カナムグラ、ギシギシ属、タデ属、ナデシコ科、アブラナ科、カタバミ属、エノキグサ、チドメグサ属、ヤブジラミ、メハジキ属、ヨモギ属など人里近くの開けた場所に草地を作る、いわゆる「人里植物」と呼ばれる種類が生育していたとみられる。また、ガマ属、イバラモ属、ヘラオモダカ、オモダカ属、スブタ、ヨシ属、ホタルイ属、ミズアオイ属、オトギリソウ属、ミズワラビ属など、水生植物や水生植物の種類を含む分類群が多く検出される。これらは、自然状態において水深が比較的浅い（数十センチ以下）沼沢地に生育することが多いが、かつて水田雑草として日本各地でみられた種類でもある。今回も、水田や溝などで検出されており、水田ならびにその付随施設、河川沿いの湿地などに生育していたとみられる。

（2）栽培について

本遺跡では、第3面・第4面において、栽培植物であるイネ属の短細胞列や機動細胞列を含めて短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出される。これらのことは、土層内にイネ属の植物体が遺構内に混入していたことを示す。これより、縄文時代晩期～弥生時代初頭以降、周辺では稲作が行われていたと考えられる。この内、第3面で検出されたSX98は、水田跡とされている。ところで、現在の水田土壌中に含まれる植物珪酸体の調査によれば、機動細胞珪酸体中のイネ属の割合が9％であるが、稲藁を堆肥として与えている水田で16％という結果が得られている（近藤，1988）。SX98から採取された試料番号1のイネ属機動細胞珪酸体の出現率が約16％であり、現水田土壌とほぼ同様な出現率を示す。よって、本遺構の付近において稲作が行われていたと考えられ、発掘調査の所見と調和的な結果であると言える。第4面で検出されたSD106では、イネ属機動細胞珪酸体の出現率が約12～18％を示す。この出現率は、上記した現水田耕土の調査とほぼ同程度の出現率である。これは、周辺から水田耕土が流れ込みイネ属珪酸体が集積したことに由来すると考えられるが、河道埋積後に旧河道内部

での稲作も想定しておく必要があるかもしれない。また、SE120やSK137でも７～９％イネ属機動細胞珪酸体が産出していることから、遺構内部に水田耕土が流れ込んでいる可能性もある。また、住居構築材や燃料材などの資材として稲藁が活用されることから、それらが遺構内に投棄された可能性もある。これらの点については、遺構覆土の埋積過程を把握し、考古学的な所見も含めて改めて検討を行いたい。

下月隈Ｃ遺跡の２次・３次調査では、古墳時代後期に遡る可能性がある水田跡が検出されている（福岡市教育委員会，1998a）。本遺跡と同じく御笠川右岸に位置する雀居遺跡では、９世紀前後以前である古代の水田跡が検出されている（福岡市教育委員会，1998b）。同遺跡では、この古代水田層より約75cm下方の層準よりイネ属植物珪酸体が多産することが確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1998）。今回検出された水田は、下月隈Ｃ遺跡２次・３次調査よりも古い段階の水田であり、縄文時代晩期～弥生時代初頭に比定されている。当該期の水田については、板付遺跡および板付周辺遺跡で夜臼式期・板付Ｉ式期・板付ⅡＡ式期の水田跡（福岡市教育委員会，1976,1986,1987a）、野多目遺跡で夜臼式期～板付Ｉ式期までの水田跡（福岡市教育委員会，1987b）で認められている。また、比恵遺跡群でも北端部の台地際から谷部にかけて位置する調査区で木製農耕具が出土しており、付近の低湿部で稲作が行われたことが想定されている（福岡市教育委員会，1991）。これらの水田は、板付遺跡・野多目遺跡が中位段丘下位面の縁辺部に、また比恵遺跡は中位段丘が沖積面に落ち込んだ場所にそれぞれ形成されているとされている（田崎，1998）。本遺跡は、先に示した遺跡と立地環境が異なり、河成低地に位置する。このような地形要因の違いは、稲作の様態・形態にも影響を与えていた可能性もある。今後、これらの諸点について、堆積土層だけでなく、水田区画や農耕具の出土状況等を考慮に入れながら総合的な検討を行っていきたい。

また、本遺跡では、栽培種のメロン類・ソバ類も検出されている。メロン類は弥生時代以降に検出例が非常に多くなるとされている（粉川，1988）。縄文時代晩期～弥生時代初頭以降になると、周辺において、これらソバやメロン類などが栽培されており、稲作以外にも畑作が行われていたと考えられる。

〈引用文献〉

福岡市教育委員会（1976）福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集「板付－市営住宅建設にともなう発掘調査報告書　1971～1974－上巻　本編」，678p..

福岡市教育委員会（1986）福岡市埋蔵文化財調査報告書第135集「板付周辺遺跡調査報告書（11）　下水道工事に伴う調査（1084・1985）」，56p..

福岡市教育委員会（1987a）福岡市埋蔵文化財調査報告書第154集「板付周辺遺跡調査報告書（12）」，28p..

福岡市教育委員会（1987b）福岡市埋蔵文化財調査報告書第159集「野多目遺跡群－稲作開始期の水田遺跡の調査－」，103p..

福岡市教育委員会（1998a）福岡市埋蔵文化財調査報告書第566集「下月隈Ｃ遺跡２－下月隈Ｃ遺跡２次、３次調査－」，110p..

福岡市教育委員会（1998b）福岡市埋蔵文化財調査報告書第565集「雀居遺跡４」，84p..

福岡市教育委員会（1991）福岡市埋蔵文化財調査報告書第255集「比恵遺跡群(10)」，246p..

畑中健一（1977）福岡市四箇遺跡の花粉分析学的研究．特定研究「古文家財」，昭和51年度特定研究「稲作の起源と伝播」年次報告，「古文化財」，p.25-29.

K.Hatanaka（1985）PALYNOLOGICAL STUDIES ON THE VEGETATIONAL SUCCESSION SINCE THE WURM GLACIAL AGE IN KYUSHU AND ADJACENT AREAS．Journal of the Faculty of Literature,Kitakyushu　University(Series B)，18，p.29-71.

畑中健一（1989）貫川遺跡第一次第５地点の花粉分析結果概要．北九州市埋蔵文化財調査報告書第85集「貫川遺跡２－貫川都市小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２－」，p.221-226，財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室．

粉川昭平（1988）穀物以外の植物食．「弥生文化の研究　2　生業」，金関　恕・佐原　真編，p.112-115.,雄山閣.

近藤錬三（1988a）十二遺跡土壌の植物珪酸体分析．「鋳師屋遺跡群　十二遺跡　－長野県北佐久郡御　代田町十二遺跡発掘調査報告書－」，p.377-383，御代田町教育委員会.

近藤錬三・ピアスン友子（1981）樹木葉のケイ酸体に関する研究（第２報）双子葉被子植 物樹木葉の植物ケイ酸体について．帯広畜産大学研究報告，12，p.217-229.

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64.

中村　純・畑中健一（1976）板付遺跡の花粉分析学的研究．福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集「板付－市営住宅建設にともなう発掘調査報告書　1971～1974－下巻　本編図版・付編」，p.29-42，福岡市教育委員会.

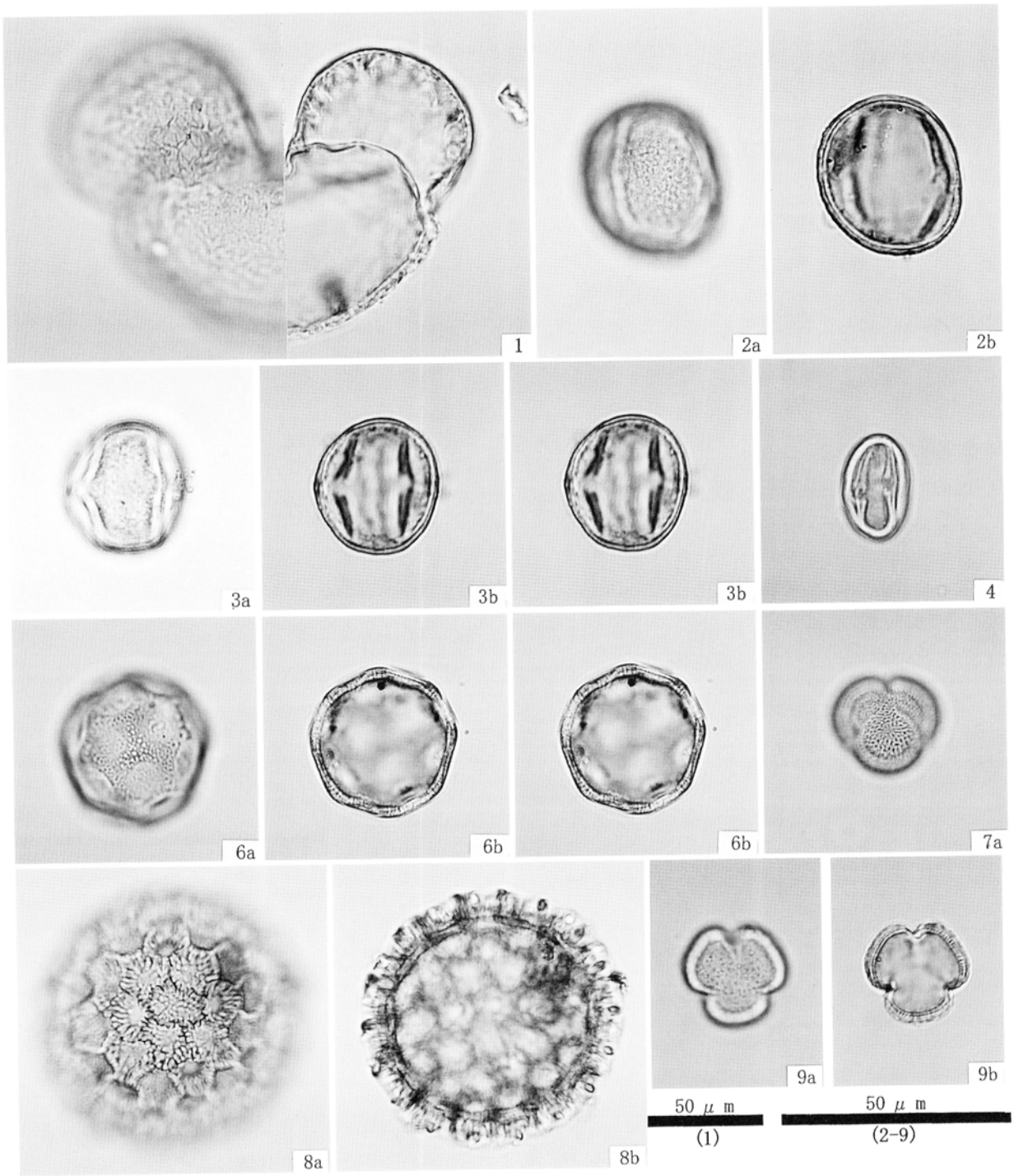
野井英明（1991）比恵遺跡24・25次調査によって得られた試料の花粉分析．福岡市埋蔵文化財調査報告書第255集「比恵遺跡群（10）」，p.229-233，福岡市教育委員会.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1998）雀居遺跡第３次調査自然科学分析．福岡市埋蔵文化財調査報告書第159集「雀居遺跡４　福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告」，p.63-75，福岡市教育委員会.

下山正一（1998）福岡平野の縄文海進と第四紀層．「福岡平野の古環境と遺跡の立地　－環境としての遺跡との共存のために－」，p.11-44，（財）九州大学出版会.

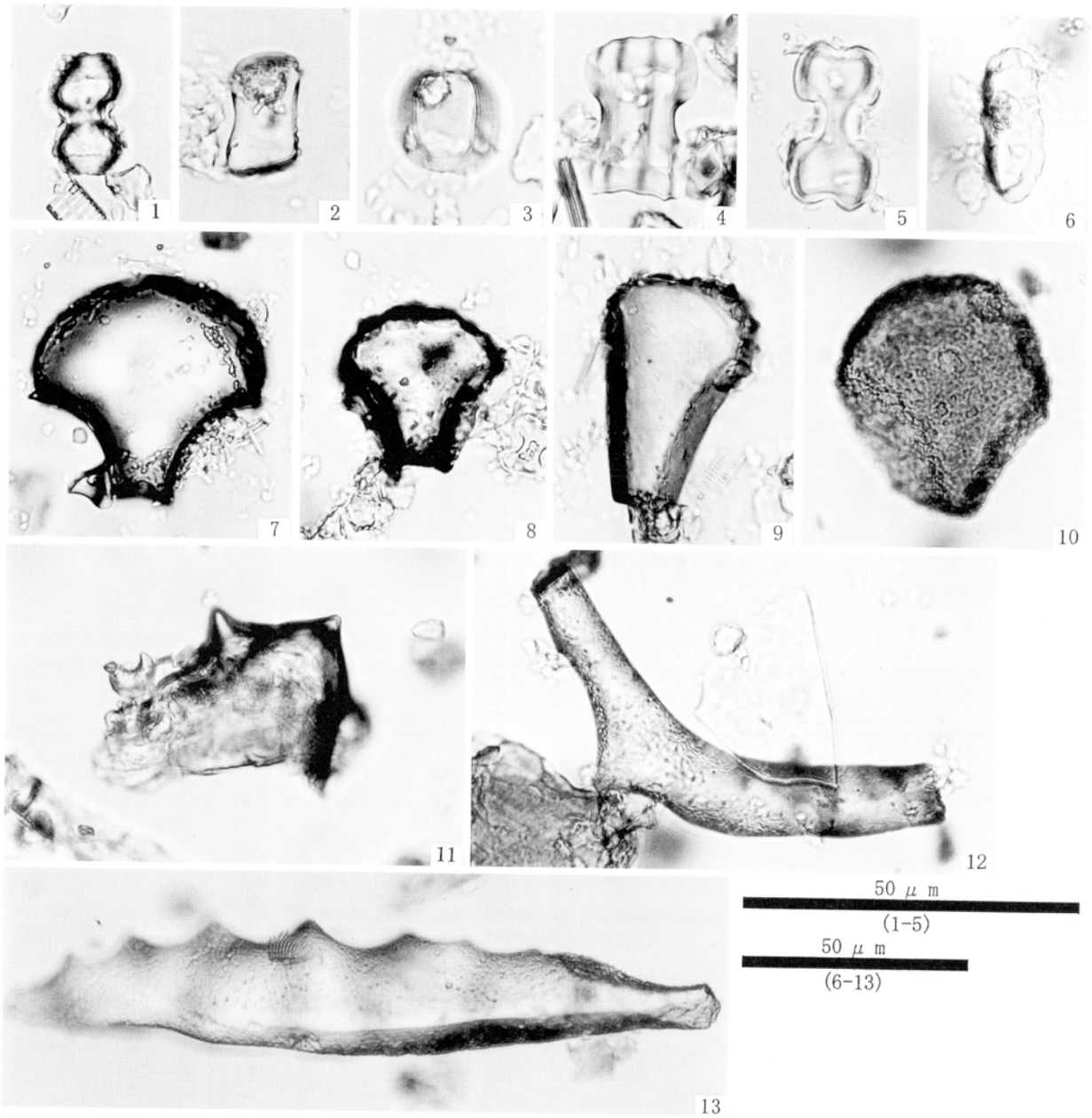
田崎博之（1998）福岡地方における弥生時代の土地環境の利用と開発．「福岡平野の古環境と遺跡立地 －環境としての遺跡との共存のために」，p. 113-137，九州大学出版会.

図版１　花粉化石



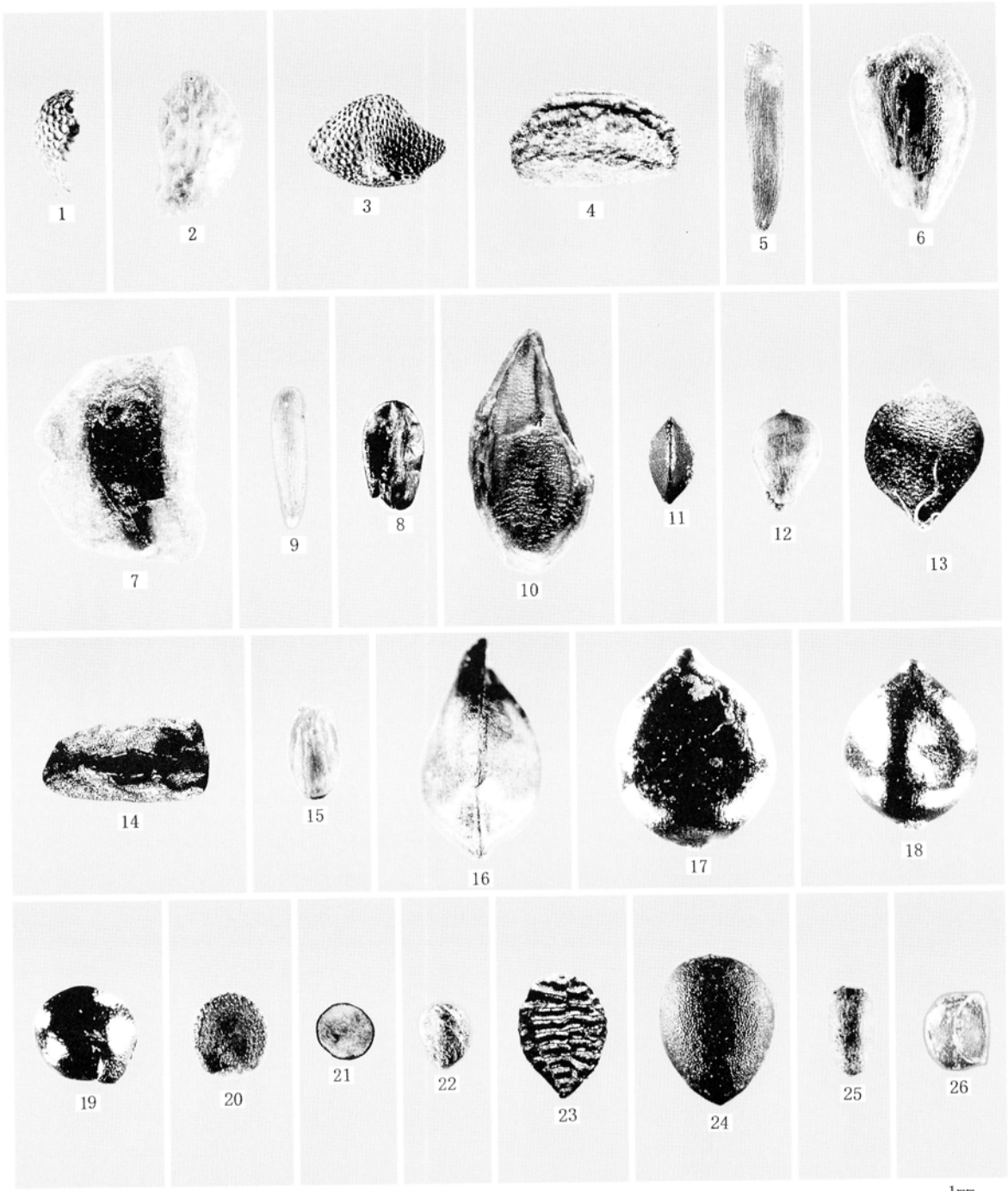
1．マツ属（SE120；5）
2．コナラ属コナラ亜属（SE120；5）
3．コアラ属アカガシ亜属（SE120；5）
4．クリ属－シイノキ属（SE120；5）
5．イネ科（SE120；5）
6．サジオモダカ属（SE120；5）
7．アブラナ科（SE137；7）
8．サナエタデ節－ウナギツカミ節（SE120；5）
9．ヨモギ属（SE120；5）

図版２　植物珪酸体



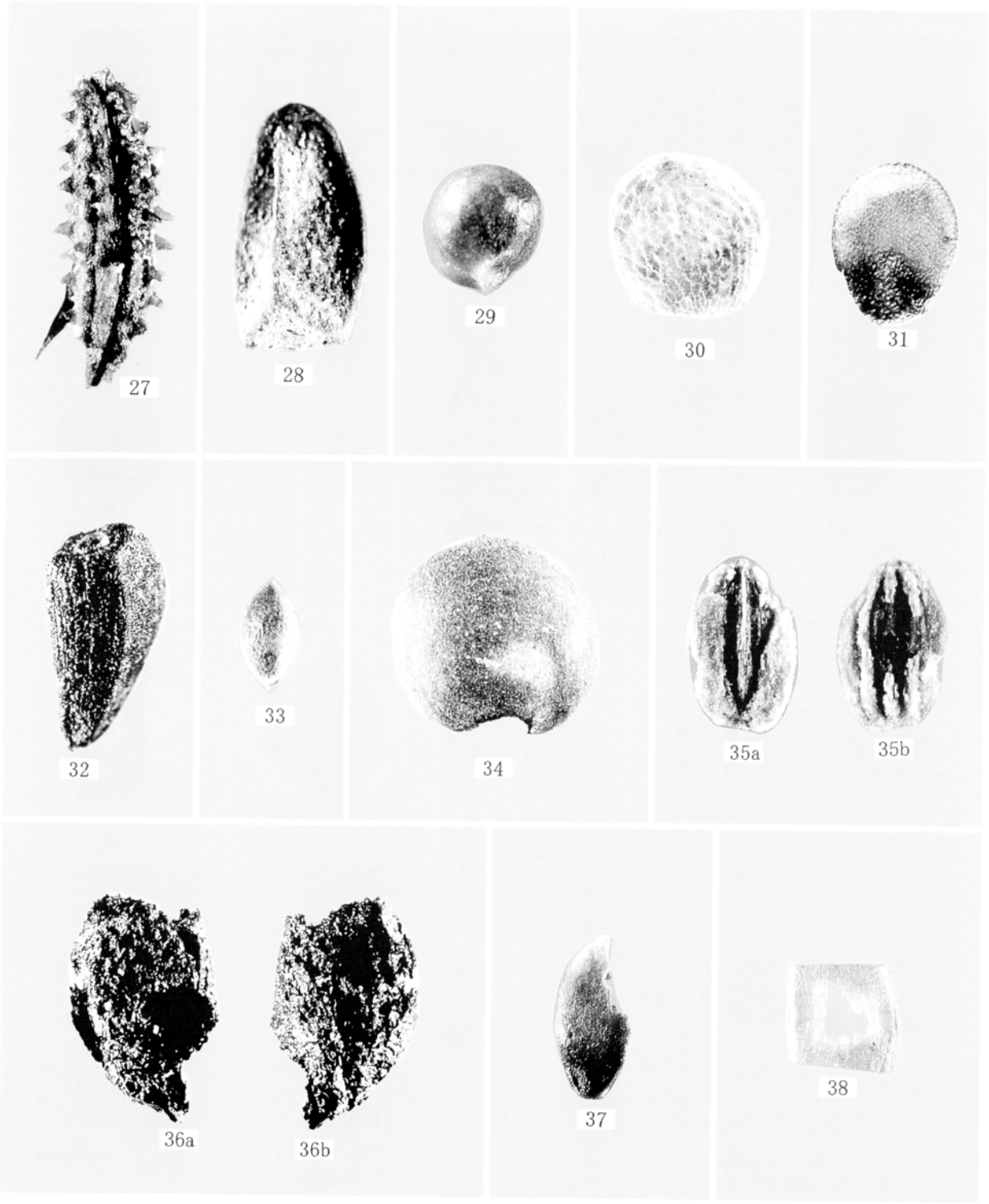
1．イネ属短細胞珪酸体（SE120；5）
2．タケ亜科短細胞珪酸体（SE137；8）
3．ヨシ属短細胞珪酸体（SE120；5）
4．コブナグサ属短細胞珪酸体（SE120；5）
5．ススキ属短細胞珪酸体（SE137；6）
6．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（SE106；2）
7．イネ属機動細胞珪酸体（SE137；5）
8．タケ亜科機動細胞珪酸体（SX 98；1）
11．イネ属頴珪酸体（SE137；7）
10．ヨシ属機動細胞珪酸体（SX 98；1）
13．樹木起源　第Ⅳグループ（SX 98；1）
11．樹木起源　第Ⅲグループ（SX 98；1）

図版3　種実遺体（1）



1．マタタビ属（SD106;4）
2．キイチゴ属（SX 98；1）
3．ヒサカキ（SX 98；1）
4．タラノキ（SD106;4）
5．イバラモ属（SE106；3）
6．ヘラオモダカ（SX 98；1）
7．オモダカ属（SE106；3）
8．オモダカ科（SK137；6）
9．スブタ（SE106；3）
10．エノコログサ属（SX 98；1）
11．カヤツリグサ科（SK137；7）
12．スゲ属（SX 98；1）
13．ホタルイ属（SD106；3）
14．イボクサ（SD106;4）
15．ミズアオイ属（SX 98；1）
16．ギシギシ属（SE106；3）
17．タデ属（サナエタデ？）（SD106;4）
18．タデ属（SD106;4）
19．アカザ科－ヒユ科（SD106;4）
20．ナデシコ科（SD106;3）
21．トウゴクサバノオ（SD106;3）
22．キギムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属（SD106;3）
23．カタバミ属（SD106;3）
24．エノキグサ（SD106;4）
25．オトギリソウ属（SK137；6）
26．チドメグサ属（SD 98；1）

図版4　種実遺体（2）



1mm (27–33)　1mm (34–36)　5mm (37, 38)

27. ヤブジラミ（SD106；4）
28. メハジキ属（SD106；4）
29. イヌコウジュ属（SD106；3）
30. ナス科（SX98；1）
31. ナス科（SX98；1）
32. メナモミ属（SX98；1）
33. 不明種実（SD106；4）
34. カナムグラ（SD106；4）
35. セリ科（SX98；1）
36. 不明炭化物（穀類？）（SK137；8）
37. メロン類（SX98；1）
38. 不明A（SD106；4）

3．放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

1．はじめに

下月隈C遺跡第4次調査（SHC-4）より検出された木片および炭化材の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

2．試料と方法

試料は、SD104から採取した炭化材2点と木片3点、SD106から採取した木片4点、SD114から採取した炭化材6点と木片5点、SK118から採取した木片4点、SD119から採取した木片2点、SE120から採取した炭化材4点と木片6点の併せて36点であり、それぞれ年輪の外側部分を採取した。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した^{14}C濃度を用いて^{14}C年代を算出した。

3．結果

表1に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値－25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C年代値（yrBP）の算出は、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の^{14}C年代が、その^{14}C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と^{14}C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて^{14}C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3（CALIB 3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、暦年代較正値は^{14}C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4．考　察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した１σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の^{14}C年代、p. 3 -20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J.（1993）Extended 14C Database and Revised CALIB3.0 14C Age Calibration Program, Radiocarbon,35, p.215 - 230 .

Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

表1. 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果(その1)

測定番号 (測定法)	試料データ	$\sigma^{13}C_{PDB}$ (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1156 (AMS)	炭化材 No.1 SD-104 (O-6区)	-29.2	2050±60	cal BC 45	cal BC 155 - 135 (10.1%) cal BC 790 - 760 (82.7%)
PLD-1157 (AMS)	炭化材 No.2 SD-104 (O-6区)	-26.9	1640±60	cal AD 415	cal AD 340 - 440 (72.5%)
PLD-1158 (AMS)	木片 No.3 SD-104 (O-6区)	-27.9	1750±50	cal AD 260 cal AD 285 cal AD 300 cal AD 320	cal AD 235 - 360 (92.0%)
PLD-1159 (AMS)	木片 No.4 SD-104 (P-6区)	-28.2	1840±50	cal AD 135 cal AD 165 cal AD 200 cal AD 205	cal AD 125 - 240 (94.3%)
PLD-1160 (AMS)	木片 No.5 SD-104 (P-6区)	-28.8	1700±50	cal AD 345 cal AD 370 cal AD 380	cal AD 260 - 280 (19.7%) cal AD 320 - 410 (73.1%)
PLD-1161 (AMS)	木片 No.6 SD-106	-29.7	2060±50	cal BC 50	cal BC 155-130 (15.9%) cal BC 120 - cal AD 0 (84.0%)
PLD-1162 (AMS)	木片 No.7 SD-106	-29.0	2100±50	cal BC 110	cal BC 175 - 45 (96.7%)
PLD-1163 (AMS)	木片 No.8 SD-106	-27.7	2080±50	cal BC 90 cal BC 75 cal BC 60	cal BC 170 - 40 (97.4%)
PLD-1164 (AMS)	木片 No.9 SD-106	-28.0	2130±50	cal BC 170	cal BC 200 - 90 (78.2%) cal BC 80 - 55 (13.4%)
PLD-1165 (AMS)	木片 No.10 SD-114 (黒色粘土)	-26.9	2440±60	cal BC 515 cal BC 460 cal BC 455 cal BC 435 cal BC 430 cal BC 415	cal BC 760 - 685 (31.9%) cal BC 545 - 410 (62.9%)
PLD-1166 (AMS)	炭化材 No.11 SD-114 (U-8区)	-25.6	2000±50	cal AD 5 cal AD 10 cal AD 15	cal BC 45 - cal AD 65 (100%)
PLD-1167 (AMS)	炭化材 No.12 SD-114 (U-9区)	-25.7	2550±60	cal BC 785	cal BC 800 - 760 (32.3%) cal BC 685 - 660 (13.8%) cal BC 645 - 545 (53.9%)
PLD-1168 (AMS)	木片 No.13 SD-114 (U-9区)	-27.1	2580±60	cal BC 795	cal BC 815 - 760 (47.1%) cal BC 685 - 665 (10.8%) cal BC 640 - 590 (26.2%) cal BC 580 - 545 (15.9%)
PLD-1169 (AMS)	木片 No.14 SD-114 (U-9区)	-26.6	2530±60	cal BC 765	cal BC 795 - 755 (20.4%) cal BC 700 - 540 (79.6%)
PLD-1170 (AMS)	木片 No.15 SD-114 (U-9区)	-26.1	2520±50	cal BC 760 cal BC 675 cal BC 670	cal BC 790 - 755 (17.2%) cal BC 700 - 540 (81.7%)
PLD-1171 (AMS)	木片 No.16 SD-114	-27.7	2520±50	cal BC 765 cal BC 675	cal BC 790 - 755 (17.8%) cal BC 700 - 540 (81.8%)
PLD-1172 (AMS)	炭化材 No.17 SD-114	-27.7	2590±50	cal BC 795	cal BC 825 - 760 (65.9%) cal BC 615 - 590 (12.4%)
PLD-1173 (AMS)	炭化材 No.18 SD-114	-25.0	2350±50	cal BC 400	cal BC 520 - 375 (98.7%)

表1. 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果(その2)

測定番号 (測定法)	試料データ	$\sigma^{13}C_{PDB}$ (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1174 (AMS)	炭化材 No.19 SD-114	-28.2	2400±50	cal BC 410	cal BC 755 - 720 (17.0%) cal BC 525 - 400 (77.3%)
PLD-1175 (AMS)	炭化材 No.20 SD-114	-28.4	2430±50	cal BC 480 cal BC 465 cal BC 450 cal BC 440 cal BC 415	cal BC 755 - 695 (28.3%) cal BC 540 - 405 (71.3%)
PLD-1176 (AMS)	木片 No.21 SK-118	-26.2	2540±60	cal BC 785	cal BC 800 - 755 (27.9%) cal BC 685 - 660 (15.4%) cal BC 650 - 540 (56.7%)
PLD-1177 (AMS)	木片 No.22 SK-118	-26.1	2470±60	cal BC 755 cal BC 700 cal BC 540 cal BC 525	cal BC 760 - 680 (33.3%) cal BC 665 - 610 (22.2%) cal BC 565 - 505 (24.0%)
PLD-1178 (AMS)	木片 No.23 SK-118	-27.2	2400±60	cal AC 410	cal BC 755 - 715 (17.5%) cal BC 525 - 400 (74.0%)
PLD-1179 (AMS)	木片 No.24 SK-118	-26.0	2370±50	cal BC 405	cal BC 520 - 385 (95.6%)
PLD-1180 (AMS)	木片 No.25 SK-119	-28.3	1940±50	cal AD 65	cal AD 15-90 (69.4%) cal AD 100-125 (22.7%)
PLD-1181 (AMS)	木片 No.26 SD-119	-28.4	1960±50	cal AD 30 cal AD 35 cal AD 55	cal AD 0 - 85 (80.7%) cal AD 100 - 120 (13.9%)
PLD-1182 (AMS)	炭化材 No.27 SE-120 (井戸枠内)	-29.6	1870±50	cal AD 130	cal AD 80 - 215 (100%)
PLD-1183 (AMS)	炭化材 No.28 SE-120 (井戸枠外)	-29.5	1620±50	cal AD 425	cal AD 395 - 470 (60.3%) cal AD 480 - 530 (39.7%)
PLD-1184 (AMS)	炭化材 No.29 SE-120	-26.4	1790±50	cal AD 240	cal AD 135 - 160 (18.1%) cal AD 165 - 200 (20.9%) cal AD 205 - 260 (39.4%) cal AD 300 - 320 (16.7%)
PLD-1185 (AMS)	木片 No.30 SE-120	-29.8	1560±50	cal AD 535	cal AD 430 - 540 (100%)
PLD-1186 (AMS)	木片 No.31 SE-120	-29.3	1710±50	cal AD 340 cal AD 375	cal AD 260 - 285 (20.5%) cal AD 320 - 405 (71.2%)
PLD-1187 (AMS)	炭化材 No.32 SE-120	-28.5	1600±50	cal AD 430	cal AD 415 - 535 (100%)
PLD-1188 (AMS)	木片 No.33 SE-120	-26.4	1590±50	cal AD 435 cal AD 525	cal AD 425 - 535 (100%)
PLD-1189 (AMS)	木片 No.34 SE-120	-28.3	1740±50	cal AD 260 cal AD 280 cal AD 295 cal AD 325	cal AD 245 - 355 (90.5%)
PLD-1190 (AMS)	木片 No.35 SE-120	-27.3	1780±60	cal AD 245	cal AD 135 - 155 (10.5%) cal AD 175 - 195 (10.0%) cal AD 210 - 265 (36.8%) cal AD 275 - 340 (42.7%)
PLD-1191 (AMS)	木片 No.36 SE-120	-27.4	1710±50	cal AD 265 cal AD 270 cal AD 340 cal AD 375	cal AD 260 - 300 (33.5%) cal AD 320 - 400 (66.5%)

第Ⅵ章　小　結

御笠川の沖積作用によって形成された月隈・平尾丘陵と春日丘陵との間の低地、特に福岡空港およびその周辺地域における遺跡の所在は、近年の福岡空港やその周辺整備事業に伴う発掘調査を契機として明らかになりつつある。今回の調査でも、この底湿地に点在する微高地を中心として早い段階から人々の生活の跡が見られ、さらにその範囲が限定されたものではなく広範囲に展開していることが、本調査地の北に位置する雀居遺跡の調査成果と併せて知ることとなった。今回の調査は80,000㎡の整備事業調査の初年度であり、遺跡の全容を解明するには至っていない。このため、本章では調査成果と課題を述べ、今後につづく調査報告の検討資料としたい。

1．低地における集落について

遺物的な初見は縄文時代早期に認められるものの、遺構的には問題ではあるが定住的様相を呈する段階は縄文時代晩期末（弥生時代早期）が想定される。溝SD114出土の遺物は量的にも、遺存状況的にも近辺の微高地に集落の存在を示すものであろう。同様な状況は雀居遺跡でも見られ、集落の規模や構成などを知りうる資料は発見されていないが、遺物などから判断すると丘陵を居住地とするものの一時的もしくは行動目的時間に限って低湿地に居住地を変えているとは考えがたい。

出土遺物量は集落規模を反映するものとすると、低地におけるピークは縄文時代晩期末（弥生時代早期）、弥生時代中期、弥生時代後期後半～古墳時代初頭、奈良時代～平安時代前期、12～14世紀に求められる。さらにピークにも差異があり、弥生時代後期後半からの状況は他の時代と比較すると突出し、爆発的増加とでも表現され、低湿地における本格的集落の出現を知る。

月隈・平尾丘陵に所在する共同墓地群を造営した集落の解明には未だ至っていないが、少なくとも各集落の生産基盤が低湿地に存在していたことは間違いなく、このことは甕棺墓と当該調査における遺物出土の時期別数量の増減数と一致する。

2．水田遺構について

調査地の基盤ローム層から表土層までの間は、層厚に差異はあるが、粘性砂質土層と粗砂・細砂層とが互層に堆積している。これらは、調査地の西を北流する御笠川の堆積によるもので、水田耕作と氾濫とが長期間に繰り返し行われてきたことを知る。今回の調査では、第２と第３の各検出面で水田を検出したが、本来は多くの水田が存在していたものの御笠川の氾濫によって流失したと考えられる。第２検出面の水田SX85・86は、調査区の東部に他の畦とは規模が異なる大畦畔が南東から北西方向に走り、大畦畔に沿って小畦で長方形や方形の平面形に区画された水田が展開する。明らかに条里制に基づく水田で、大畦畔は坪の境界を示すものである。水田１枚の面積は一定しておらず、当初の水田が分割されたものと思われる。営農期間については、出土遺物などから奈良時代前半～平安時代前半期を推定されるが、出現期がやや新しくなる可能性も残る。

第３検出面の水田SX89・98は、畦畔の方向が上層の水田とは異なり南北方向を呈している。この方向は流路と同じであることから、水田開発が地形に影響されたものであることは明白である。なぜならば、水田経営にとって最も重要なことは水の安定的確保と供給であることから、畦越しの受・排水方法（水掛り）を用いて効率的に行うには水田を等高線に並行する位置関係に造る必要がある

ためである。営農期間については、弥生時代までは遡らず、古くても古墳時代前半期が推定され、基本的には古墳時代後半期以降の所産であると考えられる。月隈・平尾丘陵に展開する古墳群の被葬者に関連すると考えられる。

第4検出面では水田遺構は検出されていないが、出土木製農耕具や土壌分析から現在の水田土壌と同じ花粉割合で稲花粉が検出されていることから弥生時代から当地において稲作が行われていたことは明白である。遺構が残存していないのは、御笠川の氾濫による流失と考えるのが妥当であろう。

3．出土木製品・建築部材について

溝SD108の井堰や水溜内から高床式建物の柱、横架材、垂木などが出土している。これらの大半は井堰の建設材として再利用したものである。特に、ネズミ返し付横架材における形状の特異性は、単に一木から造り出す当時の木工技術やその技術を支える金属加工技術の水準の高さを物語るにとどまらず、建物の特異な性格を反映している可能性がある。つまり、建物が一般的家屋・倉庫とは異なり、祭祀や有力首長の家屋に結びつくものかもしれない。これら建築部材や大量の木製農耕具の他に机や楯などが出土しているが、このような遺物の面や遺跡発展期などの側面からも状況は雀居遺跡と極似する。二つの遺跡の間は2㎞の距離を測るが、同じ低湿地の他の微高地上に所在する他の集落とともに一つの共同体を構成していたのかもしれない。

4．出土遺物と放射線炭素暦年代測定結果について

当該調査で出土した木片および炭化材を放射線炭素暦年代測定したところ、出土土器から縄文時代晩期末（弥生時代早期）と推定している溝SD114出土試料14点の内、BC825～760が2点、BC700～540が6点、BC540～375が6点という結果を得た。弥生時代前期後半と後期前半の土器が出土している土壙SK106出土試料4点の内、BC200～90が3点、BC120～AD0が1点という結果を得た。弥生時代後期の土器が出土している溝SD104出土試料4点の内、AD125～240が1点、AD235～360が1点、AD320～440が2点という結果を得た。井戸SE120出土試料8点の内、AD250～400が4点、AD400～500が4点という結果を得た。

5．今後について

本事業地における発掘調査は、当該調査の第4次から第9次が計画され、すでに第8次調査まで終了しており、調査終了面積は計画の95%を超えている。これから資料整理・調査報告書作成を断続的に実施していくわけであるが、広範囲な発掘調査による下月隈C遺跡の全容解明が期待される。特に各時代における水田および水利施設の解明は、低湿地における水田化の発展状況、古代条里制の実態把握などこれまで不明であった点を明らかにするものである。さらに、古代の周辺においては官衙に関連する施設の存在がこれまでに指摘されてきたが、これらの解明も期待される。

下月隈C遺跡
Ⅲ

—本 文 編—

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書
〈第750集〉

編集・発行　福 岡 市 教 育 委 員 会
福岡市中央区天神一丁目8－1
平成15年3月31日
☎092（711）4667

印　　刷　アド印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南5丁目21-28

SHIMOTSUKIGUMA－C SITE

THE REPORT OF THE 4TH ARCHAEOLOGICAL EXACAVATIONS
OF THE SHIMOTSUKIGUMA-C SITE
IN FUKUOKA, JAPAN

March 2003
THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY